

平成 15 年度

痴呆性高齢者の在宅生活を支える地域ケアサービスの方策に関する研究

痴呆性高齢者が暮らす地域づくりに関する研究報告書

痴呆性高齢者が突きつける
究極の福祉社会への課題

平成 16 年 3 月

社会福祉法人 浴 風 会
高齢者痴呆介護研究・研修東京センター

平成 15 年度

痴呆性高齢者の在宅生活を支える地域ケアサービスの方策に関する研究

痴呆性高齢者が暮らす地域作りに関する研究報告書

< 概要 >

1. 研究事業目的

痴呆性高齢者(以下「高齢者」)が地域の中で、あくまで本人の自由意思によって「自分らしい生き方」を選択し、それをまっとうできるための理想的な環境条件づくりをめざして、高齢者の地域社会での自由意思による行動とそれへの地域住民の関わりの実態を、フィールドワーク等によって多面的に把握し、そこから、地域の真の介護力を極大にする各種の手立てを開発しようとするものである。

2. 研究内容

- ① 高齢者の徘徊・散歩とそれを見守る住民との日常的な関わりの実態と問題点
- ② 高齢者が参加を欲している各種の地域グループの受け入れ実態と問題点
- ③ 高齢者の徘徊に対する住民による発見・保護システムの機能の状況と問題点
- ④ 高齢者が真に安らげる地域での居場所づくりへの各種の試みの機能状況
- ⑤ 高齢者の在宅や施設での生活に対する住民の理解と反発の実態

3. 研究の実施状況

(1) 研究委員会の開催

上記のテーマについて、8回にわたる研究委員会を開催

(2) フィールドワークの実施

上記のテーマに関係した対象を探し出し、委員が手分けをして、該当する事例の存在する現地へ赴き、当事者に聴取を実施。

〔調査対象と調査参加の委員・一覧〕

- ① 埼玉県春日部市・介護者の高畑富美子氏に聴取<自宅訪問>(大塚・木原)
- ② 千葉県千葉市・当事者が参加しているカラオケの仲間に聴取(大塚・永島)
- ③ 神奈川県茅ヶ崎市・当事者と介護者に聴取<自宅訪問>(黒川・川崎・木原)
- ④ 北海道札幌市・当事者を仲間に加えているサロンに聴取(木原)
- ⑤ 群馬県大胡町・当事者を受け入れている履物店に聴取(諏訪・黒川・大塚)
- ⑥ 長野県駒ヶ根市・当事者のお茶飲み友達に聴取(黒川・木原)
- ⑦ 神奈川県川崎市・施設から久しぶりにアパートに戻った当事者に聴取<本人と世話焼き>(黒川・大塚・木原)

- ⑧愛知県安城市・当事者の2家族に聴取(木原)
- ⑨北海道釧路市・当事者や家族・ボランティア、在宅支援センター等9名に聴取(木原・岩渕・川崎)
- ⑩広島県大竹市・当事者を支える隣人等に聴取(木原)
- ⑪長野県須坂市・当事者を受け入れているサロン(2サロン)に聴取(大塚・木原)
- ⑫福井県福井市・当事者を支える隣人や在宅介護支援センターに聴取(木原)

(3)研究報告書のまとめ

以上の研究活動の結果を報告書にまとめる

(4)住民等啓発用のパネルの作成。福祉セミナー・大会等で活用されるよう貸し出しへ痴呆性高齢者等の要援護者を支えられる地域を作るために、住民や関係者への啓発を目的としたパネルを作成。A全。合計132枚。

- ①お互いさまのまちづくりー住民の支え合いのパターン紹介
- ②住民の支え合いを育むために(住民支え合いの仕掛け方)
- ③わたくし流ボランティアのすすめ(住民の福祉参加の入門編)
- ④ボランティア・パワーアップ・5つの課題

4.研究報告書の概要

◇後述の「本委員会の研究目的と報告書の組み立て」を参照

◇なお執筆は、委員会での議論をふまえて委員長の木原孝久が担当、末尾に各委員の個人的考察を紹介してある(執筆者はそれぞれの文章の冒頭に示してある)。

高齢者痴呆介護研究・研修東京センター

痴呆性高齢者の在宅生活を支える地域ケアサービスの方策に関する研究の下部研究

「痴呆性高齢者が暮す地域づくりに関する研究」委員会名簿

- | | |
|--------|---|
| 木原 孝久 | 住民流福祉総合研究所所長 |
| 大塚 真理子 | 埼玉県立大学 助教授 |
| 黒川 理恵子 | 神奈川県精神保健福祉センター救急情報課 副技幹 |
| 池田 昌弘 | 東北福祉会せんだんの杜 副社長 |
| 永島 光枝 | 社団法人 呆け老人を抱える家族の会 理事 |
| 白川 すみ子 | NPO法人 新しいホームをつくる会 会長 |
| 岩淵 雅子 | 釧路地区障害老人を支える会（たんぼぼの会）代表 |
| 川崎 貞 | 社会福祉法人 浴風会 地域サービス部長 |
| 永田 久美子 | 社会福祉法人 浴風会
高齢者痴呆介護研究・研修東京センター 主任研究主幹 |
| 諏訪 さゆり | 社会福祉法人 浴風会
高齢者痴呆介護研究・研修東京センター 主任研修主幹 |

本委員会の研究目的と報告書の組み立て

■ これまでは地域の福祉力の分析と、関係者の役割に焦点

本研究委員会は、これまで痴呆性高齢者をどれだけ地域(住民)で支えられるのか、というテーマに絞って研究を続けてきた。

平成13年度は、ずばり地域の介護力とはどういうものなのかを、さまざまな事例を収集し、分析してきた。地域住民は痴呆性高齢者を支える力量を持っているのか、持っているとしたら、自身の中からどういう力を引き出し、それをどのように効果的に発揮しようとしているのか、そこに焦点を充ててきた。

地域住民の福祉力といっても、たいしたことはない。住民一人ひとりの力は微々たるものである。そういう小さな力をどのようにして極大にしようとしているのか、その知恵の発揮し具合が最大のポイントであることがわかった。

翌年の平成14年度は、そうした地域住民の福祉力を高めるために、関係者はどういった支援努力をしたらいいのかを研究テーマに据えた。住民は住民のみの力ではたいしたことはできない。もともとそういう力を発揮しようという意欲にも欠いている。その住民をやる気にさせ、その福祉力を効果的に発揮させようとするにはどうしても関係者の働き掛けが必要である。そこにテーマを絞ったということである。

ところが、関係者は住民に福祉の営みをゆだねようという気があまりないということもわかった。福祉はプロの営みだ。それに、住民はたいした力は持っていない。だからプロの活動の一部を補完する程度で十分、という考え方を、多くの関係者が持っている。これでは住民が福祉に参加しようという気は起きてこない。そういう事実があることがわかったからこそ、14年度はこういうテーマを取り上げたわけである。

■ 当事者が生きている地域社会の全体を見ていったら…

そして平成15年度は、痴呆性高齢者が住み慣れた家や地域で安心して、しかも自分らしく生きていけるには、どんな支援が必要なのか、コミュニティはどんなことができるのかを考えることにした。当事者が人間らしく地域で生きていけるための環境づくりのあり方に焦点を充てたのだ。

そこで、委員が手分けして、できるかぎりたくさん、介護の現場に出向いて、痴呆性高齢者の置かれた状況をつぶさに観察してきた。ただ当事者と介護者の関係だけに目を向けるのではなく、当事者が生きている地域社会そのものの全体を見ることを大事なポイントに置いてきた。地域社会の中で痴呆性高齢者はどのように生き、どのように行動し、どのように悩み、どのように発言し、そして何を願っているのか。

■当事者の言動はいつも「笑いの種」になっていた！

そこでわかったことは、彼らは「自分らしい生き方」を追求する意欲は十分あるが、周りがある努力や願いをあまり聞き届けてくれないので苦しんでいるということであった。

「当事者主役」と、関係者はいとも気軽に言うが、当事者が生きている現場に向いていると、そのどこに「当事者主役」が実現しているのか疑いたくなるほどに、当事者は日々の行動から、生き方を決める段階までのどこでも「脇へ追いやられて」いる。

「要援護者も地域社会に自然に受け入れられるように」と言うが、現実には痴呆性高齢者は、いつも「とんでもないこと」をしていて、迷惑をかけてばかりいる存在としか見られていない。当然、彼らを受け入れる体制はほとんどできていない。痴呆性高齢者の言うことは、常に周囲の「笑い」の対象になっている。当人が何か言うたびに、周りの人たちはゲラゲラと笑い飛ばす。悪気はないのだろうが、本人の顔を見ると、なんとか「おかしなこと」は言わないようにと、必死に言葉を探している。その必死さと周囲の笑い顔が奇妙な対照をなしている。

当人は、それなりの目的意識を持って「散歩」「外出」をしているのに、これを「徘徊」とみなして、「見つけたらすぐ連れ帰る」ことしか周囲の人たち(プロも含めて)は考えていない。

今回は徹底的に当人の側に立ってみようと、私たち委員は各自自分に言い聞かせてフィールドワークに臨んだのであるが、現状はまことに悲劇的である。社会は、少しでも人と違った行動をとる者、周囲に迷惑を掛ける者を異常者として排除しようとする。「病気」のゆえにそういう行動をとらざるを得ない人にとっては、その存在さえ許されない。結局は施設へ入所させられることになる。これがフィールドワークの最大の感想である。超高齢化社会になるにつけて、痴呆はもう珍

しいことではなく多かれ少なかれ老後に訪れ得る症状の一つになりつつある。その痴呆になった時に、今のような社会の痴呆への見方や対応、受け入れ体制のあり方では、まことに心許ない。

■根本の所から社会を変えていかねば当事者は救われない

そこで私たちは考えた。痴呆性高齢者が安心して生きていける社会を作るには、住民の理解を求める、あるいはそのための支援活動に参加してもらうといった程度の対応ではとても間に合わない。たしかに理解をしてくれる人は居るが、しかし一部の人が理解してくれるだけでは、痴呆性高齢者の「安心社会」はとてもじゃないが実現し得ない。

もっと根本の所から社会を変えていかねばならない。例えば「一部の理解者」を増やすのではなく、「住民総ヘルパー」をめざすぐらいでなければダメなのだ。高校卒業までに全員がヘルパー二級を取得することを義務付けるとか。やる気になれば、こんなことは実現できる。

社会のあり方そのものにしても、現在の文明社会自体が痴呆性高齢者には恐怖の対象になっている。だれもが癒される社会をめざすぐらいでないと駄目だ。最近、「スローライフ」が叫ばれるようになったが、そんな新しい社会づくりと連動していくぐらいの大きな視野での運動展開が望まれる。

他人の家に上がり込んでも、快く受け入れてもらえるような「迷惑かけ合い」社会を作る必要もある。ということは、当事者もまた平気で周囲に迷惑をかけられるようにならなければいけない。そういう介入・迷惑を許せるオープンな社会も作っていかねばならない。ところが最近では、「プライバシーの尊重」が声高に叫ばれ、他人の家へ踏み込むことはタブーになっている。踏み込む方も、他人の悩み事にプライバシーの侵害などと言われるまでして関わろうという気もない。しぜん、社会はますます相互萎縮、互いに閉じ合う方向へ進んでいる。これを変えていかねばならない。

■保健福祉関係者に欠けている「社会変革」の意欲

考えてみたら、保健福祉関係者は、そのめざす福祉の理想を実現するために、「社会をどのように変えていこうか」という議論はあまりしない。社会のあり方、進み方は、むしろ「所与のもの」として受け入れ、それを前提とした理念作りを

している。

いまは分別社会。効率を求めてしゃにむに分別をしようとしている。ゴミの分別ならまだしも、これを人間にも当てはめて、学校では習熟度別のクラス編成をする、高齢者は高齢者で、子供は子供で、別々の組織を作り、活動し、拠点づくりをする、というのが、当たり前のことと考えている。

保健福祉関係者もこれに「乗って」しまって、対象者を徹底的に分別していく。業種という発想が少しもおかしな営みでないと、だれもが考えている。健常者と障害者を区分けするだけでなく、その障害者を障害の種類ごとにさらに分ける。ある老人保健施設に行ったら、重度の痴呆の人と、中度の人、軽度の人で、部屋やブロックを分けていた。分別志向が、「痴呆」という「特別な人」がいるということ、社会に「教育」しているようなものである。今はむしろ分別志向の社会と闘うぐらいの意欲が求められる。

このようにして、痴呆性高齢者が地域でその人らしく生きていけるための支援方策は、そのための環境づくりのあり方へ、そして最終的には、社会そのもののあり方をどう変えていくかという課題に発展していった。

社会を変えていく、という視点をまず、私たち保健福祉関係者が持つようにならない。福祉はもともと、その理想を具現しようとするれば、社会変革をめざさなければならないようになっている。今のように、社会の流れにそのまま乗っていくようでは、本当の福祉を実現することはできない。

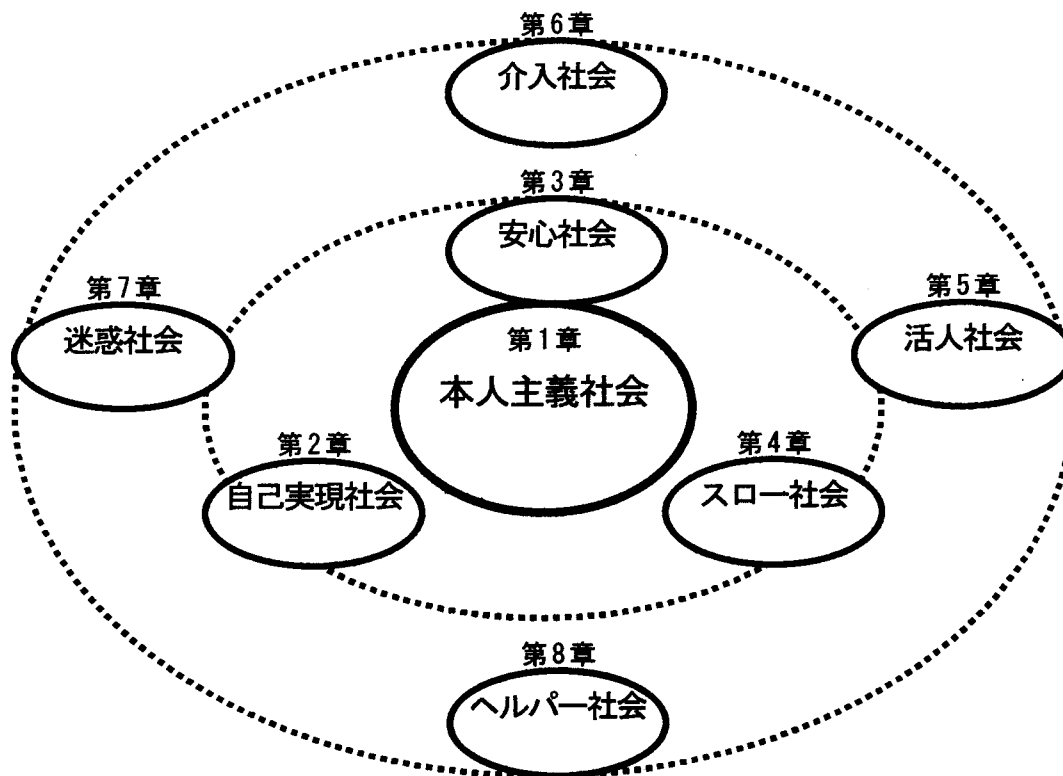
最近広がりはじめたNPOの中には一部、これをめざした革新的なグループもあるが、全体としてはやはり「社会の流れ」にそのまま「乗る」かたちの活動が圧倒的に多い。福祉はその程度の営みなのだと割り切っているのだ。

■大骨は「こんな社会を作りたい」、小骨は「具体的な当事者支援策」

本委員会はそこで、報告の骨格に「痴呆性高齢者のその人らしい生き方を支援するために、どのような社会であるべきなのか」を据え、議論の中ででてきた「痴呆性高齢者のその人らしい生き方への支援方策や環境づくりのあり方」をそれぞれ該当する骨格の中に、「小骨」として組み込むというかたちにした。

以降、痴呆性高齢者がその人らしく生きていけるような社会のあり方をそれぞれ章としての柱を立てて、その中で「支援方策」を叙述していくという組み立てにしてあるので、この組み立て方を頭に入れて読んでいただきたいと思います。

目次



第1章 本人主義社会—すべては当事者から出発する、を原則とした社会<1>

「本人の会」づくりがカギ握る<図><8>

「痴呆」の世界から還って来たクリスティーン<9>

これが「痴呆」の世界だ(クリスティーンの叙述から)<14>

支援を得られやすい条件<図><15>

痴呆でガン末期の状態でも「世話焼きさん」<16>

要介護者・介護者向け教育もきめ細かく<18>

介護者と要介護者への系統的研修<図><21>

「自己決定」でなく「相互決定」。「介護」でなく「相互介護」<22>

「自己決定」のわからなさ<図><24>

「介護(ケア)」のわからなさ<図><25>

「相互介護」ができる環境<図><26>

「私を愛した痴呆の母」<27>

介護者はなぜ末っ子なのか?<40>

天性主義と相性主義<図><41>

第2章 自己実現社会—痴呆になっても、それなりの自己実現が図られる<43>

ふれあいサロンに痴呆の人も「入れてあげる」<47>

地域グループの受け入れ体制作り<図><49>

第3章 安心社会—不安と恐怖の日々にせめて安心をもたらす環境づくり<51>

絶対的な庇護者の存在<56>

仕事もやめて母親の介護に賭けた人生<58>

アカの他人だけ「放っておけなくて」<63>

「歩く」(徘徊)の支援ネット作り<図><66>

ご近所は分譲のときからの親しい仲間—なら徘徊も安心<67>

「入所してもまた家へ戻れる」が保障されるのなら<69>

「失禁したっていい」と思える環境づくり<70>

第4章 スロー社会—まち全体がだれにとっても癒される場に<71>

「散歩」コースのそこそこに見守ってくれる人が<74>

過去がそのまま残る「極小のまち」<78>

本人が安らげる舞台装置とグッズ<図><81>

第5章 活人社会—どんなに要介護でも、人のために役立てる<83>

痴呆老人が御用聞きの調整ボランティア<88>

当事者本人の「努力」を認める体制づくり<図><90>

第6章 介入社会—お互いの家を開き合い、「こじあけ」合うことから<91>

超介護者と超助けられ上手が連携すれば<97>

「介護重点地区」の指定<図><100>

地区ごとにコミュニティ・マネジメント拠点施設<図><101>

ファミリーケースワーカー<図><102>

親を看取り終えた介護者の活用法<図><103>

第7章 迷惑社会—社会に出て、周囲に堂々と迷惑をかけられる社会<105>

「助け」も「助けられ」も活動(業務)と認知<図><109>

第8章 ヘルパー社会—住民の誰もが介護技術を持ち、その体験も積んだ社会<111>

地域の要介護者に救いの「超大物世話焼きさん」<116>

世話焼きさんをつぶしてしまわないまちを<121>

福祉のプロが「住民」として活躍したとき<123>

ふれあいサロン拠点の近隣福祉推進へ<125>

活動推進組織のランチづくり<130>

有償サービスのランチづくりで「安心地域」に<133>

スポット・ボランティア<図><138>

実際に果たしている役割に位置付け<図><139>

住民活動を支援するときの心得<140>

<委員の個人的考察>

◇大塚真理子 <141>

◇黒川理恵子 <148>

◇永島光枝 <150>

◇永島光枝&大塚真理子<152>

◇池田昌弘 <158>

◇白川すみ子 <160>

◇岩渕雅子 <162>

◇川崎 貞 <172>

第1章

本人主義社会

すべては当事者から出発する、を原則とした社会

すべては当事者から出発する、を原則とした社会

<第1章>本人主義社会

■当事者主体を具現することがいかに厳しいことか

福祉関係者の共通の欠点だと思うが、言葉と実践がひどく乖離している場合が少なくない。自己決定とか当事者主体、住民主体などがその典型と言える。当事者主体を具現することがいかに厳しいことか、まだ関係者に理解されていないフシがある。今回の現場取材でつくづく感じたのがこの点であった。研究の対象である痴呆症の人本人がそこに居るのに、私たちはその本人を完全にオミットしたままで議論をしているといった場面がよくあった。むろん本人との意思が通じにくいということもあるが、それだけではない。

こんな場面があった。ある1人暮らしの痴呆性高齢者が、集合住宅に住んでいる。デイサービスやショートステイに連れて行くが、周りの人とまったく溶け込めない。ケアマネジャーはなんとか老人ホームに入所させようと「今、入所の順番待ち」だと言う。

本人はどう思っているのかとそのケアマネジャーに聞いたら、「そりゃあもう、『今が天国』って言っていますけどね」。自宅を訪問したら、私たち訪問者が来ても、肘枕でごろ寝をやめない。堂々としたものである。なるほどこれでは『天国』であるはずだと思った。

ケアマネジャーはどういう理由で入所させようとするのか。まさか社会防衛的な観点ではあるまいかと疑ったくらいだ。こんな素行の悪い老人は老人ホームへ入れてしまえとでも言うのか。当事者主体ということは、こういう場面で、その真価が問われることになる。

痴呆性高齢者にとっては、この当事者主体をどこまで周囲が守ってくれるのが、その人の運命を左右する極めて重要なポイントになる。しかし今述べたように、現状はあまくない。なにしろ素行が悪いというだけで当事者としての主導権を剥奪されかねないほど、そんなに危うい状況に置かれている。当事者への特別な庇護者と本人で、いかにしてこの当事者主体を守っていくかが、本物の福祉社会作りにとって、大きなカギを握っているといってもいい。

■当事者主役、最近のトレンドから拾う

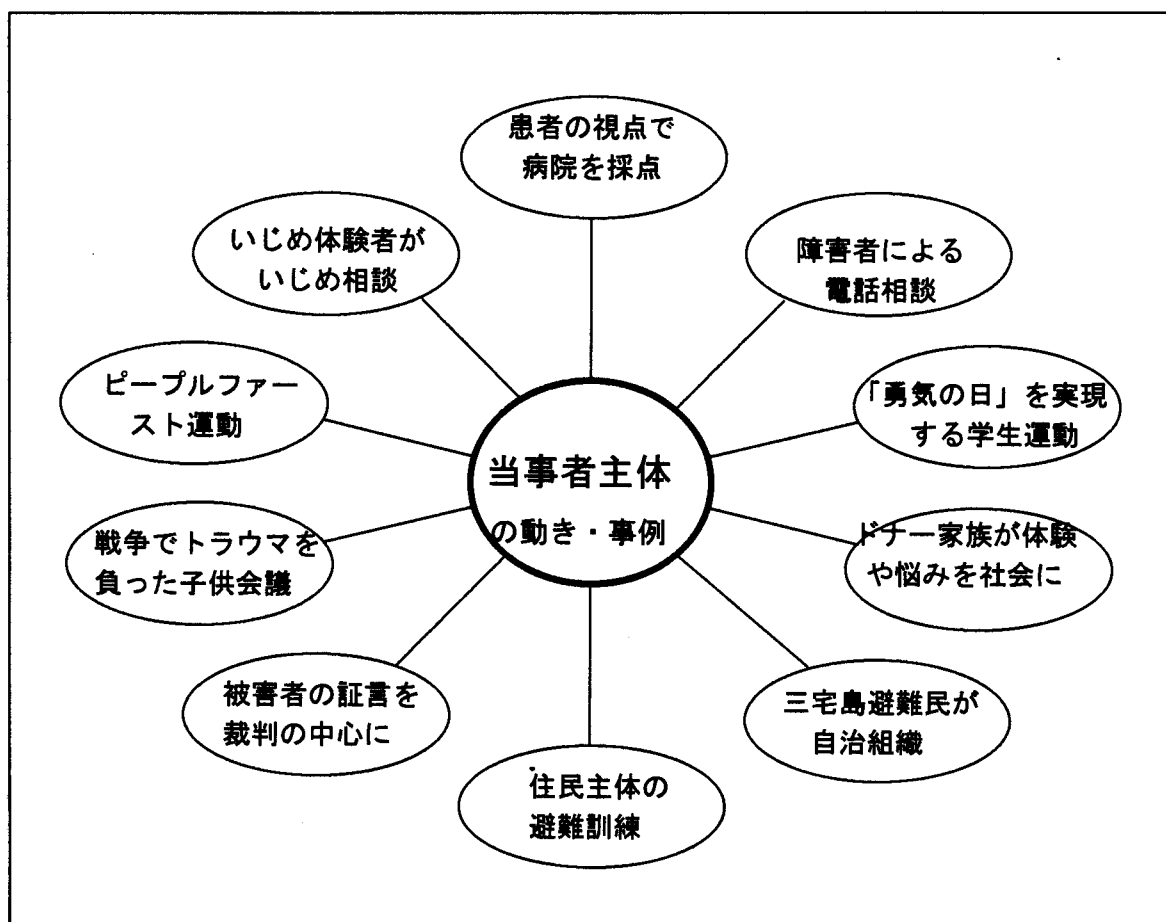
当事者主役はなにも老人や障害者だけの問題ではない。最近のニュースから、これに関連しそうなテーマを抜き出してみたら、以下のとおりになった。

キーワードだけ示してあるが、おおよそはわかるはずだ。医療の世界では患者主体へ進みつつある。患者の視点で病院を採点、という事例が出て来た。

いじめの問題に関しては、いじめを受けた人たちが今、いじめに遭っている人たちの相談に応じている。ダウン症候群の当事者、本人の組織づくりが全世界で進んでいる。庇護者だった親の言い分とは正反対のものも出てきて、やはり家族も他人だなと痛感させられた。

カナダで「戦争に巻き込まれた子どもに関する会議」があった。現地の子どもが主催者として参加し、戦争でトラウマを受けた子どもらが集い、体験を語り合った。

国内では子ども国会で提案された「勇気の日」を作ろうという動きがインターネットや中学生新聞などを通じて全国の中高生に広がっている。東海村で原子力事故を想定した住民参加の初の避難訓練が行われたが、渋る行政を動かして開催



に向かわせたのは住民だったという。三宅島からの避難住民は自治組織を結成して、現地からもたらされる島の情報を連絡網を通じて伝え合っているとも。ドナー家族が交流し、体験や悩みを社会に伝えようと「日本ドナー家族クラブ」を発足させた。

いずれも、社会のさまざまな場面での当事者が主体的に自らの問題解決の主導権をとり始めている。当事者が自らの運命を自身の手で決定し、自らその問題解決への行動を開始する。それが容易に実践できる社会をこそ、まずは目指さねばならないのだ。

では、当事者主役の社会づくりへ向けて、どのような努力が必要なのか、どのような得策があるのか。以下に並べてみよう。

①まず痴呆性高齢者本人のセルフヘルプグループづくりから

まず(痴呆の)当事者「本人」の連帯から始めなければならない。今までわが国にも無数の当事者グループができているが、福祉関連で意外に多いのが、家族の会あるいは親の会である。

彼らが当人の意思も代弁していると思われていたが、事実は違った。時には両者は激しく利害が衝突する。ある意味では「敵」でさえある。その「家族の会」から抜け出て、本人の会をどのようにして立ち上げるかが、当事者主体へ前進できるかのカギを握っているといってもいい。

そのためには、本人の会づくりを支援する、家族の会の支援グループとは別のグループができることが望ましい。本人の方を専ら支援するワーカーも生まれるべきだ。

こういう当事者本人のグループ作りと、それを支援する体制ができることで初めて当人が自らの願いや要求を主張できる環境が出来上がる。

②介護者から本人への「主役」移動

本人の会ができるにつれて、自然にそうなっていくだろうが、介護者から本人へ「主役」の移動がなされなければならない。本人をどのように処遇するかは、家族が決めるのではなく、本人が決める、そういう意味では価値観の基準を徹底的に介護者から当人の方へ移すことが必要だ。

③痴呆の世界を自ら語ることの効用

国際アルツハイマー学会に参加のため来日したクリスティーン・ボーデンさんが、自ら痴呆の世界を開示してみせてくれた。本人の手で初めて語られる痴呆の世界。それは痴呆の解明に役立つというだけでなく、当事者がその解明の主導権を取ったという意味では画期的なことと思われる。

彼女が開示してくれたことで、私たちはわずかながら痴呆の世界を垣間見ることができた。そのことが私たちにどれほど「安心」をもたらしてくれたことか。そうか、痴呆というのは、そういう体験をすることなのかと、わかっただけでも大いに安心材料になるものなのだ。

というふうにして、いつのまにか本人がこの問題の主役になってきているのを、私たちが実感するのだ。自身の状態を公にし、この症状の解明と治療に関係者と協同していく、それこそが当事者主体の動きとみることができる。

④きちんと周囲に表現・主張できるよう要介護者教育を

痴呆の体験を語るだけでなく、自ら抱えている願いや悩みをきちんと周囲に表現・主張できることが、当事者主体の次の段階になるかもしれない。

「(痴呆になっても)自己主張をしっかりできる人」、そういう人を作っていく教育(要介護者教育)が今、求められる。

本人の置かれた状況は、まさに孤立無援。周りからの限りない圧力と無理解の中で、しかもそれに対抗できる何物もない。自己主張するほどの言葉もエネルギーも備えられていない。これは大変なことである。

そこで「思い切って開き直って生きよう!」と自信をつけさせる。「迷惑をかけてもいいではないか」と後押しする。まだそういう教育のノウハウは開発されていないが、早急にこれを進めていかねばなるまい。ケアマネジャーや家族、施設職員に、相手の指示を否定して、あえて自分の主張を言えるか。それは大変な戦いだ。

たまたま小さい頃から頑固で、自己主張の強い人が痴呆症になったとき、その性格が幸いしている、という場合がよくある。施設職員やケアマネジャーは嫌がるかもしれないが、当人にとっては得な性分だ。それぐらいでない、とても自分の意思を(担い手に対して)表明することはむしろかしいということなのだ。

⑤支援者を得られやすい条件づくり

自己主張できる資質の次は、自分の支援者を確保できる資質だ。自立とは、自分自身が安全に生きていくための支援者を巧みに確保できることが基本になる。これには本人の生まれ持ったの性格がだいぶ関係している。明るくて社交的で、人好きのする人がお得なことは間違いない。興味深いことであるが、(後で事例にも紹介してあるが)、周りの支援を確保できている人は、昔から世話焼きさんであった人だ。「昔あの人にはお世話になったから」と。

面白いことにそういう人物は、要介護の今も、また支援をいただきながら、十分すぎるほどの「お返し」も実行している。地域はあくまでギブアンドテイクの原理が働いていて、世話焼きである人に世話焼きさんが近づいてくるという関係になっている。

⑥痴呆になるまでの本人の「準備努力」と教育活動

当事者主役の社会は、どこまでも当事者自身の自立心と努力を求めている。そうでなければなかなか当事者主役は守りきれない。その自立心の中に、周りから巧みに助けの手を引き寄せられるセンスも含まれている。

それを痴呆になってから学べといっても無理なことで、やはり痴呆になる前の永い準備教育が結局はものを言う。介護者もこの点については同様だ。そこで要介護者と介護者へ向けての準備教育が極めて重要な課題になる。

明日から介護をしなければならない、あるいは当事者として人の助けを求めなければならないという時は、とても間に合わない。いずれ親を介護することになるかも、というあたりから初めるのがコツだ。その後は「そろそろ」講座、次いで「直前」講座、そして「初心者講座」、その後は「ベテラン講座」「アフターケア講座」となる。当事者本人の場合も同様と考えていだろう。ベストの介護者の発掘法、自信のつけ方、周りへの上手な迷惑のかけ方、御礼の仕方・言い方、理解の求め方、ボランティアの確保の仕方、当事者グループの作り方、社会への問題提起の仕方など、メニューは豊富だ。

⑦当事者の世界へスムーズに入り込む技術の開発

当事者主体ということは、何でも当事者の責任に帰させるだけではない。本人が主役として対処できない場合(痴呆になれば当然、そういう状況になっていく)、

周囲が当事者の意思をどこまで理解し、当人の意思に忠実に従う体制がつかれるかどうかは課題になる。

痴呆になれば、各自独特の世界に入っていく、その世界に周りの人たちも入ってくることを求めるようになる。痴呆症の人にとっては、それがリアリティそのものであるが、周りの人にとってはそうではない。しかしそれでも敢えてその世界に分け入っていくことが当事者主役の要件であるとも言える。

後で紹介する「私を愛した痴呆の母」の主役の高畑富美子さんは介護に際しては「バアチャン・リアリティに乗れるか」どうかを問われているとする。「私は女優よ」と言う人が居る。ほとんどそれは女優の営みと言っていい。その「バアチャン・リアリティ」にスムーズに呼応できる技術とは一体何か？ これから開発していく必要がある。

⑧「当事者主体」から「相互主体」へ

ここまでは専ら当事者主役という発想を問題にしてきたが、では介護者の主体性は何なのかということになる。主体性は当事者のほうのみにある、というのもおかしい。福祉は当事者にのみ向けられているのではなく、当然、介護者にも振り向けられる権利がある。とすれば、でてくる結論は、相互主役ということになる。本当は当事者主体ではなく、介護者との相互主体だったのだ。そうなると、自己決定もじつは相互決定、介護は相互介護と理解すべきかも知れない。

前述の高畑さんが「私を愛した痴呆の母」と言う表現を用いた理由をこう述べている。私自身、母を介護しているものと思っていた。バアチャン・リアリティにも私なりに柔軟に対応してきた。「こうきたら、こう反応する」と、母の世界にいつでも乗っていける体制もできた。私の対応は「イチローじゃないけど、百発百中だった」と。

そこで「待てよ」と考えた。百発百中だったということは、私の反応が優れていたのではなくて、母親が私の対応に彼女なりに柔軟に対応してくれたおかげかもしれない、と思い直したのだ。私が百発百中になるように、母が気を利かせたにすぎない。そう考えたら、思い当たるフシがいろいろあることにも気がついた。そこで結論する。私が母を愛していたと同じように、それと同じぐらい母も私を愛していた。いろいろ気を使って来た。介護は相互的なものだったのだなど。

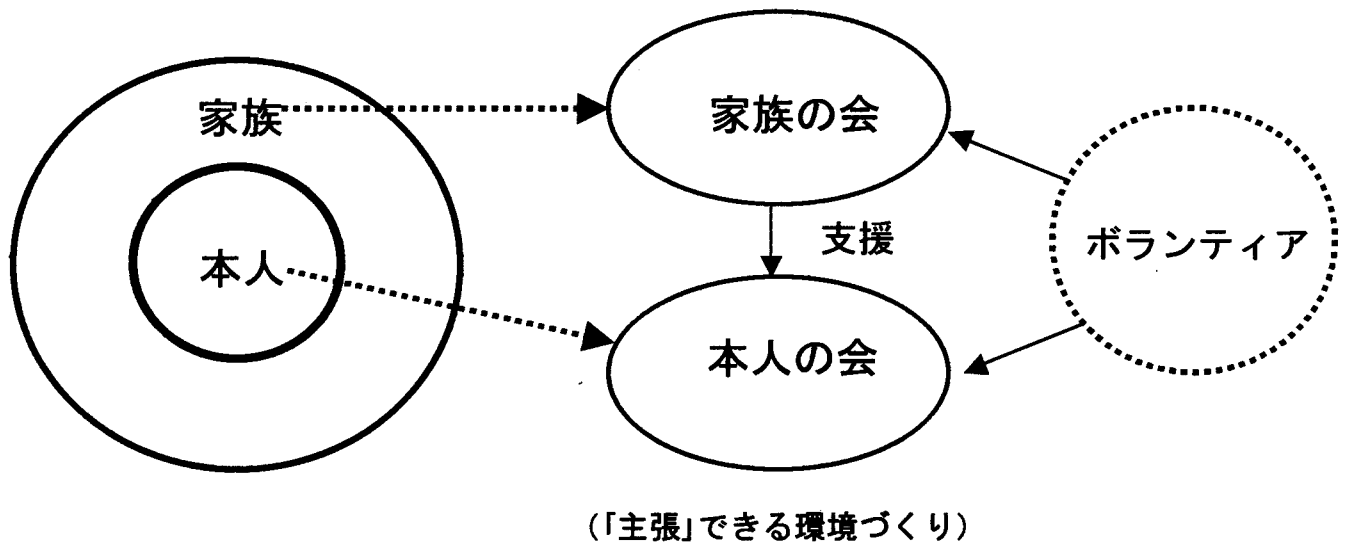
ではそういう相互決定、相互介護の境地にだれもがなれるのかといえば、そう

ではない。そこにはいろいろな条件がある。後で少し並べておいたが、両者のそれぞれに、例えば個人主義的な考え方が下地としてなければならない。私は私の生き方を追及したい、と同時に、母には母の生き方があるだろうからそれも尊重する。私も母の生き方にできるかぎり反応しよう、と同時に母もまた私の生き方に最大限理解を示す。

お互いが勝手に主張するのではなく、却って相手の生き方に反応し、そこに自分の生き方も乗せてみる。そうした響き合いの中に、相互の育ちを確保するという境地である。高畑さんの語りをできるかぎり忠実に再現したものを後に紹介するので、この境地が具体的にはどういうものなのかをじっくり観賞していただきたい。

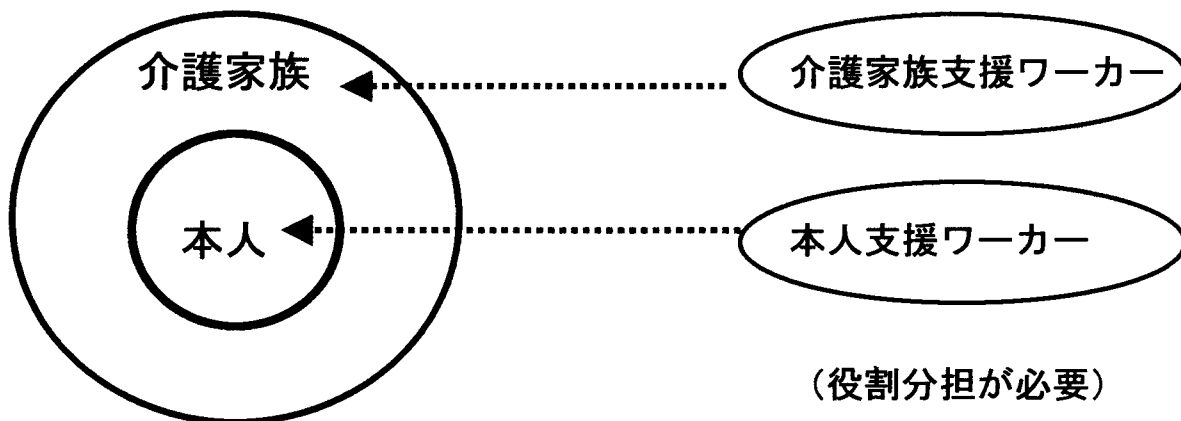
「本人の会」づくりがカギ握る

本人が自分の生き方、過ごし方をどこまで主張できるかどうかは、結局のところ、本人のセルフヘルプグループができるかどうかにかかっているのかもしれない。いかにして本人の会作りを実現させられるのか。



■本人支援専門のワーカーも

家族への支援ワーカーとは別に、本人を対象の支援ワーカーがいなければ、彼らの主張を本当に代弁することはできない、という意見が委員から出てきた。本人と家族は一体という考えからの脱却が望まれるのだ。



「痴呆」の世界から還って来たクリスティーン

痴呆の人が体験していること、彼女が生きている世界を社会に公にすることが、痴呆性高齢者の福祉やその理解の推進にいかにか大きな役割を果たすものかを、クリスティーン・ブライデンは教えてくれた。やはり福祉は当事者から始まるものなのだ。写真はNHKテレビから



■彼女は「あの世界」を丸ごと持ち帰った

私たちのイメージ世界において、痴呆の人は、どこに居るだろうか？ 心臓病や癌を患う人が、私たちと同じ国のどこかに住んでいるのに対し、彼らはいつの間にか、ある閉ざされた扉を抜け、「彼らの世界」へと、歩いて行ってしまふかのようだ。その先をきた人は、こちらへ戻ることも、私たちの言葉で明確に語ることもないため、まるでそこは、死のように未知で、それが私たちを不安にさせる。もしもそこへ行くことになったら、世界はこの目にどう映り、心は何を想うのだろうか？

しかし、僅かにだが、その扉が開き始め、痴呆の人たちの声が聞こえ始めた矢先、こんなイメージ世界そのものを、扉もろとも吹っ飛ばしてしまうような女性が現れた。向こうとこちらを行き来し、痴呆の世界を丸ごと持ち帰り、こちらの世界に馴染ませてしまったかのようだ。いや、本当はそれは、初めから私たちと共に、ここにあったのだ。それを理解させてくれるのが、クリスティーン・ブライデンである。

彼女の著書『私は誰になっていくの？』（旧姓クリスティーン・ボーデンで発刊）は、世界でもほとんど類のない、痴呆患者が書いた本であり、本国オーストラリアでは5年前に刊行さ

れている。日本語版は今年の10月末に発売されたが、著者訪問記・インタビューの付録つきで、「その後のクリスティーン」も知ることができる。

■脳の画像は115才の人のよう

福祉界に預言者がいたなら、彼女の出現は、特別な星の下に予告されたいろんな。そんなことを夢想してしまうほど、クリスティーン・ブライデンは特別な資質と経験を持って、痴呆の世界に現れている。

思考や感情をうまく言葉にできない痴呆患者たちと、一方で、言語を介さなければ相手を理解できない愚鈍な我々との、埋めようがなく思われたギャップを埋めるために、登場したかのようだ。

クリスティーンは、1995年に、46歳の若さでアルツハイマー病と診断される。97年ごろから症状の回復が見られ、98年に前頭側頭痴呆症と再診断された。

これは日本の専門家によると、アルツハイマーの中核群よりややはずれた病態ではあるそうだが、彼女の脳のスキャン画像は115歳の人のようである。

その画像を見せて講演をしたところ、高名な専門医が「こんなのは嘘だ！こんな状態なら話せるはずはない」と言って信じなかったそうだが、それこそが、専門家たちの典型的な反応であった。

国際アルツハイマー病協会の会議に出席し、「私は痴呆の患者です。私に聞きなさい」と言うと、「あなたは痴呆ではありません」とくる。それほど、尋常でない言語能力を有しているのは、なぜなのか？——そもそも、彼女は超人なのであった。

■超人が「やかん」も思い出せぬようになった

プリンストン大学で経営学の大学院入試を受けた時、彼女の語学力の得点は99%を示し、これは世界でトップの1%に入ることを意味した。

病気で退職した時の地位は、首相・内閣省の第一次官補で、これは省のトップから二段階目であり、科学技術への目覚ましい貢献に対して、国家公務員勲章も受けている。IQが高く、頭のいい科学者との会話でさえ、相手がなかなか要点を言えないので腹立たしく思った。

記憶力は「何ギガバイトものメモリーを持つ大きなハードドライブ」の様で、いつでも幾つでも同時に呼び出し、分析できた。つまり、彼女から見ると、「モノ忘れ」とは摩訶不思議な現象で、われら一般人は手動のタイプライター並み。どうしてそんなにトロいのか、理解できなかったのである。

そのクリスティーンが、痴呆症になって「やかん」も思い出せなくなってしまったのだから、我々は「栄光の日々から奈落の底へ」と考える。しかし、生来のチャレンジ精神と、クリスチャンとしての信仰心とで、彼女は見方を逆転させる。

■これは神が私に課した役割だった

アルツハイマー病とともに歩む現在こそが、神が自分の人生において目的としたことの重要な部分であり、それ以前の経験が準備だったのだ、と。

障害者の自立運動を率いてきた中西正司氏が、最近の著作『当事者主権』の中で、「当事者の専門性」に注目し、いわゆる専門家の医学と対等な学問としての「当事者学」の確立を提唱している。そして、当事者運動、当事者学が最も遅れている分野として、高齢者を挙げているが、特に、痴呆がそうであろう。

クリスティーンは、痴呆の分野で患者本人がいかに無視され、理解されていないかを身をもって知り、自分が特別に持った能力をここで生かすことに、大きな意味を見出したようだ。

当事者として体験しながら、同時に、科学の専門家として観察・記録し、分析することができる。また、出版業界で働いていたことから、執筆・編集ができ、これだけ痴呆が進んでも会話やスピーチができる。多忙な大臣らに対し、難しい科学技術に関する事柄をできるだけ簡潔に説明しなければならなかった経験により、「痴呆になるということ」を、そうでない人々にわかりやすく説明することができるという。

そしてなによりそれが活かされたのが、この本だ。痴呆患者の「不可解」と思われてきた行動について、また、なにより彼らの心情について、様々な比喩を用い、非常にわかりやすく教えてくれるのである。

■「周りの世界はうるさすぎる！」

その中で特に印象に残るのは、痴呆患者には周りの世界がうるさく、早すぎてついていけないが、それは必ずしも悪いものではない、という指摘である。

静かな場所と時間を確保すれば、「自然などを深く味わう心の内部空間が大きくなっている」ので、以前よりも心が豊かに感じられるのだそうだ。

昔の彼女は、常に他人も自分も駆り立て、ペースの遅い人には容赦のない、「あまり性格のよくない」人間で、親友を含めた複数の友人が、今の彼女の方が良いと言っているそうだ。

テレビCMなどは、音を消してもまだ多くのものが溢れすぎていて混乱するので、目を逸らすというが、そう言われてみると、あんなものに慣れさせられてしまった我々の方が、むしろ生物として異常なのだと思えてくる。日本のこの、無制限に、ただ効率と利益だけを考えてつくられた煩雑な都会で、痴呆の人はいかに圧迫感と混乱を感じているのだろうか、考えさせられる。

■私のことを「ぼんやりさん」と娘は命名

彼女の環境を特別なものにしてるのは、「家族」もあるだろう。彼女が痴呆と診断されたのは、DVの夫と別れた直後で、10歳から20歳の娘3人を育てるシングルマザーだった。ここに、大人の介護者と高齢の患者との関係とは違う、ユニークな空気が生まれている。

彼女本人が非常にユーモアを大事にすることと、娘たちの率直な態度で、気まずさや深刻さというものが軽減されているのだ。クリスティーンは、例えば「横倒しのビン」が思い出せなければ、「冷蔵庫の中で平たく寝ているあのビン」と独創的に表現し、娘たちを楽しませる。一方娘たちは、彼女が痴呆患者特有の無反応な状態で空を見つめている様子を「ぼんやりさん」と名づけ、その時のマネをして彼女を笑わせてくれる、といった具合だ。

つい先日、講演活動のために来日したクリスティーンが、NHKの番組でインタビューを受けていた。その時の内容と、この5年前の著作では、雰囲気やトーンに、違いが感じられる。それはおそらく、まず本については、「痴呆患者本人を励ます」という目的が第一にあり、また、症状がかなり改善されていた時期に書かれていたことからだろう。どちらかという、「希望」を多く語ったものになっていた。

それに対し今回のインタビューは、「介護する側」に対象をしばったものであり、また、執筆時よりかなり症状が進み、（娘や夫のことを忘れ、言葉も失う日が近いという）新たな試練の前に来ていることで、この段階での強い不安感や、娘を心配する言葉が聞かれた。しかし、それでもなお、今後の人生を夫と共に歩み、充実して生きる希望を語る、穏やかな表情は変わっていない。

■必要なのは「自分の人生には意味がある」と思えること

彼女は、世界の国々をまわりながら、痴呆患者から見て望ましい、患者本位のケアを訴えている。その中心となる最も重要な要素として、彼女や夫のポールが指摘しているものは、専門家には想像もつかないものだった。それは、痴呆患者の「スピリチュアリティ（精神性）」である。

本の中で、彼女はキリスト教の信仰そのもの、その素晴らしさについて書いている。しかし、最近ではそこから一歩進み、「それが自分のスピリチュアリティであったけど、それは宗教とは限らない。人により、釣りでも、アートでも、なんでもいいのだ」と考えるようになった。

痴呆と診断された時に最も必要なのは、電動ベッドよりも何よりもまず、「自分の人生には意味がある」「これからの人生にも生きがいがある」と思える何かなのだ、と。

■なんと発病してから再婚を果たした！

痴呆になってから、「さて、これからの人生をいかに大事に、楽しんで生きるか」ということを考える。そして症状の改善が見られたとたん、「異星人の宇宙船」と化してしまった車の運転に再挑戦し、紹介所でパートナーを見つけて結婚だってする。

これが、幼少時のあだ名が「私できるもん！」だったというクリスティーンのチャレンジ精神だ。「なんだ、痴呆になったって、こんなに人生を楽しめるのか。」これが、いま痴呆の人、そしていつか痴呆になるかもしれない我々にとって、どんな事実よりも安心感を与えてくれる。

自分を「介護者」ではなく「ケア・パートナー」と呼ぶ夫のポールは、「痴呆を患っていて

も、普通に、充実した人生を過ごせるよう、そのために必要な手助けをしながら、一緒に楽しんで生きていく」と言う。

クリスティーン・ブライデンは、自著の冒頭で、我々の社会における痴呆というものがなにやら隠すべき「タブー」であることに触れ、『自分は痴呆症です』と言って公表することで、きっと私は究極のタブーを打ち破りつつあるのだらう！」と言った。しかし、痴呆がタブーであり続けるには、それが「隠れて」いて、「奇妙」で、さらに「哀れ」でなければならないのだ。

彼女は、自分の行動や様々な活動を通して、痴呆の「負のオーラ」を取り払い、あるがままの姿を私たちに見せる。そして患者とケア・パートナー、社会が協力して欲求水準を上げることで、いくらでも痴呆ライフを充実させられるのだということを教えてくれている。

この意識が浸透したら、そこに、破るべきタブーはもう、ない。



痴呆になってから再婚した相手と(NHKテレビから)

これが「痴呆」の世界だ(クリスティーンの叙述から)

<抗痴呆薬を飲まない場合>

まわりの世界が早すぎてついていけない。ひどく落ち着かなくなり、話すことも、考えることもできず、わけのわからない混乱の中に取り残される。

<抗痴呆薬を飲んだ場合>

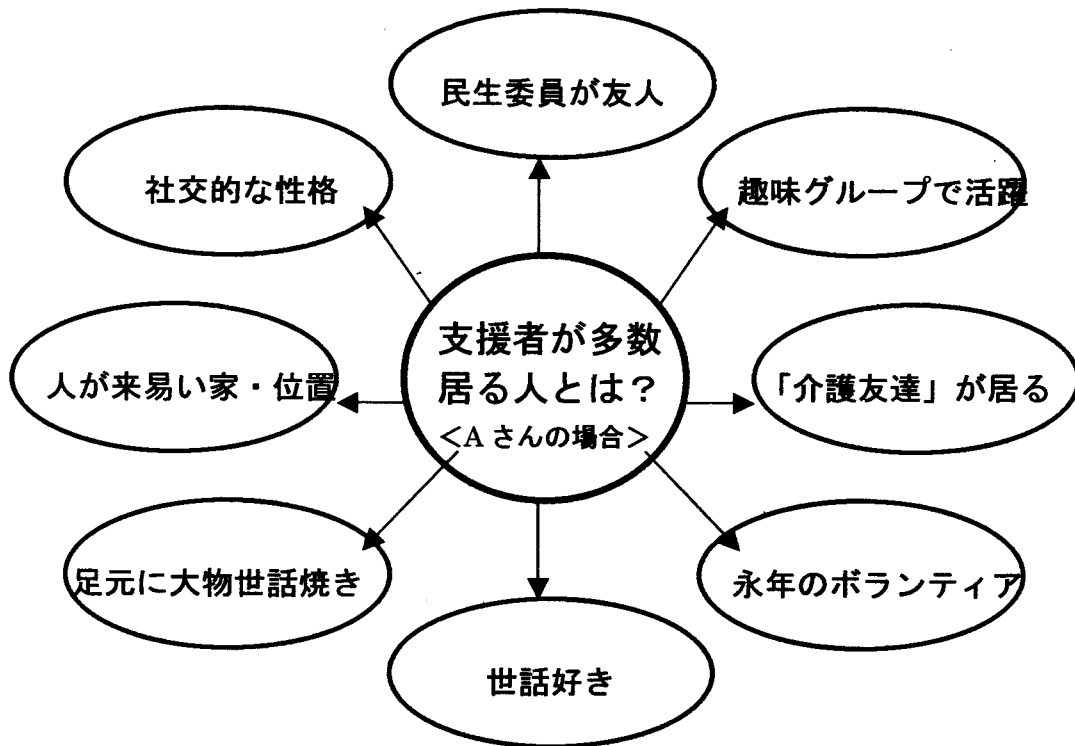
- 頭の中全体にぼんやり霧がかかっている、何をすることも大変な努力とコントロールが必要。そうしなければいつも間違ってしまう。内心は、「まるで爪を立てて絶壁に張り付いているよう」だ。
- 「どろどろした糖蜜のような脳」の内部で言葉がごちゃまぜになっている感じ。頭の中の言葉の本棚が床に倒されて、ごちゃまぜのかたまりになったよう。それを分類し直して、自分の言おうとする言葉を探し出そうとしているようなもの。
- 一度に一つのことしかできない。順序立てて物事を考えることもできないため、全てを一度にやろうとし、疲れ果てて倒れ込むまで、そのことにも気付けない。
- 普通の家庭生活でさえ、あまりに多くのことが起こり、話され、多くの音が耳に入ってきて、ついていけない。特に怒りやけんかに対処する力は残されていない。
- 助けを求めないのは、助けてくれる人がそこにいることをただ単に思い出せないのだ。娘の持ち物が目に入らなければ、存在自体、心に浮かばない。
- 音の区別をつけるのが難しく、何の音なのか思い出すまでは未知の不安な音でしかない。日常のちょっとした音にも大げさに反応したり、勘違いをしてしまう。
- 騒がしい環境は頭の内部で反響を起こし、脳をひどく混乱させ、聞いている音が何の意味もなさなくなる。まわりの世界は突然、遠く離れて自分とつながらないものになり、疲れ切って絶望的に感じ、「ぼんやりさん」になる。目を閉じて横になるか、静かな場所を見つけて空を眺めたりしなければならない。
- やりたくないことを提案されても、その理由を説明することは難しい。反対に相手はあらかじめ「そうすべき」理由をいくつも考えているため、結局それに従うことになり、善意の家族や友人によってさえも「圧迫」されていると感じてしまう。痴呆がすすめば「嫌だ」という言葉さえ思い出せず、さらに欲求不満が溜まり、暴力的になってしまうのだろう。
- いま持っている「数少ない自由」をできるだけ長く手放さないでいることが、とても大切だとわかった。普通の人ができるような間違いをしても「イカレてる」証拠とされ、外の世界は、その自由をあまりにも容易に取り上げようとするから。
- 感情を伴う反応はあまりにもエネルギーを多く使いすぎるから、以前より少し「平板」に感じる。空っぽに感じることもあるし、涙もろい時もある。
- デイケアの場は死んだようで好きでない。病気が進んでいる人と居ると恐怖を感じてしまう。同じ段階にある患者同士、普通に喫茶店などで集まる方がいい。

支援者を得られやすい条件

同じ痴呆症の人でも、まわりに助け手がたくさん居る人と、その反対の人が居る。自分らしい生き方を痴呆になっても保持したいのなら、とにかく「自分を助けてくれる人」をたくさん確保しなければならない。

では、助け手をたくさん確保した人とは、どんな人なのか？ ある一人の痴呆症の人を調べてみたら、以下のとおりであった。

つまり、症状が出るまでの、その人の生き方や、生まれながらの性格が、決定的に影響している。



大きくは、

- ①その人の生まれもつての性格(世話焼き、社交的)
- ②友達づくりへの努力(趣味友達などで、介護し合えるほどの友人も、民生委員等の福祉関係者と知己に)、
- ③人のために尽くしてきたか(ボランティア活動歴、町内会の役員等)、④世話焼き(裏返すと、助けられ上手でも、自己主張もしっかり)、
- ⑤自宅の状況や位置(人が集まりやすい家、家の前を人がよく通る)などが挙げられる。

支援を得られやすい条件。例えば…

痴呆でガン末期の状態でも「世話焼きさん」

■「家に帰りたい」という本人の願いで近隣住民で支えることに

福井県の在宅介護支援センターがかかわっている、一人暮らしの痴呆高齢者（女性）Uさん。悪性疾患で入院し、手術・治療後、万全の状態ではないが、「家に帰りたい」という本人の願いが強く、近隣住民で彼女を支えることになった。

彼女の住まいは団地の一階の隅にあたり、同じ一階の1人暮らしの人たちが、とおりがかりのついでに様子をみたり、ちょっと寄ってみたり、おすそわけを置いていったりするらしい。

彼女の支えのネットのキーマンは、4階に住んでいる元自治会長のTさんで、めずらしく男性の天性の世話焼きだ。片親に育てられたせいもあって、若い頃苦労したせいかなと本人は言っている。とにかくUさんは、痴呆で「なにもわからなくなった」ため、なにかあると「Tさんに聞いてくれ」。

夜はUさんの孫の友人が有償の契約で泊りにくる。同じく遠い親戚のKさんが昼ご飯を作ってくる。その他の日常の安否の確認やこまごまとした支援は近隣の人たちが担っている。

■要介護者がホスト役になっての「ふれあいサロン」が開かれていた

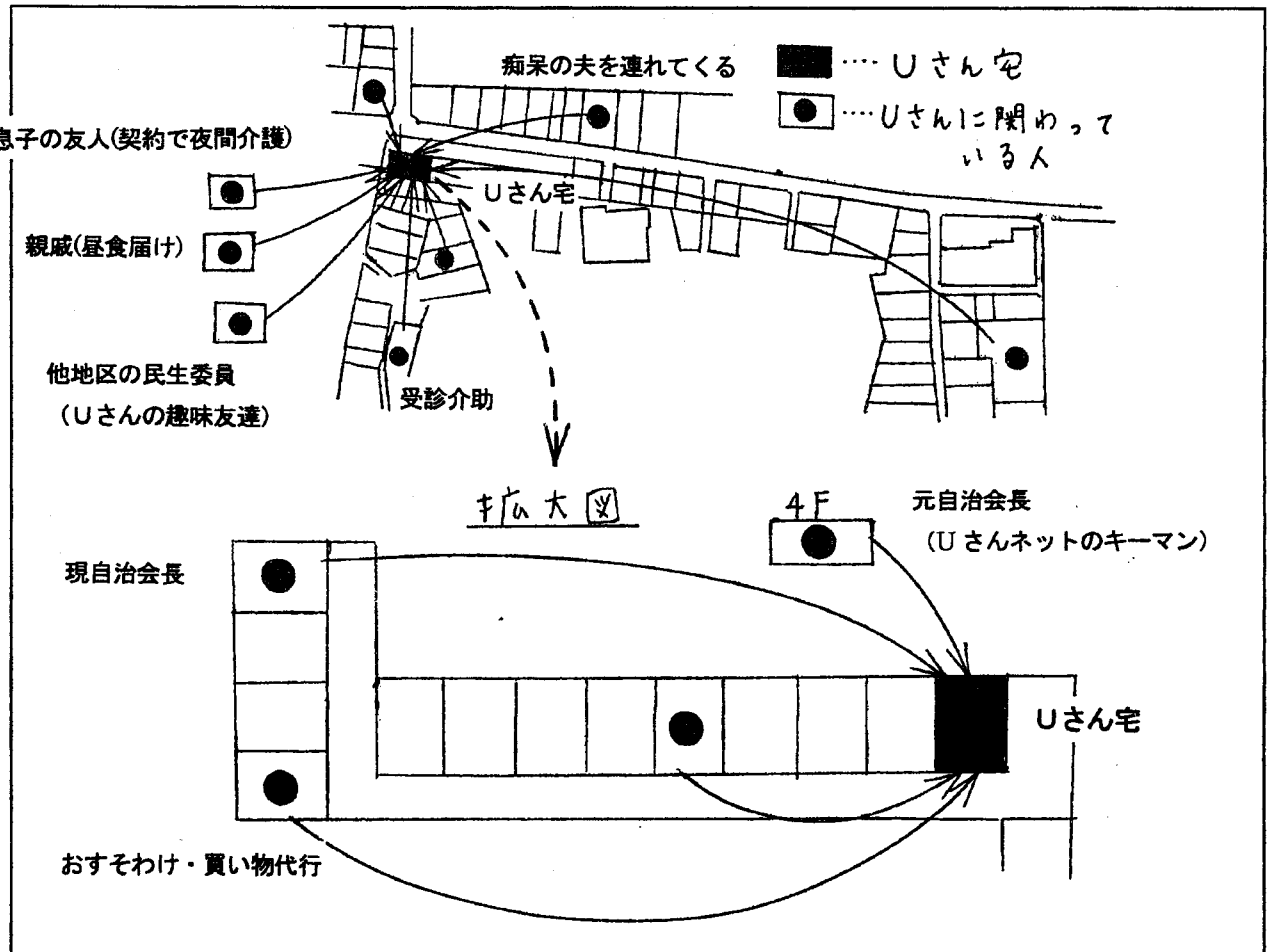
といっても、Uさんが一方的にお世話になるというわけではない。そのあたりが面白いのだ。例えば何人かの男性が彼女の家に遊びにくるが、そのとおりにカルタなどを楽しみにくる。そのお相手をしているのがUさんなのだ。女性のほうも何人かがしょっちゅうやってくるが、こちらは日常生活のこまごまとした支援がメインになっているものの、じつはUさんがホスト役になっての「ふれあいサロン」であるらしい。要介護でしかも痴呆だというのに、あれ食べ、これを持っていきなど、相変わらずの世話焼き振りなのである。

どっちが要介護者なのかわからなくなることもあるというからすごい。こうして毎日、数名がUさん宅に顔を出すのは、「昼間疲れさせれば、夜はよく眠られて、徘徊をしなくてすむのではないか」という、彼らの作戦名であった。

■ボランティアとして活躍したときの仲間が、今は彼女を支える資源に

なぜこんなに、Uさんをみんなで支えようとするのか、Tさんに聞いたら「それが彼女の人徳だと思うよ」。こんな体調になっても常に明るく振る舞い、まわりを楽しませようとしている。話し好きで、自分の方から「寄っていかないかい？」と積極的に声をかける。

それに彼女は、もともと民謡クラブで活動し、施設慰問もする等、ボランティアとして活躍した。そのときの仲間が、今は彼女を支える資源になっている。まさに「情けは人のためならず」ではないか！



「いずれ」から「そろそろ」、そして直前準備、初心者向けへ

要介護者・介護者向け教育もきめ細かく

■「いずれ」と「そろそろ」は違う

今回はフィールドワークを中心に研究活動を実施した。各委員が分担して介護家庭等に聴取したが、そこで感じたことがある。要介護者や介護者自身への「教育・研修」をもっときめ細かくやらねばならないということであった。

例えば、同じ地域に複数の介護者が同じ種類の苦勞をしている。しかし彼らが地域が同じという意味で連帯し、助け合っているかといえば、ほとんどない。地域の人たちに巧みに助けを求める、というのは、やはり理屈であって、たいていは要介護者と介護者が家に閉じこもっている。これを単なる理屈の域に止めているのは、助けられ上手というのが非現実的な発想なのではなくて、もはや介護の「地獄」の真っ只中に入ってしまったら、そういう発想は受け付けられないということなのだ。あらかじめ、まだ介護に取り掛かっていない時期に、冷静に考えてもらえば、助けられ上手という策が効果的であることはわかるはずである。だから事前教育が欠かせないのだ。

ここに何段階かの「教育・研修」を並べてある。今まではただ危機管理教育をやっていただけだ。「いずれはあなたも親を介護するときがきますよ」と脅かして、それに呼応した人が講座にやってくる。しかしまだ親が元気なときは、なかなかこういう講座に顔を出す気は起きないものだ。「自分にはそういう役割は巡ってこないに違いない」と思ってしまう。

■その時期が近づいた頃からそろそろ始めよう

そこで、もう少し、事態が現実的になってきた頃から、改めて講座を組んでみたらどうか。すなわち、「どうやら私が親の面倒を見なければならぬようだ。しかもその時期はだいぶ近づいてきた」という段階に来た人たちへの講座開設だ。

じつはこういう人たちは、たとえば地域で開かれているボランティア講座や福祉講座、あるいはもっと一般的な生涯学習講座などにやってくる。ボランティア講座の講師を担当した際、受講の動機を参加者に尋ねると、おおまかにみて全体の5分の1ぐらいの人が、そういう動機を打ち明ける。「そこで今からボランティアとか介護の勉強をしておきたい」。それほどまでいなくても、「少しぐらいはこういう世界に踏み込んでおきたい」と言う。

■介護者として「助けられ上手」になりましょう、と

この「そろそろ…」の時期を過ぎて、いよいよ「まもなく親の介護が始まる」という時期に、受験で言えば「直前準備講座」が必要になってくる。もはや人ごとではないことがわかった。明日か明後日か、否応なく介護の仕事が回ってくる、という段階に、その時期にふさわしい教育内容が用意されて

いい。この学習を体験せず介護に踏み込むために、文字通りの「地獄」の世界にもまれてしまうことになる。

自分だけで頑張るはいけない。いろいろなサービスを活用していいのだ。いや、それだけでなく、地域の人たちの助けを得てもいい。当事者グループというのに加わって、仲間同士の助け合いもしよう。それに、ただ、日々介護では、体だけでなく心も参ってしまう。上手にリフレッシュする工夫をしなければだめだ。自分のストレス対策要員も確保しよう。助けが得られやすいように自宅も改造しなければならぬ、などといった、さまざまな学習テーマがありうる。

その直前講座を受けた後に、いよいよ「本番」に入る。学んだことが、そのとおりに実践できるか、やはりそううまくはいかない。ましてや、直前講座を受けていない人は、当惑の日々だろう。そこで初心者講座がありうる。ここまでくれば、もはや「人ごと」ではないことがはっきりする。その初心者に対する講座があつていいのではないか。すでに体験が始まっているから、実技の中味やあるべき心構えなども、よくわかる。

そして、介護をし終えた段階で、今度はアフターケアのための講座が待っている。つらい介護を何年間もしてきて、突然、そのつらい日々が途切れてしまったとき、危険な状態が生まれてくる。ぽっかりとあいた心の空洞。それを巧みに埋める術を教わっていない。痴呆症状が出て来る人も居る。ちょうど42キロものマラソンをしてきて、突然、休むのは体によくないと、ひきつづき軽いランニングを続けている光景に出くわすが、あれと同じだ。

いちばん一般的なのは、家族の会で本格的に仲間のためのボランティアを始めたり、行政機関の依頼などで、他の介護者へのアドバイスや相談を受けるというケースであるが、人間はやはりそうしたいのだろう。人のために尽くすことで、心の空洞を埋めることができる。

■看取り終わった人を講師で活かす仕組みを

介護をし終え人たちを介護の専門家として活用していくシステムだ。

痴呆の妻の介護に疲れた夫が、近隣の人たちに支援をお願いしたことがきっかけで、今、町内会長を中心に、その当事者宅で定期的にふれあいサロンが開かれるようになった。そのときの参加者として町内会長は、やはり痴呆の人の状態や心情をよく理解してくれる人がいいということで、周囲の「介護をし終えた」人を数名リストアップし、協力を求めた。結果として、この選択はピタリうまく行った。

ほとんど活躍しているのはOBたちという家族の会にも出会った。介護講座の講師を担当している人もいた。そういう場を提供することが、そのままアフターケアになるのだ。

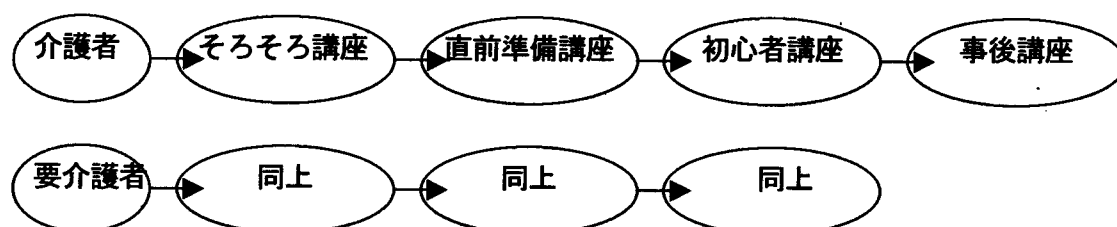
■要介護者向けの講座も。御礼の仕方、人の使い方など

さて、今まで述べたのが介護者向けの研修であり、処遇であるが、一方で、要介護者自身に対しても何段階かの講座が開かれていい。図を見ると、「事後講座」を除いては、介護者と同じ種類の、また同じ段階の講座が必要だということになる。

ただ嫁や娘の介護に身を委ねているだけでなく、もっと積極的に、「上手な介護のされ方」とはどのようなものなのか、介護者への御礼の仕方にはどのようなヴァリエーションがあるのか。お返しの行為として、どんなことができるのか。介護者に好かれるにはどんな態度を取ればいいのか。要介護の状態にあっても、人生を楽しく生きるにはどのような工夫が必要なのか、地域のグループに入れてもらうにはどうしたらいいのか、まだ元気なうちから仲間に入ってあげばいいかもしれない。

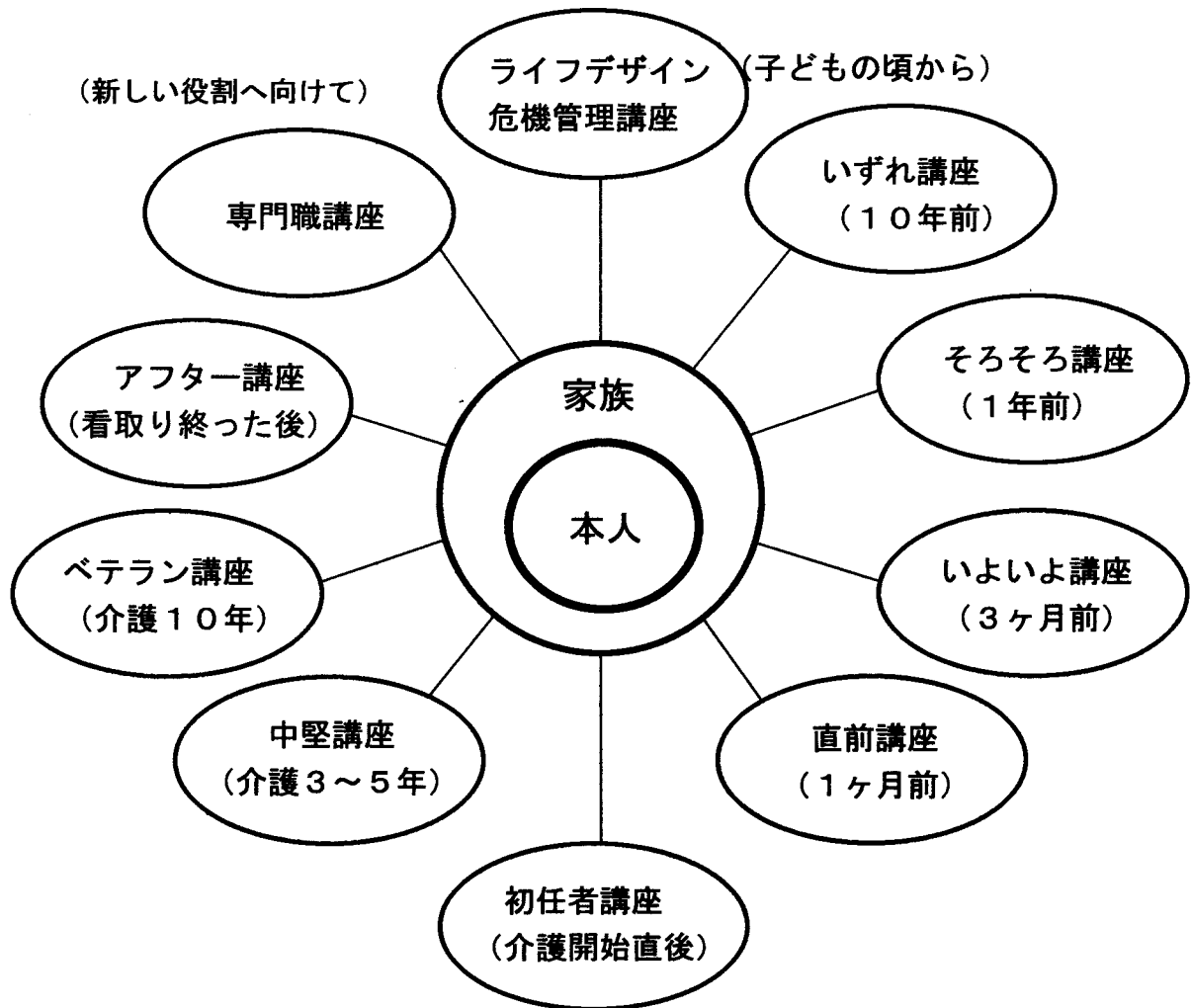
その他にも、自立訓練のメニューにはどのようなものがあるのか。家族に負担をかけないためにはどんな努力が必要なのか、当事者グループに入るにはどのような方法があるのか、自分でそれを組織する方法は？ などなど。教わるべきことはいくらでもある。これだけの知識を吸収しておけば、同じように介護状態になってもだいぶ境遇は違ってくるのではないかな。

いままで、講座や研修といえば、担い手の方ときまっていたが、これからは担い手と同じぐらい、受け手の側もさまざまな知識や技術を習得して、担い手がやりやすいような、また本人が幸せに生きることができるような状況を作り出していかなければならないのだ。ものごとを単純に事前・事後などと分けしていたのでは、効果的な教育は行われ得ないということが、これでお分かりのことと思う。



介護者と要介護者への系統的研修

地域の人たちに上手に助けてもらいながら、介護をしている一方で、誰にも打ち明けず、助けも求めずに、引きこもっている介護者も少なくない。そうなる前に、いろいろな段階での研修が必要だ。それは本人についても言える。この部分の研修が全くといっていいほど不足している。



研修の柱は「介護の社会化」

—特に「地域にゆだねる」センスを

- ◆「ともに豊かに」の心得
- ◆助けられ上手の技術
- ◆それなりに「地域や人のために」(本人も介護者も)

「自己決定」でなく「相互決定」。「介護」でなく「相互介護」

私たちは日常、気軽に「自己決定」とか「介護」という言葉を使っているが、厳密に考えていくと、これはおかしいということになる。当事者主体ということ言えば、自己決定であるが、しかしそれを保障して当事者が自己の決定に責任を持てるのか、という問題が浮上する。一方、当事者主体からすれば「介護」という言葉はおかしい。当事者が福祉の営みの客体になっている。当事者が主体となれば、少なくとも「相互介護」と言うのが正しい。

■「自己決定」はどこかへんだ

痴呆性高齢者の「その人らしい生き方」を家族や地域がどこまで支えられるかという議論の中で、「自己決定」という問題が議論に上る。当事者主体となると当然、「自己決定」の尊重が重要な要件の一つになる。

自己決定という言葉はたしかに正しい発想なのだが、しかしそれをどこまで認め得るかという議論が出て来た。それをしたことで生じる結果に、本人がどこまで責任を取れるのか。本人の自己決定に、周りの家族や介護者が責任を取ると言っても、現実的ではない。どうやらこの議論の出発点の所に、問題を難解にさせるなにかがあるのではという議論になった。

■介護者の決定権もある

自己決定は、本人にあるのは当然として、それを言うなら、介護者にも決定権は認められるべきである。実際には、介護者の決定権の方が圧倒的に強くて、結果として(本人の意思に反して)施設入所といった処置になるわけだろう。

それにしても、この「相互決定」というのが、現実に近いあり方であることは認めざるを得まい。もともとは当事者本人だけの決定権ということ自体が現実から遊離していた。正しくは「相互決定」なのだ。両者の「決定」がぶつかり合い、そのダイナミックな係わり合いの中で、より妥当な「決定」が生まれてくる。一見、屁理屈のように見えるが、じつはこちらの方が現実論に近かったのだ。

■「私を愛した母」

同じことが「介護」という営みにもいえる。私たちは介護の現場といえ、一方に介護を受ける者がいて、もう一方に介護者が居る。後者が前者を一方向的に介護するというのが、「介護」の意だと、誰もが思っている。

しかし、これもまたおかしい。では介護を受けるものはただただ受ける一方なのか。そんなことはないだろう。たとえ呆けていても、ネタキリでも、それなりの「対抗介護」(?)はなされていると見るべきではないか。

研究委員会で、ある介護者の体験が注目の的になった。痴呆の実母を(夫の了解を得て)引き取っ

た主婦が、看取り終わった今、ふりかえってみたら、「母が私を介護していた」部分もたしかにあったと、思い至ったのである。自分は一方的に母を介護していると思っていたが、それがこんなにもうまくいったのは、母が私のやりかたにうまく対応してくれていたのだ。

母がおかしなことを言う。「ははあ、こういうことだな」と、母の世界にこちらも乗ろうとする。「それがまた、ピッタリ当たるのよ。まるでイチローの気分。百発百中なのね」。ところが、それは母が私の演技に乗ってくれていたことが、だんだんわかってきた。

痴呆の世界に居ながら、母は娘の私を気にかけて、私の介護の努力を認め、両者の関係がぎくしゃくしてきたら、結局は母の方が私に合わせてくれていた。そういうことが、ひとつひとつ思い出されるのだ。彼女は今、介護の数十年間を文字にしているが、タイトルはこうと決めた。「私を愛した母」。介護していたのは母の方だったと彼女は言うのである。

■互いに相手の生き方を尊重

両者は、よく言われる「母子密着」とはだいぶ違っていた。自分は介護に埋没したくない。母の生き方に私が百パーセント埋没させられるのはごめんだ。私は私の生き方をもちたいし、それを全うしたい。同じようにして、痴呆の母もまた自分なりの世界を持ち、それを生きていく自由を認めよう。その世界を大事にしてあげよう。ある程度の距離を保ちながら、自分の生き方も母の生き方も平等に大事にしていく。冒頭で紹介した「相互決定」というのは、こういう親子の間からはじめて実現するのかもしれない。

このケースは、娘の方が、母の方の「決定権」と「介護力」を最大限に後押しする努力をした。一般的な親子ではそうも行くまい。では要介護者と介護者の間で「相互決定」「相互介護」が自然にできるようになるには、どういう条件が整っているべきなのか。

本書の他の箇所でも「クリスティーン」という痴呆の女性を紹介した。IQがとてつもなく高かった人が、中年にして頭脳年齢 115 歳になってしまった。しかし彼女は痴呆になってから生涯の伴侶を獲得し、痴呆の人でしか体験できない人生を作り上げようとしている。

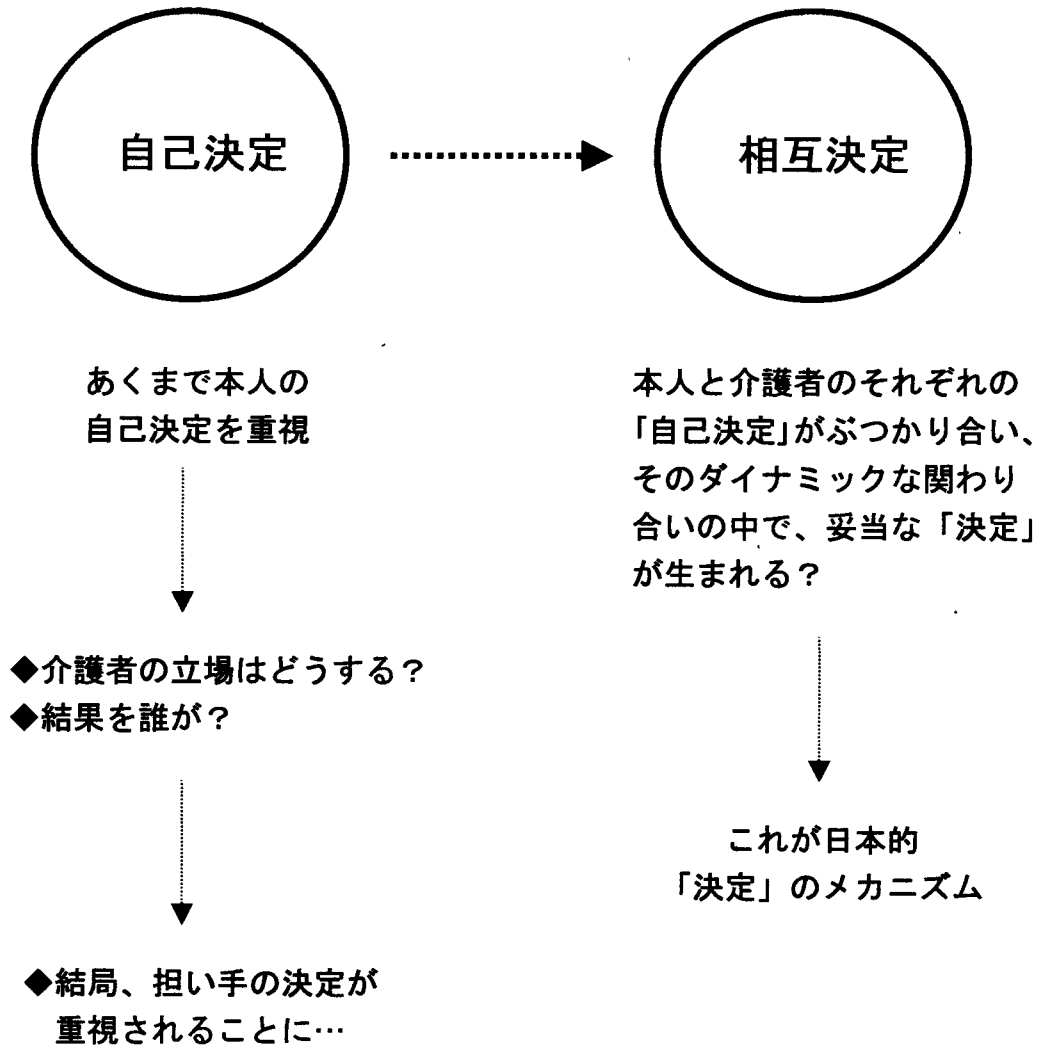
当事者自身が問題の主体者だという理解にたつて、しかも同じ当事者同士の連帯が深まり、広がるに連れて、本人の自己決定意欲は高まって行く。彼女はその段階にまで至っている数少ない当事者かもしれない。

その段階に至ったとき、当事者本人と介護者の「相互決定」と「相互介護」が現実的な到達目標になっていくのだ。本人の自己管理能力をどこまで育て得るか、そこに新しい介護の関係が育ってくるカギが潜んでいた。

「自己決定」のわからなさ

むしろ「相互決定」？

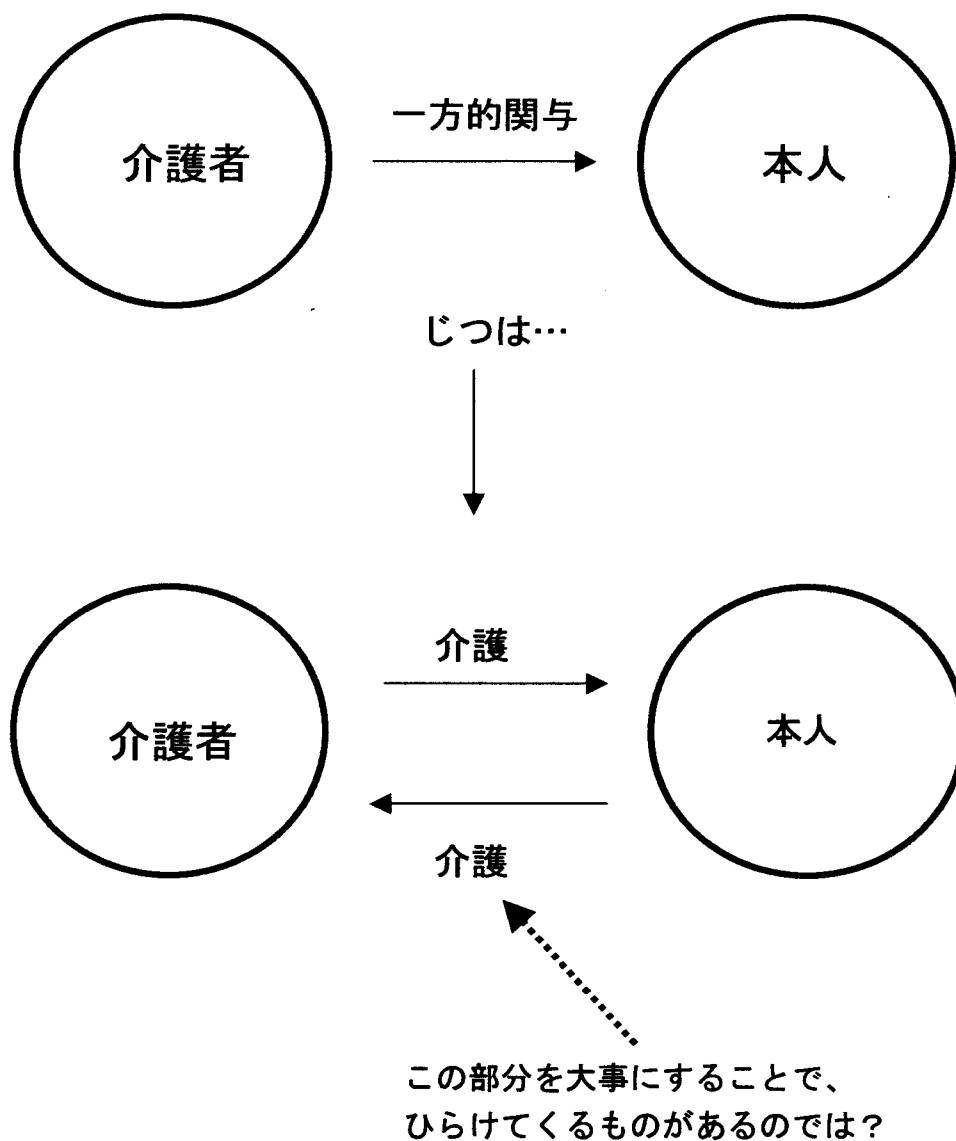
私たちが普段使っている「自己決定」というのには、どこかうさんくささが漂う。建前はそうでも、実際はそれは無理という思いが頭にあるのだ。それならばどう考えたらいいのか。委員会の議論の中ででて来たことは「相互決定」だった。



「介護（ケア）」のわからなさ

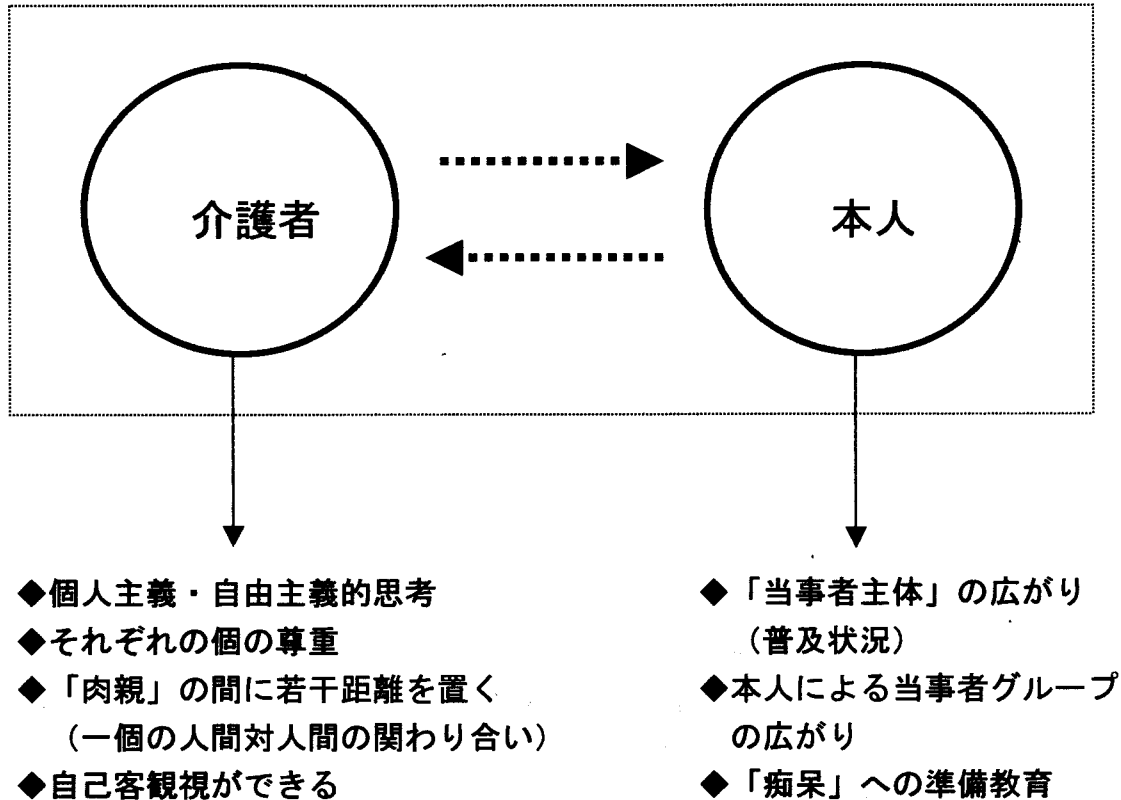
むしろ「相互介護」か？

同様にして、私たちが気軽に使っている「介護」もおかしい。たしかに表面的には介護者による介護行為なのだろうが、その中身を点検してみると、じつは、要介護者からも介護者へ向けて「介護」行為があるのでは、という議論になった。



「相互介護」ができる環境

相互介護が実現するには、要介護者と介護者の双方の生まれ持つての資質と努力、相互協力が欠かせない。そしてまた社会の環境づくりや当人への教育活動も。これについては、「私を愛した痴呆の母」の部分参照されたい。



「私を愛した痴呆の母」

要介護者は福祉の対象者であるだけだと私たちは当たり前のように思っているが、じつはそうでもない。要介護者もまた「介護」という営みの主役の一人として、主役にふさわしい役割をしているのだ。それを介護者自身がどのように実感したのかを、一人の介護者の述懐というかたちで紹介しよう。埼玉県春日部市に在住の高畑富美子さん。以前に、痴呆の実母を引き取って介護した(既に亡くなっている)。そのときの体験を高畑さんに聴取し、こちらでまとめたものである。



ボランティア活動中
の高畑富美子さん

■「私が介護した痴呆の母」でなく

高畑富美子さん(埼玉県春日部市在住)が、痴呆の母と過ごした日々をまとめた原稿が今、すでに100枚になる。書き始めた時に考えていた題名は、『母の世界につきあって』や、それこそ『痴呆性老人の介護』といったものだった。しかし30枚ほど書き進んだところで、考えが変わったという。

「いま、『これだ』と心に決めている題名がある。それは、『私を愛した痴呆のカンちゃん』。カンちゃんとは、母のニックネームだ。「私が介護した痴呆の母」ではなく、「私を愛した痴呆の母」。結局、母と自分の関係はこれだったのかな、と思っている。

高畑さんは、3人姉妹の末っ子として生まれた。長女はいかにも「長女らしく」育ち、次女はそ

の反動で、親子関係に葛藤があった。そしてその両方を見て育った高畑さんは、家族の中でどこか「良い子」を演じながら、また「一歩引いている」という意味で、傍観者のように感じることもあった。だが、その反面、自由でもあった。

■「三番目の子」であったしあわせ

3番目の子供ということで、親からの干渉が少なく、特に「こうしろ」と言われたい限り、自分で選択し、自分で結果を見ればいい。そういう生き方ができた。これは、母に言わせれば「お前には躰をしてこなかった」ということだったが、高畑さんにはありがたいことであった。次女である姉は、母からやたらと、「お掃除をちゃんとやれ」と言われてきた記憶がある。母を自分の家に引き取っても、「ちゃんと掃除しなければ怒られる」と思い、掃除するたびに緊張した。そして、母が痴呆で掃除が出来なくなると、それが「復讐」に変わった。高畑さんが「なんでそんなに怒っているの？」と聞くと、姉は「私もこう言われてきたんだから」と洩らした。

その点、高畑さんには、母からうるさく言われた記憶がない。掃除は嫌いで、下手だ。母と高畑さんの間には程よい距離があり、確執がない。だから、互いにゆとりがある。姉の所から高畑さんの家へ移った母は首をかしげ、「この人は掃除が嫌いなんだね。女が家の中を掃除しなければだめだよ」と、姉の家とは違う意味で、自分がその役割を担わなければと思っているようだった。そしてそんな母を見ていることが、高畑さんは楽しかったと言う。「まったくねえ、ボケちゃって」と責めるように嘆いた姉とは、初めから、受け止め方に大きな違いがあった。

そもそも高畑さんには、誰に対しても「これがこの人なのだ」と、自分と違う個性をそのまま受け入れられるところがある。そしてその資質は、結婚当初、「女性らしさ」や「妻の役割」というものと馴染まない自分を感じ、夫との関係の中で悩んだ経験によって、強められたと言う。「母は私に厳しいことを言ったり、躰けたりはしなかったけれど、やはり私のロールモデルだった。だから、『母はこういう時、我慢して父に仕えていたな』と思ったりすると、葛藤が起こり、とても苦痛だったのです」

そこから、女性学を勉強したり、カウンセリングを受けたりしながら学ぶ中でたどり着いた結論が、「やっぱり私は私らしく生きていい」だった。「嫌なことは、嫌だと言っていいのだ」と。

■「人は生来、したいことをする」

母と同居を始めたばかりの時は、母が内股で「女人の小走り」をしたり、夫の前でしなをつくるような仕草をすると、「嫌だな」と思ってしまった。しかし、それは母のせいではなく、母が疑いなくそういう文化を身につけ、それでいいのだと思ってきた人なのだ考えると、そこを受け入れられるようになっていった。母が、「ここの人は誰だろう。女がお掃除をしないで」と言って、落ち葉を掃こうとする。すると高畑さんは、それを認めるのだ。「ボケた母に、『これは女の仕事でなくてもいいのよ』なんて言わなくていいわけでしょう。私はただ認めるの」

なんでも、本人がやりたいと言ったことは、やらせないよりやらせた方がずっといいと思ってい

る。それは、「人というのは、したいことをするように生まれてきているのじゃないかと思っているから」だ。これは高畑さんのもとの生き方でもある。結婚した頃から、夫によく言われた。「お前は、したいことをすぐするんだな」。

母にも、やりたいことをやらせてみると、そこには思わぬ効果がたくさんあることがわかった。例えば落ち葉掃きは、運動をするから筋肉がつき、体が冷えず、骨も強くなる。本によれば、筋肉をつけることが脳の働きにも良い影響を与えるということだった。そして食欲が湧き、よく眠れる。姉は、「夕方に掃除なんかさせなくて」と言うが、高畑さんはやりたい時にやらせた。

■「ちょっとここでお茶でも」と

落ち葉掃きをしに外へ出ると、そこは「社会」だ。母は愛想が良く、通る人に「こんにちは」と声をかけ、顔見知りになると「ご飯を食べませんか？」と言い出す。そこで高畑さんは「しめた！ 待ってました」とばかりに、「ちょっとここでお茶でも飲んでいって下さいよ」とその人たちを誘い入れ、母や痴呆に関する情報を手渡すのである。そのように、母の痴呆をオープンにし、地域の人を活用するということに対して、高畑さんはまったく気後れしない。「私、そういうところ平気なの」

世間体は気にしない。「夫が世間体で生きているような人だから、私まで一緒になってそんな価値観を教えたら、21世紀に生きるというのに、子供が気の毒でしょ。自分自身、「女のクセにそんなことをするな。人に笑われる」と、ずいぶん叩かれた。「だから私は、笑われている人がいても、笑わない。仲良くするの」。それは、父親の影響もあるかもしれないという。

高畑さんの父は、「弁護士のなり損ね」だった。だから、実際にヤクザっぽい仕事もしていたと思うが、一生懸命に勉強していた。そして、たとえ稼ぎにはならなくとも、困っている人たちにはいつも味方をした。それを、とてもよく憶えている。

だから高畑さんは、世間体を気にして母を困らう、ということは決してしなかった。しかし徘徊は、「したい時にいつでも」というわけにはいかなかった。そこで、時には「お母さん、徘徊しましょう」と、連れ出したのである。

■「徘徊も母には意味のあること」

「徘徊というのも、母には意味のあることなのです。そして私も、医学的な知識はなくとも、『昼間、太陽を見ながら歩いたら、夜はちゃんと寝るな』と思ったの」。それを始めた半年後、これを実証したある老人施設の実験結果が、新聞に載った。夜の徘徊を減らすには、太陽と似た光線を、昼間に一定時間、目に当てると効果がある、というのだった。

「お化粧品療法」にしても、世間の先を行った。母が「お化粧品がしたい」と言うと、姉は「ボケても化粧品だけはするのね」と言うが、高畑さんは100円化粧品を買ってくる。そして母は化粧をし、しげしげと鏡を見て、「ああ、綺麗だねえ」とつぶやく。そうすると、いつもならすぐに「水戸に帰る」と言い出すところが、「富美子、今日どこかに連れて行ってくれる？」となるのだ。

高畑さんが家の中をうろうろしていると、母はすぐに「富美子、オシッコ」と言うので、そのた

びにトイレの場所を教える。「なんでそんなにしょっちゅう行きたがるのだろう？本当に場所を覚え
たかしら？」と思い、ある日高畑さんは、居間で寝ていた。すると、やってきた母は、「この子は一
日中、なんて忙しいんだろうね」などと言いながら、自分の部屋からタオルケットを持って来てか
けてくれ、その後黙ってトイレへ行ったのである。「その時わかった。私が母のトイレを気にしてい
るから、母は『もらしてはいけない』と思い、すぐに『オシッコ』と言うのだ。私が知らん顔して
いればいいのだ、と」

このように、母の意志を尊重していくと、ボケた人はいつもただ徘徊したいわけではないのだと
か、家族の役に立ちたいと思っているのだとか、オシッコをもらしてはいけないと思っ
ていつも私に聞くのだとわかってくる。そうすると、つくづく感じるのだ。「ボケた人とは、いつも一生懸命生
きている人ではないか。努力している人ではないか」と。

■「だから私、介護が楽しくって」

このように、母との一つ一つのやりとり、そしてその中から新しい発見をすることが、高畑さん
にとっては楽しみであり、「だから私、介護が楽しくって」。しかしこれは「家族だから」ではなく、
「同じ家族の中でも、向いている人と向いていない人、出来る人と出来ない人がいる」のだと、断
言する。「大体、私はいつも、『家族がやれ』なんて言わない。『女がやれ』なんて、どこへ行っても
言わない。」家族が一人で介護生活をするというのは、「私みたいな性格だからできたけど、私だっ
て体を壊した。体力をつけようと、最近是一生懸命ダンベル体操をやってるけどね」

高畑さんは、自分がこんなに楽しんで介護ができたのだから、「痴呆患者、本人の意思を尊重する」
やり方を、施設などでも採用できるのではないかと考えている。「これは、『ユニークな介護』なの
ではなく、これが本当の介護なのではないでしょうか。『この人は次に何をしでかすんだろうか』と、
ただ痴呆の人をじっと見ている、いい発想は浮かばない。『この人は何がしたいのかな？この人は
ボケていても一生懸命に努力をしている人なんだ』とそう思ったら、人生の先輩として、自然に尊
敬する心が生まれてきますよ」

■「母と花札してくれる人」募集

家族でなくても、相性の合う人なら介護はできるが、では誰が？となると、なかなか難しい。し
かし高畑さんは、自分は母を本当に一人で介護していたわけではない、と強調する。地域の人を活
用したのだ。「母と花札してくれる人」を頼んだ。母が縫うための雑巾を持ってきてもらったりもし
た。『80歳代の相手を求む』とポスターも書いた。半分はだまし討ちですよ。ボケた人なんて書か
ない。そして私と母で面接をして、母が『あの子はダメダメ』と言ったら、その日の夕方に母が電
話をした。『私には合いません』ってね」

どんな人が「ダメ」なのかというと、どちらかと言えば「カウンセラー的資質」のあるような人
だ。面接の時にアルツハイマーのことを話すと、そういう人は「たくさんしゃべって楽しませてあ
げよう」と張りきり、ぺらぺら喋る。すると母は、「話好きってのは疲れるねえ」とため息をつくの

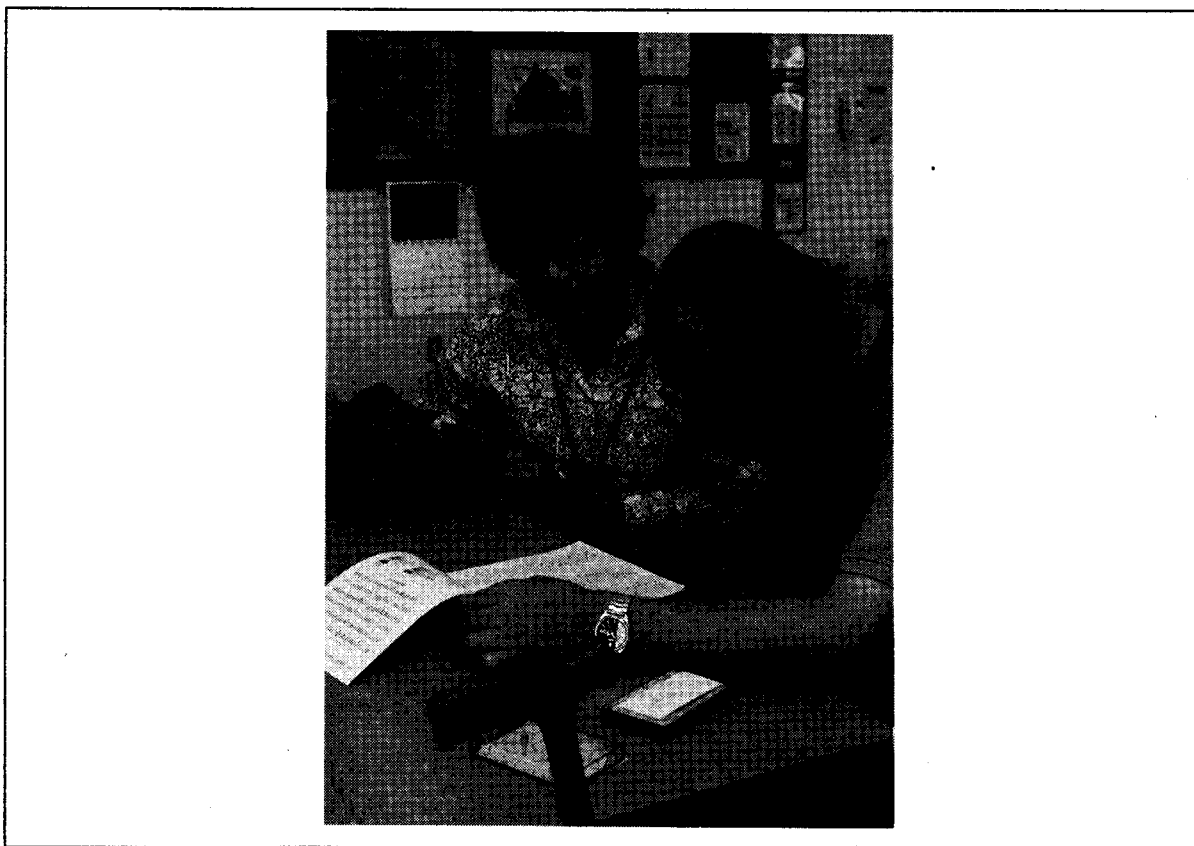
だった。その母が、自分の相手として選んだのは、70歳を過ぎた農家のおばあさんだった。「ここでお茶とお菓子でもくれるなら来るよ」という人で、その人に母はサービスをしていたのである。

「だから、ボケた母を介護するというのではなく、ボケた母がそういう人たちを愛したわけです。私を愛したように。」

夫は、高畑さんの母の顔を見たがらない。地方のそれなりに良い家で育った人間だから、母にお茶くらいは入れてくれるが、「おばあちゃん、お茶」と、ぶっきらぼうに渡す。すると母は、「ああこの人は、私とおしゃべりするのが嫌なんだな」と思う。夫は、土日は家に居て母と一緒にいるから、イライラする。その土日に、高畑さんはあえてヘルパーを呼んだ。「風通しを良くする、第三者が入るといふ考え方ですよ」このヘルパーも、ポスターで「公募」したボランティアだ。痴呆のことも介護のことも、何も知らない人だ。「初め、夫は『嫌だな』と言いましたが、私より10歳も若い人が来ると、身だしなみを整えて、私の前ではしないのに『お茶でも入れよう』なんて言い出すの。それも、100グラム500円のお茶じゃなくて1000円のにしよう、なんてね。帰る時には『お世話になりました。』と、挨拶までしてくれる」

この夫が、変身していく。「お前のボケの介護は、ばあさんの言いなりだ」と言っていたのが、痴呆の親を抱えた職場の同僚が増えた2年後には、「富美子が言っていたことをそっくり教えてあげたら、みんな喜んだ」と報告してきた。「頭をゲンコツでたたいてやったわ!」と高畑さんは笑う。

「人は変わるの。私が変わったわけではないですよ。母が来てくれたことで変わったの。ここの環境も変わるし。だから、母の存在力ってすごいと思うの」



■自分の母を「さらす」ことの意味

高畑さんは、地域でも、機会があるたびに話をさせてもらった。例えば自治会の総会で、「5分でもいいから時間をください」と頼んで母の話をする。「そうするとみんなびっくりしていたわよ。『あの人すごいわね。自分の親がボケた話をしているよ』って。『よく言うわね』と言うから、『ええ、おかげ様で』って言っただけ。いいんですよ、そういう風に思う人がいても。そう思わない人もいるんだから。」

公民館の高齢者学級に参加すれば、イベントでの講師をかって出る。高畑さんがそういう活動を懸命にしていたのは、影から母をのぞき見ながら、「高畑さんのお母さんがボケてるみたいよ」と言う人々の、心理的な偏見がとても悲しかったからだと言う。母はそういう人たちに対して悪いことをしているわけではなく、そういう間違っただけの見方に負けたくない、正しく伝えたいという思いが強かった。

母親をそのように「さらす」ことについて、文句を言ってくる人もいた。母は、自分が今いる環境を理解できないから、夕方は一人でふるさとに帰ろうとした。日中は外に出るとすぐに、近隣の人や通行人に「私は水戸から来た。あんた私を水戸に連れて行ってよ」と言う。

■「母に名札なんかつけて」と非難も

高畑さんは、これはチャンスだと考えた。母が初めて一人で外の落ち葉掃きをする前、高畑さんは母に名札をつけた。近隣の人たちに、「ああ、この人が高畑さんが話していたお母さんなのだ」とわかってもらう意味もあった。すると、やはり「母親に名札なんかつけて」と、言いに来た人がいた。

母のプライドの問題については、高畑さんも考えたことはある。「だけど、ではプライドのために危険な夜道を歩いて命を落としてもいいのかな、と。恥ずかしいことではないはずだし。癌の人もエイズの人も、みんな公表している。私は、痴呆という病気は、超高齢社会ではみんなの問題として考えた方がいいんじゃないかと、そういう発想なんです。

クリスチャン・マルカンという有名な映画俳優がアルツハイマーになり、妹さんがその兄のことを本に書いて賞をもらっているけれど、やはりいろいろ言われたらしい。わたしもそういう問題について考えてはみたけど、そんなに深く考えている余裕は正直なかった。とにかく大変だったから」

高畑さんは、悪いかなと思いつつも、黙って母に名札を付けた。そして母は後で、「ありがとうね、洋服に名前が書いてあるからすぐ私だってわかるよ」と高畑さんに言った。これが、彼女が言う、「母が私を愛してくれた」ということなのである。

■母は私をパーフェクトに認めた

「母は、私がすることを、ほとんどパーフェクトに認めたのよ。」なぜだろう？という問いに、高畑さんはこう答えた。「私の笑顔がかわいかったのじゃないですか。母はいつも、私の目を見ていました。私は、これはみんなに嫌がられるんだけど、カウンセリングを学んで以来、相手との関係がそ

れなりにできてきたかなと思うと、目を見て話すようにしています。やっぱり目かな、と思っている。

母が自分を受け入れてくれていたと思う、こんなエピソードもある。目の前で母が、「あんたは私の娘そっくりね。笑顔も声も。娘はいい子でしたよ」と言った。「どこにいるの?」と聞くと、「わからないんだよ。いい子がいたんだよね」と言う。「私の顔を覚えられなくなったと思うのです。でもこれが反対だったらどうですか。『あんた娘そっくりだね。嫌なところが』なんて。もしかしたら、母は私のすべてを忘れたわけではないのかもしれない」

夫とのこともそうだ。夫は高畑さんの母にあまり顔を見せないから、母の記憶にあるのは彼の後頭部ばかり。ある時、高畑さんが母と買い物に行く時に電車に乗っていると、頭の薄い人がいた。すると母は、「あのいい人だよ」と言った。夫に似ている人だったのだ。母なりに、夫の良さを認めていたのである。

■母は嫌いな人を一瞬で見分ける

デイサービスにも一人、母がとても好きな人がいた。母より15～20歳年下のその男性は、59歳で発症し、まだ初期の段階だから、自分がどこにいるかわかる。するとその人の奥さんが、「あなたはここにボランティアに来ているのですよ」と教える。そしてその男性は、第二の人生をこんな所で過ごせて幸せだと思っているのであった。彼は、高畑さんの母が「水戸へ帰る」と言ったところ、「よし、任せておけ。僕が調べてあげるよ」と言った。母はその人が大好きなのだという。

「母は、状況がどうであれ、嫌いな人を一瞬で見分けます。これはよく言うじゃないですか。痴呆の人には、いい人と悪い人しかいないと。そういうものなのかもしれないな、とも思います。感覚が鋭くなる、ということなのかもしれない。」

高畑さんは現在、相談員をしていて、老健施設などを頻繁に訪れる。大体3階が痴呆病棟で、みんな一緒くたになっている。中には、すごい悪態をつくおばあさんもいて、声をかけると「あんた知らないよ」などと言っているが、3～4回会うと、「あら、また来たの」とくるのだ。「私はその人について、名前しか知らない。でもその人が、『心配なんだ、帰らなければ』と言いますよね。だから、『お宅の前を通ったらみんな頑張っていたよ』と言うと、『ああ、そうか。私、こんな所に居ていいんだね』と安心するのです。

1ヵ月後にまた来た時にも、『お宅の前を通って来たら、みんな頑張っていたよ』と声をかけると、彼女は私を見てニコッと挨拶をしてくれるの。だから時間はかかるけど、通じ合えるようになって嬉しいわ。」高畑さんが講演で聞いた話だ。

八王子の施設長が、廊下をウロウロしているおばあさんたちから「豆腐を買ってきた」と声をかけられる。彼が「今晚は湯豆腐ですね」と言うとおばあさんたちは「湯豆腐ですよ」と笑顔の返事。実際に豆腐が無くてもコミュニケーションは成立する。施設長は「何をやっているの?」とは質問しない。相手の情報から会話の糸口を探すのだという。

■「母には質問しなかった」

『何をやっているの』と聞くと、痴呆の人は考えてしまうのです。何をやっているのかと聞かれたら、答えなければいけない。質問はしない方がいいね、と私は思った。だから母には質問しなかった。」徘徊は、母がしたいと言うならしてもらった。しかし高畑さんに時間がある時は、一緒に徘徊した。「積極的徘徊」だ。

母は一人だと不安になりながら歩くことになるし、万が一行方不明になれば、探しに行くことになり、時間の無駄でもあった。一緒に歩くと、「回想法」も実施できる。「水戸の実家ってどんな風になってたかね」と高畑さんが聞くと、「店構えが大きくてさ」と、瞬時に返ってくる。この積極的徘徊は、母が「もう帰ろうよ」と言うまで、長い時は1時間40分程、続いた。

ボランティアに頼む時もあるが、その場合には「シナリオ」が必要になる。まず、他人が「散歩に行こう」と言うと乗り気にならないので、演出が行われる。「水戸に帰るからね」と私が言うと、母は帽子をかぶりコートを着て薄化粧をし、身支度を整える。そこで、「さあおばあちゃん、水戸に行くよ」と言われると、母は「そうだね」と、安心してその人について行くのだった。

しかし20分か30分歩くと、母は「もう10里も歩いたね。道を間違えたのかね」と心配し始める。「私はまだお嫁に行く前の女だろう。男に襲われたら大変だよ。よかったらあんたの所に泊めてくれるかい？」と言うので、そこでボランティアは「うちでいいの？」と返事をし、「いいよ」という母を、我が家に連れて帰って来る、という筋書きであった。

■言ったことを整理して返せば

この散歩の意味は、夜によく眠ることだ。昼夜逆転というのは大変だし、高畑さんが普通の生活を送るためには、夜、母にちゃんと眠ってもらう必要がある。雨の日は母が嫌がるためあまり出かけなかったが、高畑さんが「じゃ、買い物に行こうか」と誘い、一緒に大型スーパーやデパートをぐるぐる歩いた。東武ストアもヨーカ堂もロビンソンも、母を連れて行った店は、どこも理解してくれた。顔見知りになった店員が、暇な時は、「見ていてあげるよ。あんた、30分くらいお茶飲んでおいで」と声をかけてくれたりした。

店員たちは、初めはただ二人の会話を聞いている。「痴呆の人は喋らないというけど、母はとても自己表現が豊かだった。私はたぶん聞き方がうまかったと思う。質問はしないで、母の言うことをきちんと整理してフィードバックする。優しい人に対しては、母は、痴呆の割に理解しやすい言葉を使っていた。「私はお腹がすいたよ。だから早く食べたい」というように、なんだかわからないということはなかった。主語・述語がきちんとしていた。

しかし、「まだご飯を食べていないよ」とか、「私はこれからお見合いに水戸に帰る」と言うため、聞いた人はすぐに痴呆だとわかる。すると店員さんが、「失礼ですが、お母様は痴呆でいらっしゃいますか」と来る。「そうですよ」と言うと、「ああそうですか、全然感じませんね」等と返事が返ってくる。

そして、高畑さんはその後2～3回その店に行き、今度は「ボケた人の介護というのは大変なの

ですね」と言ってきてくるのを待つのである。そして、「そう、私もたまには介護を放棄したくなってしまうのよ」と、本当の気持ちを洩らすと、「まあ、そうなの。新聞で読んだけど、大変なのね。私でも5分くらい見られるかしら？」と言ってくれる。

■「母が私を受け入れ、愛した」

『大丈夫よ、母は、ボケていても初めて会う美人はすごく褒めるんだから』って言うの。みんな、テープレコーダーを準備しておきたいほど、母が褒めるんですって。うちの母はそういう人だった。よく褒めるんです。」それは、痴呆になる前からだったが、高畑さんの姉の所に居た時は違っていたということ、考える必要があるようだ。姉は「あんなに人の悪口ばかり言っている人は見たことがない」と言った。こちらの態度次第ということなのか。その話になると姉は怒るが、よくわからない、と高畑さんは言う。

姉妹の、母への接し方が大きく違ったのは事実だ。お姉さんは、「母が、仏壇が火事になりそうなほどお線香を燃やす」と怒ったが、高畑さんは一工夫した。竹串を買い、先の尖っている部分を切って、切り口の辺りを全部赤のマジックで塗り、下はみんな緑色に塗った。「おばあちゃん、煙も匂いもないけれども、これはいくらつけてもいいから」と言うと、母は、「そうかい。いいね、マッチもいらないし」と、たくさん立てていた。

揚げ物をしている時に母がそばに来て、私は何度も火傷をした。そこで、居間に新聞紙をばらまいておき、ひもと一緒に置いておく。すると母は、「だらしないねえ」ときちんと束ね、「はい、しばったよ」と言う。そうすると、高畑さんは娘に「ほどいておいて」と頼むのだ。

なんだかやった気はするが、母はまた「だらしないねえ」と始める。煮物用のコンニャクをねじってもらうこともある。「はい、やったよ」と母が持ってくると、次のコンニャクを渡す。母がそれをやっている間に、先程のコンニャクを元に戻して、「うちは大勢だからね」と渡すと、「そうか」と言って、また20分はコンニャクをやっていてくれるのである。

このような、高畑さんの数々の「細工」に対し、母はどこかで気付いたはずだが、そのことを口に出したことは一度もない。まさに、「母が私を受け入れ、愛した」のである。そしてそれが、高畑さんが介護を楽しめた大きな要因となった。

「だって楽しいじゃないですか。私の考えたことが、イチローではないけれど、全てヒットするんですから。パーフェクトですよ。」落ち葉掃きのお掃除を好きにさせた時は、みんなに言われたものだ。「高畑さん、お掃除をしないで徘徊してしまったらどうするの。」

しかし、母はただ掃除をして帰ってきた。このことについて高畑さんは、母が自分を愛してくれたと同時に、「人というのは役に立ちたい存在で、それは、ボケても最後まで残る部分であるからだ」とも感じているのである。「母は自尊の感情が継続的に強く湧いていて、痴呆の進行がとてゆるやかだったので、健康的なボケさんでしたよ。」

■人は楽しむために生まれてきたのだ

高畑さんは、「楽しむ」ことをとても大切にしている。人は楽しむために生まれてきたのだと、常に思っている。高畑さんの中で、それは「お掃除」よりも高い位置にある。だからこそ、働きながらの子育ても、介護も、楽しんだ。そして、そもそも高畑さんにとっての「楽しみ」は、人と関わることなのである。「ヨーロッパ旅行に行っても、景色なんかぜんぜん見ない。美術館なんてぜんぜんつまらない。やっぱり人を見ているのが楽しいね。」

そのような人は、この社会には少ない。「だから私は、変人と言われているのですよ。」しかしそれは、「気付き」の問題ではないか、と高畑さんは言う。「みんな、変人になってはいけない、楽しんではいけない、と思いついでいる。それこそ、ジェンダーとか、そういうものがありますよ。夫なんか、1ヶ月に1回笑えばいいみたいな顔をしているからね。」そんな夫に、高畑さんは言うのだ。「あんた、老人ホームに行ったら嫌われるよ。笑っていたら、おやつだって良いのをくれるよ。」

もちろん、高畑さんは持ち前の資質だけでなく、多大な努力もしている。夜、眠る時でさえ、介護や家事のことばかり考えていた。それを、高畑さんはこう表現する。「これこそ私だけのプロジェクトXよ。プロジェクトというのは普通、数人でやることだろうけれども、私もプロジェクトですよ。近所の人を頼んだり、ありとあらゆるプロデュースをし、努力を重ねたわけだから。これからは、女のプロジェクトXをつくってもらいたい。なんで男ばかり、と思いますよ。」

■育ち合う関係の人にめぐり合えたら、本当に幸せ

人同士のつながりに、男だから、女だからということはない。そう高畑さんは思っている。「人というのは双方向に、互いに良いものを引き出すような、育ち合う関係の人にめぐり合えたら、本当に幸せなんですよ。「私はフルマラソンを走ったけれども、母との関係は、それよりも楽しかった。フルマラソンというのは一人での孤独な作業なのです。自分が努力して自分の能力を開発する。しかし介護というのは、ボケた人が相手です。そこにつきあうというのは、ディズニーワールドに行ったよりも最高におもしろかったよね。一瞬で行ける、インナートリップなのです。」

そして母との付き合いは、高畑さん自身を変えた。高畑さんが、通信講座で「アサーション（自己表現）」を学ぶ決心をしたきっかけは、母だった。「母はちゃんと自分のことを表現できるのですよ。『お腹が空いた』『眠たい』『オシッコしたい』『あの人は嫌いだ』。私はしていなかったの。それを言うてはお終いよ、というところがあったのです。専業主婦で、ボケた母を引き取って。私も自己主張したら夫はどうなるか。でもこれをしていないことは最大の障害でしたね。これを言わなければいけないですね。私を理解してもらおう。」

夫に向かい、「あんた、私の話をちゃんと聞きなさい」と言えるようになった。そして自分を表現できるようになると、今度は、夫のことも以前より理解できるようになり、感謝するようになった。だから母とのことはやはり、「介護というより、人間関係なのだ」と思うのである。

その「介護」は、99.9%が、母との「関係の調整」であった。「それはもう、母の世界につきあってしまえばいいのよ。私は体験できない。それこそ私は『ばあちゃんリアリティ』と言っているの。」

母がお見合いに行くと言ったら、母はいま気分がいいのだろうなと思い、そこに話を合わせる。『私はどう?』と言ったら『お前ね、もっと痩せたほうがいいよ』なんて言うわけですから。」

■「おばあちゃんが倒れたらおれが抱きかかえてやる」

子供達も、痴呆の祖母と上手に付き合っていた。「息子が会社から帰ってきて、おばあちゃんのところまで喋っていると、母が『おまえはいい男だ』って。いい男じゃないのだけれども、母から見たらいい男で、『いい男だね、もてるだろう』『うん、もてるよ、僕は。いっぱいだよ。最近、帽子が好きで、花札が好きで、大正琴が好きで可愛いおばあちゃんが、僕のことを好きなんだよ』『あら、それは私だよ』って、2人でやっているの。見ていると本当に楽しくて。次男は次男で、大学受験の頃、ある日2階にいないのですよ。朝になってどうしたのかなと思ったら、おばあちゃんの部屋から出てきた。『どうしたの』と聞いたら『初体験だよ』とか言って(笑い)。本当に子どもはユニークでしたね。」

食事の支度をまともにできなかったから、夫はできあいの物を買いに走ったりと、食べることばかり気にする、「あまり文化面に気をまわせない」人であった。しかし、変わった部分もある。「おばあちゃんが倒れたらおれが抱きかかえてやる」と言ってくれるようになった。それでも、夫が嫌がるため、目の前で介護をしたことはない。母も、夫がいると自分の部屋へ入っていった。「それは母にとって大変かなと思ったけれども、一人になりたいのですね、痴呆の人も。何か考えているの。」母なりに関係調整をしていたのだろう、とも思う。

高畑さんの姉が母を引き取った時には、親子関係の他に、もう1つ問題があった。まだ初期の症状のため、母は元気に出歩きながら、あちこちで問題を起こしたが、姉には痴呆の知識がなく、「こういう困った性格なのだ」と思い込んだ。幸い、高畑さんは以前に3級ヘルパーの資格を取っていて、その講習の中で痴呆のことも学んでいたため、母を見た時に思い当たった。性格と受け取るか、病気と理解するかで、対応には大きな違いが生まれてしまうということをつくづく感じた。

■母と一緒に近隣一体へ「引越しの挨拶」に行った

地域の人たちに、母を理解してもらうことでは、そんなに苦労したという思いはない。「だって一緒に歩くから。見かけると、隠れる人もいますけど、いいんです。来る人もいますよ。『あら高畑さん、水戸から来たおばあちゃんって、この人ね』って。いろいろな所で話したり、資料を渡しておいたりしましたから。」

介護を始めた当初は、介護のかの字もわからなかったから、母を留守番で2時間、部屋に入れておいたりした。すると、痴呆の症状が進んだように見え、水戸に帰りたがった。そこで、アルツハイマー病に関する新聞の切り抜きなどをもち、母と一緒に近隣一体へ「引越しの挨拶」に行った。「母です。母はこういう病気なのです。よかったですね」と資料のコピーを渡した。母は、「娘がお世話になっています。しばらくここいるつもりですけども、また水戸に帰ります」と挨拶をした。高畑さんはその後も、自治会で喋ったり、役員をした子育てグループで話をしたり

し、やがて講演を頼まれるようにもなった。

高畑さん自身のリフレッシュ策の1つは、市が男女共同参画の視点で作っていた啓蒙誌の編集委員を務めたことだった。ジェンダーや女性学を初めて学んだのもその時で、「ああ、ここに気が付くことで、私の介護はずいぶん楽になるな」と感じた。例えば、それまでは「娘だからちゃんとやらなければならないのだ」と思い、重くのしかかっていたのが、「別に娘がやらなければならないことはないんだ。別にいいんだ」と吹っ切れた。そしてそこから、自己表現の勉強にもつながっていった。

今は、介護があったからこそ、また夫が伝統的な価値観を持っていたからこそ、自分の中の扉を開くことができたのだ、と思うようになった。「介護が素敵だと思うのは、そういう自分を掘り起こしていく作業があったからだと思いますね。私は私でいいと、そこに行き着きました。」

■母と一緒に道を歩いている時に、前から来た知人が、電柱の陰に隠れた

地域にも、理解してくれる人と、してくれない人がある。こちらの働きかけに応じて、みんなが変わるということはない。しかし、変わった人は高畑さんの所へ来てくれた。「テレビでボケた人の介護って大変だと聞いたよ。高畑さんから前貰った資料、読んでなかったけれども、いま読んだら大変なのだね。子供さんの卒業式の時はお母さんを見てあげてよ」という人が出てきた。そしてそういう人が、高畑さんの家にボランティアに来るようになり、2級ヘルパーの資格を取ったりしているのである。

「わざと母のことは見せには行かなかった。でも、例えば買い物ついでに一言二言交わす。それで、気付く人は気付いてくれる。」母と一緒に道を歩いている時に、前から来た知人が、電柱の陰に隠れた時に、初めて大きなショックを受けた。「みんな、ボケた人のことを正しく理解していないのだな」と知った。「そういう言うに言われぬ嫌な感じというのはずっと残るのです。そうするとまた母と歩いても誰かがそう思うのかしら、と。そういう母が、何も言わないことでずっと偏見を受ける対象でいることの方が、私は悲しくて苦しかったから、あえて公表したのです。」

普通の人と比べれば「平気で頼みごとができる」高畑さんだったが、介護の手はもっと、いくらでも欲しかった。5分でもいいのだ。そういう、「スポット的」なヘルプが欲しかったという。実際に、そういう風に来てくれた人もいた。「今晚うちは天ぷらだから、高畑さんのうちの天ぷらを一緒に揚げる、それでもいいの。本当にほしかった。夫が8時頃帰ってきて、『まだできていないのか』と言われると…。そういう支え方でいいのです。おばあちゃんは見てくれなくてもいいの。」

■そういう人を育ててほしいですね。人材を。…人の好きな人ね！

家庭の中での、介護の社会化も必要だ。「私の場合は、夫がとても抵抗した。だから、まず家庭の中で理解し合えるということが大事だと思います。」

介護する家庭内の環境について、高畑さんはこう考える。「痴呆の人を介護するには、介護者と痴呆性老人がまず隣同士に居ること。母には悪いけれども、ガラス張りみたいによく見えること。母

が離れの部屋に行くと、そこで何をするのかいつも不安でしたよ。やはりいつもそばに居ること。そして食事は、1週間に1回はおばあちゃんの部屋で食べられるように。夫は嫌がったけれども、子供たちもみんな一緒だといいですね。支援に来てくれる人の部屋もあっていい。私は、支援の人には縁側から入ってきてもらっていました。母はそれを見つけて、『いらっしやいませ』とかやっているし、夫はあまり介護に関わりたくないから、別の出入り口を使う。あとはトイレをポータブルに代えたけれども、高齢者の方は遊びに来ると、『トイレに行くとき、旦那さんがここにいると嫌だ』と言うのです。だからトイレもちゃんとあるといいかな。」

食事は、高畑さんはなるべく家族と食べずに、母の部屋へ持って行って食べた。「そうすると、母はもう全然ボケてないの。『おまえ、女は若いときにいっぱい産んだほうがいいんだよ』などによく言われたし、男の選び方とか。まったくボケてないのですよ。」嫁が姑を介護するのはどうか、ということにはわからないが、高畑さんにとって、介護したのが「実母である」ということが、とても重要であったとは感じていない。「母子間で大きな問題を抱えている場合もたくさんある。相性で、うまくいくかいかないかのどちらかではないですか？」

もしも社会の制度が変わり、高畑さんのような人がそのまま、ケアマネ業務や介護業務者として認められ、業務手当や設備整備費が支給されたら、どうだろうか。「そうしたら、施設を作らなくても、ここで母を看取った後に、私はプロだから今度は違う人の介護ができる。実際、夫が私より先に死んだら、そうしようと思っているのよ。でも、私がここで働いていたら、例えば夜は居るけれども、昼間、そういう人を育ててほしいですね。人材を。…人の好きな人ね！」

介護者はなぜ末っ子なのか？

調査活動で発見した意外な事実

■委員もまた末っ子！

研究の一環で、痴呆の親を介護している（または看取り終えた）人たちに聴取しているが、（たまたま私たちが出会った人たちがそうなのかは知らないが）、みんな、末っ子だったのである。その話を委員会に持ち寄って、改めて委員たち（親を介護した経験のある）に聞いてみたら、やっぱり全員、末っ子だった。いったいこれはどうしたことか。では、長女ではダメなのか。委員の間から、いろいろな「解釈」案が出て来た。

幼い頃、親にかなり厳しくしつけられた人が多いのではないか。きびしかったかどうかはともかく、「いじくりまわされた」（ある聴取対象の家族の言い方）。ところが、末っ子になると、親の干渉もだいぶ緩んでくる。末っ子だからと、かわいがられた。

それが親の痴呆進行によって、主客逆転。長女の場合、「あたしもおかあさんにはすごくきびしくされたから」、となる。痴呆だから仕方がないのだが、物忘れをしたり、間違いをしでかしたりすると、ついつい「しっかりしなさいよ」と口に出てしまう、といった体験も披露された。

■「密着度」の差かも

母子がかなり密着していたことが、長女のこういう行動に反映されるのではないかといった見方もあった。末っ子になると、この密着度もだいぶ緩んでくる。お互いに一定の距離をおいて相手を見ることができるようになる。

おもしろいことに、長女の家に来たときは、親の方までイライラ、ピリピリしていたという声もあった。末っ子の家に来ると、おだやかな性格に変わっていく、と。

どの家でもこんな構図になっている、などとは言えないだろう。しかしそれにしても、である。

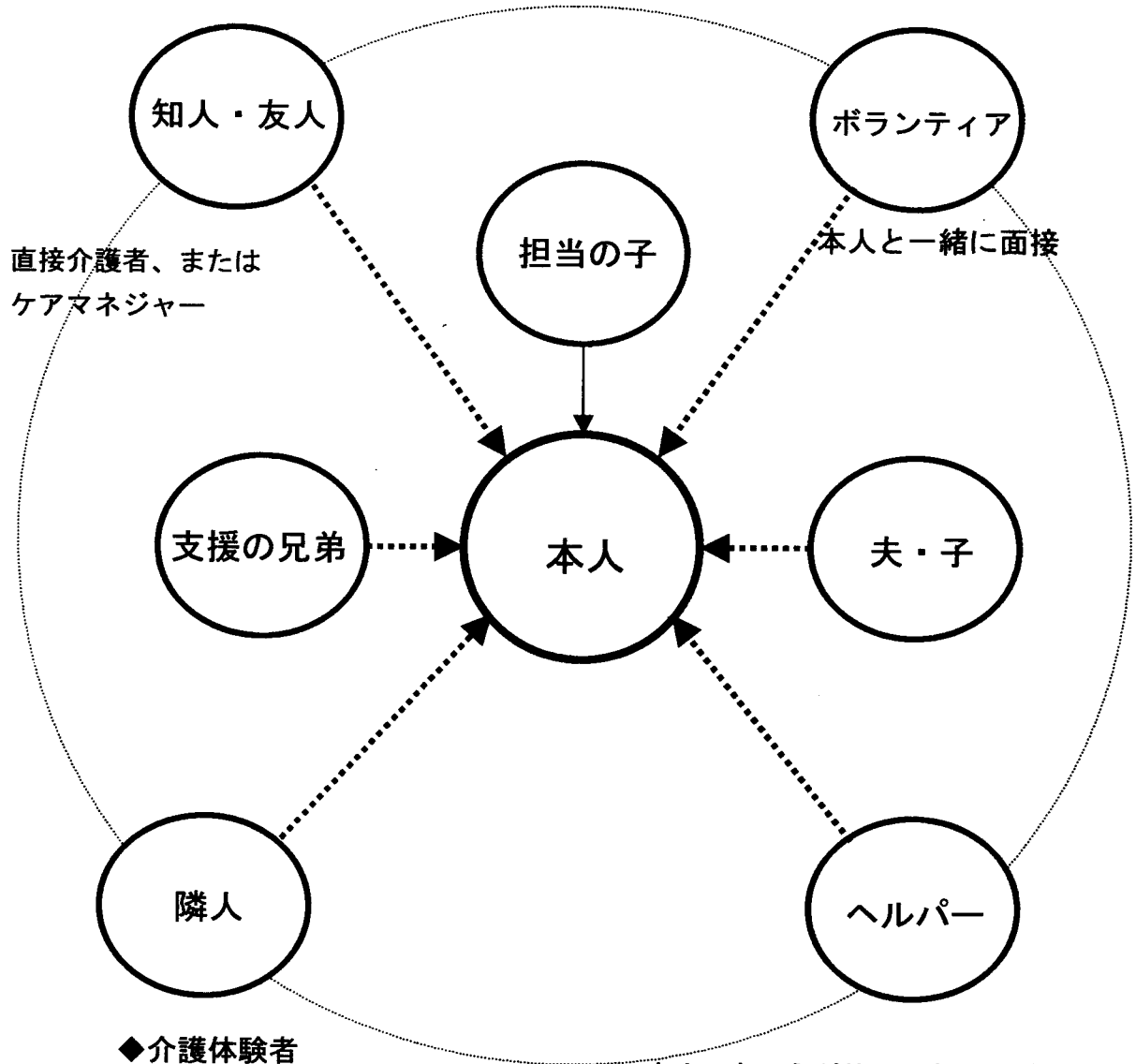
私もその後、生涯学習講座や福祉講座などで、「親を介護しているのは、長女か次女か、末っ子のだれが多いか？」と聞いてみると、圧倒的に「末っ子」という声が帰ってくる。

■当事者が「あの子がいい」がベスト

一つだけ言えることがある。ベストの介護者は当事者本人がいちばんじっくりくる相手であるべきだということだ。相性という概念が介護の理論に馴染むかどうかには関係なく、とにかく当事者にとって「あの子がいい」という子がベストなのだ。長女でなければとか、長男の嫁でなくては、と言うとき、すでに当事者主体の姿勢を失っている。

天性主義と相性主義

本人にとって好都合な介護者や支援者とはだれか。本人と相性のよい人、本人が「アンタがいい」と見込んだ人となる。資格とか、担い手側が指名した人、順序として長女が、といった選択方法は、本人主体に考えた場合は、ふさわしいとはいえない。天性主義となる。身内かどうかも関係ない。



- ◆介護体験者
- ◆世話焼き
- ◆天性

身内であろうが他人であろうが、要は、本人が見込んだ人物であること
→家族はケアマネジメント役も可能（資質による）

第2章

自己実現社会

痴呆になっても、それなりの自己実現が図られる

痴呆になっても、それなりの自己実現が図られる

<第2章> 自己実現社会

「自己実現」という言葉を私たちはよく使う。「自分らしい生き方」という言葉は福祉関係者が今、要援護者に対して実現させるべき目標の一つとして使われている。自分の生まれながらに持っているはずの潜在能力を発揮しきって、充実した自分らしい人生を築き上げる—それを誰もが望んでいる。しかしこの言葉を痴呆の人にあてはめる人はいるだろうか。それは要援護者には贅沢な目標だと、誰も口に出しては言わないが、内心はそう思っている。

施設はともかくとして、在宅生活をしている痴呆の人を訪れると、これが「自己実現」とはとても思われな生活がそこで営まれていて、愕然とする。ふれあいも創造活動も何もない、ただ単調な時間が過ぎていく。福祉を達成するということは、前述のように、その人らしい生活がおくれるということ、つまりその人らしいライフスタイルを持ち、それを実現していくことではなかったか。

一見、痴呆の人本人がそんな生活をまだ追及しているとは見えないが、しかし誰でも特別な圧力をかけない限りそういう生活を志向しているのは間違いない。ただそのための条件が悪化してくるにしたがって、本人の要求水準が低下してくることは否めない。それに輪をかけて、周囲が本人のそうした欲求を抑制するために、あきらめのいい人は、早々と「自己実現欲求」を低下させてしまう、ということはあるだろう。そこで求められるのは、「まだあきらめるのは早いよ!」と、要求水準を再び上げさせるような働き掛けである。福祉の目的は「安心して暮らせる」ことではない、自己実現なのだ。どんなに要介護状態になっても、である。

そのためには、社会全体がそうした自己実現を強烈に追求し、しかもそれをしっかりと応援する環境を作っていかなければならないのだ。

①痴呆になってもできること、痴呆の人しかできないことを

本書の「当事者主体社会」の章で紹介した、クリスティーン・ボーデンさん。自らアルツハイマーになりながら、発症後も敢えて再婚し、アルツハイマー学会の理事にも就任し、まさに自己実現を図ろうと日々努力している。彼女は「痴呆にな

ってもできることがある」さらに「痴呆になってからでしかできないことがある」ということが必要だと言っていた。

普通の人でさえむずかしいことを、痴呆になってからも実現できるべきだと言っているところが凄くないではないか。「痴呆になってからもできることがある」。これならまだわかる。それに加えて「痴呆になってからしかできないことがある」となると、「えっ!」と意外に思うと共に、なるほど、そうあるべきだと、納得できる。痴呆の人にとっての自己実現にはこういう要素がある、という点がミソなのかもしれない。

それが何かはまだよくわからないが、それを追求している間に、そうか、痴呆になって初めてこういう境地になれた、とか、痴呆になったからこういう楽しみがあった、などというものがあるとすれば、素晴らしいではないか。それこそ関係者は後押しすべきなのだ。そのためには、関係者自体が普段から自己実現の努力を怠らないようにしなければならない。その努力の量に比例して、対象者にとっての自己実現を現実的に考えることができるようになるのだ。

デンマークのホルベック市の老人福祉課長が来日したことがある。その席で、いわゆるお役人である彼女が自身、めざしている福祉というものを開陳してくれた。彼女はまず、黒板の下欄に左から右へ直線を引いた。左が誕生、右が死だ。人は誰でも左から右の終末へ向かう。彼女は今度は縦軸に「福祉のレベル」を設定した。「普通はこうなるでしょう」と言いながら、左上から右下へ向けて徐々に下降する線を引いた。「しかし」と彼女は「私はこうしたい」と言いながら、左上から右上へ直線を引いて、右隅に来たら、その線を垂直に下へ向けた。つまり、死ぬ直前まで自己実現の生活を送り、そして「ある日、突然…」なのである。

こういう自己実現の生活追求のためには寝たきりにはできまいと、いくら要介護になっても寝かさない。寝巻きを与えない、と言っていた。もうコミュニティ全体が要介護者の自己実現を応援する、という体制なのである。これが本当の福祉なのかと思ひ知った。

②痴呆の人の生活のQOLへ、さまざまな可能性の追求を

まちで「徘徊」している痴呆の人のファッションには、なんとなく共通したものがある。それに加えて、この人が誰なのかを示す「標識」。目立つようにと、そういう類の服装をさせられた人も居る。

しかしどうしてもそういう服装をさせたいのなら、思い切って「徘徊ファッション」を開発したらどうなのか、という話が委員会でも出た。徘徊という言葉はふさわしくないから改めるとして、どうせ目立つ服をというのなら、当代きってのファッションデザイナーの服がピッタリではないか。

そういえば痴呆の人をモデルにした着物ショーがときどき開かれている。どうも着物を着るとしゃんとする。目の色が輝いてくるという見方も出て来た。一度着た人は「また着せてほしい」と言う。

資生堂が痴呆の人や寝たきりの人を対象の化粧教室を開いているが、その結果、痴呆が治ってしまったという事例も現れた。おむつが取れたという報告も。

私たちはどこかで誤解をしてしまったのかもしれない。要介護の人にはもう「豊かな生活」はあきらめた方がいい。せいぜいがもっと要介護にならないようにリハビリに励むことだ、と。ところが今紹介した事例は、そういう論理がじつは正反対であることを証明しているのではないか。つまり、要介護であればこそ、普通の人以上に「QOL生活」を追求すべきだと、それがずばりリハビリにつながっていくのだと。

痴呆の人は、自宅の中で、家族と離れた別室で一人ひっそりと生きている。こんな貧しい生活は、症状をすすませるだけではないか！ もっと彼らを外へ引き出して、ダンスでもカラオケでも、旅行でも、なんでも体験させるべきである。

③「バージョンアップ・サポーター」(QOLヘルパー)

前項に関連するのだが、ではいろいろなお楽しみ事があればそれでいいかというと、どうもそうでもない。自宅で細々とやっている楽しみごとを、もっとバージョンアップさせる必要がある。痴呆なんだからこの程度で、などと適当な所で満足してしまわないで、さらに高いレベルをめざしていかねばならない。それが自己実現という概念が要求していることである。

これは当事者だけではない。本人だけでなく家族ももはや「豊かな生活」をあきらめている。ここを打開しないといけない。家族がQOLを追求しないで、どうして要介護の親に豊かな生活を保障しようなどと思うだろうか。本人と家族が運命共同体というのは、そういう意味でも言えるのだ。

最近レクリエーション・ワーカーが福祉の分野でも増えてきているが、どういふわけか施設内での活動に限定されがちである。野外活動もあるにはあるが、在

宅のよう援護者向けの活動という発想がまだ欠けている。

本当なら、施設よりもむしろ家庭内に介入して、そのまずしいお楽しみ活動に「活!」を入れる必要がある。訪問型生きがい推進員とでも称するか。もっと欲を出して、それぞれの道のプロが「バージョンアップ・アドバイザー」等と称して、よりレベルの高いお楽しみ活動にさせていけばなおいい。

④痴呆でもできるゲーム・スポーツの開発

本委員会の委員が訪問した先で、カラオケ・パーティがあった。そこに痴呆の男性が受け入れられていた。「カラオケなら痴呆の人もある程度はついていけるのではないか」と委員は感想を述べていた。それでも健常者のメンバーたちの理解があればこそ実現したことであろう。

カラオケに限らない。痴呆の人でもできるゲームなりスポーツが他にも、もっといろいろあるのではないか。その開発が遅れている。関係者はこういう人たちに対しては、介護機器とかりハビリ機器にしか開発意欲が湧かないようである。それならゲーム機器業者やスポーツ機器業者の出番になるかもしれない。

⑤痴呆の人を趣味グループに受け入れ。入れさせ屋を派遣

前項で述べたように、趣味活動などを痴呆の人が楽しみたいというとき、そうした地域グループが痴呆の人を受け入れてくれるかがカギになる。痴呆の人の一週間の動きを追っていくと、趣味グループとかゲートボールなどに「入れて!」と行っている。受け入れてくれるグループもあれば排除しているグループもある。

そこで「(グループに) 入れさせ屋」みたいな専門職なりボランティアが、痴呆の人が望んでいるグループに話を持って行って「入れてあげて欲しい」と交渉する、という活動があっている。ただ受け入れてほしいというだけでなく、受け入れてくれたグループには介助者を派遣するとか、補助金を支給するなどの措置をとってもいい。

実際に痴呆症の人が受け入れられている現場に行ってみると、何のことはない、今までそのグループに所属していた人が痴呆になったけれども、今までどおり受け入れてあげている、ということだとわかった。あらかじめ加入しておけば有利だというわけである。

ふれあいサロンに痴呆の人も「入れてあげる」

■デイサービスに通っている人も受け入れていた

長野県須坂市でも、住民有志によるふれあいサロンが20ほどできている。その活動発表会で、「サロンに要介護者を受け入れているサロンは？」と聞いたら、3つのサロンが手を挙げた。痴呆の人を受け入れているグループが二つ。デイサービスセンターに通っている人を受け入れているサロンも二つあった。

一つのサロンが、両者を受け入れていた。デイサービスセンターに通っている人も受け入れている会のリーダーはK男さんで、「デイサービスに負けないぞ」という気構えでやっています、と張り切っていた。

できればこのサロンにデイサービスセンターのスタッフも関わっていい。つまり、自分のセンターで受け入れている利用者が、センターに来ない日に何をしているのか、どういうグループに所属しているのかを調べ、そこにスタッフ自ら出向いて、そのグループごと支援していけば、いずれはその利用者はデイサービスセンターに来なくても、このサロンで間に合うようになるかもしれない。これが自立支援というのだろう。そういう姿勢をデイサービスのスタッフが持っているかどうかが問われる所だ。

■「ここは『非常識の会』、って言うんだよ」

さて、そのデイサービスセンターに通っている人を受け入れているK男さんのサロンでは、痴呆の人も受け入れていた。私たちが訪問したときは、サロンが開かれている前のグラウンドで、男性達とゲートボールに興じていた。別段、痴呆の人に関わっているといた雰囲気はない。「こうするんだ



痴呆の人を受け入れているふれあいサロン(左端がK男さん)

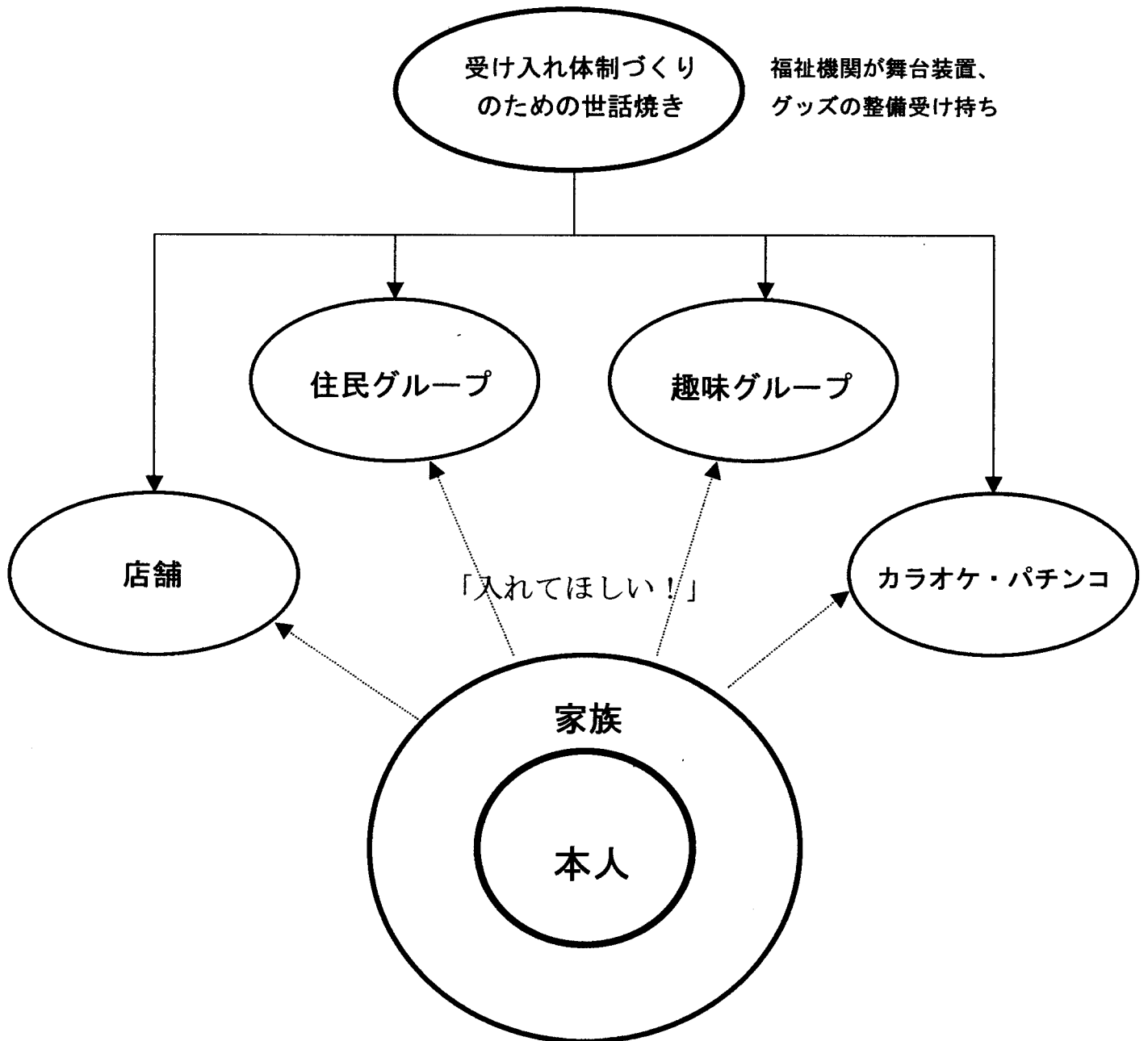
よ！」などと男性達がアドバイスしている。

この女性、サロンに加わっていても、誰も特別扱いはしていない。本人も私は痴呆だなんて思っていない風である。元気なときからのメンバーだから、自然に受け入れることができたという。

もちろん、ときどきへんなことをするのだが、だれも驚かないようになっている。「ここはね、非常識の会っていうんだよ。だれがどんなに非常識なことをしても、文句を言わない」と K 男さん。痴呆の人を配慮した、特別なルールをつくったのだろう。そういうサロンだからこそ、痴呆の人も「安住」できるのかもしれない。リーダーの姿勢次第ということだ。

地域グループの受け入れ体制作り

地域グループが、仲間入りを願う痴呆の人本人やその家族を暖かく迎え入れられるような体制をどうやって作っていくか。ただ一方的に協力をお願いするだけでなく、側面からどんな支援ができるかも検討する必要がある。



第3章

安心社会

不安と恐怖の日々にせめて安心をもたらす環境づくり

不安と恐怖の日々にせめて安心をもたらす環境づくり

<第3章>安心社会

痴呆症の人の心を苛む不安と恐怖の日々。私たちはこれに対して、あまりにも無関心な態度をとりつづけている。彼らにとって、いかに安心を確保するかが、最大の課題ではないかと考えられる。ではその「安心」をどのようにして実現させたらいいのか。

①「絶対的な庇護者」の存在

自宅介護の現場を訪れていて気づいたことがある。半ば偶然だが、たまたまきわめて良質の介護者、というよりは庇護者に恵まれた痴呆症の人は、ある意味では幸せである、ということだ。

私たちが訪問するような家庭は、まあどちらかと言えば、そうした類の良質な介護事例ではあるだろうが、その中でも飛びぬけて良質の介護者に出会うことがある。「良質の」という言い方がちょっと不都合かもしれないが、要介護の親を完全に守りきっている、また守ろうとしている、しかもそれを自身に与えられた使命とも考えている、そして自身、この使命に従うことを幸せとも考えている、といった状況が出来上がっている、そういうケースである。

痴呆症の人は、ある意味では幼児に近い。母親がちょっとでもわが身を離れることにも不安を感じる。そういう「幼児」を絶対的に庇護する「母親」といった構図になるだろうか。

問題はその「絶対的な庇護者」である「母親」に出会えない要介護者である。ところで、そうした「絶対的な庇護者」の資質を備えた人は、地域にどれぐらい存在しているのだろうか。むろんきちんと調べたわけではないが、ある程度の数は居るのではないか。もともとは潜在していたのが、たまたま姑を介護する段になって初めて自身のその資質に目覚めたという人も居るだろう。初めからその資質に気づいて、その資質が生きるような機会を進んで求めているような人も居るものと思われる。

別の章で取り上げた「超介護者」もそういう一人ではないかと考えられる。その人は、特定の要介護者にではなく、近隣のすべての要介護者に向かって自身のその資質を発揮しようとしている。

今まで姑に対して発揮していた資質を、姑の亡き後、また別の対象に同じようにその資質を生かそうとしている人も居る。親を看取り終わった後も、家族の会などで活躍しつづけたり、個人的に介護相談員などをしている人たちの中に、やはりこの種の人材が紛れ込んでいるのではないかと考えられる。

そうした潜在した人材を掘り起こして、その資質が十分生きるようなチャンスを提供する必要がある。「絶対的な庇護者」を確保できていない要介護者に対して、なんらかの同質の人材を振り向ける必要が、どうしてもあるのだ。とにかくそれぞれの要介護者の周囲から探し出す労力を厭うべきではない。

②入所してもまた家へ戻れる、そしてまた施設へ入れる—安心感

川崎市の調査で、今の施設の抱えている問題が浮き彫りになった。要介護5の女性が特別養護老人ホームに入所。久しぶりに元住んでいたアパートに、一日だけ里帰りした。その場に居合わせたのであるが、彼女は今は要介護3だという。施設生活で要介護度が2だけ減った。めでたいことであるが、だからといって、地域へ戻るといふわけには行かない。そんなことをしたら、また入所するためには3年待たねばならない。仕方なく入所を続けているうちに、いずれ要介護度は上がっていくのだろう。せっかく体調がよくなったというのに、自宅復帰は困難ということになる。柔軟性を欠いた、今の福祉制度が、このような問題を引き起こす。

いつ入所してもいい、そしていつでも自宅へ帰れる。そしてまたいつでも入所できる、といった「やわらかな施設」「ひらかれた施設」への転換が求められているのだ。それが当事者の「安心」を大いに保障することができる。

そこに、今議論されている「小規模多機能施設」の存在が注目を浴びる理由がある。必要なときに必要な期間だけ入所できるし、一晩だけでもいい、昼間だけでもいい。在宅に居てもサービスをしてくれる。そんな施設形態が安心を保障する。

③元気なうちからお泊り体験。要介護になればそこに入所

それにしても、施設といえ、自分の意思で入るといふわけではない。家族の

促しで、あるいはケアマネジャーの勧めで入所するというのが通例だ。

本来ならば、永い間慣れ親しんだ家に居るのがベストだ。しかしそれも叶わないとすれば、次善の策として、「あの家ならいい」という、「あの家」を要介護状態になる前から各自で作っておくことだろう。痴呆になっても、自然に足が向いてしまう、そんな家を作っておくということである。

委員の一人である釧路市の岩淵雅子氏は「釧路たんぼぼの会」を主宰している。そこに一人の高齢男性が「家を一軒提供したい」と来た。そのかわり彼の老後の介護を引き受けて欲しい、というのが提示された条件であった。そこで岩淵さんが考えた、その家の活用法であるが、まだ要介護状態になる前の人たちにこの家で「お泊り練習」をしてもらったかどうか、というものであった。いずれ要介護状態になったとき、この「練習」で慣れ親しんだ家に「入所」するのならいいのではないか、というわけである。

なにも、岩淵さんに仕掛けてもらうまでもなく、各自で「お泊り」体験をやってみるという方法もある。ごく親しい友人宅、親戚宅、子どもの家、どれでもいい、そこなら安らげるという「家」を自宅以外に確保しておくことは、施設入所という段階になって、決定的な効果をもたらす。介護予防とは別に、こういう準備活動もお互いにやっておく必要があるようだ。

④絶対的に安らげる「別宅」の確保

長野県駒ヶ根市のK子さんは、痴呆になる前からほとんど毎日のように訪問していた隣家の宮脇さん宅に、痴呆になってからも毎日、訪問している。というよりは、ほぼ半日は宮脇さん宅にいる。別宅と自宅の間ぐらいの存在になっている。宮脇さんも、足が悪いので、誰かが来ればさびしくない。K子さんは、足の悪い宮脇さんのために、庭や畑の草取りなどをしている。これで「おあいこ」というつもりなのか。

愛知県安城市でも2人の痴呆症の女性の動きをその家族達に聴取しながらマップに載せていったら、いずれもほぼ毎日、しかも半日はそこに居るという「家」があることがわかった。別に親戚でもない。お互いが痴呆症という相手も居た。一緒にいれば、またその家にいれば心が落ち着くという「家」を持ったとき、安心の基本的な要件が具備されたといっていもいいかもしれない。

⑤「失禁は長生きの勲章」という「逆転の発想」を普及

「私も駄目ね、この頃ボケちゃって」といわれたとき、あなたは何と答えるのか。「しょうがないじゃない」というか、「ボケたっていいのよ」というか、あるいは「ボケで何が悪い？」と反論するか。

私たちは当然のことながら、痴呆を病気と考える。つまり、ネガティブに受け取るのであるが、しかしそれでは当事者は救われない。「仕方がないじゃない」と言われても、たいした慰みにはならないのだ。むしろ「ボケってというのは、それだけ長生きした証拠じゃない!」とか「それも一つのライフスタイルと考えたら？」とポジティブな捉え方をしたとき、ようやく安らぎが訪れるのだ。

本書の他の章でも紹介したが、北海道浦河町の精神障害体験者達の共同生活寮「べてるの家」では、「精神障害」に対して、徹底的にポジティブに対応している。そもそも病気の元になった職場での人間関係の軋轢から逃げるのではなく、あえてセールスを仕事に選ぶ。その結果病気が再発すれば「順調、順調」と言う。そして「病気は治さない」。幻覚や幻聴があれば、それもポジティブに捉えて、「幻覚・幻聴大会」を開く。求められれば全国の集会に出向き、そこで自らの病名を明かし、「だれだって、なるのよ」とすました顔をする。「ようこそ、精神病院へ」という歌をうたい、まさにタレントのノリだ。地元住民を集めて「精神障害への差別偏見大歓迎集会」も催す。

こういう言動を全国でやりまくる結果、どんな効果が生まれているだろうか。他の精神障害者にもたらす安心効果自体も素晴らしいが、まだ発症していない私たちにも同様の安心をもたらすのだ。病気をどう捉えるかは本人が決めることであって、他人が勝手に決めることではないのだ。

⑥「散歩」の途中に見守ってくれる人がいる

痴呆症の人はそれぞれの事情・理由で、町を「散歩」する。そのルートを丁寧に辿っていくと、その人が必ず立ち寄る家や店があり、その家や店の店主が快く受け入れていることがわかる。そうやって、毎日お決まりのルートを「散歩」する。これが安心の一つの環境づくりだ。

ときには、突然、見知らぬ家に入り込んだり、目的もはっきりしないままにバスに乗り込むことがある。それでも心得ていて、当事者の目的に沿った対応をしてくれる—そういう町を作っていけば、「安心の町」ということができる。

⑦「分譲仲間」－長い間馴染み合った「まち」

痴呆の人が徘徊を始めても、周囲の誰かがそのことを家族に知らせてくれたり、家族の元へ連れ帰ったりしてくれる、という地域があった。そういう地域に共通しているのは、予想通り、例えば何十年前に宅地分譲のときから共に住み続けてきたということだ。何十年と地域の関係が変わっていない。少しは新住民が居るけれど、大部分は顔を合わせれば親しく挨拶し、おすそわけをし合い、妻は妻、夫は夫で、趣味を一緒に楽しんだり、パーティを開いたりしてきた。そういう土地で痴呆になると、まず近隣を徘徊している限りは問題はない。

⑧多世代混住社会－これから生まれてくる人と死んでいく人が居る

最近になって、突如として、高齢者ばかりになってしまった地域というのが出て来た。ということは、昔は若夫婦ばかりの町であった。こういう地域を作ること、むしろ福祉問題を自身で作り出してしまうのだ。

全国各地でそういう地域に出向いてみると、ほとんどが超高齢で単身家庭、しかもその一角だけ、歯が抜けたように空き家がある。行政も何の手も打たない。残り的人たちが死に絶えるのを待っているだけ。こういう地域で要介護者が出てくると(当然そうなるが)、支援の手をさがそうにも、近くから得られない。

まちづくりを不動産業者に任せている現状は、何とかしなければならない。これから生まれてくる人がいて、これから死んでいく人がいる－それが「まち」なのだ。そんな「まち」ならば、要介護者を支援する資源は足元から得られやすい。要介護者だらけの「まち」をつくるべからず、である。

⑨毎日、お決まりの「しごと」がある

ただ周囲の人に世話をされるだけでなく、自分もまた、日課のようにする「しごと」があるというのも、大いなる安心材料だ。前述のK子さんは、嫁の配慮で、朝から晩まできちんとお決まりの「しごと」を持っている。朝は新聞取り、犬の散歩、洗濯物の片付け、皿洗い。午後は隣家の宮脇さん宅でお茶を飲み、夕方、孫が帰ってきたら、その世話を、と1日絶えることのない「しごと」の連続で、これが明らかに彼女の「安心生活」の基盤になっている。

当事者の命運を制する人物がいた!

絶対的な庇護者の存在

痴呆性高齢者に欠かせないのは「絶対的な庇護者」の存在であろう。何があっても、(極端に言えば)一時も離れずにそばについて守ってくれる人。たいていは偶然の産物であるが、この人物がたまたま確保できた当事者は幸せだなとつくづく感じた。痴呆性高齢者は、症状がすすめば、ほとんど幼児に近い。だから、幼児にとっての母親と同じように、一時も離れずに守ってくれ、何でもしてくれる人物が必要なのだ。そのときいかに大きな安らぎと安心が得られるものかを、この「嫁いじめの姑」で感じた。これだけいじめられても、しかも痴呆の症状が出てからもいじめつづける姑と言うのもたいしたもの(?)だが、それでも庇護しつづける嫁もまたすごい。

■相手に害悪もたらず

復讐にも二つの種類があることがわかった。正の復讐と、負の復讐と言ったらいいか。正の復讐が、一般的に言われているもので、私をいじめたあの人に復讐してやる、といった場合で、相手に害悪をもたらずたくらみのことだ。

ではもう一つの、負の復讐とは何か。いまの正の復讐とは逆に、相手に利益をもたらず復讐のことだ。それでは復讐にはならないではないかと思われるのだが、必ずしもそうとはならないらしい。

今回の研究のいっかんで、全国各地の、痴呆性高齢者を介護している家庭を訪問している。長野県のある町を訪問した折、嫁さんから「負の復讐」があることを教わった。

■何十年もいびられ続け

K子さんは何十年もの間、姑にいびられつづけてきた。だいぶ手ひどい扱いを受けてきたようである。それでもなんとか我慢してきた。「ならぬ堪忍、するが堪忍」という言葉が出てきそうな凄まじいいびりを受けてきた。そのいびりの主が数年前から痴呆症になったのである。

人の顔をすぐ忘れてしまう。孫の名前も忘れてしまう。食べたことも、風呂に入ったことも、なにもかにも忘れていく。骨折して入院したときは、毎日下の世話もしてあげた。

■徹底して尽くして

本当はK子さんにとっては絶好の(?)復讐のチャンスであったが、まてよと考えた。私は別の復讐をしてみたいとその時思ったのだ。何十年間のいびりを今こそ返してあげようとするれば、わけもないのだが、逆に、徹底的に尽くしてあげてみよう。尽くして尽くして尽くしまくることで、「ああ、今まであんたには悪いことをした」と本心から謝らせてあげたいという作戦であった。まともな謝罪の言葉は、まだ出て来てはいないが、もはやこの私に委ねきっていることは間違いない。それでも、無事退院して、元気になると、またK子さんいびりが始まった。そのときはさすがに「正の復

警」への誘惑がもくもくと湧き出てきたが、そこはぐっと我慢。

■元気になったらまた

K子さん宅を訪れたとき、姑も顔を出した。なるほどこれがK子さんいびりの主かと、納得した。それだけの面魂をしている。呆けたとはいえ、まだまだ迫力は十分である。しかし現実には、K子さんがいなければ何もできない。私達の前で、K子さんの腕に手を回して「この人がいちばん好き！」とやる。「あれあれ、人様の前で、ごますりかい？」とK子さんは笑ってのける。

仕事もやめて母親の介護に賭けた人生

■「収入の方は俺達がなんとかするから」という兄弟の勧めで

「絶対的な庇護者」に恵まれると、痴呆になっても最低限の「安心」が確保される、と本章で述べたが、安城市のY男さんもその「絶対的な庇護者」と呼べるのではないか。郵便局の外務員がしごとであったが、母が痴呆になって、「収入の方は俺達がなんとかするから」という兄弟の勧めで母の介護に徹することにした。

まあ、兄弟達に「尻を押される」かたちでの介護に踏み切ったわけではあるが、その後はいわば母親の専属のヘルパーとして、つまり文字通りプロ意識を持って取り組んできたという。母の「散歩」のルート(別紙参照)をみていて、母が神社仏閣を好んで「散歩」していると知って、一年間、県内外の神社仏閣へ残らず(車で)連れて行った。

■自分流の「介護者の心得」もあみだす

家族の会にも加わり、そこで、周りの人に助けってもらってもいいのだと教えられて、積極的に周りの人たちの善意にすぎるようにもなった。彼のプロ意識が尋常のものではないとわかったのは、彼から「Y(本人の名前)流介護者の心得」というパンフレットを手渡されたときだ。

- 一つ、痴呆は病気だと割り切ること。
- 一つ、お年寄り中心の生活をする事。
- 一つ、お年寄りの言動には、否定、排除、削除はしないこと。
- 一つ、お年寄りを一人にしないで、でき得る限り一緒に居ること。
- 一つ、お年寄りの失敗を責めないこと。
- 一つ、お年寄りの一歩前を用意すること。
- 一つ、自分を「殺す」。「いい、加減な介護」をすること

うんぬん…。「お年寄りの一歩前を用意」とは、症状は明日はもっと進む、と読んで、それにあらかじめ備える、ということらしい。寝たきりになる前に介護教室に参加しておむつ交換などのやり方を習ったりした。「先輩」をみると、もっとヒドイ状態が見える。そこから思いついた心得らしい。

■男は本気になるとプロをめざす？

その他にも、彼の口から、自身が開発したさまざまな介護のノウハウが次々と出てくる。今では「かつ助くん」という介護のホームページを立ち上げている。

男性というのは、良くも悪くも「プロ」になっていく。たまたま趣味の一環として料理を習えば、いっぴしの料理人にまでなつて、本を出版するまでになる。Y男さんは、母親の介護に踏み入つて、そこで事実上のプロになってしまった。

■同じ地区を3人の痴呆の人が「散歩」していた

Y 男さんの母が「散歩」している界隈を住宅地図で乗せていくと、その他にも2人の痴呆の人が同じように「散歩」をしていることがわかった。

Y 男さんの母はこの地図の、主に上部のあたりを「散歩」の領域としている。やはり毎日のように「居ついている」家が2軒ほどあって、そこが母親の「居場所」になっていた。あとは神社仏閣、お稲荷さんなどに好んで出かけている。永い間母が住んでいた地域だから、彼女が「散歩」をしていたら、「ウチの前を通ったよ」とY男さんに知らせてくれる。郵便局の外務員をしていたから、知り合いは多い。

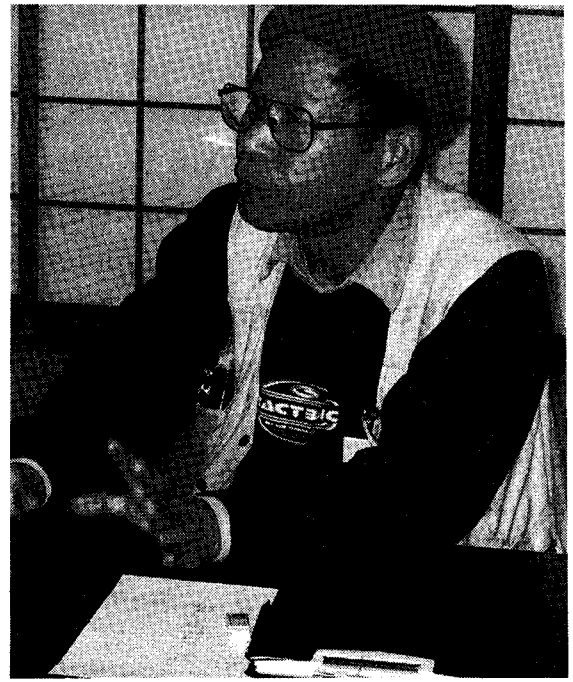
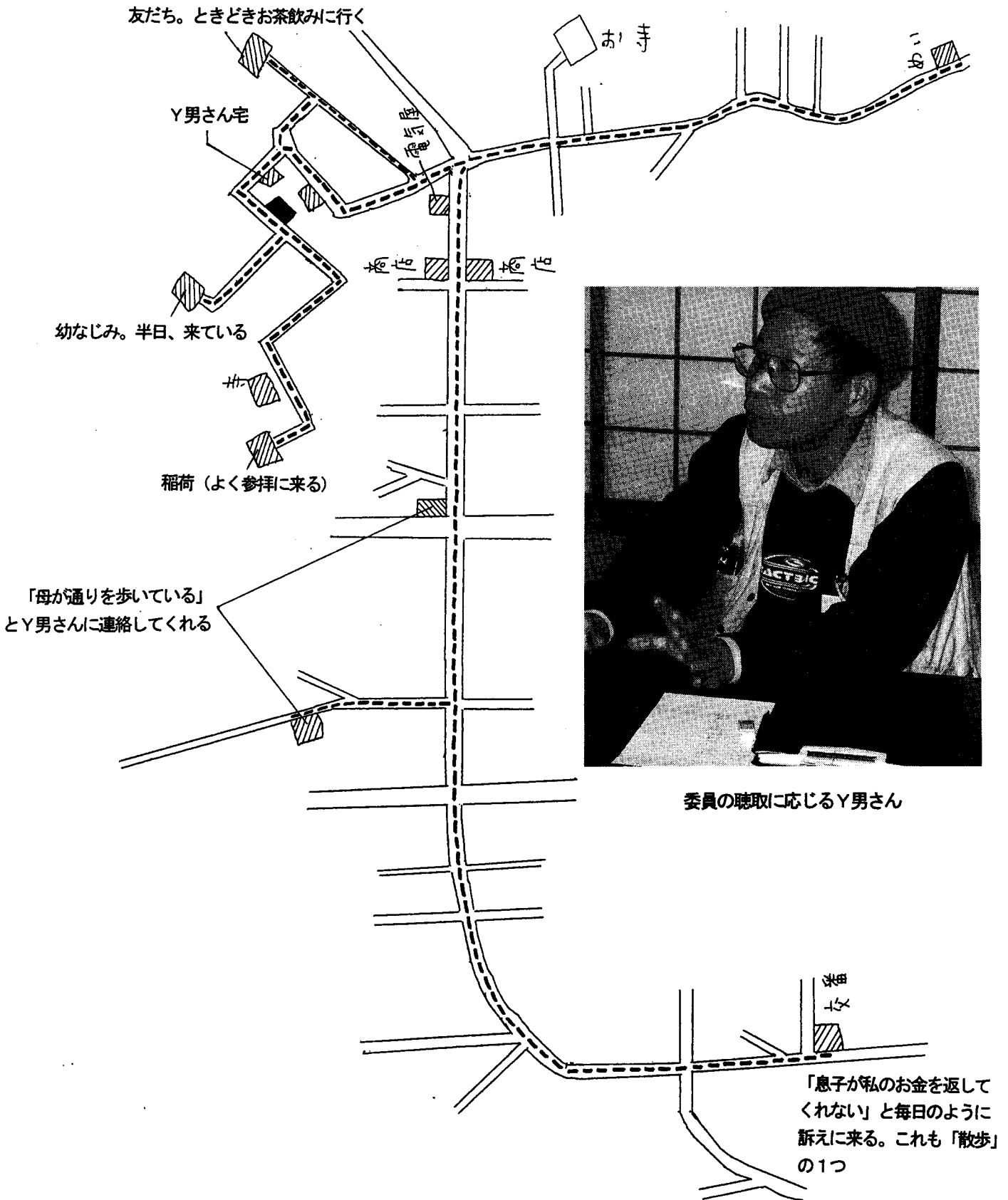
地図の下方の交番へ日参しているが、「息子がお金を返してくれないから訴える」ということらしい。これもまた「散歩」の一環なのだ。

■当事者たちに見込まれた薬局が、この地区のちょうど中心部に

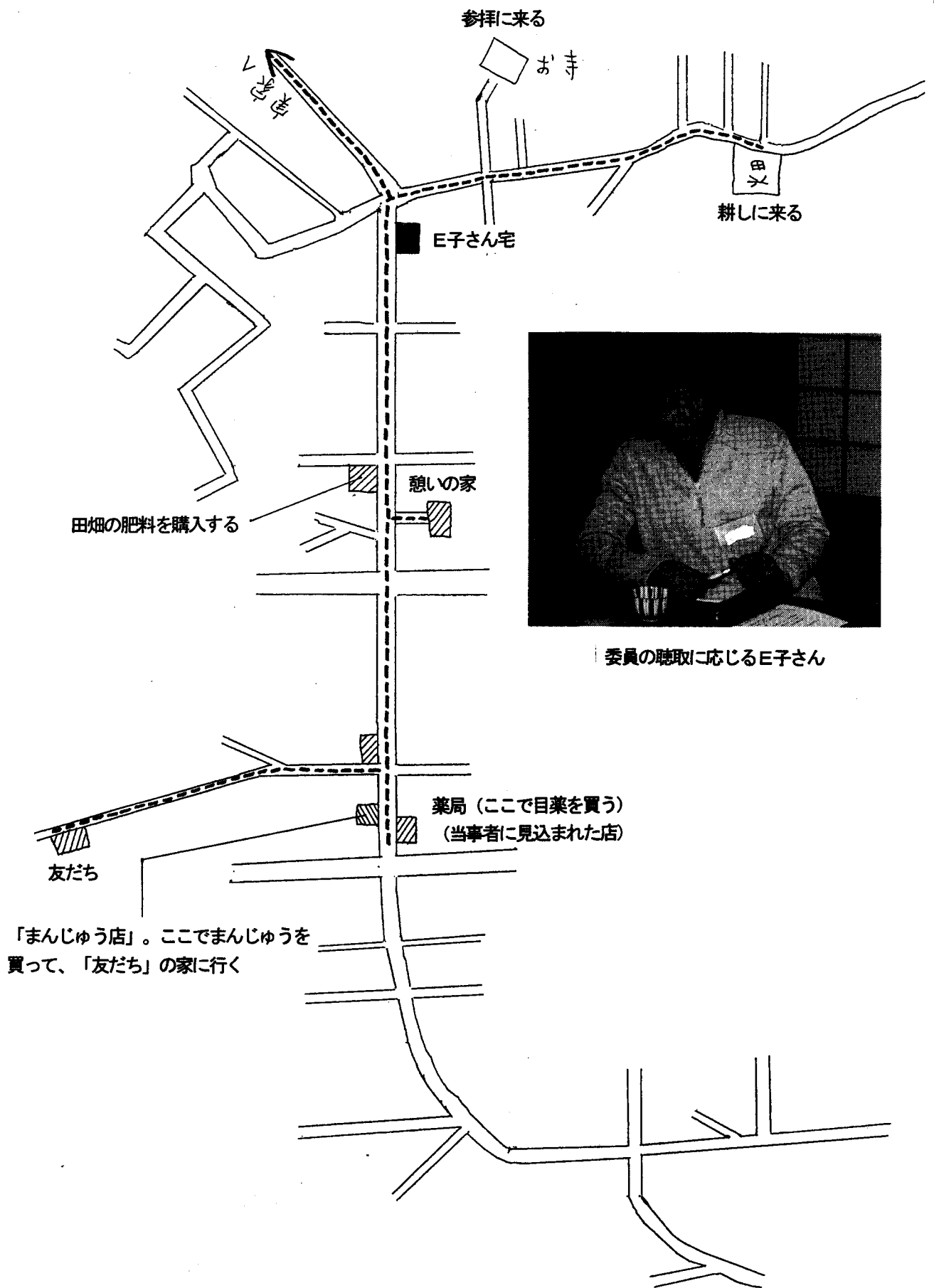
一方、E 子さんの母は、Y 男さんの母とコースがだいぶ重なっている。彼女の母の場合は、上右の方角に畑があって、そこへ毎日のように出かけては耕作に精を出している。その肥料を買うために、地図の中央部にある肥料店に行く。もう一歩足を伸ばして、中下の薬局に顔を出す。この薬局の店主がいわゆる見込まれ屋さんらしく、3人目の痴呆の人も毎日、この店に来る。ちょうどいい場所にあって、当事者たちの憩いの場を提供しているのだ。

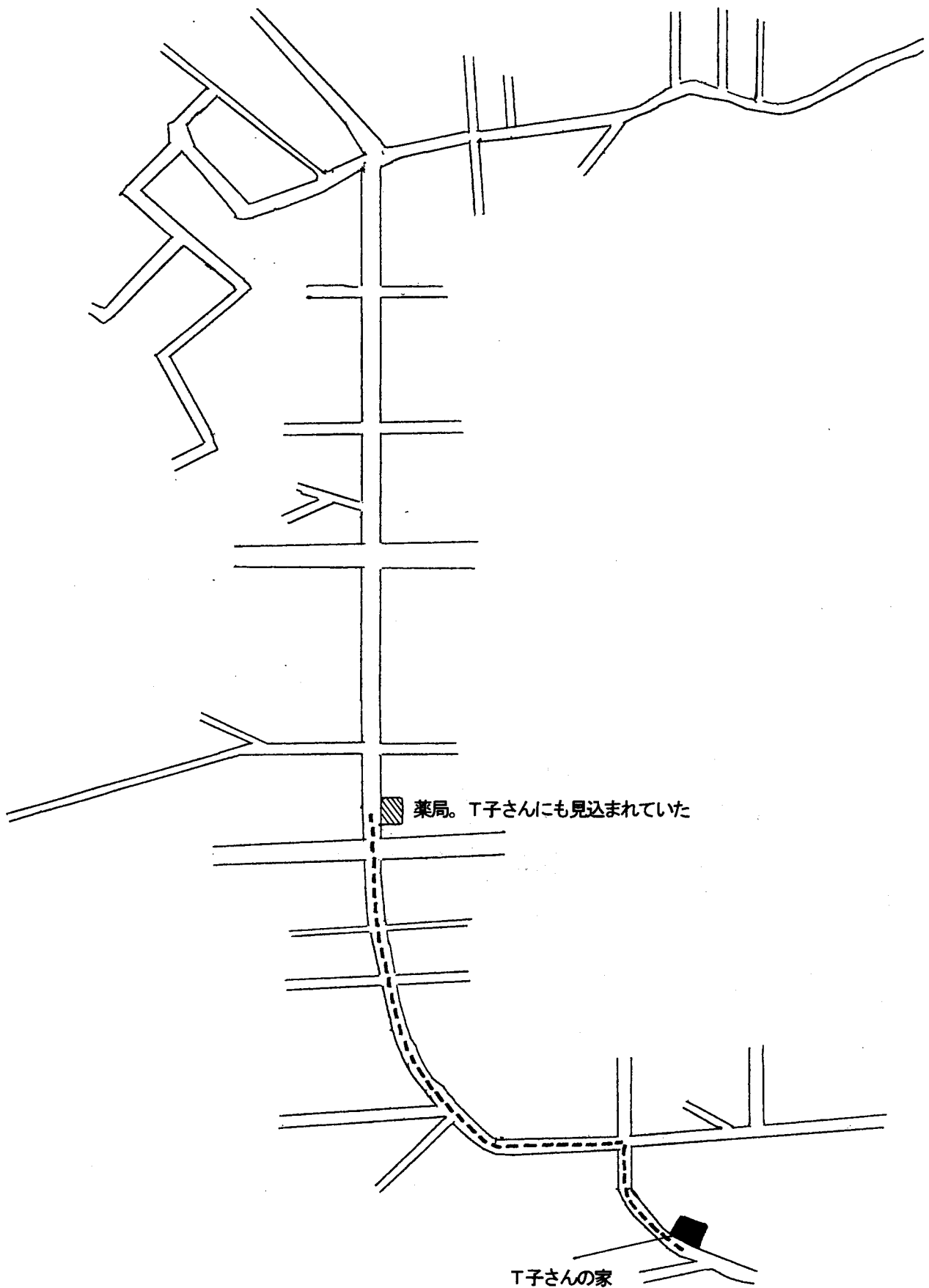
またEさんの母は、薬局の前のまんじゅう店でまんじゅうを買って、それを手土産に、左方向の友達の家にお茶飲みに行く。ここが彼女の「憩いの家」だった。

Y男さんの母は寺社が好き
(ここへもよく来る。みんな声をかけてくれる)



委員の聴取に応じるY男さん





薬局。T子さんにも見込まれていた

T子さんの家
庭のフェンスを開けるとすぐに出してしまう。
家族が地元の人に「お願い!」と声かけている

アカの他人だけど「放っておけなくて」

■N子さんが「飯を食わせて」とやってきた

普通「絶対的な庇護者」といえば、身内である場合がほとんどだ。娘とか嫁が、たまたま介護者としての資質が生まれもって備わった人である。ところが、地域というのは不思議なもので、当事者とは全く、縁もゆかりもないのだが、「放っておけなくて」と、近隣の要援護者に関わっていく人もその中に、まさに「絶対的な庇護者」と称していい人物も含まれる。

釧路市で発見した K 男さんもその一人である。塗装業をしていた K 男さんは、退職後も四軒長屋の一室に一人で住んでいた。その長屋の、彼の部屋から一室置いた部屋に N 子さんという痴呆の女性が一人住まいしていた。

何も起こらなかつたら「庇護者」なんぞになるはずもなかったのだが、あるとき N 子さんが「飯を食わせて」とやってきた。いまだき飯を食わせろとは奇妙なと思って、彼女の財布を開けさせ、貯金通帳を見せてもらったら、「すっからかん」！ これは放って置けないぞと、彼女の生活全体を見てみたら、どうやら彼女に「食いついた」者どもが居ることに気づいた。

■生活力のないK子さんを食い物にしている人たちが

年金が入ると、「□□へ行こう」今度は「〇〇へ行こう」と誘いをかける。支払は N 子さんにとこの作戦だ。同じようにして、彼女をデパートに連れて行っては高価な買い物をして、その支払はまた N 子さんにさせる。というわけで、財布も貯金もたちまち底をついてしまったというわけだ。

K 男さんは彼女を食い物にしている人物達と対決し、一方で彼女の生活を全面的に支えるようになった。「おまえ、なんでそんなに N 子に関わるのか？」と疑いの目を向ける者もいたが、彼はそれは無視して、彼女にかかわりつづける。

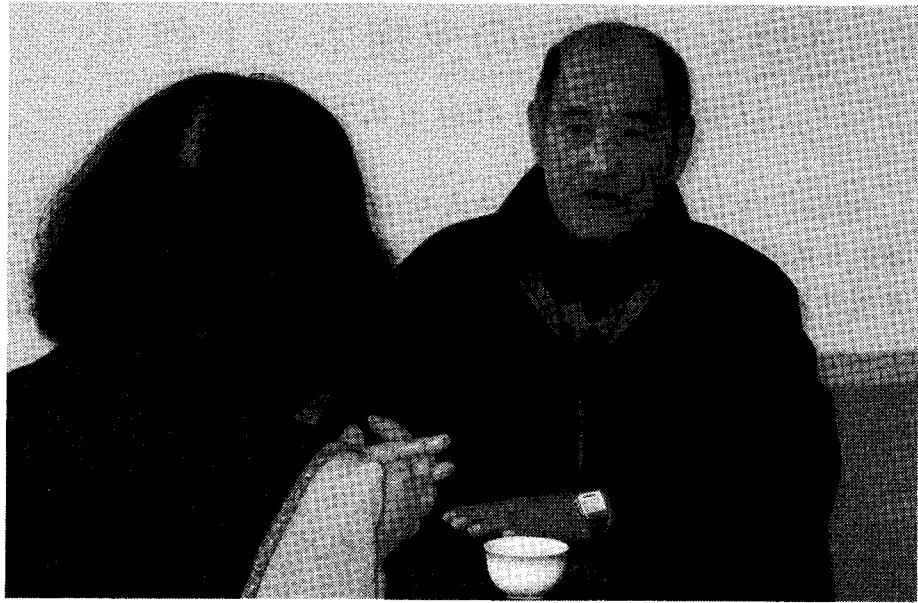
それからいろいろあって K 男さんは、市営住宅に応募して、そちらへ移り住んだ。彼女も半ば強引にくじ引きに連れて行き、ようやく彼女にも家らしい家があてがわれることになった。両者の住まいは、写真にあるように、少し離れているが、その後も彼はちよくちよく彼女の自宅を訪れて面倒を見ている。

■ケアマネジャーに聞くと「特別養護老人ホームの入所待ち」だと

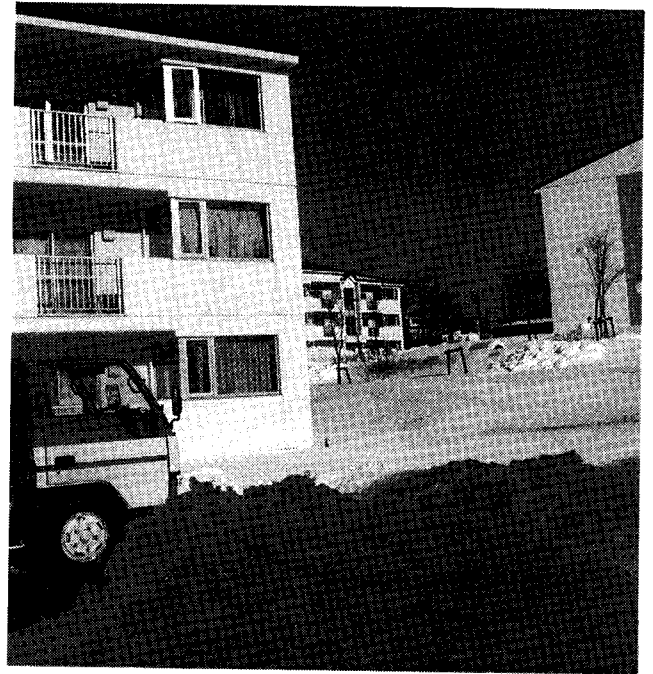
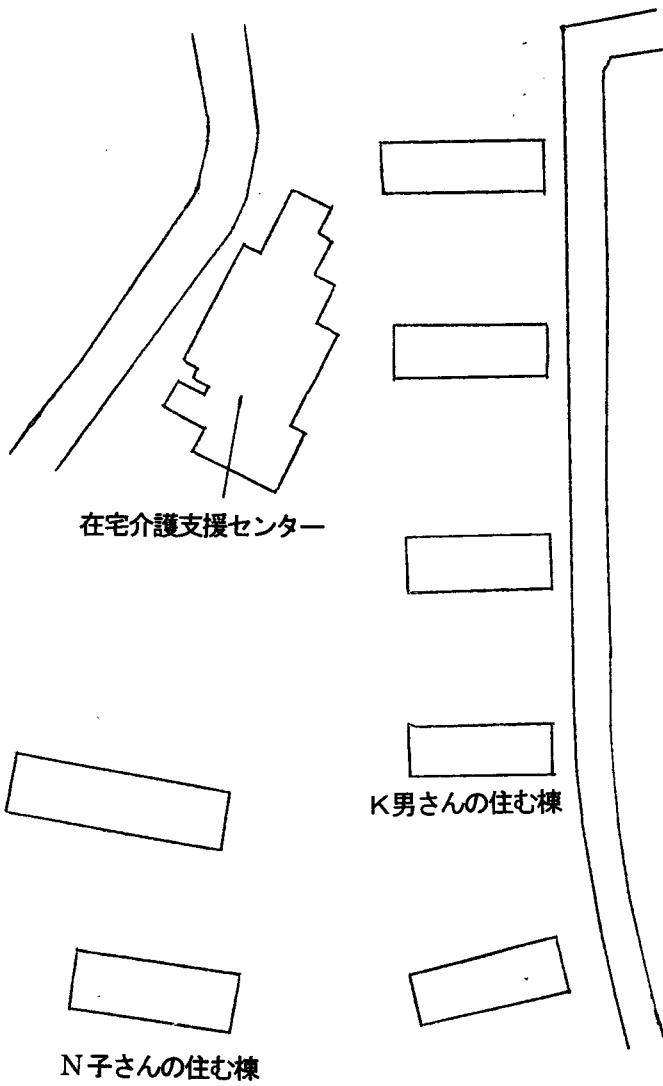
両者はまったく縁もゆかりもない他人である。たまたま同じ長屋に住んでいたというだけ。彼女は前述のように、幼児のように生活力がない。加えて痴呆の症状が出た。だれかが支えないことには、まず生きていけない。たまたま特別級の世話焼きの資質を備えていた K 男さんに出会ったのが、彼女の幸運であった。

彼女の今後について、担当のケアマネジャーに聞くと「特別養護老人ホームの入所待ち」だという。では本人は今の生活をどう見ているのかとそのケアマネジャーに聞いたら、「そりゃもう、天国、で

すよ」。N子さん宅を訪れたら、膝枕をしてうたたねをしていた。私たちが訪れても、膝枕をやめない。「なにしに来た？」と口をきくだけ。毎日ヘルパーが食事や掃除に来るから、安心だ。なるほど、これは「天国」である。しかし、ケアマネジャーは彼女に「天国」生活をつづけさせるわけにはいかないらしい。



委員の聴取を受けるK男さん

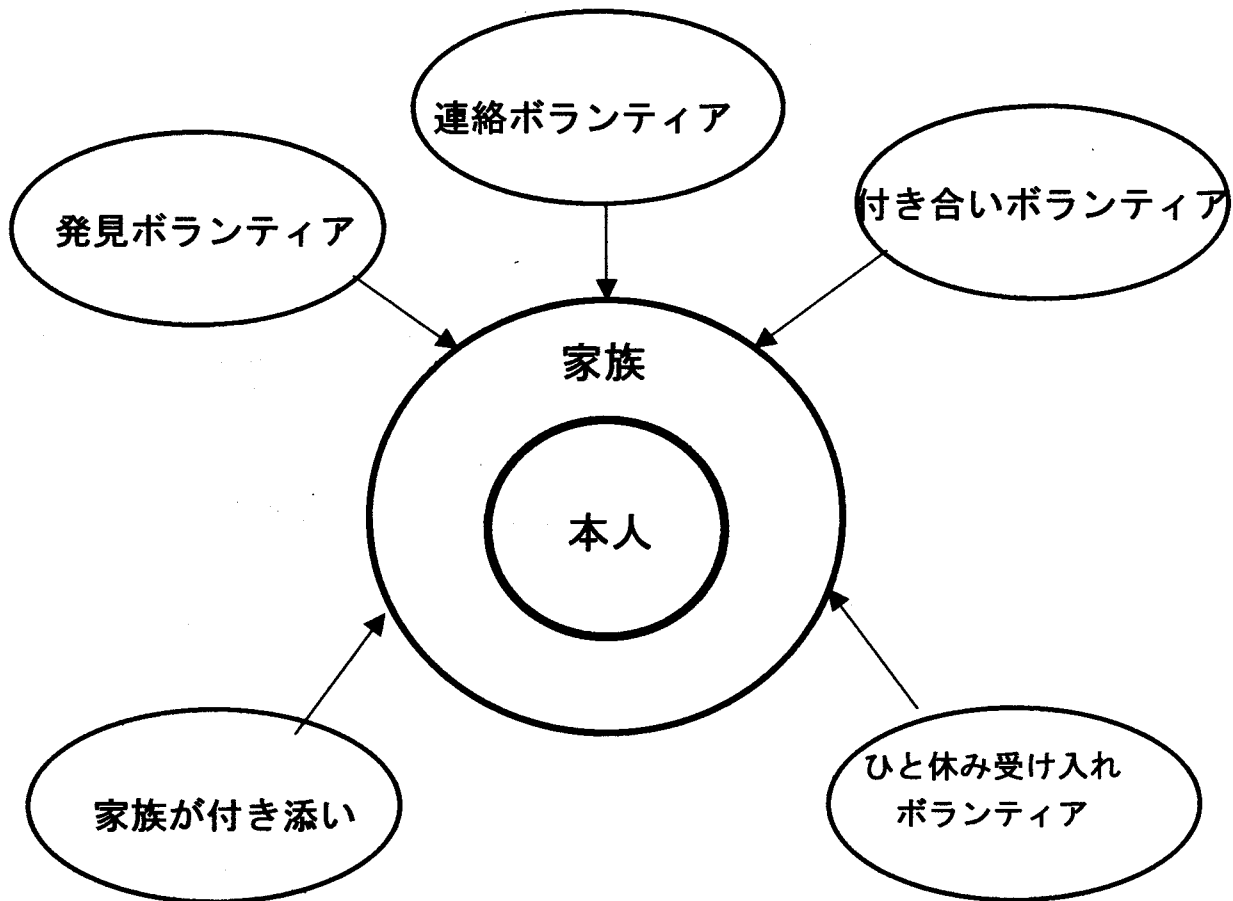


手前左がN子さんの棟。中央奥に見えるのがK男さんの棟

「歩く」(徘徊)の支援ネット作り

「歩く」のもそれなりの意味がある

「徘徊」にもいろいろあるが、それぞれが本人にとって意味があるという基本的な理解で、徘徊行動のしやすい環境を作ってあげる必要がある。理解者や受け入れ家庭・店、乗車協力の車両、発見して、連れてくる人などのネットワークづくりや協力者への説明・謝礼も含めて検討の要がある。



「ご近所は分譲のときからの親しい仲間」なら徘徊も安心

■「さらっと徘徊」型の人なら、対策も容易

「徘徊」と一口に言っても、さまざまだ。かなり長い距離をしかも長時間徘徊する人もいれば、ほんのご近所をさらっと廻るだけの人も居る。その中間で、ある程度の距離を毎日こなすが、長い間親しんだ地区なので、徘徊途中で沿道の誰かが気づいて、家族に連絡してくれたり、自ら歓待してくれる人がたくさん居る、というケースもある。

ここで紹介するのは、その「さらっと」の口である。地図に示したように、自宅の周辺をさらっと廻る程度だし、分譲のときから親しくお付き合いしてきた人がまわりにたくさん居るから、その中の誰かが気づいて、連れ戻してくれる。地図の中で「協力者」の印をつけたところを見ていただきたい。

■分譲仲間には、協力して「まち」を作ってきたという連帯感が

思い出してみると、地域の人たちが親しくお付き合いし、加えて困ったときは助け合うことまでの地区というのは、この「分譲のときからの仲間」というケースが意外に多いのである。ちょうど入れ歯のように、途中から一人また一人と新しい人が移り住んできたような地区では連帯感が育ちにくいことは間違いない。

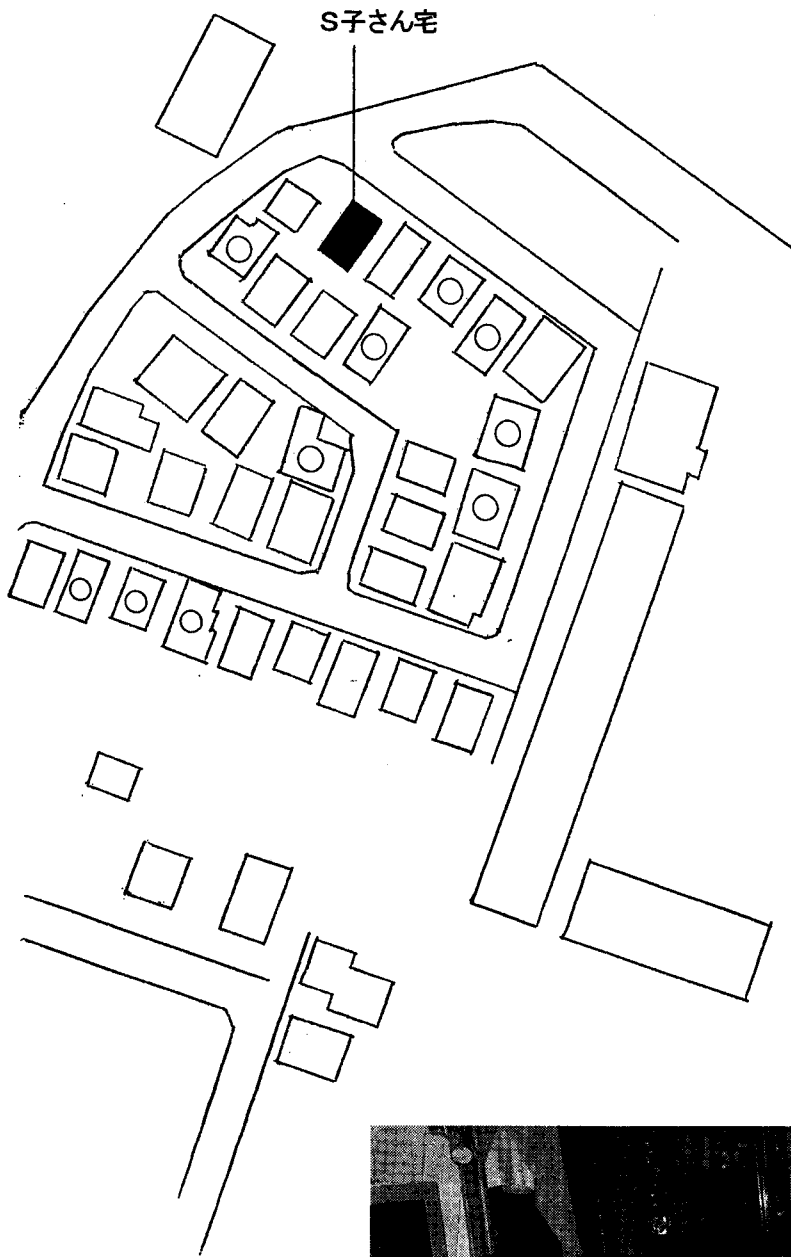
「分譲のときから」というのは、まだ家以外の周辺の環境が、整備されておらず、お互いにそのために協力して「まち」を作ってきたという連帯感が育っている。

痴呆の人が安心して生きていける場というのは、やはりこういう地区なのだ。できれば本人がその「分譲仲間」の一人であれば、もっといい。

■「娘さんが施設職員」という有利さ

ただし、これだけの要件で、すべてがうまくいくというものではない。この地図で紹介した事例では、介護をしている娘さんが老人福祉施設の職員で、要介護の親を隠すといったことは全く考えていない。すべてをオープンにするし、だいいち痴呆という症状に普通の家族ほど神経質にならない。そんな介護者だから、周りの人も気軽に助けてくれるのだ。

- ……「分譲」のときから親しい間柄の人。
痴呆の父を見かけたら連れ戻して
くれる。父の徘徊もこの近辺に限
られる



委員の聴取を受けるS子さん

「入所してもまた家へ戻れる」が保障されるのなら

家へ帰ってもまた施設へ戻れるのなら

今の福祉制度は相当硬直していて、当事者の側からみたら、なんとも融通が利かない。その点が、「安心」できない要因になっている。一旦施設に入っても、状況がよくなればまた家へ帰れる、あるいはその逆に、一度家へ帰っても、状況次第でまた施設へ戻れる—ということが可能ならば、住民の施設に対する見方もまただいぶ変わってくるのではないか。

■入所でめでたく要介護度が5から3に下がった。ではどうする？

痴呆症のS子さんは、特別養護老人ホーム生活が「合った」のか、そこでのリハビリ効果が上がって、要介護度が5から3に下がってしまった。私達が訪れたときは、世話焼きさんやNPOの人たちの顔も憶えていた。

それならまた、地域で生活できるかもしれないと思わせるほどだった。しかし残念ながら、今の制度はそんな柔軟性はない。一旦施設を出れば、また（ゼロから）申し込みをすることから始めなければならない。

■小規模多機能施設なら可能になるかも

たまに施設を出て、地域で生活してみる、といったことが自由にできるような、柔軟な制度になれば、安心して施設入所もできるかもしれない。

これから生まれる小規模多機能施設なら、そのあたりが可能になるかもしれない。しかもその施設が自宅近くにあれば、いつでも戻れるという安心感が増す。夜だけ施設に泊って、昼間は自宅にという方法だってある。選択肢の幅が広がることで、その人らしい生活により近づいていく。

■施設も介護度の変化に柔軟に対応する体制に

施設というところは、一応「自立支援」が理念としてあるのなら、要介護度が変わるたびに、処遇のあり方もそれに対応して柔軟に変えていくべきではないのか。5が3になり、2になっていけば当然、また地域へ戻すという選択肢もあってしかるべきである。

この程度の柔軟性もなければ、もはやこれからの福祉の流れにはついていけないというべきではないか。

「失禁したっていい」と思える環境づくり

痴呆症の人が自信を失い、周りの人任せになってしまう転機になるものの一つに、「失禁してしまった!」とき、「何もかもわからなくなってしまったと思った!」と落胆したときがある。そのとき社会がどう反応するかが、「安心社会」か否かの分かれ目になる。

■プロが周囲に居るのに、なぜ?

そのとき、「失禁したってどうってことないわよ」「わからなくなったっていいじゃない」と言ってくれる人、そして本人自身がそう思えるような環境をどうやって作っていくか、が問われているようだ。

ヘルパーやデイサービス、在宅介護支援センター、ケアマネジャー、施設関係者などが関わっているにもかかわらず、そういうアドバイスを本人にしてあげる人がいないのか。あるいは(関係者に)そういう価値観が育っていないのか。もしそうだとしたら、専門研修をやり直さねばならない。

■「失禁は長生きの勲章」という価値観作り

本人にとって、最も問題なのは、自分の今の状態が否定的にしか見られないということだろう。だからこそ「失禁はそれだけ長生きした勲章のようなものよ」「わからないことがなぜいけないの? そんなことはどうということはないのよ」といった価値観を徹底的に社会に植え込む必要がある。

プロというのは、ある意味では怖い存在であるかもしれない。プロが存在し得るのは、そこに「問題」があり、本人も周囲の住民も解決不可能となった時である。ということは、「失禁」が「問題」と本人にも社会にも自覚させることから、プロの「しごと」が始るからだ。「失禁なんて問題じゃない」と言ってくれるプロが何人居るだろうか。

■安心社会は患者自身が作り出すものでもある

これは、他のさまざまな福祉問題についても言える。北海道浦河町にある精神障害体験者達の共同生活の家「べてるの家」では世間とは全く反対の論理が幅を利かせている。「精神病は治さない」「順調に再発した」といった言い方をする。こんな論理を持って全国の集会に顔を出し、「ようこそ、精神病院へ」といった歌をうたい、「ぼくはアルコール依存症」「わたしは統合失調症」と平気で言っている。幻聴が聞こえる人は、それを特技とみなして「幻聴大会」を開いてもいる。

このようにして本人が精神病を隠さず、自身それに恐れも悩みも抱いていないことを公言することで、他の精神患者だけでなく、住民もまた安心する。安心社会はこの意味では患者自身が作り出すものでもあるのだ。痴呆性高齢者の一部がこのように痴呆を肯定的に捉え、それを公の場で公言するようになると、状況はだいぶ違ってくるのではないかな。

第4章

スロース社会

まち全体がだれにとっても癒される場に

まち全体がだれにとっても癒される場に

<第4章> スロー社会

本章のほかに「安心社会」という章がある。若干似ているところもあるが、安心は「身の危険がない」あるいは「心が乱されない」といった意味であり、「癒し」はもっと内面的な安らぎをめざしている。前者がネガティブな概念で、後者はポジティブな概念と言ってもいい。

文明が進化するに連れて、私たちはますます癒しを求めるようになっていく。文明が作り出した社会そのものが、癒しを求めさせている。痴呆の人にとっては、それは私たちが抱えている以上の「切なる願い」であるのかもしれない。癒しを与える社会づくりは、私たちも痴呆の人も、一緒に求め、作り出していかなければならない目標になった。

① 「スローライフ」「スローワールド」の実現

いつの頃からか「スロー」という言葉が頻繁に使われるようになった。いろいろな意味があるが、文明の利器に頼らない、人間の手づくりによる生活をめざしている。時間に追われず、じっくりと手をかけて作ったモノに囲まれた生活。

私たちは効率を求めて文明の利器を開発し活用することで幸せが得られるものばかり思っていたが、どうもそうではない。誰もがいつも、急いでいる。自分で自分を追い立てている。それで効率が上がったと思っているが、心は少しも落ち着いていない。なにかがおかしい。

もう一度、人間の、あるいは自然の元々のリズムに戻る必要があるのかもしれない。ゆったりと流れる時間、なにごと「ゆっくりゆっくり」とすすめていく。あせることはない。急いでやらねばならないことは、元々たいしてなかったのだ。そんな生活作り、社会づくりが、痴呆の人にとっての福音になる。文明社会そのものが痴呆にとっての敵だった！

こういう意味では本来、保健福祉関係者が「スローライフ」を主唱していかなければならないのに、どうもそうではない。障害者の作業所の関係者が「スローワーク」を提唱し、社会全体の労働がそれに倣うよう運動している、といった程度である。

これからは保健福祉関係者も文明の動向を読みながら、人間を幸せにする文明作りへ、先導役を引き受けなければならないはずなのだ。

②痴呆の人に安らげる家庭環境づくり

福祉関係者は当事者の処遇について、施設か在宅かと二者択一式の議論をするが、現実はどうもそう単純ではない。特に在宅というのは本当はなにを意味しているのか、あまりはっきりしない。ただ在宅であればいいのか。実際に要介護者の自宅を訪れると、「これが在宅生活なのか？」と失望させられることが多い。文字通り「ただ家に居る」というだけで、人間が心安らかに、あるいはもっと人間らしくもあるいはもっと欲張って、心ゆたかに生きる場とはとても思えないと言う場合が多すぎるのだ。

ここで言う「癒しの家」とは何なのか。そこに家族の団欒があるということが、大きな要素になっているようだ。例えば息子夫婦が夫婦喧嘩ばかりをしていると、痴呆の人本人も落ち着かない。いつも家庭内に笑いがあり、笑顔があるということの本人に与える影響は小さくない。

そういう場に出向いてみると、なにも痴呆の人がその輪に入らなければならないということではないらしい。本人の脇で、ゲラゲラ笑いながら井戸端会議が開かれていればそれでいいのだ。意味はわからないでも、一緒になって笑っている。「笑いの環境」がいいのだ。

いつも自分を見守り、守ってくれる人がそこに居るというのも大事な癒しの要素であるが、たまたまその人（嫁や息子、孫など）が居ないと、突然落ち着かなくなる。あるいは家族が喧嘩をしていると、食べたことを忘れてしまったりする。

③当事者にとって「安らげる家屋」構造に

家屋の構造が当事者にとって安らげるものになっていないと困る。ある介護家族は、家の構造全体を痴呆の親にとって最大限、安らげるものにしようと努力していた。当人の友達が来たときに家の物とあまり顔を合わせなくて済む出入り口の設け方、義理の息子とあまり出会わなくて済むような位置関係など、家族と本人の関係を考慮に入れて工夫していた。

痴呆になると、家に引きこもる時間が多くなる。だからこそ、家という場は、そこでふれあいも、運動も、お楽しみも、ゆったりとできる空間を確保しなければ

ばならない。

④「自然がいっぱい」－癒される地域社会作り

愛知県安城市で痴呆の母の介護をしてきたY男さんは、母がなぜか神社が好きで、周りの神社に頻繁に出かけているのを知り、一年かけて、県内外の神社に母を連れて行った。

自然がいっぱいの田園風景の中を毎日「散歩」している駒ヶ根市のK子さんの全ルートを辿っていくと、これが痴呆の人に癒しをもたらす環境なのかと感じた。いつも決まった田んぼのあぜ道を歩き、橋を渡り、いつも見知った〇〇さん宅にちょっと寄り道し、通い慣れたJAで同じ品物を注文し、辻のあたりで□□さんと立ち話をする。そして退屈な昼間は半日、隣のM子さんちでお茶を飲んで暮らす－「痴呆になったらこういう環境で暮らせればいいな」と委員たちが皆、同じことを考えていたことが、あとでわかった。

⑤幼い頃から何も変わらない町

後で紹介する「過去がそのまま残るまち」を読んでいただきたい。痴呆が進むと幼児期に戻ると言われるが、このまちではその人の幼児期にあったものがそのまま残されている。昔かくれんぼをしたときによく隠れた納屋とか、飴玉をよく買いに行った駄菓子屋とか。しかもこのまちでは老後になっても、子どもどもの呼び名で言い合っている。

痴呆の人にとって、ここには「ふるさと」がそのまま生きている！ こういうまちをつくることもまた、癒しの環境づくりになるわけだ。もう既になくなっていく「ふるさと」をもとめてあてどなくさ迷い歩く痴呆の人がよく居るが、ここでは昔の「ふるさと」が厳然として今、生き残っているのだ。

「散歩」コースのそこそこに見守ってくれる人が

■彼女を影から見守ってくれる人がちゃんという

長野県駒ヶ根市のこの地区(地図を参照されたい)では、痴呆の K さんが毎日のように「散歩」をしている。コースは3つほどあって、東西南北に渡っている。そのそれぞれの「散歩」コースに、うまい具合に彼女を影から見守ってくれる人がちゃんというのだ。

彼女が立ち寄るといふ家や店もある。いつも同じ物を買おうとするので、家族と店が示し合わせて、対策を講じている。しかもそれぞれには、ただ「散歩」コースであるだけでなく、なんらかの「目的」、めざすもの・ことがある。だれだれさんちに行くのだとか、どこどこへショッピングに行くのだとか、だれだれさんちにお茶を飲みに行くのだとか。

■サロンによって、「散歩」の見守りの柔らかなネットワークが

本書の他の章でふれてあるが、この地区では各所でふれあいサロンが開かれている。人口のサロンというよりは、どちらかといえば自然発生的なサロン、つまり井戸端会議に近い。それを社会福祉協議会がその存在を認知したというにすぎない。そのサロンの立ち上げに関わっているのは当然のことながら、世話焼きさんである。

世話焼きさんが軸になって立ち上げたサロン、つまり井戸端会議でどんなことが行われているか。意外なことに、それぞれが足元の要援護者に関わっている。そのことの報告会みたいにもなっていたのだ。むろん話題はそれだけではないが、その話題の中身をいちいち点検してみると、「わたしは隣のだれだれさんの世話をした」といった話が少くないのである。そこで社会福祉協議会では、このサロンを小地域推進の拠点組織とみなすようになった。各自足元で活動していることをサロンで話す、それに他の人がアドバイスしたり、できれば一緒に関わったり後方支援したりする、それでいいのだ。

地図で紹介したこの地区でもそんなサロンが開かれていて、「散歩」をする彼女を沿道で見守っているのも、多くはそのサロンの仲間である。サロンによって、「散歩」の見守りの柔らかなネットワークが構成されていたのである。

■隣の M 子さん宅に、ほとんど毎日、しかも半日は居る

そしてもう一つが、上に示した家族の家が、ここで紹介する痴呆の人の最高の安らぎの場になっていた。彼女のちょうど隣にある M 子さん宅に、ほとんど毎日、しかも半日は居る。「おかえし」というわけではないが、M 子さんの足が少し不自由なので、畑の草取りなどをしょっちゅうやってあげる。お互い様といった雰囲気は2人にはある。

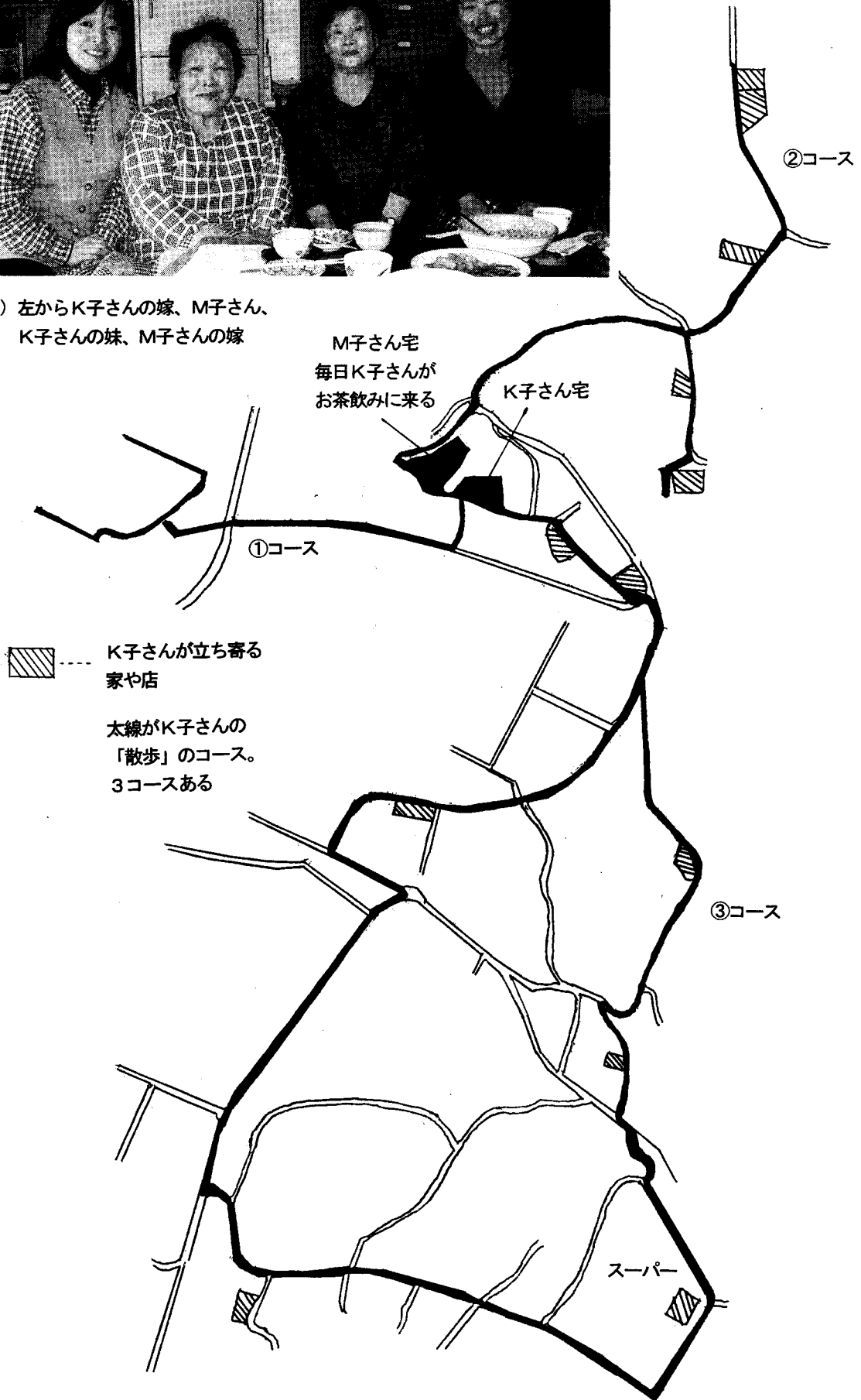
■痴呆の人にとって理想の世界がここにはある、と

調査にいったみて、委員達はつくづく感じたのである。こののどかな田園をゆったりと「散歩」をする。脇ではあちこちでそれを見守ってしてくれる。そして半日は隣のM子さんちで過ごす。これも彼女には最高の安らぎだ。

家に帰れば、いろいろ「しごと」が待っている。洗濯干し、皿洗い、犬の散歩、孫の世話などなど。痴呆の人にとって理想の世界がここにはある、と傍からは感じられたのである。



(写真) 左からK子さんの嫁、M子さん、
K子さんの妹、M子さんの嫁





のどかな田園風景の中を
毎日「散歩」。ときに犬の
散歩も彼女の役目



彼女が毎日買い物に立ち
寄るスーパー。



彼女が毎日立ち寄る
家の1つ

痴呆性高齢者に安らぎを与える

過去がそのまま残る「極小のまち」

痴呆性高齢者に安らぎを与える環境とは何なのか。そのヒントの一つが、ここ広島県大野町で見つかった。痴呆になると、子どもの頃に戻る人も少なくない。幼い頃居た故郷へしきりに帰りたいがる。そんなとき、その故郷が幼い頃のまま残っていたらどうなるか。大野町社会福祉協議会の酒井保さんにレポートしてもらった。

■子供時代の愛称で呼び合い

私が暮らしている「極小の町（広島県大竹市松ヶ原町）」では、大人と言われる世代の人やお年寄りのほとんどが“子どもの頃の愛称”で呼び合っている。「〇〇の△△ちゃん」という具合にである。例えば、自治会長を務める中本春一さんの場合は「中本のはるちゃん」。消防団長の片山利光さんは「片山のとしちゃん」。その他、「山脇のみっちゃん」や「砂奥のりっちゃん」。ちなみに私は「酒井のたもっちゃん」である。

私のカミさんは、嫁いできたばかりの頃、「〇〇の△△ちゃん」という呼び方、呼ばれ方に異様さを感じていたようであった。「いい大人が“△△ちゃん”って呼び合うこの町はヘン！オカシイ！それはこの町の風土？それとも文化？」と言っていた。

しかし、そのカミさんも今では「酒井のたまちゃん」という称号を戴いている。「風土か…文化か…」といった難しいことは私にはよくわからないが、こういった町の雰囲気や地域の問題を知らず知らずのうちに解決しているというコトに気が付いたのはごく最近である。

例えば、今現在に身を置くことが出来ず、過去に混乱の解消を求めている老人呆けの人たち。「極小の町」にそういった人たちを“癒すチカラ”があるとしたらどうだろう。

■アンタは、たもっちゃんかい

今年9月15日に行なわれた「松ヶ原町敬老会」に私は来賓として出席した。「極小の町」の敬老会。出席者25名は馴染みの顔ばかりで、私は、私の親父の親友であり、私自身小さい頃から随分と可愛がってもらっていたYさんというお年寄りのところに酒を注ぎに行き、「おじさん、元気そうでなによりです。お世話になつとります」と話し掛けた。

するとYさんは目を瞬きながら「アナタはどなたじゃったかいの？」という妙な反応。「酒井ですよ」「はあ？役場の人ですか？」「酒井重忠の息子ですよ。忘れんさったですか」と、どうも話しが噛み合わない。

隣の席に座っていたお婆さん（Yさんの奥さん）がすかさず、「ごめんね。この人、近頃呆けがひどくなってね」と教えてくれた。「そうですか…。おじさん、酒井のしげちゃんを憶えとる？」「おお、しげちゃんはワシのトギ（「親友」の意）じゃ」「そのしげちゃんの息子よ」と話し掛けて

みたが、やはり「はあ？」という反応。“しげちゃん”はわかってても、“その息子”はわからない様子であった。

そのうち、おばさんが呆れ顔で「もう…、お父ちゃん、この人はね。酒井のたもっちゃんよ」というと、瞬いていた目を大きく開いて「ほう、アンタは、たもっちゃんかい。大きゅうなったのお」と大きな声で反応した。「お父ちゃん、たもっちゃんがわかるん？スゴイじゃない！」と言いながらYさんの肩を摩るおばさんは本当にうれしそうな顔をしていた。

記憶が蘇り、勢いがついたYさんは、“小さい頃にしげちゃんと遊んだ話”や“子どもの頃のたもっちゃんの話”などを「たもっちゃん、たもっちゃん」と言いながら30分もの間喋り続けた。敬老会も終わり、三々五々お年寄りたちが帰って行く中、Yさんだけは私の手を握り、「そうかい、アンタがたもっちゃんかい。大きゅうなって…」と同じ言葉を繰り返し、帰りを急いでいるおばさんを困らせていた。

“最近の記憶は薄れ、昔の記憶が何かの拍子に蘇ってくるというのがぼけの特徴の一つ”であるらしく、そのことは“徘徊”に大きく起因しているようである。

■ 「たぶんH商店におるけえ」

敬老会の開催直前に「出席予定のSさんがまだ来ていない。家には居らんそうなんじゃが…」というハプニングがあった。Sさんはここ最近“まだら呆け”の症状が顕著で、散歩に出ては帰り方がわからなくなるということが幾度かあったらしい。

このような場合、普通だったら「大変だ！手分けして探そう」となるのだが、主催者側の自治会役員は「多分あそこにおるはずじゃけえ。Kちゃん、アンタすまんが迎えに行ってくれんか」「よっしゃ！」で片付けてしまった。

「私も探しに行きましょう！」と慣れないネクタイを緩めながら靴を履こうとした私に「たもっちゃんは来賓なんじゃけえ、ええよ。心配せんでも、たぶんH商店におるけえ」と言っているところへ「やっぱりあそこにおった」とKちゃんが本人を連れて戻ってきた。

呆気を取られポカンとしていた私に「この町の中で年寄りが寄る所いうたら、なんぼもありやあせんけえ。H商店に居らんかったら、Uちゃん方の農具庫の角。そこに居らんかったら落合橋んところか神社に行きやあたいてい居るけえ」とKちゃん。

H商店は、ちょうど町の中心部に位置し、隣には農協支所、斜め前がバス停で冬にはバスを待つ中学生や高校生がそこで暖を取り、夏には散歩途中のお年寄りが陰を求めて集まる所として、私が子どもの頃からカタチを変えていない場所の一つである。

時折目にする“通い帳（掛買いをするための帳面）”を持って菓子を買いに来た近所に住むおばあさんが、通り掛かりの子どもらに飴玉を配ったり、畑仕事の合間にやって来た地下足袋に作業服姿のおじいさんたちがパイプ椅子に腰掛けて魚肉ソーセージにカップ酒で談笑している光景は時間の流れを止めてくれる。

■過去がそのまま残る安心感

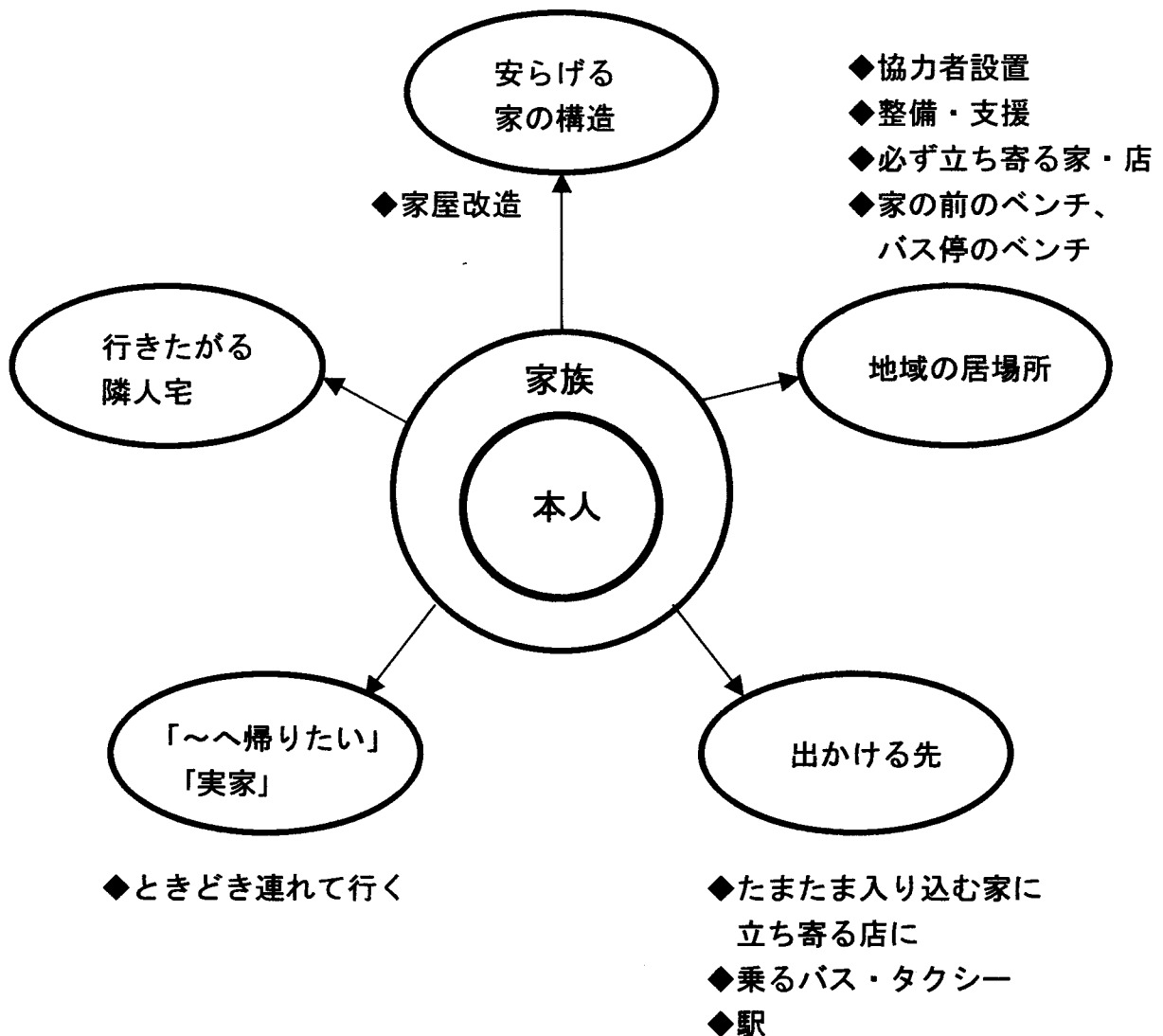
“極小の町”では、そこに暮らしている住民それぞれの“個性”が“愛称”として町の空気の中に溶け込んでいる。いい大人が「△△ちゃん」と昔のままの愛称で呼び合っても違和感がないのは、みんなが顔見知りで体裁を飾る必要がないからであろう。

そういった環境は、過去を生きている呆けの人にとっては居心地が良いのではないか。昔と変わらない商店や家屋、道、田畑も“自分の居場所（混乱しないで居られる場所）”として安心できる空間なのかもしれない。

「Uちゃん方の農具庫」も「落合橋」も「神社」も昔のままのカタチを残している場所なのである。“極小の町”では、Sさんの行動を徘徊とは言わない。“散歩”なのだ。“呆けの入ったお年寄りの散歩”なのである。

本人が安らげる舞台装置とグッズ

私達は本人の選択した行動の多くを「困った行動」とみて、それを排除しようとしてきた。本来は、それが傍から見てどうかというよりも、本人がそれを選択したという事実を大事にしていく必要がある。本人がどのような場へ行きたがり、誰と会いたがり、そこで何をしがっているかをすべて読み込んで、本人が最高に安らげる「舞台装置」を作り上げていかねばならない。



第5章

活人社会

どんなに要介護でも、人のために役立てる

どんなに要介護でも、人のために役立てる

<第5章>活人社会

■「人にやさしい社会」を、ではなくて

私たちは福祉によってどんな社会を作っていくかと聞かれると、「人にやさしい社会」を、と答えるのではないか。子供にやさしい社会、高齢者にやさしい社会、と言えば、だれでも納得する。しかし、当人が望んでいるのは、それよりも「人を活かす社会」を作ってくれ、ということなのだ。

今回痴呆性高齢者が生きている姿をその地域ぐるみで見えてきたが、彼らが望んでいるのもやはりこのことだった。彼らは普段、自分が何もできなくなっていることに絶望的なほどに落胆している。加えて、日々人に迷惑をかけていることが、この落胆を倍化させている。

「何もできなくなっちゃったよ。許してね」と家族の中で小さくなっている女性、「人の役に立たなくなった」「人に誉められることがなくなった」と嘆く男性—そんな言葉が印象深くよみがえる。だから、痴呆性高齢者への福祉の柱は、「彼らにボランティア・チャンスを！」であるべきなのだ。

■日々の何気ない行動から見つけ出し「やってるじゃん！」と

後に紹介するように、痴呆性高齢者の言動を丁寧に見ていくと、それなりの「ボランティア」をしていることがわかるはずである。それを日々の彼らの何気ない行動の中から見つけ出し、「やってるじゃん！」と言ってあげ、それ相当の評価をすることこそが、まさに彼らが最も求めていることであった。

ある痴呆性高齢者主体の特別養護老人ホームに行ってみたら、(いくらでも徘徊していいように) 四角くなった廊下を2人の入所者が歩いている。「ほほえましいですね、お2人で散歩ですか？」と寮母に聞いたら、「いや、散歩しているのは一人だけで、もう一人は『散歩付き合いボランティア』ですよ。ひとりではさびしいだろうからってね」。

東京・東村山市のK子さんの母親は、何十年も「仕事人間」を続けてきた。定

年退職して毎日家に引きこもる間に、痴呆の症状が出て来た。朝になると、「徘徊」を始める。思い余った娘は、ボランティアセンターから「古切手はがし」のしごとをもらってきて、母親に提示してみた。喜んだ母親は、朝になると「さあ、しごとしごと」といって机に向かう。夕方になると、これで今日の仕事は終り、と言って、本当にすがすがしい顔になるそうだ。拾い出そうとすれば、こんな話はいくらでも出てくる。

■「私をもっと使ってくれ！」

先日、民放テレビ（テレビ朝日だったか）で「激論」と銘打った番組があった。そこに、昔テレビでレポーターやキャスター、評論家として名を売った人たちが登場していた。いつの間にか70代の半ばになっていた。

要するに彼らが皆、言いたいのは、「我々をもっと使え！」ということで、この点では「激論」になっていない。自分はまだ以前の役をやらせられてもこなせるのに、このごろはめったにお呼びがかからない。けしからんと口々に叫んでいた。一見、冗談も交え、おもしろおかしく語ってはいたが、その目や表情を見れば、これが彼らの必死の訴えであることはすぐにわかった。

たしかに彼らの語り方は、以前とほとんど変わらない。キャスターやレポーターをやらせても、勤まるのではないかと思われる。しかし70歳を超えれば、彼らの残存能力がどうかという論議もなしに、問答無用で第一線からはずされてしまう。テレビなんぞは、その際たるものだろう。これは残酷な扱いだなと、そのとき率直に思ったものである。

■「やさしさ」より「こき使う」のを望んでいる

「人にやさしい社会」を実行すればこういう扱いになるものなのか。やはりおかしい。彼らは「やさしさ」なんか、まったくといっていいほど求めてはいない。「私を使ってほしい」と必死に訴えている。「人を活かす社会」をこそ彼らは求めていたのだ。

これはなにも、レポーターやキャスターにだけあてはまるのではない。寝たきりや痴呆状態になれば、それこそ前述の「やさしい社会」が待ち構えている。

要介護度によっては、ヘルパー派遣だって、デイサービスだって、施設入所だって、なんでも用意されてある。「さあこれからは徹底的にやさしくしてあげます

よ」である。

しかし彼らは心の奥底ではやっぱり「私だって人の役に立てるはずだ。私にもお役をくれ！」と叫んでいるのではないか。現に、寝たきりの人も痴呆の人も、彼らの口から出てくるのは「私もだれかのためにこういうことができた」という表現だ。相手はそんなことを求めてもいないのに。

■「あなたは要介護△」という宣告の残酷

あるケアマネジャーが言っていた。「あなたは要介護度5」ですよ、と宣告したとき、明らかに「ガクッ」ときているようだ。

あなたはもう人間として駄目になったんですよとでも「宣告」されたように思えるらしいのだ。「宣告」した人は、文字通り事務的に伝えたに過ぎないのだろうが。

杖にすがってようやく歩いている一人の男性（70半ば）が私に奇妙な言い方をした。「（要介護になると）人間がランク付けされてしまうね」と。

彼自身要介護2か3なのであるが、たまにはボランティアでもしようかと、福祉センターに出かけたら、ケアマネジャーに「（要介護の人が）こんなところをうろちょろしないの！」と叱られたというのだ。「要介護なのだから、家に引きこもっていなさい、間違ってもボランティアをしようなんて考えないことね」。あなたは「やさしさの対象」になったのだから、「人にやさしく」する役目は捨てるべしと言い含めたわけだ。

「いのちを大切に」という言い方があるが、これだって、その本質はこの「人を活かす社会」づくりのことかもしれないのだ。「要援護者にはサービスを提供、元気な人にはボランティアチャンスを提供」。こんな単純素朴な発想が、今の福祉社会を支配している。

社会全体を見直さねば…

では「人を活かす社会」というのはどのようにして作るものなのか。私たちが考えていた以上に、社会のさまざまな部分を見直さねばならないことがわかってきた。社会の根本的な改革が求められているのだ。

図を見ていただきたい。人を活かす社会はこんな要件が具備されねばならないのだ。

例えば、①競争社会から共生社会へ変わっていかねばならない。競争が正当化される社会では、高齢者などの弱者は、自分の役割を見つけるどころか、社会から排除されてしまう。夫々の持ち味が大事にされ、それで役立ちうる社会でないと困るのだ。

②今、スローワークという言葉がはやり始めたが、どんなに鈍くても、それぞれが自分のリズムで働け、また役立ちうる社会こそが、弱者が生きのびれる社会である。もう少し「減速」させなければならない。

③日本は減点社会といわれる。なにかいいことをするよりも、とにかく失敗をしない方が出世が早い。失敗が許されない社会では、弱者は結局は適応できない。それぞれの欠点よりも、その人の数少ない利点を大事にしてくれる社会が望ましいのだ。

④いかに高齢化しても、それなりの特技は持っている。高齢なりの有利な部分があるものだが、それを個性として評価してくれるのでなければ、立つ瀬がない。高齢や障害を個性としてみてくれる社会、である。

■「敗者復活」を認める社会でなければ

⑤一回失敗したら、それで永久に浮かび上がれない社会は、弱者には不利。何度失敗しても、またチャレンジする機会を与えられる社会になってほしい。またチャレンジするにも、それなりの資格が必要というのも困る。無資格者にもチャンスを与えられる社会でもあってほしい。

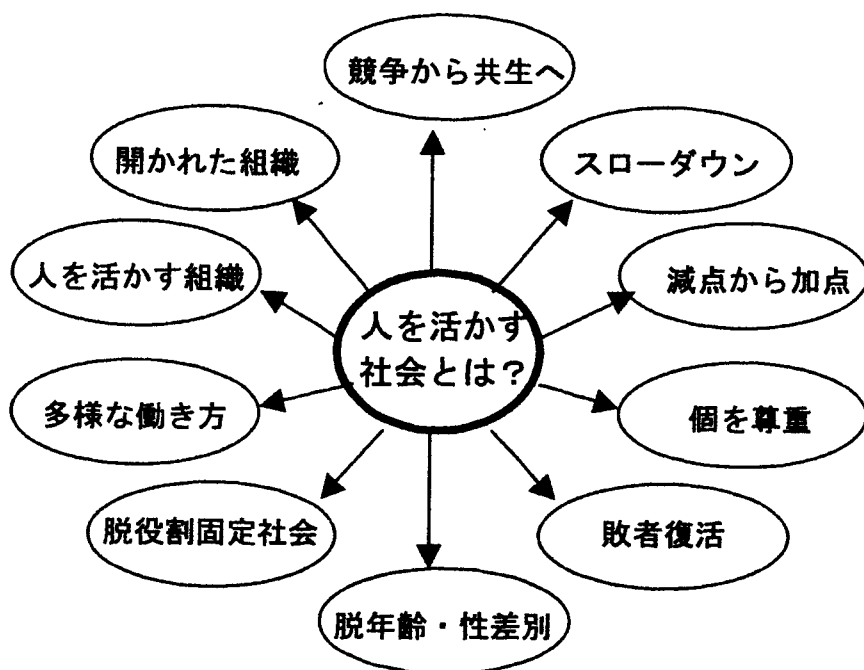
⑥年齢や性別で差別される社会は願い下げである。高齢者だけではない。今の社会は子どもをほとんど人間として認めていない。保護の対象にする代わりに、大人が享受している権利のほとんどを剥奪している。

⑦日本という社会は「役割固定社会」と言うこともできる。特定の役割をそれぞれに貼り付け、その立場に固定していることを期待している。福祉サービスの受給者は受給者の位置に甘んじるべきだとし、その人が「私だって人の役に立ちたい」などという困惑してしまう。非行少年というレッテルを貼ると、ほとんど永久にそのレッテルを貼り続ける。先ほどの要介護者と同じように「僕だって人の役に立ちない」などといっても、とんでもないと拒否する。そうやって問題を抱えた人たちが人のために役立つ機会を完全に剥奪してしまう。それが日本という社会なのだ。

⑧今私たちが「働く」といえば、いくつかの決まった労働形態をイメージする。高齢者や障害者はそのイメージに沿った働き方はできにくい。そうやって結局、働くという機会をいつまでたっても与えられない。

人にあいさつをするのが得意な障害者なら、そのことで給料がもらえるような社会—そんな社会になってほしいと思うのだ。

あとは社会の組織に期待されることであるが、⑨人を活かす組織。どんな高齢者でも、その人なりの役割をあてがってくれる組織。もう一つは⑩開かれた組織。寝たきりでも痴呆でも、仲間に迎え入れてくれる組織だ。



痴呆だって、隠れたボランティアをしている！

痴呆老人が御用聞きの調整ボランティア

保健福祉関係者は、ケアの対象者を対象者とししか見ない。つまり、その人は関係者等からサービスを受けるだけの人と見てしまう。これではたまらない。本人はいつも人の迷惑をかけていると心に重りを抱えているから、いつも何か人のためにできることはないかと活動チャンスを探している。だから、その気で見れば、なにかやっているということがわかるはずだ。それを認知されることが、いかにうれしいことか。以下は、広島県大野町社会福祉協議会の酒井保氏が見つけた事例を紹介してくれたものである。

■「わが子も信用ならん」

痴呆症（アルツハイマー）のKさんは一人暮らしのおばあちゃん。近くに、息子さんと娘さんという身寄りはあるが「金庫のお金や通帳を狙っている。自分の子どもとはいえ信用ならん」という被害妄想により、自ら身寄りとの関係を絶ってしまった。

事情を知ったお向かいに住むHさん。Kさんの息子、娘との間に入って仲を取り持とうとしたが難しく、現段階では修復不可能と判断したHさんは、Kさんの日常を見守り、その様子を息子たちに連絡するという役割を買って出た。そのHさんから「Kさんの相談にのってあげてほしい」との連絡が入り、早速、訪問。冒頭の概要は、訪問の前にKさんの娘さんと連絡を取り合って知り得た概要である。

■御用聞きサービスを利用していた！

「どのようなことにお困りですか？」との問いに「通帳を預かってほしい」と言うKさん。通帳を持っていては、心配で家を空けられないと言う。事前に確認した娘さんやHさんの話によると、通帳を気にするあまり、引きこもりがちになっており、ほとんど外出をしないらしかった。

「家にいるばかりでは、買物もままならないでしょう。家事のお手伝いを…」という私の言葉に「買物？そういうものは、届けてもらうとります。魚は、〇〇屋さんが持ってくるし、野菜は、△△屋が持ってくる。雑貨の類（たぐい）も同じよね。近所の料亭やら旅館に出入りしとる店屋が気に掛けてくれて、時々、用を聞きにきてくれるんよ」とKさん。

電話一本で事が済む今の時代に、漫画の「サザエさん」に出てくる“三河屋のサブちゃん”というような“御用聞き”は、近年には希少である。用を聞いて、品物を届けるという繰り返しには“見守り”というオプションも付いてくる。見事なマネジメントである。

■店屋に口利いてあげたら喜んだ

Kさんは、つい最近まで近所の料亭や旅館から忙しい時にはお声が掛かり、仲居の手伝いをしてい

たらしく、そこに出入りする業者と馴染みになったのをキッカケに、彼女自身の家に、生活に必要な食料品や日用品を配達してもらっているとのことであった。

「わざわざウチのためだけに来るんじゃないたら遠慮なけどね。店屋としては、料亭や旅館に品物を運ぶついでじゃから遠慮はいらんでしょ」というKさんは、こう続けた。

「ウチの裏手にIさんという私の友達がおるんじゃないけどね。一人で住んどる。この間、ちょろっと外へ出た時に出おって話したら“買物がどもこもならん”言うけえ、店屋に口を利いてあげたら喜んでね。そしたら、もう一人の友達のTさんも口を利いてくれえ言う…。Tさんも一人で住んどるけえ、不自由は同じなんよね」…なんとKさんは、“御用聞き”の派遣調整までやっていた。呆けても他人の世話焼くKさんは、元バスガール。その経験によって培った社交性は、痴呆となった今も健在で、娘さんによると「母は気位が高く、世話好き」とのことであった。

“呆けて”なお「他人の世話を焼く」。「芸は身を助ける」と言うが、身に刻んだ技量というものは、老いてもしっかりと存在しており、自身の為だけにではなく、「他者の助け」にもなる。

「そうそう、お向かいのHさんのところにも口を利いてあげたんよ」とKさんは得意顔で話す。

「どうね？ アンタも…。ウチが口を利いてあげようか？」

「いや、私は…」

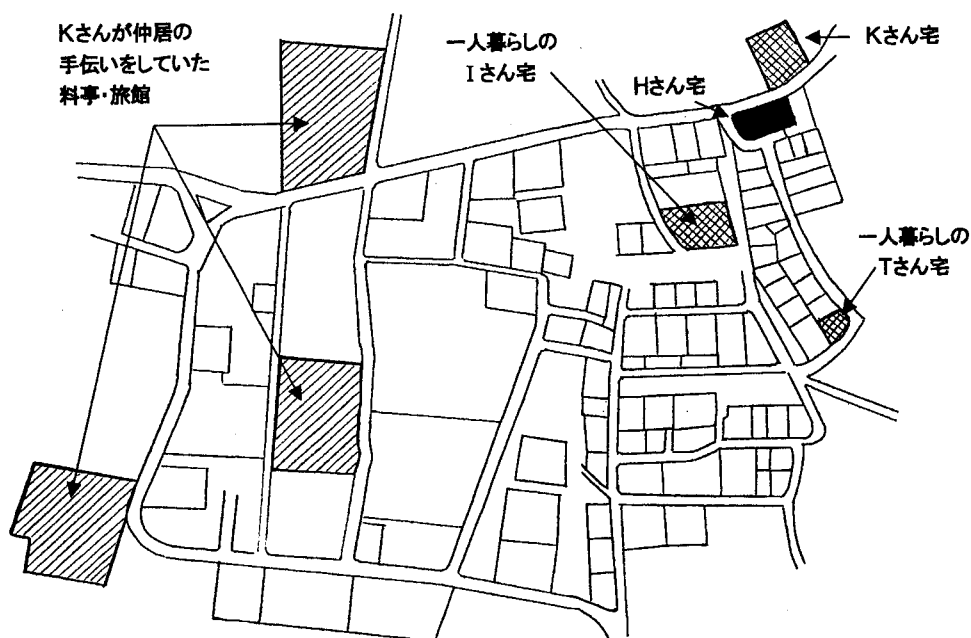
「遠慮はいらんよ。ちいとくらい遠くても、私が言うて届けさせるけえ。家は何処ね？」

「ここから10キロくらい山に登ったところですが…。松ヶ原という町なんですけど、ご存知ですか？」

「松ヶ原…知つとるわいね。ずいぶん“奥”じゃね」

「はい…」

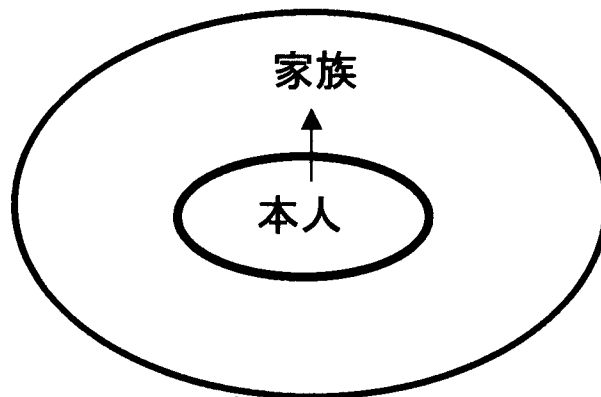
「わるいねえ…なんぼウチでも、そこまで言う口は持っとらん」



当事者本人の「努力」を認める体制づくり

ただ介護されているだけかと思ったら…

痴呆の人もその人なりに家族を愛し、介護者に尽くそうとしている。その努力を認めることから始めなければならない。28 ページで紹介した「私を愛した痴呆の母」の中で、介護者である高畑さんが、母への介護を振り返ってみたら、結局、「私を愛した母」ということになる、と打ち明けた。私が一方的に母を介護していたのだとばかり思い込んでいたが、今振り返ってみると、私の介護がうまくいったとすれば、それは母が私の行為を認め、受け入れ、支えてくれたからこそなのだと気づいたというのだ。「当事者主役の社会」の中で相互介護という発想が提示されているが、これもまた当事者の行為を認めたことになる。



- ◆痴呆の人も一生懸命生きている
- ◆介護者への細かな気配りも

- ◆本人の努力（気配り）を認める
- ◆痴呆なりの「ボランティア」を追認

第6章

介入社会

お互いの家を開き合い、「こじあけ」合うことから

お互いの家を開き合い、「こじあけ」合うことから

<第6章>介入社会

要介護者を抱えた家庭はどうしても、家を閉じがちになる。奇異の目で見られることへの抵抗感からであるが、そこから要介護者の不幸が始まる。

いかにして、家を開き合い、こじあけ合うのか、これが要介護者が救われる社会作りにつながっていく。

特に痴呆の場合、そのことを近隣に隠しておきたがる。そのため周囲からの支援の手が得られず、専ら家族の犠牲による自宅介護か、あるいは施設入所へつながるかの二者択一になってしまう。

今は情報社会で、高度な IT 機器によって膨大な情報が流通し、いとも簡単にそれを得られる状況になっている。しぜん、各々の秘しておきたい情報も否応なく公開され、あるいは不当に流通されることで、受ける損害も少なくない。そのため「プライバシーの尊重」が人権問題とつなげられて声高に言われるようになった。

こうした状況が逆に、閉じたがる人たちに有利に働くという問題が生じている。「プライバシーの侵害だ!」といわれれば、閉じこもる人たちに積極的に介入していくことがはばかれるようになった。

少なくとも福祉の世界ではこの「プライバシーの尊重」をむしろ破壊していく動きが今、求められているとあっていい。あくまでも要介護者を救うという観点からすれば、どちらかといえば「反・プライバシー尊重」を唱えざるを得ないのだ。

■隣人も不作為犯だ

振り返って、現今の社会一般を見てみよう。

最近頻繁に起きる児童虐待事件。中学生を父親と継母が殴る蹴る、食事もとらせず、衰弱死寸前で助け出された。例によって、学校側が自宅に入ろうとしたが「プライバシー侵害で訴えるぞ」の一言で、すごすごと引き下がった。児童相談所などは、中学生なのだから自分で冷蔵庫を開けて食べられるはずなどとうそぶいて、自宅を訪問することもしなかった。

近隣でも、毎日この中学生への折檻の悲鳴が「とても聞いてもらえない」と引

っ越した人も居るといふ。「どいつもこいつも…」と腹の立つことばかり。無関心を装った隣人もこうなると、親と同罪とは言わないが、不作為犯とでも命名したくなる。

ところでこの「プライバシー保護」。これを遵守することで、意外な人たちが得していることに、私たちはそろそろ気づかなければならない。

私達がこの言葉の縛りで、なかなか対象者宅へ入り込めない間に、「それではこちらが」とちゃっかり入り込んでいるのが、例の「おれおれ詐欺」であり「押し売り」である。プライバシー保護のおかげで、こういう手合いに対する耐性が恐ろしく弱ってしまっている。「おれおれ詐欺」の被害状況を聞くたびに、なんでこんな連中に騙されるのかとあきれてしまう。

要するにワルの側の家庭内への介入・侵入が目立つのは、そしてそれが意外なほど成功しているのは、善の側の介入・侵入が手控えられているせいでもあるのだ。善の介入とは、ボランティアの見守りとか、各種のサービスのための訪問活動である。それをびびっている間に、悪の介入・侵入が恐ろしくはびこってしまったというわけだ。

「プライバシー尊重」で得しているのは、他にもいる。今度わかっただろうが、家庭内で暴力を振るう親もそうだろう。訪問者があれば「プライバシー侵害で訴えるぞ」と脅かせば、たわいなく引き下がってしまう。暴力の振り放題だ。学校内での教師の体罰や生徒のいじめも、学校という「巨大なプライバシー保護膜」に守られた場だから起きていることだ。福祉施設も同様。

■「尻の重い人」も得している？

尻の重い人も得しているかもしれない。地域活動を促されても、なかなかその気にならない人がよく使う言い訳が「プライバシーの壁があってね」である。この言い訳がいかにももっともらしくみえるところに、「プライバシー恐怖症」がなかなか重症であることをうかがわせる。福祉関係者が「プライバシー尊重」というのは、閉じたい人に良い口実を与えるだけなのだ。

そろそろ「プライバシー破壊」へ向けて、攻勢に出る時期ではないのか。そうでなければ、最近起きているような悲惨な事件は防げない。法律がどうの、児童相談所と学校の連携がどうのといっても、所詮は役所のやることで、そんなものに期待していれば、またまた事件を起こさせてしまう。

では、具体的にどのように「プライバシー」を破壊していくのか。閉じたい家をどのようにこじあけていくのか。まず福祉の世界に限定して、その方策を、本委員会の席で出て来た案の中からいくつか提示してみることにする。

①天性の「こじあけ屋さん」を活用せよ

閉じこもる人の家に入り込むのは、普通の人は無理である。しかし、それができる人が、地域には居るものである。「こじあけ屋さん」という。世話焼きさんというのは大抵、この資質を多かれ少なかれ保持していると見ていい。これは学習して得られるものではなくて、天性の資質である。

本書で紹介されてある全国のさまざまな世話焼きさんたちの行為を丁寧に見ていくと、何らかの意味で「こじあけ」をしていることがわかるのではないか。

北海道釧路市の世話焼きさん、佐井さんは10数軒の家に「おしかけ」て要介護者の面倒を見ている。プロでもこれだけのことはできない。それを主婦業をやりながらこなしている。相手から見込まれることもあるが、彼女自身が結局の所「おしかけ」ているというケースの方が多いのではないか。しかし相手は彼女のやっていることを「こじあけ」とは感じていない、そこがミソなのだ。

こういう人材が、地域ごとに何人か居れば、要介護者にとってこんなに頼もしいことはない。人材が偏在していれば、意図的に「散らす」ことも考えなければならぬ。

ある地区で、一人の世話焼きさんが家族によって老人ホームへ入所させられてしまった。おかげで、その地区の助け合いが一挙になくなってしまった、という話を聞いた。またある公営住宅で、要援護者たちの頼みの綱だった世話焼きさんが、収入が規定の額を超えたので、退去させられることになった。困った住民は役場に、「あの人をこのまま居させてほしい」と陳情に及んだという。世話焼きさんの存在はこれほどに重みを持っている。この人に代わって民生委員やヘルパーを派遣しても、代役は勤まらない。としたら、こういう世話焼きさんを、そういう人が居ない地区に いわば「出向」してもらおうといった試みもあり得るのである。

②世話焼きさんが「ファミリーケースワーカー」を

前掲の佐井さんがやっていた活動の中に「ファミリーケースワーカー」がある。むろん本人は別に自分の活動をいちいち意味付けることはしないが、傍から見れ

ば「ファミリーケースワーカー」としか言いようがないこともたしかにやっている。

彼女がこう言っていた。「家族の中に他人が入ることはとても大事なことのよ」。例えば姑と嫁のいさかいというのがある。喧嘩したくてやっているわけではなかろう。それぞれの考え方が根本的に異なる場面が多いのだ。そのときに佐井さんがその間に割って入る。姑はいまどきの若者の考え方がわからない。嫁は昔の人の考え方が理解できない。佐井さんはそんな時、それぞれに相手側の考え方や立場を説明してあげるらしい。

同じ釧路市の佐藤さんも痴呆の父親を介護しているが、彼女は老人施設の職員が本業だ。だからこういう親を抱えても、一般家庭ほどには違和感がないし、父親に奇異な振る舞いがあっても、別段驚くこともない。処遇のことは本業そのまままでやれるという利点がある。その佐藤さんが言っていた。「身内だとどうしても親やその置かれた状況を客観的に見られない」という欠点があると。痴呆の症状が出て来たときも、それが徐々に変化していくさまも、他人だったらもっと早く気づくはずだった、とも。それが身内の限界なのかもしれない。だからこそ、他人の目を入れる必要があるわけだ。

③家族の壁を超える「擬似家族」の認知・普及

他の章でも取り上げるが、最近はいわゆる血のつながった「家族」にしがみつくなのでなく、「血」にこだわらない、擬似家族みたいなものが広がってきている。そういう相性の合う人、いつも一緒に居るのが楽しい、心休まる相手を、「ほとんど肉親」と心の中で認めている、そんな関係である。

痴呆の場合、すでに家族の顔も忘れてしまって、それこそ「血のつながり」そのものにたいした意味がなくなっている。そういう人が前掲のように、なんとなくいつも一緒にいて、それが心休まるという関係の相手を確保しているケースが散見される。これを認知すると共に、こういうあり方を社会一般に普及させていくのも、一つの策かもしれない。

血の濃さ如何で、家に入れたり入れなかつたりするということであれば、その「血」を超越した地域社会作りをしていけばいいのだ。

フィールドワークをしていて気づいたのだが、かなり遠い親戚であるが、一応親戚となると、家の中まで入れる、ということがわかった。いくら親しくても、血縁でないと、家の奥まではなかなか入れない。ところが親戚ならば、その奥ま

で入ることが、なんとなくだが許されるというのだ。

地方に行くと、近隣中同じ苗字ばかりという現象に出くわす。正真正銘の親戚ではないが、百年、二百年前は、一応血はつながっていたかもしれないという。そういう地域では、かなり簡単に他人の家に入り込んで居る。そういう社会づくりをめざせばいい。「馴染み合い社会」の章でも触れることになるが、こういう馴染み合える社会を作ることが結果として「介入」も容易になる社会作りにつながるわけだ。

④セルフヘルプグループでこじあけ合いを

愛知県安城市で痴呆の母を介護したY男さんは、家族の会の有難さをつくづくと言っていた。男性はともすれば、自分だけで頑張りがちである。周囲の人たちに助けをもらうという考え方に思いが及ばない。孤軍奮闘で、おかしくなっている矢先、家族の会の人たちとふれあい、そこで「自分だけで頑張るのではなく、周りの人たちに助けをもらっていいのだ」と教えてもらってから、本当に気が楽になったと言っていた。これが家族の会から得られた最大の利益だと明言していた。

⑤「親を看取り終わった人」の出番だ

親を看取り終わった人には、特別な役割がある。同じ介護の経験があるということで、「現役」からも歓迎される場合が多い。現に介護家庭の相談員みたいな役割を果たしている人もいる。家族の会で積極的に活動している人も多い。この人材を閉じた家庭への「こじあけ屋さん」として活用していくのもいい。

「せっかく今まで介護に使っていた家だから、どうせならまた一人引き取ってもいい」という人もいる。他の介護家庭へ住み込みで手伝いに出かけることもできそう。それだけの資源力があるのだ。

後でも触れるように、この人物を中心に地域内の介護家庭のネットワークを作っていくといい。このネットワークが、いわば「こじあけ合い」の仕掛けになる。

⑥地域ごとに介護者の連帯を。これを「こじあけネット」に

これだけ痴呆性高齢者が増えていくと、小さなコミュニティでも必ず何軒かの当事者家庭があるとみていい。現に、今回のフィールドワークで、50軒から100軒の中に、数軒は痴呆性高齢者を抱えた家があることがわかった。ところが彼ら

は相互にほとんど行き来をしていない。家族の会で初めて一緒になったというケースがほとんどである。そこでの懇談で、お互いにごく近くに住んでいることがわかったりする。

しかしこれはなんとももったいない話である。この数軒が、同じ地区同士ということで交流・連帯できればこんなに心強いことはないのではないか。

では現実になぜこれができにくいのかというと、効果的な方法を考えていないからではないのか。そのすべての家が同時にオープンになるというのは、望み難い。しかし一軒や二軒は、開かれた家庭があるはずである。世話焼きさんがたまたま親の介護をしているということだってあり得る。その世話焼き的な介護家族がキーマンになって、それに一軒か二軒の、ややひらかれた家族が呼応する。ここまでくれば、あとは楽になる。残りの「閉じた家」を同じ当事者同士として、個別にこじあけ始めるのだ。チャンスを見つけては押し掛ける。そういうことを繰り返していくうちに、結局はすべての家が開いてしまうということは、あながち不可能とは言えないはずである。大事なことは、これを天性の資質のないプロに委ねるのでなく、あくまで天性主義でいくことだ。

⑦家族主体に極小地域ごとにコミュニティ・マネジメント

何軒かの介護家庭が固まっている地域を「介護重点地区」と指定して、リーダー格の家族を基幹施設として、ネットワークをつくっていくのを関係機関が側面支援するとどうか。

そのネットを、ただの痴呆性高齢者のためのものに限定するのではなく、他の問題も包含した、小地域福祉推進のネットと格上げしていくという方法もある。これをコミュニティ・マネジメントと称して、極小地域ごとに、その域内の人たちが安心して生きていける場を作っていくのである。そうすれば、単に介護家族だけのネットでは足りない資源を調達することもできるはずだ。

超介護者と超助けられ上手が連携すれば

■C男さんが地区内の多くの家庭に介入することが許されていた

地域には保健福祉関係者が信じられないほどの「超介護者」が居る。その人がその地区の要介護者のほとんどに関わり、それだけでなく地区内の多くの家に「介入」することが住民によって許されている、というのだからすごい。

釧路市のある地区、およそ180世帯ぐらいの区域にも、この超介護者が居ることがわかった。その人物、C男さんは元炭鉱で働いていた人で、自分自身のために特殊なマッサージ方法をあみだした。おもしろいのは、それを自分のために使うだけでなく、まわりの人たちにも「おすそわけ」をしていた。地図をご覧いただきたい。地区内のこれだけの人たちにその腕を開放していたのである。もちろん他の地区の人たちにも同様にしている。

■この地区にはもう一人、超介護者がいた

C男さんはこの人たちの家へ出向いたり、自宅にきてもらったりしているが、いずれにしてもこれだけの人たちの家庭内の生活・福祉課題にも「介入」している。これらの人たちの家には、要介護者を抱えていたり、本人が要介護状態であったりする。それにしても、相当の数である。

じつは、以前にこの地区にはいわば「超介護者」が一人居た(地図にその家を示してある)。こちらも男性で、自身要介護の妻を抱えていたときに、周りの人たちが急に疎遠になったことを残念に思っていた。そこで自分はその逆をしようと、地区内の要介護者などの世話を徹底して実行していた。C男さんもじつはこの人の影響で超介護者になったようである。その後この人は亡くなってしまったから、今はC男さんだけが活躍中ということになる。

■世話焼き的介護者が地区内の痴呆の人を次々と宅老所へ

この地区にはもう一人、特異な資質を持った人が居た。痴呆の夫を抱えた女性が、いわゆる「助けられ上手」で、岩淵委員の主宰する宅老所に夫を連れて通っていた。それだけでなく、周り中の痴呆の人を同じ宅老所に連れてきてしまった。世話焼きさんの資質を備えた家族介護者であったのだ。その後本人も要介護になり、やがて夫婦とも亡くなってしまった。

■この3者が連携すれば、見事な介護ネットワークができていたはず

こういうことを考えられないか。この三者、つまり世話焼きさんの家族・しかも助けられ上手さんと、超介護者の2人が存命、という時期がたしかにあった。その幸運な時期にもし3者がまく連携すれば、なかなかいい地区になったのではないか。助ける側には二人の超介護者が居る。もう一方の助けられる側には、世話焼き的な資質を持った家族が居た。その人が要介護家庭を束ねることができた。事実、それに近いことを実行していた。

■2人が手を握ってコミュニティ・マネジメントをしていれば

おそらくこの世話焼きの資質の介護家族も自宅を開いていたに違いない。C男さんちもむろん開いている。両者のいずれかの家を(岩淵委員の主宰する)宅老所の、この地区のランチとして活用できたのではないか。介護家庭を両者でこじあけ、地区内の資源を2人で掘り起こして、これらの家に派遣することもできただろう。つまり、ここを拠点にこの小さな地区内での「コミュニティマネジメント」が実行できたはずなのだ。

そろそろ「地区」の範囲を考え直すべき時期に来た。今は、小地域といっても、せいぜいが小学校区である。これでも広すぎる。C男さんだって、把握できるのはこの程度の範囲である。そのせいぜい180世帯の中で、その中の自宅を開放した宅老所に通うのは、かなりの引きこもりの人でも、それほど抵抗がないのではないか。なにしろC男さんも、もう一人の介護家族も世話焼きさんで、周囲の人に見込まれている。

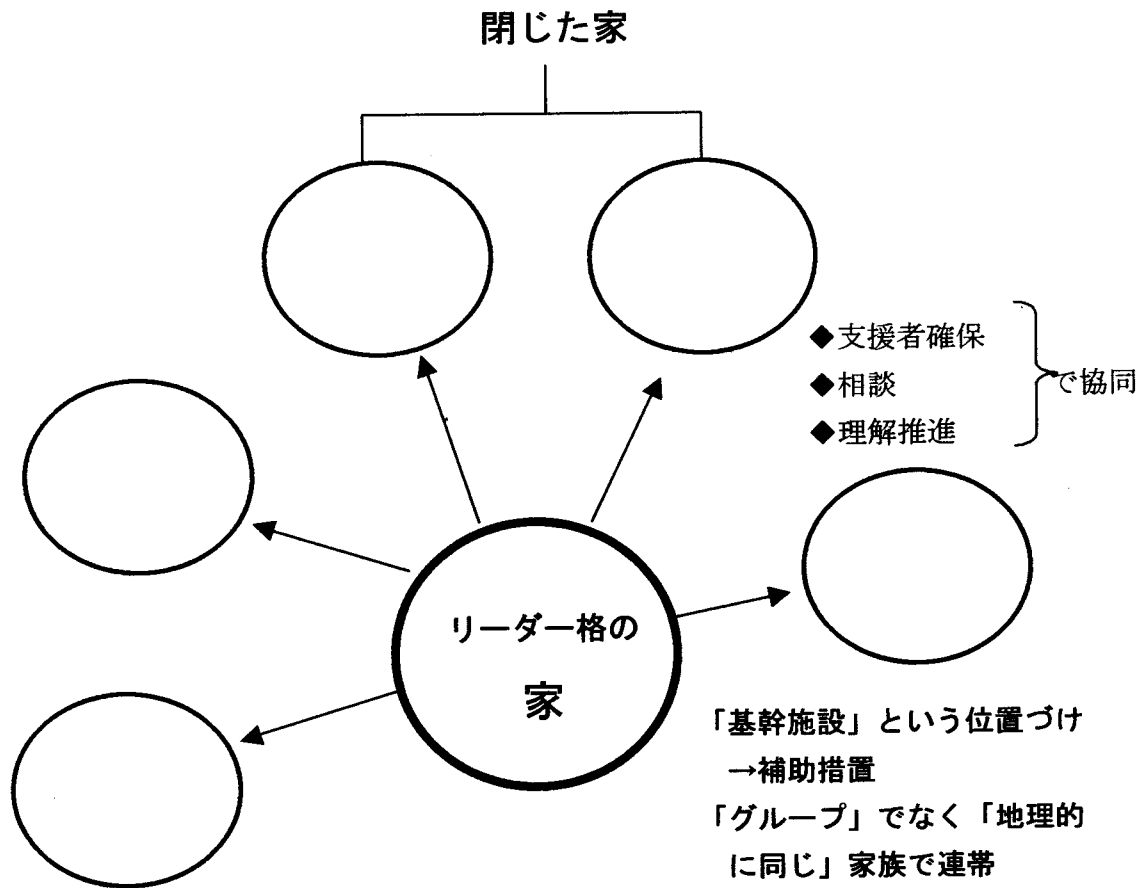
そして、両者のコミュニティ・マネジメントを関係者(岩淵委員のグループも含めて)が側面支援するというかたちにしたら、おもしろいことが起きていたかもしれない。



岩淵委員の聴取を受けるC男さん

「介護重点地区」の指定

同じ地区内の介護仲間でネットワーク

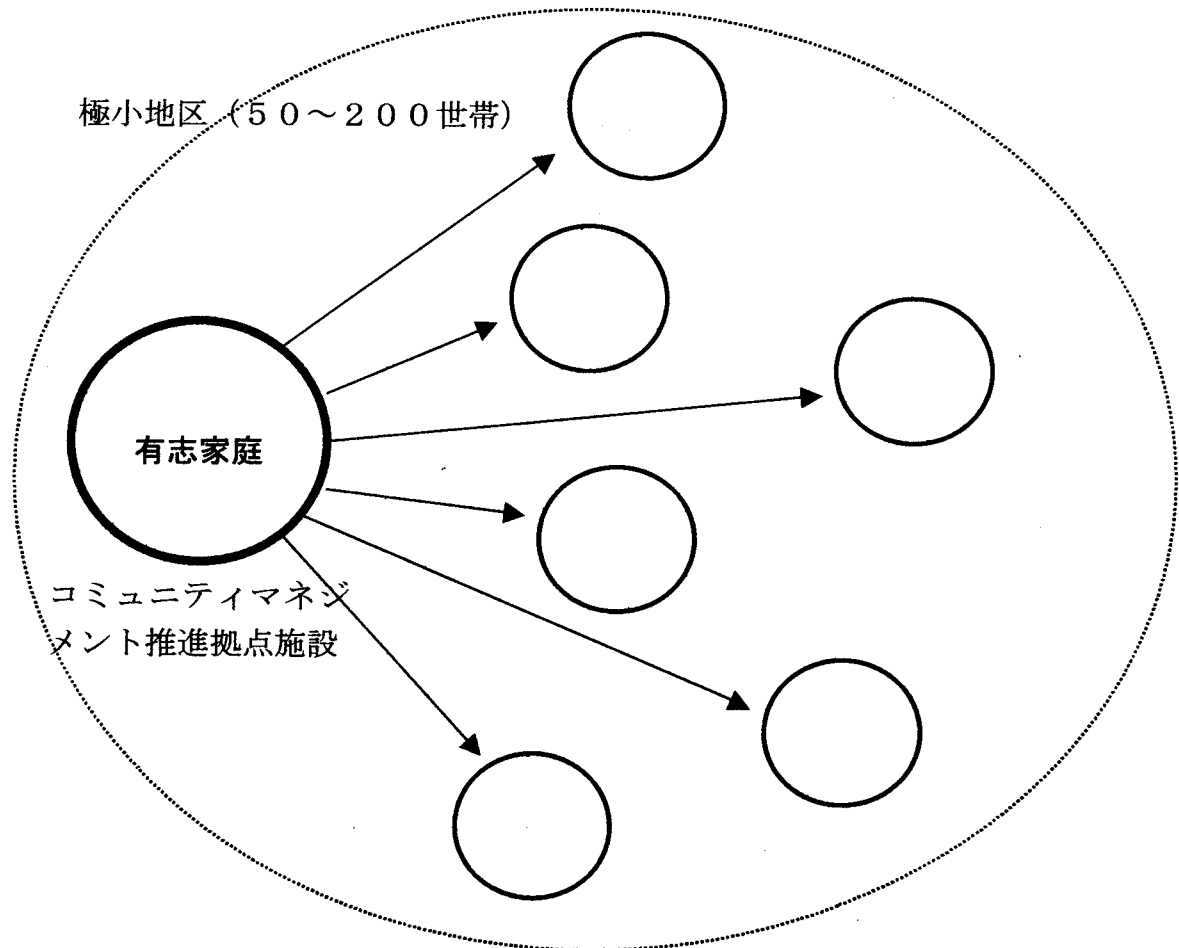


[この地区一帯を痴呆介護重点地区に指定]

痴呆高齢者を介護している家が、地域の中で、ある程度まとまっている所もある。その中で、マネジメント上手の家族が一人居ると、近隣に分散している家族たちのキーマン的な役割を果たすことができそうだ。閉じこもる家を開かせたり、その人たちに地域の人に上手に助けられるコツを教えたり、自分が確保した福祉資源を「おすそわけ」したりと、ネットワークすることで有利なことが生まれてくる。この一帯を「介護重点地区」として集中的に支援するという方法もある。

地区ごとにコミュニティマネジメント拠点施設

特に「助けられ下手」な家族への支援と資源の相互調達



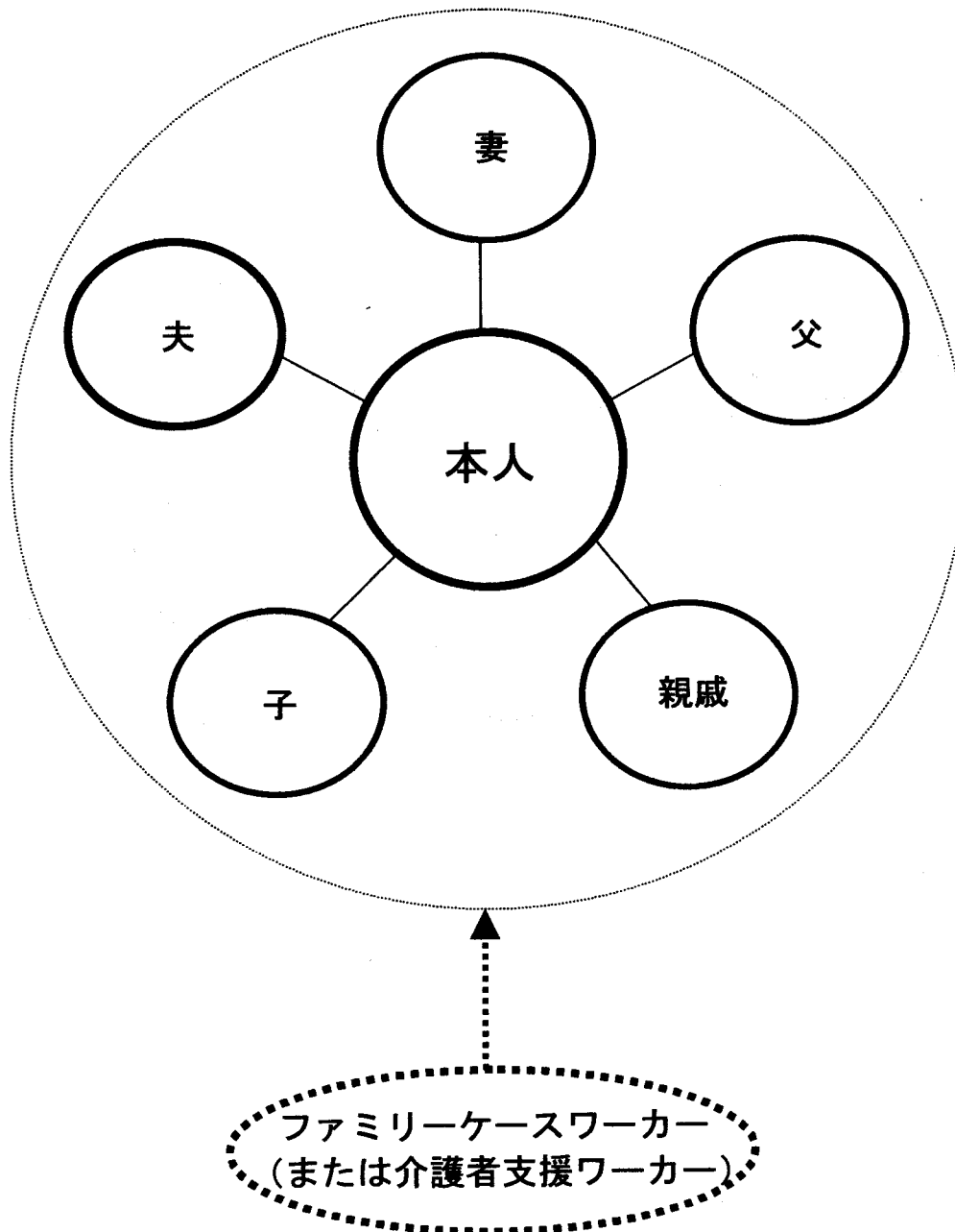
- ① 緊急避難的受け入れ（一泊、ショート等）
- ② 当事者に見込まれた世話焼き宅等
（→住民の中の仕切り屋を認知・補助）
- ③ 500～200世帯までの極小地区に一カ所
- ④ その地区内の当事者支援のネットワークづくり。支援者の発掘・活用

前項は、基幹施設とみなしてのネットワークを考えてみたが、そうではなく、極小地区ごとに、その地区内での住民の支え合いを総合的に支援、というかプロデュースをする存在を考えてみたらどうか。それをコミュニティ・マネジメントと称して、その資質のある人なり組織なりが請け負うのだ。この中に、介護家庭への支援ネット作りのしごとも含まれることになる。

ファミリー・ケースワーカー

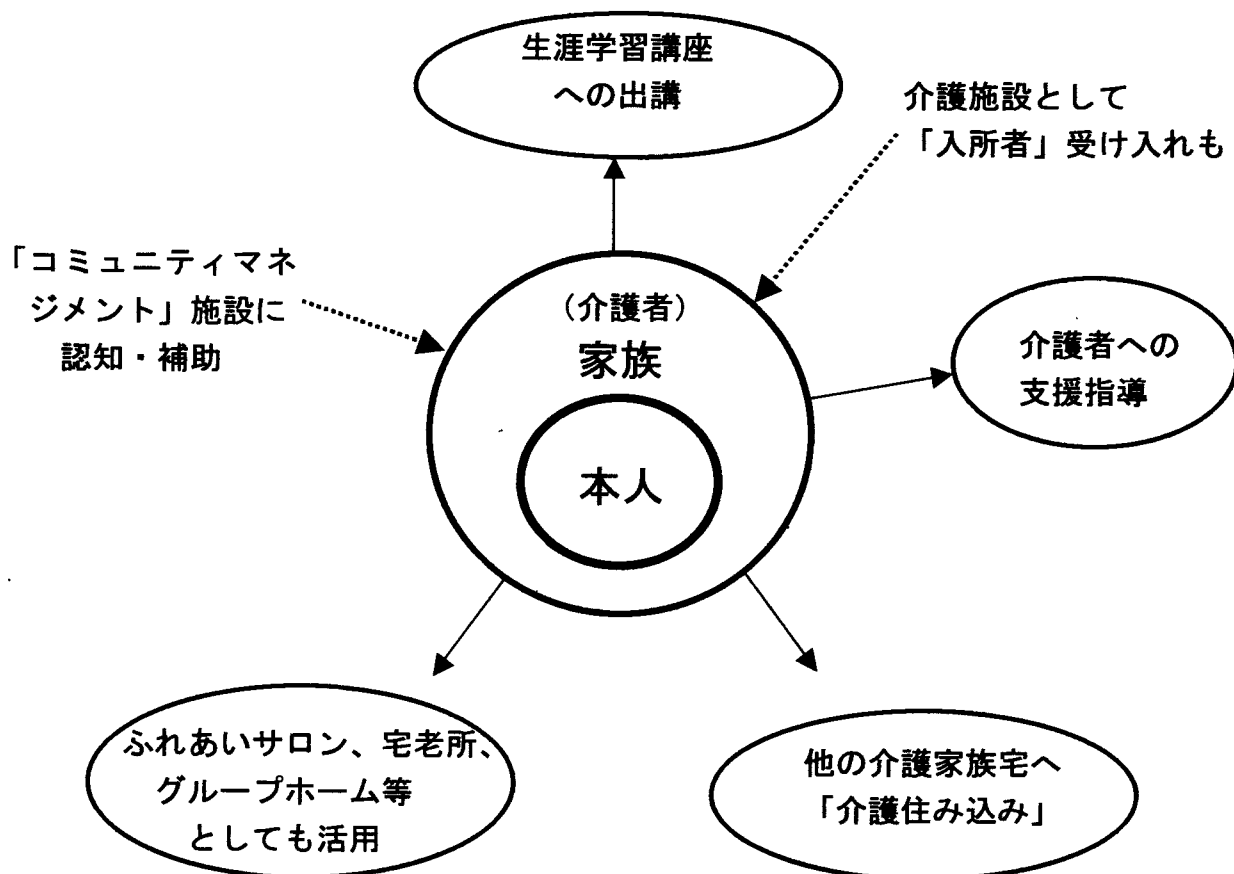
居心地良い家づくりへ家族メンバー間の調整役

本人を中心にどういふ介護とその支援体制をつくっていくのか。今は当事者家族の協議で決められているが、場合によっては第三者が入って、本人から見てのベストの体制作りを構想し、そのために家族を説得していく必要も出てくる。他人が入ることの利点は大きい。「制度的なこじあけ」と言える。



親を看取り終えた介護者の活用法

閉じこもる家族をこじあける先兵ともなって



親を看取り終わった後の家族であるが、本人の性格によって「介護のことはもう忘れたい」という人と「本格的にプロとして活躍したい」の2通りある。後者については、むしろ活用させていただかないと、本人のストレス解消にならないという問題と関わっている。すでに介護相談員として活躍している人も居る。本格的な活用法を考えるべきだ。この人たちが、閉じこもる家族を「こじあける」先兵となることも考えられる。

第7章

迷惑社会

社会へ出て、周囲に堂々と迷惑をかけられる社会

社会へ出て、周囲に堂々と迷惑をかけられる社会

<第7章>迷惑社会

高齢者がよく言うのが「この身体では、もう人さまのお役に立てることはありません。せめてこれからはどなたの迷惑にもならない生き方をしていきたいと思います」だろう。しかし、その人はいいが、痴呆の人は困るのだ。自分では意図しないのに、なにか行動をするたびに誰かに迷惑をかける。

だから、痴呆の人にとって安らげる社会とは、だれもがいくら迷惑をかけても許される社会だということになる。日本という社会は、周りに対して特別に「いいこと」はしなくても、「悪いこと」「迷惑をかけること」だけはいけない、というのが依然として厳しいルールになっている。減点社会ともいわれている。なにかいいことをするよりも、まずいいことをしないことの方が、職場等でも評価される。こういう社会そのものを変えていかねばならない。

埼玉県で痴呆の母を介護した高畑さんは、積極的に周囲に迷惑を掛け、人さまの助けを求めた方であるが、周りからだいぶ陰口を叩かれたようである。「あの人、自分の母親をボケといっているわよ」「あの人、ボケのお母さんを平気で連れて歩いてるわよ」。それでもめげずに彼女は母を連れて歩き、迷惑をかけつづけた。孤独な戦いであつたらう。いま痴呆の親を抱えた家族は、まさに日本文化と戦いながら生きているようなものかもしれない。その戦いをもっと楽にさせてあげる方法はないものか。

①子どもから大人まで世代別・系統的な「迷惑かけ教育」

今の福祉教育はいわゆる「ボランティア教育」に偏り過ぎている。というよりは、ボランティア教育しかやっていない。福祉を教えるとなれば、どこかの老人ホームに出かけて奉仕活動をさせる。それが福祉教育だと思っている。しかし福祉という営みでもっと大事なものは、自分が福祉課題を抱えたときにどうするのかというあたりではないのか。とすれば、弱者である子どもがまず教わるべきは、困ったときにどうやって、だれに助けをもらうのかという技術である。

これが親を介護するときに役に立つ。親の介護のために必要な支援を周囲からいただくのだ。そういう教育が小中高校の教育課程の中に組み込まれれば、もっと日本の文化変化が促進されるかもしれない。

そして、大きくなってからも、(他の章で紹介したように)「いずれ」→「そろそろ」→「いよいよ」→「直前」→「初心者」講座と系統的に迷惑かけ講座を開けばいい。それぐらいしなければ、なかなかこの伝統は打ち壊せない。

②「助けられ」も立派な福祉の営みという見方

迷惑をかけるという言い方をすると、「やっぱり私にはできない」となってしまふ。しかしこれは一つの福祉活動なのだ。福祉の営みというのは、二つのルートがある。一つは周囲の福祉課題を抱えた人に関わるという行為。そしてもう一つは、自身抱えた福祉課題に自ら主体的に取り組むという行為。この後者の行為の中に、自立訓練もあるし、セルフヘルプグループを作って助け合うという行為もあるし、周りの人に助けを求めるといった行為もあるのだ。

助けを求めると言うとき、いかにもネガティブな感じがするが、そうではなく、自身の抱えた福祉課題に自分が主体的に取り組む一問題を分析し、解決方策を考え、その解決に必要な資源を掘り起こし、教育し、上手に活用していくという一連の高度なセンスが求められる行動なのである。セルフケアマネジメントとアメリカでは言っているが、これに手当ても支給されるべきだし、当然評価の対象にもなる。この考え方が普及するには、まず関係者が率先してこういう発想に切り替えなければ駄目だろう。

③「みんなで迷惑かければこわくない」

痴呆の人を抱えた介護者はだれでも「世間の迷惑になっている！」ということが心の重荷になっている。そしてそのことが家族を萎縮させている。どんどん閉じこもっていき、そのうえ人の迷惑にならないようにと細心の注意を払っている。

こういう状態をどうやって乗り越えるのか。家族の会が各地にできているが、彼らは会合のときに出てきて交流するだけで、日常的な交流はやっていない。偶然、それぞれの住まいを言い合っていたら、意外に近い距離にお互いが住んでいたことがわかったりする。わかったから、以後、同じ近隣同士としてお付き合いするかと言えば、そうでもない。

しかしこれはなんとももったいない話である。同じ地域のもの同士として、つまり同じ地区の人たちに迷惑をかけている同志として、これからは一緒に迷惑をかけましょうよと居直ればいいのだ。「みんなで迷惑かければこわくない」である。

まず、人に迷惑をかけるのをあまり気にしない仲間が一人居れば、その人に習って、少しずつ迷惑をかける幅を広げていけばいい。「先駆者」が迷惑をかけた対象は、それに慣れていくだろうから、後に続く人は、楽と言え言える。そうやって、迷惑かけの対象を共同で広げていけばいい。これに地元の世話焼きさんが側面援護をしてくれれば助かる。

④「自立」の段階から予備的ヘルパーを入れる

本当に重度になったら、助けを求めざるを得ない、という考え方ならついていけるだろうが、本当に必要なのは、まだそれほどでない状態のときでも、それなりの助けを求める、つまり人に迷惑をかけることが許されるはずだ、と理解することなのだ。元気だから、だれにも助けを求める必要はない、とってしまったらおしまい、それぞれの状況に対応した困りごとがあるはずで、それに助け手を探すことはなんら責められる筋合いはないのである。

だから、まだ要介護にならない、「自立」の段階から「助けを求めてもいいのだ」と実感させる教育が必要だ。いわば、助け手の本格導入の予行演習としての意味がある。

⑤「嫌われ者」も受け入れる社会

保健福祉関係者はどういうわけか、福祉サービスの対象になる人は、それなりに品行方正でなければならぬと思っているようだ。サービスを受けるんだから、おとなしくしなさいとか、関係者の指示に背いてもいけない。要するに「いい子」であることを要求する。だから、このような要件に合致していない対象者は嫌われる。「素直でない」「生意気」「性格が悪い」と、特別扱いされる。それが人情と言えそれまでだが、こういう「嫌われ者」を特別扱いし、排除する福祉の世界が、住民にも影響していないとは限らないのだ。

「迷惑をかける」と言うのも、「品行方正でない」「特殊な性格をしている」と言うことも含めてその人の福祉課題であるとみるべきではないのか。その問題があ

ることを嫌っていたのではプロの役割は果せない。そこが理解されていないのだ。

そうした「嫌われ者」も受け入れられ、最大限の理解をされる社会をつくらねば、痴呆の人は救われない、という関係になっている。

⑥保健師やヘルパー、民生委員が迷惑かけの見本を

地域通貨が広まっているが、なかなか実践できないことがある。高齢者等はせっせとその通貨で支払いをするが、その通貨を老人からいただいている活動家の方が、なかなかその通貨で消費しない。「だって、おばあちゃんにやってもらうことなんかないもの」と言い訳を言う。これでは流通したとはとても言えない。福祉の営みの片方しか実践できていないことに彼らは気づいていないのだ。

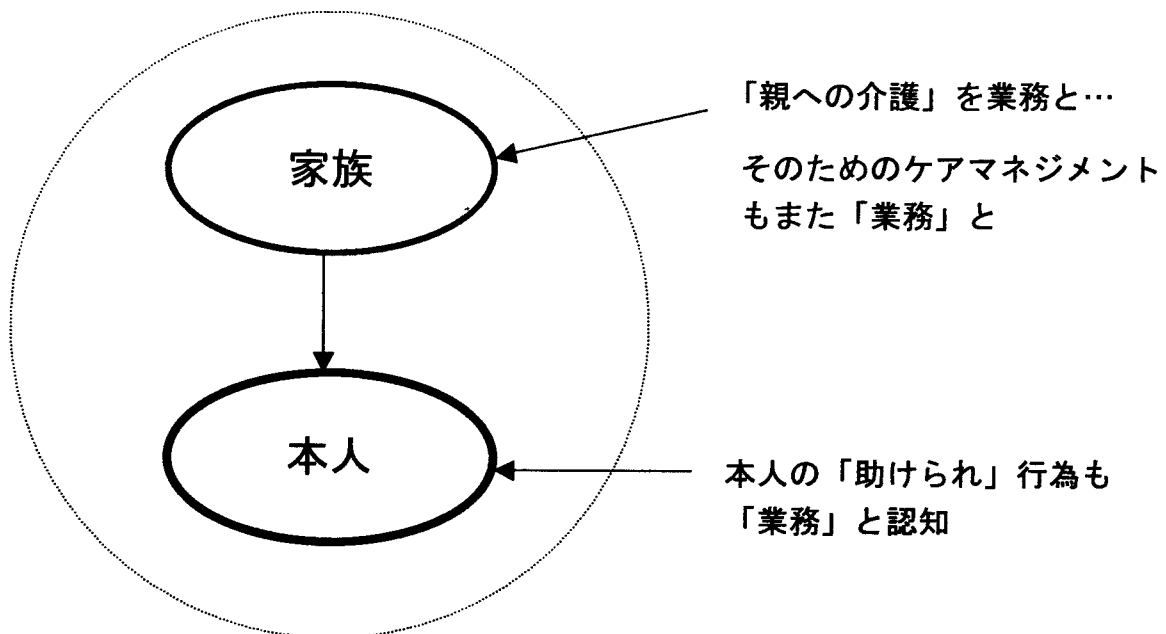
同じようにして、要介護者に普段、関わっているヘルパーや民生委員、保健師、ケアマネジャーなども、なかなか「人に迷惑をかける」ことを実行しない。ところが住民の世界での活動家である世話焼きさんは、これができる。両刀遣いであることが、住民に受け入れられる大事な要件である。そこが世話焼きさんと市民活動家、あるいはヘルパーなどのプロとの違いだ。

むしろ、保健師やヘルパーなどが率先して、周りの人に迷惑をかけてみたらどうなのか。どんなに健康でも、助けてもらいたいことはないはずはない。「あの人までが、助けを求めている、迷惑をかけている！」と住民に見せて上げることの教育効果は計り知れない。

「助け」も「助けられ」も活動（業務）と認知

助けられ行為に手当ての支給も

同じ問題だが、私たちは「助け」の活動ばかりを「活動」と認め、「助けられる」営みをまったく評価しない。家族の（地域の人たちに助けをもらうという）営みも評価されないし、本人が家族たちに介護されているという行為も同様。これを認知し、評価することで、上手な介護のされ方を本人も考えるようになるのではないか。



第8章

ヘルパー社会

住民の誰もが介護技術を持ち、その体験も積んだ社会

住民の誰もが介護技術を持ち、その体験も積んだ社会

<第8章>ヘルパー社会

今までは、福祉サービスや活動は、住民の有志が担ってくれればそこそこ、なんとかなるのではと思われていた。だからヘルパー研修をしたり、ボランティア講座を開いて、住民の一部が積極的に関わってくれれば、福祉は成るのだと。

しかし痴呆性高齢者の地域での生活を見たとき、そんな「一部有志」住民がその気があった程度では、安心して生きていくことは不可能に近い。例えば毎日、町を歩き回る人にとっては、理想を言えば、住民のすべてが彼らに理解を示し、その場で必要とされる支援をしてくれれば助かる。介護者達の孤軍奮闘振りを見ていると、町の中に点在する善意の理解者にかろうじてすがっている。と共に、大部分の無理解者に苦しめられている。

そこで住民をすべてヘルパー、つまり福祉への理解を持ち、必要な支援の手をその場で差し伸べられるような資質を備えさせるための戦略が今、求められているのだ。

といっても、方法は単純ではない。住民を残らず福祉への理解者・活動者に仕立てるにはよほどの効率的な仕掛けが開発されなければならないのだ。

ここではそのいくつかの方法を提示しておくことにする。これらの方法のすべてを効果的に使いこなさねば、所期の目的を達成することはできない。

①「超介護者」が小地域ごとに存在

地域には、福祉関係者は気づいていないが、超介護者とも言えるような、とてつもないスケールの大きな世話焼きさんが居て、その人がその地域の介護を仕切っている。どの地域にも居るというわけではないが、たまたまそういう人物が存在する地域では、その人の周辺の要介護者は、まさに幸運に恵まれた人ということができる。

ここでは北海道釧路市で見つけた、そんな超世話焼きさんの活動を紹介しておいた。「自分の地区ではそんな人は居ない」と思っているかもしれないが、大

抵の場合、そういうひとが居ても、関係者はその人の存在に気づいていない場合が多い、ということを入念に入れておいていただきたい。関係者は住民の活動には、それほど無関心なのである。

②「天性の介護者」がその力を十分発揮できる環境づくりを

住民の中の世話焼きさんと言われる人のやり方をよく点検してみると、こういう技術は天性のもの、つまり学習して習得するものではないということがつくづくわかってくる。世話焼きさんの活動方法には見事な知恵が発揮されているが、そういう技術はだれから教わったのかと聞いても「わからない」。今まで生きている間に自然に身についた、としか言わない。おそらくそういうことなのだろう。その人の永い人生の間に偶然、良好な教育環境に恵まれたということだ。

とすれば、この天性の資質の持ち主をいかに大事に活用していくかが、問われる所である。しかし不幸なことに、そうした資質の特別な持ち主ほど、周囲から「迫害」(というほどではないが)を受けている。天性の資質だから、そうと意図しなくても、身体が先に動き出してしまう。すると、まわりの活動家や関係者から、嫌味を言われたり、いろいろな形での妨害をされたりする。

ある超介護者は、ケアマネジャーのような活動までしてしまうのだが、本物の(?)ケアマネジャーから、「そんなことをもぐりでやっていたら、訴えてやる！」と言われた。あまりにやり手なので民生委員に推挙されたが、そこでも他の民生委員から「あんたのようなことまでやらなくちゃならないのなら、私は民生委員を辞めたい」なんて言われたりしたと嘆いていた。活動をやりすぎで、嫌味を言われるようでは、とても活動者にとって良い環境とは言えない。

③天性の介護者の「出向」や「異動」を可能に

もう一つ、この天性の介護者について言わなければならないことがある。すでにこのことは他の箇所でも述べたかもしれないが、この人材がその地域に存在するかどうかが、要介護者の運命に決定的に響いてくる、ということは間違いない。しかし、超介護者となると、そううまく具合に各地に散在しているというわけにはいかない。すると方法は一つ、彼女等を地域に適切配置することも考えなければならない。偏在しているならば、そうした介護者に出向なり異動

をしてもらわねばならない。住居の経費を支給して、一定期間特定地区に出向居住してもらうのである。

そんなことは不可能と思うかもしれないが、現実には、世話焼きさんが異動するたびに、移動先で必ず活動を始めているのだ。あとは「出向」「異動」の依頼なり指示が出せるかということになる。

④福祉のプロもまた住民としての役割分担を

後で事例でも紹介してあるが、当たり前のことながら地域には保健福祉関係者も「住民」の一人として生活している。そのプロが住民としての役割を担っていけば、相当の資源になるはずである。一度調べてみたらいいが、地域には相当パーセントの関係者が住んでいるのだ。それに例えば、ヘルパーの現役やOB、ヘルパー資格を取得した人、看護師や保健師の現役・OBなどと並べていったら、かなりの数になる。

その人たち自身が資源になると共に、周囲の住民資源を掘り起こし、活用し、またとりまとめていく役割を担えば、住民総ヘルパーへ向けて、大きな一歩を踏み出したことになる。

釧路市で痴呆の父親を介護中の佐藤さんは現役の福祉施設職員であるが、やはりプロが関わると心強い。痴呆のどんな症状が出てもたじろがないし、住民資源を活用するセンスもある。関係機関とのネットづくりもお手のものだ。ということは、住民は「兵役」ではないが、一度は福祉の現場で働いた方がいいのかもしれない。

ある重症心身障害児施設で働いている若い女性と懇談していたら、「ここで働いたおかげで、私にどんな子供が生まれても育てていける自信ができた」と言っていた。この自信は大きい。肉親が痴呆になった時に、たじろがない娘が居るとするのは、やはり心強いではないか。ならばそういう住民総現場体験というのを制度化するぐらいの意欲が今の施政者には欲しい。それを後押しする関係者の意欲が求められるのはもちろんである。

⑤極小地域福祉の推進で住民資源の掘り起こし

地域に点在する「理解」者をどう結び、結集するのか。そこが重要なポイントになる。地域にはそこそこ世話焼きさんや活動家が住んでいる。しかし彼ら

は相互に孤立し、個別に活動している。だから点から線・面になかなかならない。

そこでその点在する資源を効率的に結ぶか、つなげる必要がでてくる。それを可能にする舞台は極小地域だ。今の地域福祉は、市町村単位で作られている。せいぜいが小学校区単位。しかしそれでは、そこに住んでいるたくさんの要介護者の一人ひとりについて、きめ細かく見守るのはむずかしい。と同時に、その地域内の小さな住民資源を掘り起こすのもむずかしい。そこまで手が行き届かない。どうしてももっと極小地域に限定して、それぞれの極小地域ごとに、その中で住民同士の支え合いが行われるように丁寧に仕掛けていかねばならない。これからは極小地域福祉の時代なのだ。

そこで、従来からできている例えば有償サービスや、ふれあいサロン作りも極小地域を単位としたシステムに変えていく必要がある。長野県の駒ヶ根市ではじまったそういう極小地域福祉の事例を後で紹介してある。要はサービスシステムのブランチを作っていくのである。それぞれのブランチが極小地域内の理解者や隠れた活動者をしらみつぶしに掘り起こし活用していくのだ。こうして初めて住民総ヘルパーへ向けての一步が始まるのだ。

ふれあいサロン作りが流行しているが、そこでもただサロンを開くだけでなく、そのサロンの仲間が各自足元の要援護者に関われば、事実上、サロンはそうした足元福祉活動の推進拠点になる。サロンに集まる人たちは大抵、足元でも要援護者への支援をしていると見ていい。そうした個人的な活動をサロンで報告し合い、そして相互に支援し合うーそれがそのまま小地域福祉の推進になるではないか。この程度のシステム作りが、住民総ヘルパー作戦には必要である。

⑥ 高校段階で全員 2 級ヘルパー取得

住民総ヘルパーというぐらいだから、高校生活を終えるまでに全員、ヘルパー 2 級を取得するぐらいでないと困る。やる気になれば、どうということはない。広島県のある島で、島民全員がヘルパー 3 級を取得していると言うニュースがあった。有線放送で講義放送を流すのだという。3 級では仕方がない。やはり 2 級程度は欲しい。高校を卒業して、まもなく親や祖父母の介護の役割が巡ってくる生徒だっているはずだ。これからはだれでも一生の間に介護のしご

とが巡って来ると見るべきである。そのとき、おたおたしないように、しっかりと教育し、実習を重ねさせておくことだ。それぐらいでないと、超高齢社会は乗り越えられない。

地域の要介護者に救いの「超大物世話焼きさん」

天性の介護者を認知・支援を

■一人で10の役を担う超大物が地域には居る

全国どこでも、近隣で周りの人たちの世話を焼いている人がいる。学んでそういうことができるのでなく、ほとんど生まれ持ったの資質を生かした人だ。福祉関係者は、自分の周囲にそういう人物が居ることを薄々は意識していても、その行動を「福祉活動」とは認めようとしない。ヘルパーや福祉員に取り立てようとしめない。しかし、フィールドワークをしてみたらすぐわかることだが、地域の福祉はこの人で持っているのだ。

たかが世話焼きじゃないかと、関係者は言うかもしれないが、彼女等のやっていることを徹底的に掘り起こしてみたら、ビックリするほど多彩な活動をしていることがわかる。一般のヘルパーや保健師では、足元にも及ばない大物世話焼きも居るのだ。彼女がその近辺のいわば総合福祉センター的な役割をすら果たしている。

そんな一人をまた、北海道釧路市で見つけた。佐井淳子さんという。とにかく彼女のやっていることを、福祉用語でいえば、別図のようになる。これを彼女一人で担っているのである。

■おむつ替えで佐井さんにお呼びが

地図をご覧ください。普通、活動家は自分の足元・近隣の人たちに関わることはしない。自宅からずっと離れた地域に出向いて、お互いに匿名的に関わるのが普通だ。しかし彼女の場合は、まさにその足元の人たちにこそ専門に関わっている。



委員の聴取に応じる佐井淳子さん

彼女の世話を受けている人たちの状況を聞いていくと、よくもまあこんなにたくさんの要介護者が一つの近隣に集まっているものだとあきれるほどだ。

H家の夫は痴呆、妻がパーキンソン病。I家には脳梗塞の人が居る。佐井さんは毎日、何度もこの人の様子を見ている。M家では一人住まいの女性がほぼ寝たきり状態。佐井さんが毎晩、決まった時間にポータブルトイレで用を足させる。佐井さんの娘さんが食事を届ける。床擦れが激しいとみて、知り合いの皮膚科の医師にも訪問してもらうようにした。

そういう場合に彼女の広い人脈が役に立っているようだ。

本人の「一人で暮らしたい」という必死の願いに応じてきた佐井さんであるが、痰の吸引や、おしっこを管で採る段階になって「なにかあったら困るから」と家族が特別養護老人ホーム入所の手続きをしてしまった。K家にも寝たきりの高齢者が居て(痴呆も?)、ウンチをしても家族には触らせない。そこで佐井さんにお呼びがかかる。

「私って、だましの名人なのよ。『ハイ、後ろを向いてね!』なんて言って、本人が気づかないうちに、サッサッとお尻を拭いてオムツをしちゃう」。介護とは相手のプライドをつぶさないでサービスする技術なのだと言った。

■娘さんもオムツ洗いの手伝い

その他、A家にも痴呆の女性が居る。徘徊が始まると、佐井さんが先頭になって、周りの人や向かいの交番まで動員して探し回る。その女性も佐井さんにおむつ替えを頼んで来る。I家にもおむつ交換に出向くが、ときどき佐井さんは、娘さんにもおむつを洗わせる。

現代っ子がよく、ウンコにまみれたオムツ洗いを承知しましたねと水を向けてみたら、私も父親からしょっちゅう『世のため人のために尽くすよう』諭されて来たという。「やっぱり、子供には言わなくてはダメね、うるさい親だなど思われても」。

「誰かがおまえに頼みに来たのなら、おまえは見込まれたんだから、やらなくちゃならない」

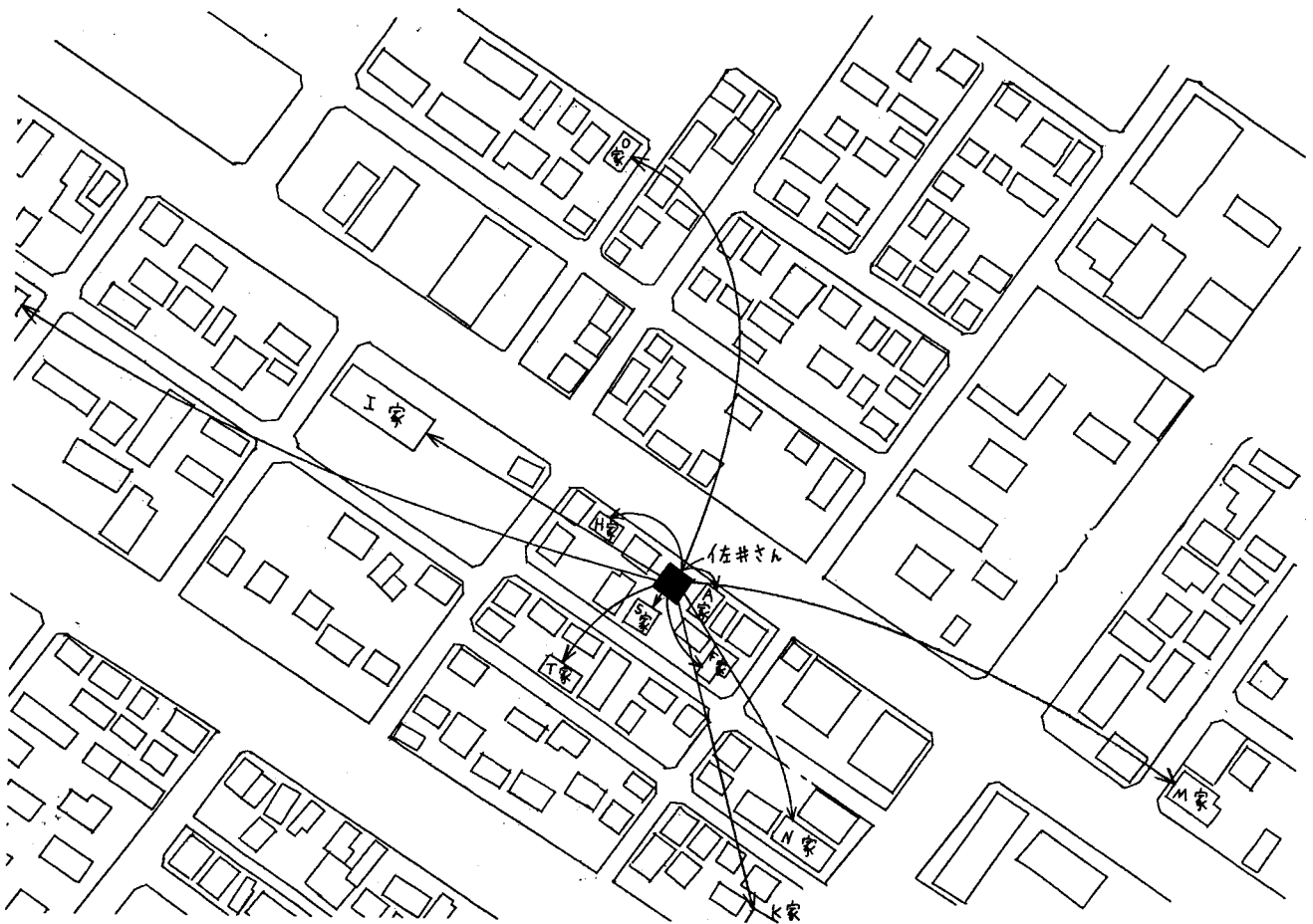
「人が困ったときは、大抵は急いでいるんだから、何かをしてからと、あとまわしにしてはいけない」などと、そういう機会が来るたびに言われたらしい。網元の娘に生まれた「お嬢さん」育ちの彼女が、意外や、介護の名人になってしまった。

■手づくりの食事を毎日届け

S家で一人住まいの息子さんには、毎日(!)彼女の手づくりの夕食を届けている。ついでにと、他の人にもおすそ分けもする。佐井さんは、市内の(痴呆性高齢者を抱えた)家族の会・たんぼぼの会にも(ボランティアとして)参加しているが、リーダーの岩渕雅子さんに言わせると「料理の名人」なのだそう。

O家には痴呆の男性とリューマチの妻が居るが、佐井さんはここに散髪にも通う。彼女は以前、理髪店を営んでいた。まことに多彩な技術の持ち主ではある。

J家には精神障害の息子のことで親の悩みを聞きに行く。「二次障害にも関わらなくちゃダメ」と



というのが持論で、そういう家庭にはカウンセラーの役も果たしている。

彼女の活動はまだまだこんなものではない。彼女の自宅はいつも近隣の人たちのたまり場になっていて、加えて要介護の高齢者数名が「ここが休まる」とやってくるので、いわば宅老所役も担う羽目になった。

ファミリーワーカーみたいなこともやっている。嫁と姑の間に割って入るのだ。姑は「うちの嫁は、親の世話をすることも嫌う。けしからん」と思っている。そんな姑に「おばあちゃんが嫁だったときを思い出してごらん、いろいろやることがあったでしょ。嫁だって忙しいのよ」などとたしなめる。嫁にはまた別の言い方をする。「家庭には他人が入ることが大事ね」と佐井さん。嫁と姑の2人だけのやりとりでは、行き詰まってしまうことを知っているのだ。それに、要介護状態が深刻になる前からヘルパーを入れた方がいいとも言う。他人を入れることに慣れさせる作戦なのだと。

■やりすぎてプロと軋轢が生じている

これまでの彼女の取り組みを見るとわかるだろうが、ほとんどケアマネジャーみたいな役もやっている。実際にそれに近い関わりをしている対象もある。そうすると、本物のケアマネジャーから「訴えちゃうから」などと脅かされているらしい。

こんな活動家だから、見込まれて民生委員になったのだが、その枠をはみ出してしまうので、今度は他の民生委員からも疎まれるようになった。「あんたぐらいに活動しなくちゃならないなら、私ほど

てもつとまらない、民生委員をやめたい」なんて、嫌味を言ってくるらしい。だから彼女の悩みは、「やりすぎる」ことからくる、関係者との軋轢であった。こんなおかしな話はない。

彼女のヘルパーとしての腕は、プロ以上で、プロの手に負えない対象者の場合に彼女にお呼びがかかるのだ。ところが彼女はまだヘルパーの資格を取得していない。ある関係者に「そろそろヘルパーの資格ぐらいは取っておいた方がいいよ」とアドバイスされた。しかし、彼女の技術は、今既にプロ以上なのだ。なぜ、いまさらヘルパー資格を取得しなければならないのか。これまたおかしな話である。こんな「おむつ替えの名人」に地域でときどきお目にかかる。こういう人物には、ヘルパーの何級ではなく、名誉ヘルパーとかいった、別の名前を提供すべきではないか。

■彼女こそ「コミュニティ・マネジャー」

佐井さんは地区社会福祉協議会活動の立ち上げにも力を尽くしている。敬老会やふれあいサロンを立ち上げたのに、「なかなか、ウチの町内から参加しないので困っちゃう」と嘆いている。

嘆きながら、内心では、そんな福祉のやり方に住民が反応しないのは当然、と思っているのではない。しかし福祉関係者がそう言うのだから、正しいのだろうと、半信半疑で取り組んでいる。

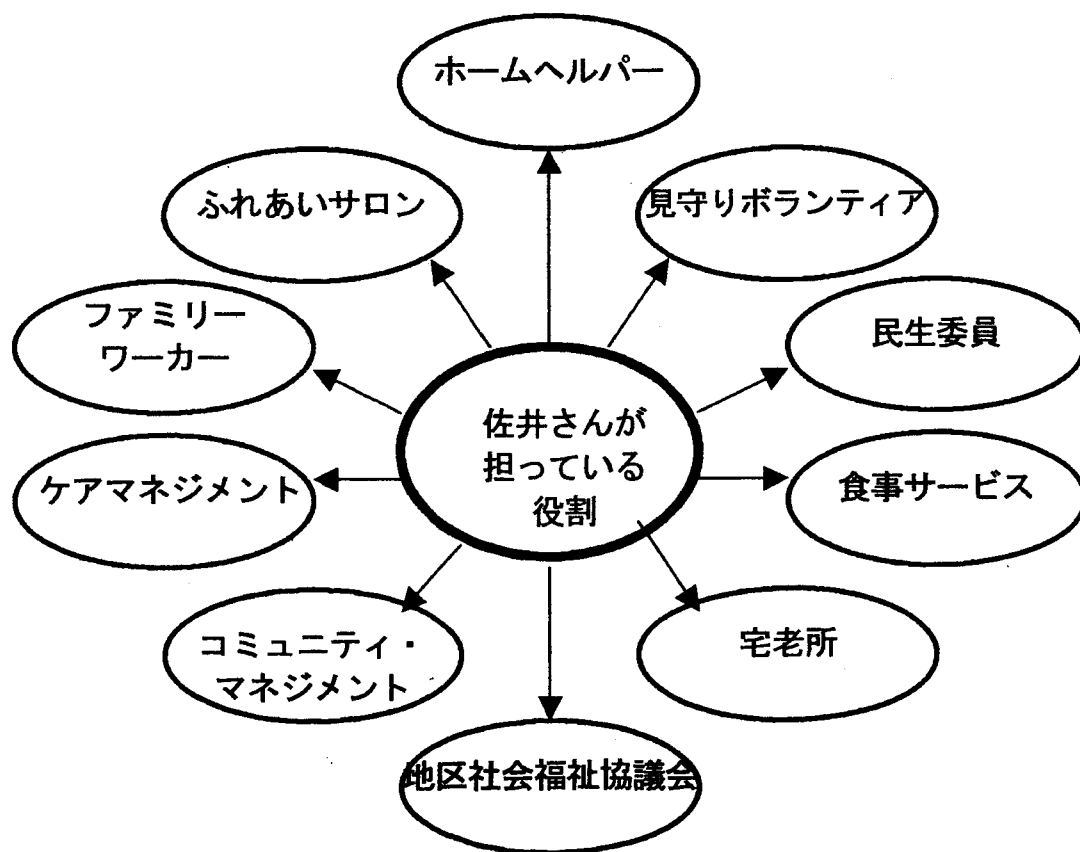
その彼女が足元の町内でやっていることを総合すれば、まさに地区社会福祉協議会活動そのものではないか！ 本書の他の箇所でもコミュニティ・マネジメントという発想を提示してある。50世帯ぐらいの小さな近隣ごとに、その近隣内での人々の支え合いを盛り立て、一人も見逃すことなく、自宅で自分らしい生き方をまっとうできるようにマネジメントをする。

彼女はただのマネジメントだけではなく、一方でヘルパーとしておむつ替えまでやり、近隣の人たちの様子を見に行き、食事も作ってあげ、ファミリーワーカーの役も担い、自宅を開いてふれあいサロンや宅老所をやっている。すごいとしか言いようがない。

福祉の技術というのは、なにか福祉センターや福祉系の学校、あるいは研究所の中にあるのだと思っていたが、じつはその原点は住民の、特に世話焼きさんの日々の営みの中に紛れ込んでいるのだ。しかし関係者はそれをいただくという気にはならない。あいかわらずの無視を決め込んでいる。それで一方で「住民主体」と言っている。そろそろ佐井さんのような人物の営みを正しく評価し、肩書きを貼り付け、まともな報酬を保障すべきである。本人は求めているだろうが、いつまでも甘えてはいけぬ。

やはりポイントは、コミュニティ・マネジメントといえるかもしれない。彼女が日々、近隣の要介護者たちの体調などに気を使い、できることは自分でしてあげ、できない部分は医師などの資源を活用する。徘徊がはじまると、彼女が仕切って探し回る。要介護者の希望で、自宅に一日受け入れる。小規模多機能施設の役も果たしている。こういう人物が今、小地域では求められているのだ。

コミュニティ・マネジャーとして、正当な報酬が彼女に支払われてもいいのではないか。



世話焼きさんをつぶしてしまわないまちを

■百余世帯になんと痴呆性高齢者が11人も居た

広島県の大竹市。といっても、だいぶ山のほうに引っ込んだ方であるが、ここで委員が出向いて調べた所、百余世帯になんと痴呆性高齢者が11人も居た！ 地元の福祉関係者との共同の調査だったが、その関係者自体、まさか足元にこんなにたくさんの痴呆性高齢者がいるとは夢にも思わなかったという。10世帯に一人、である。

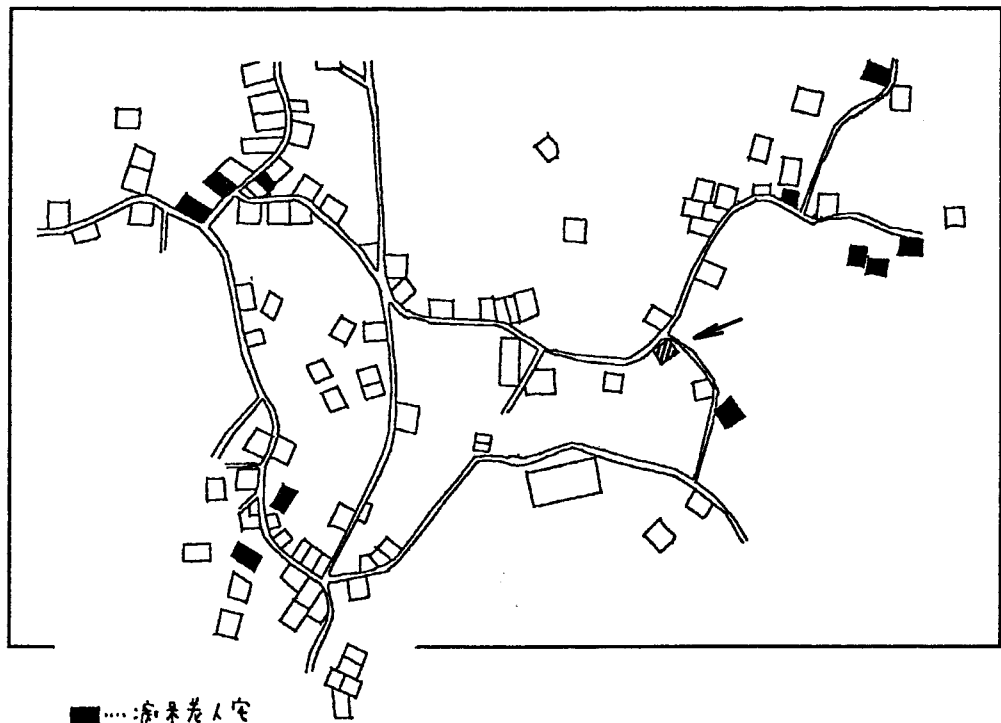
それで、住民はこの人たちにどういう支援をしているのかを調べるつもりであったが、その中で大きな問題にぶつかった。私たちがたまたま聴取したのは、地図上に印をつけてある家の主婦であった。自他共に認める「世話焼きさん」だという。だから、毎日、誰かの世話ができないものかと、対象を探している。

■世話焼きが活動するのを押し止める風土

地図をご覧になればわかるだろうが、ちょうど三叉路の所に家がある。そのあたりを子どもが登下校のときなどに通りかかる。家に居ながら、ちょいちょい外を見ているから、子どもたちが通るときも見逃さない。彼女は「放課後先生」と呼ばれている。学校から表彰されたこともあったらしい。

ご覧のとおり、彼女の家の奥の方に痴呆の人が住んでいる。当然、彼女も気づいている。それだけではない。他にも地図の右上の方に5人も居る。

彼女としてはなんとかかかわりたいと思っている。ちらちら家の前をのぞくと、彼女らが通り過ぎ





委員の聴取に応じる世話焼きさん

ることもある。かかわりたいのであるが、この地区全体にそれをさせない雰囲気があるというのだ。彼女の家族自体、そういうことをするのを嫌がる。

世話焼きが活動するのを押し止める風土。これだけの痴呆の人がいることがわかったのは、この地区の何人かの世話焼きさんに聴取したからであるが、この 11 人の人たちが、ひっそりと引きこもって暮らしている。家族もまた引きこもっている。情報だけはさすがに漏れているのだが、なにせ関わりが始まらない。むろん何のかかわりもないというわけではなかろうが、全体としては、ないに等しい。

■地元に住民として生活している「関係者」がまだ動いていない

地元の関係者に聞くと、この近辺に障害者の施設があつて、そこの職員が何名かこの地区に住んでいることがわかった。地元の小学校の校長もなかなかの活動家だという。NPO の活動家も見つけた。そしてマップ作りに協力してくれた関係者の自宅も、じつはこの地区にあつた。

これだけの「関係者」がうまく連携していけば、これらの引きこもりの人たちを開かせていくことは不可能ではないのではないか。「世話焼きをさせない風土」をぶち壊すのだって、できないことはない。要は地元に住民として生活している「関係者」がまだ動いていないということである。住民として自分も足元の福祉に関わらなければならないという意識が、まだない。そこに地域福祉がこれ以上進まない、大きな原因があるのではないか、とも思ったりした。

福祉のプロが「住民」として活躍したとき

要介護者の周辺にこんなにも施設関係者が住んでいた！

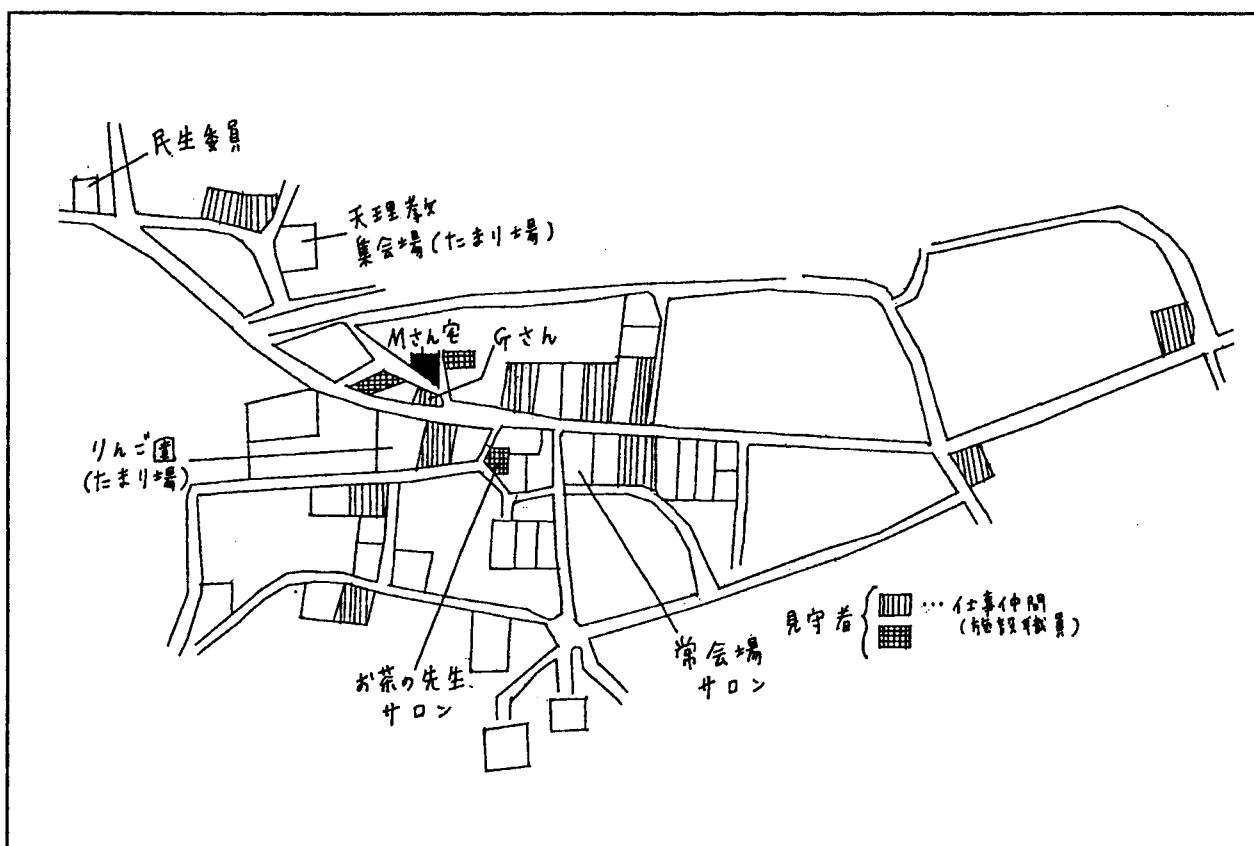
長野県茅野市では、市内を東西南北4つの地区に分け、それぞれに保健福祉サービスセンターを置いている。基幹センターと結んで、保健福祉サービスのネットワークを作っている。それぞれのセンターに1人、「ふれあいネットワーク」を配置、足元の住民の隠れたニーズを掘り起こしたり、住民同士の支え合いを支援したりしている。ケアマネジャーの資格も持った彼女等は、「コミュニティ・マネジャー」と見てもいいかもしれない。

4人のふれあいネットワークの1人、後藤しのぶさんは、ニーズが来れば必ず、その近辺の住宅地図を携行し、資源発掘もすべてその地図上でやる。彼女に、実際にマップをどのように活用しているのか、まとめてもらったら、その一つに以下のようなケースがあった。

■痴呆で徘徊が始まったばかりのMさんの見守りを

Mさんのケアマネジャーから、痴呆で徘徊が始まったばかりのMさんの見守りをサービス利用以外の時にしてくれる人を確保してほしいと依頼を受ける。

Mさん宅を訪問する。本人からいろいろな話題の中から交友している人を確認した。数日後、Mさんの近所のGさんから「杖がほしいので紹介してほしい」と電話があったので、早速Gさん宅を訪問した。話題の中に、Gさんは若い頃施設で働いたことがあるとのこと…「そうだ」。



■彼女の足元に13人の元施設職員がいるではないか！

この地域には福祉施設があり、Gさんと働いたお仲間をお聞きしてみると、驚いたことに13人の元施設職員がいるではないか。話題の中にもMさんの情報が出され、それとなく皆さんがMさんの行動を気にしている様子である。

早速、ケアマネジャーと連絡を取り、介護保険サービスと近隣の見守りを組み入れた計画を作成し、特に朝、夕方道路に立っていることが多いので、立ち話風にMさんを見守っていく方向の協力体制を元施設職員とMさんと相性の良い交流者をお願いすることができた。(本人に負担を感じないように見守ってほしいと希望した。)



後藤しのぶさん

世話焼きさんで構成。足元のニーズに対応

ふれあいサロン拠点の近隣福祉推進へ

住民総ヘルパーという発想は、具体的にはどのようにして実現するものなのか。そのヒントがここにある。長野県駒ヶ根市。その社会福祉協議会で興味深い試みが実施されている。

地区ごとに天性の活動家である世話焼きさんを主体にサロンの形でまとめ、この組織を拠点にそれぞれが足元の要援護者に関わり、その情報交換や支援し合いの方法をサロンの席で協議する。こうして住民の資源性のある人たちを結集して、大きな力にしていくのだ。

■世話焼きさんを「福祉員」に

地域を実質的に支えているのは、いわゆる「世話焼きさん」たちである。しかもその大部分は女性。彼女等の活躍の範囲は、きわめて狭い区域、極小地域である。彼女等(世話焼きさんの大半は女性だ)の活動のやり方は、まさに住民流。集まらず、集めず、会議をせず、定めず、計画せずである。

こういうあり方が住民には最もふさわしい。それなら、このあり方をそっくり尊重した形で「福祉の地域づくり」を試みよう、同市社会福祉協議会は考えた。

といっても、これを全市に適用するのではなく、このやり方がぴったりはまった特定地区だけである。実験的な試みだが、これが見事にうまくいった。その特定地区は人口3500、840世帯。これが12の小集落に分かれている。一集落平均50世帯弱。全国各地で、どのぐらいの規模の集落が支え合いをするのに最適かと、住民自身に聞いてみたら、どこでも「50世帯ぐらい」という答えが返ってくる。それとほぼ一致している。

それぞれの集落の中から、世話焼きさんを数名、ピックアップし、「福祉員」の肩書きを貼り付けた。やはり全員、女性である。つまり、住民の中の天性の(広義の)ヘルパーを地域から擲り上げ



サロン別に地元の「支え合いマップ」作り

てその人たちの協同でそれぞれの地域作りをしてもらおうというわけである。その協同の拠点が「サロン」、つまり彼女等の言い方でいえば井戸端会議だ。

■支え合いをめざすサロンに

彼女らが世話役になって、「ふれあいサロン」を立ち上げた。自然発生的なサロンをそのまま追認した地区もある。仕掛けた人物に聞くと、このサロンは、ただ「集まる」ためのものでなく、支え合いができるようなサロンにしたいということだったようだ。初めから「支え合いサロン」をめざしたのである。それぞれがごく小さな集落だから、その域内の高齢者のかなり多くが集まってくる。

さて、このサロンを、福祉の地域づくりの拠点的な場・組織にしようと社会福祉協議会は考えた。今まで地区社会福祉協議会を組織して、そうした機能を果たすことを期待し、それなりの成果は上げてきてはいるが、一つの地区社会福祉協議会がカバーする範囲が大きすぎて、とても細部にまで目が行き届かない。

しかし住民は、その細部の所、平均 50 世帯というきわめて小規模のグループの中でふれあい、支え合いをしている。それぞれの集落にきめ細かく対応するのであれば、本当に福祉の地域づくりをしたとはとても言えない。そこで、すでにあちこちで実践されていた自然発生的なサロンに注目が集まることになる。彼女等は、あとでも述べるが、ただ集まっているだけではない。ささやかながら支え合いだってやっているのだ。つまり福祉機能も果たしている。

それならこのサロンをもっと積極的に、要援護者をメンバーで支えたりするための拠点にしようというのである。

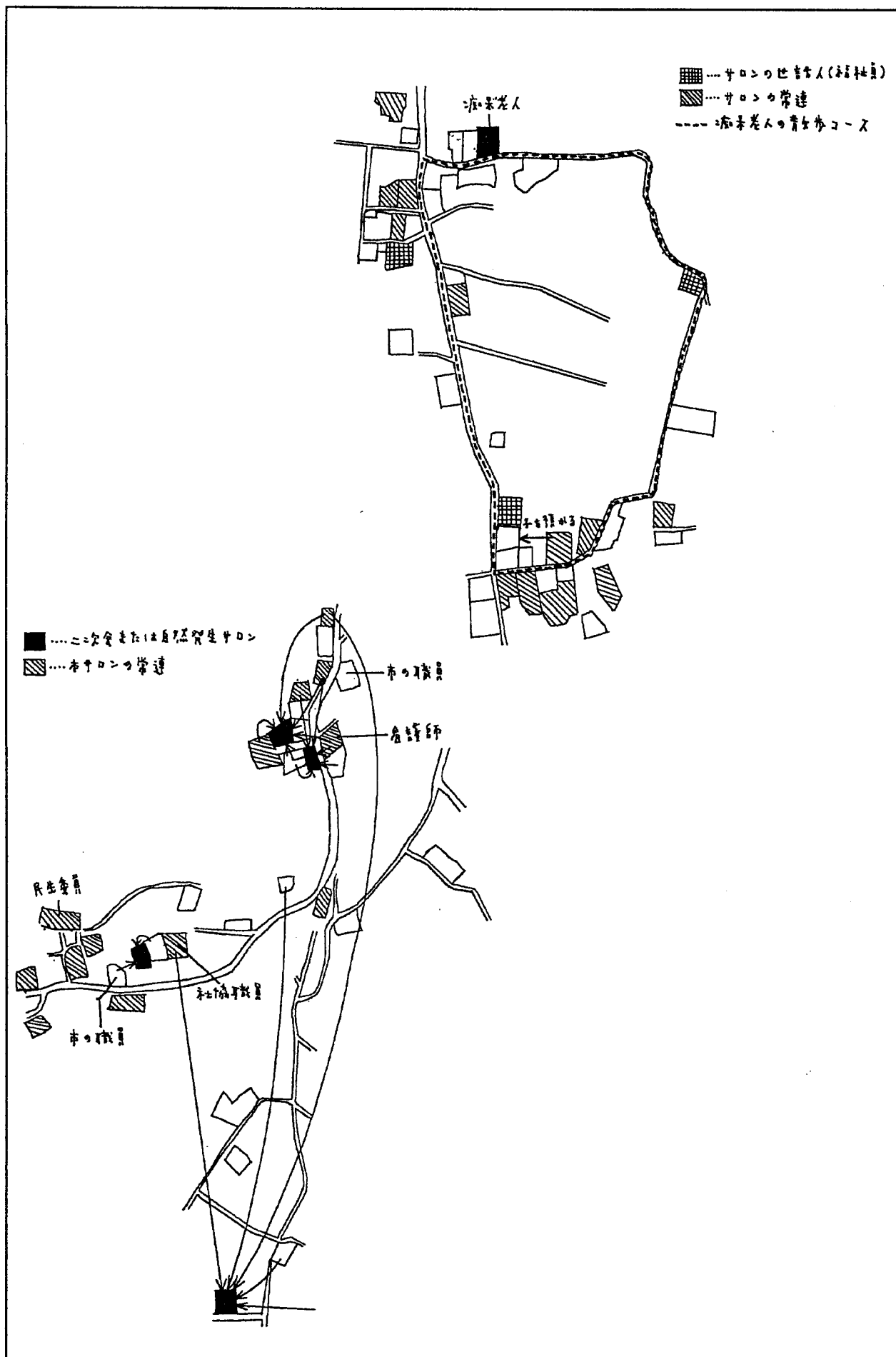
そこでまず、集落別に生まれたサロンの世話焼きさん、福祉員に支え合いマップづくりに取り組んでもらった。このマップづくりに取り組むこと自体が、福祉の地域づくりへ、メンバーの気持ちを向けさせる、いいきっかけになっていることがわかった。

いままではサロンに来る人のことしか考えなかったが、「来ない人はどうしているのか？」という疑問が沸いてきた。その人をマップ上で追跡していくと、メンバー(サロンの常連)のだれかがその人を気にかけていた。その人は、自然発生的な小サロンには来ていたことがわかったりした。サロンの常連が開いた二次会にだけは来ている人も居た。

■痴呆老人の散歩を見守り

このほど、この 12 地区、すべての集落でのマップ作りを終えた段階で、こういう命題を立ててみた。—もし世話焼きさんをリーダーとした「サロンの常連」で構成された「地域づくり推進組織」(地区社会福祉協議会のようなものだが、それよりももっとずっと小さな地区での推進組織と考えたらどうか)が、今までよりもやや意図的にそういう福祉的機能を進めるとしたら、どんなことができ得るのか。これを考える素材とするために、いますでにこれらのサロンがどんな(地域づくり的な)働きをしているのかを、マップの中から抽出してみたのである。

その中から、興味深い事実が浮かび上がってきた。例えば、第一番目のマップをご覧いただきました



い。上の方に一人の痴呆の高齢者が住んでいて、点線を引いたルートを毎日歩いている。いちばん下のあたりに彼女の実家があるので(もう誰も住んでいない)、その前を通るのが彼女の楽しみらしい。

ところで、このマップの中の、サロンの常連の家を見ていただきたい。なんと、彼女の散歩ルートに集中しているではないか。要するに(本人がそうと意識してやっているかどうかはわからないが)サロンの常連たちに見守られながら散歩をしていたのである。それだけでなく、例えば下の辺りに、子育てに困難を感じている家庭があつて、その子どもを隣家で、ほとんど預かって育てていた。その隣家もサロンの常連だった。

というように、サロンの常連たちは、日常的に足元の要援護者の見守りや買い物などの手助けをしていた。そういうお互いの活動の情報交換がサロンでなされているのだ。いわば普段の地域活動の情報交換、というわけである。

■サロン同士が複雑なネット

もう一つのマップは、二次会、ないしは自然発生のサロンが、この地区だけでも4箇所できているというものである。それらの二次会なり自然発生サロンのメンバーが相互にホスト役になったり、他のサロンに顔を出したりというふうにして、複雑に交差していることがわかるだろう。

このようにして、地域住民はものすごい複雑なネットワークを張り巡らしている。そのネットを通して、AさんがBさんの移送ボランティアを引き受けたり、Bさんが代わりにみなさんをサロンに招待する、といったふうに、担い手にも受け手にもなり合っている。

また本サロンには来ないが、二次会や自然発生サロンにだけは顔を出している人も居る。ということは、二次会や自然発生サロンにもかかわることで、今まで放置していた域内の高齢者も、実質的に「仲間にする」ことが出来るのだ。

■男性組織と合同イベントも

13集落できているサロンは、同じ地区内のさまざまなグループともつながっていた。ゲートボールやお花などの趣味グループと、何人かのメンバーが重なっている。その「重なった」人を通してつながっている。

この地区の多くは、わずか数種類の名前しかない。親戚できあがっている地区なのである。当然その親戚ネットもできているし、それとサロンのネットが重なっているから、地区の大部分の人はいずれかのルートでだれともつながっていたのだ。

この地区のサロンも、他の市町村のそれと同じように、男性不在である。では彼女等は域内の男性とどうやってつながっているのか。メンバーに聞いてみると、男性が主に所属する「高齢者クラブ」と年に何回か、集団対集団で合同のイベントをするのだという。そういうことでいいのだ。なにも日常的に男性がサロンに参加しなくても、定期的に合同のイベントを開けばいいのだ。

その男性主体の高齢者クラブの幹部から、(サロンのメンバーに)「運営を手伝ってくれれば助か

る」といった声が出て来たという。超高齢化した組織の運営をサロンのメンバーでやってあげるのも、一つの事業になる。

■会議を開かないし、決めない

改めて「推進組織」を作るのではなく、それぞれの集落の世話焼きさんが「サロン」という形で集まり、おしゃべりをしながら、なんとなくお互いが個人的にかかわっている対象者の情報をオープンにする。それに対して、仲間が「あうんの呼吸」で呼応する、といったふうにして、実質上の「推進組織」ができたも同然の形ができていないか！

なにも会議を開いて、それぞれの関わっている「ケース」を話し合い、かかわりのあり方を協議するなどといったやり方をするまでもない。というよりは、そういうことをしないからこそ、うまくいっているのだ。誰が担当かも、勝手に「会議で」決めない。それぞれが足元の当事者に関わっている。それはその人と当事者の個人的な合意に基づいてなされているのであって、他のメンバーに指示されるまでもない。

会議を開かない、決めない、計画しない、といった「ないないづくし」の地域推進組織だからこそ、当事者もこれを受け入れるし、メンバーも活動できる。こういうのが住民流の地域福祉推進組織であり推進方法なのかもしれない。カバーする領域は、彼らのお付き合いの範囲。だからこんなに小さな集落単位になる。

では地区社会福祉協議会は要らないのかといえ、そうではない。そうした集落単位の営みを後方から支援する立場になれば生きるのではないか。世話焼きさんやその小さな集まりだけでは、例えば大きな「事業」的なことはできない。彼女等の手に負えない、公的サービスに委ねざるを得ない部分もあるだろう。広域で取り組まねばならない部分もある。

その代わり、最前線は集落単位の世話焼きさん主体の「あうんの呼吸」型活動推進に委ねればよい。その最前線に地区社会福祉協議会の母体自体がストレートに関わろうとするから、住民も拒否反応を示すのだ。最前線は、きちんとした組織活動は受け付けない。それが住民の願いである。

世話焼きさんのネットも、また地区社会福祉協議会も、双方ともに生きる、新しい小地域福祉推進のあり方を、サロンという、そろそろ地域に根付き始めた活動形態を活用しながら、築き上げていったらどうか。

問題は地域の毛細血管がまだ育っていないということ。そこで

活動推進組織のランチづくり

住民総ヘルパー、つまり住民のすべてを福祉資源にしたいという発想をどのようにして実現させるのか。ここではランチ作りという方法を提示する。市町村という大きな領域の中で住民が連携して活動するのは事実上難しい。そもそも住民資源が顕在化されにくくもある。そこで市町村よりももっと小さな区域、小学校区よりもっと小さい町内会ぐらいの中で、活動推進組織ができて、その区域内の住民資源を丁寧に発掘、活用すればどうかということだ。

そのために効果的な方法の一つは、すでに市町村単位でできている活動組織の近隣版を作らせていくというものだ。この方法で、潜在していた住民資源が掘り起こされる。こうして住民総ヘルパーにやや近づいていく。

■各種活動が揃えば「地域福祉」か？

どうやら私たちは、ある種の錯覚を抱えている。地域福祉というのは、その筋の機関をはじめ、さまざまな団体・グループが、それぞれの役割を果たしていけば、結果として実現するのだと思っているのではないか。

例えば行政や社会福祉協議会は各種の在宅サービスを提供する。NPOがグループホームや宅老所を開く。あるいは有償の家事援助サービスを提供する。ボランティアがミニデイサービスやふれあいサロンを開く。あるいは見守りなど要援護者への支援をする。これらの諸活動・サービスが、全体として地域福祉を形成するのだと。

じつは、それよりもっと大事なことがあった。それらの諸活動やサービスが地域福祉の実現に向けて本当に効果をもたらすかどうかは、その一つ一つのサービスや活動が、各々地域づくりに貢献することができるかどうかにかかっているのだ。この点にまだ怠りがある。

有償の家事援助サービスは、依頼があれば協力会員を派遣するという段階にとどまっている。ふれあいサロンはただ定期的で開催し、「また来月いらっしやいね」で済ませている。ホームヘルプやデイサービスも、その本来のサービスをきちんとこなすことで終わっている。ボランティアもまた、それぞれの本来の活動を「継続」させることで満足している。それはそれでいいのだが、しかしこれでは「力強い」地域福祉が行われたとは言えない。

■サロンが痴呆老人を仲間に入れた

ふれあいサロンを拠点に「地域づくり」を始めた長野県駒ヶ根市の事例を本書の他の箇所で紹介してある。同じ長野県の須坂市での、サロン開催ボランティアの集会で、各グループの地域づくりとの関連を質したら、10いくつかのサロンのうち、3グループが、デイサービス利用者を仲間に取り入れていた。「デイサービスには負けないぞ」という意気込みで取り組んでいるとリーダーが言っ

ていた。痴呆性高齢者を仲間に引き入れているグループも2つあった。常連の中には、普段、つまりサロンに来ない日々、自分の足元の要援護者に関わっている者も少なからず居た。

ふれあいサロンを開くとき、「地域福祉」の一環であることを強く意識するならば、このような行動が生まれてくるはずなのだ。

■有償サービスの地区版作りを開始

有償の家事援助サービスも、依頼されたサービスをただ提供していればいいのではない。駒ヶ根市にも「宅福便」という家事援助サービスのシステムが社会福祉協議会にあるが、よく調べたら、その地区版とも言える活動が2箇所生まれていた。

ある世話焼きさんが「私の所(地区)は私の仲間で引き受けるよ」と言ってくれた。自分の目の届く範囲では、親しい協力会員が連携して足元のニーズに対応しようというのである。またある地区では、辺地にあるため、宅福便に移送サービスの依頼ばかりが発信されていた。それならばと、地元の有志たちで、足元のニーズに対応しますと言い出した。こうやって、有償サービスは市内の各所で自主的主体的に展開されることにより、まさに「地域づくり」に発展しつつあるのである。

今の有償サービスグループはまず、こういう発想は持っていない。本当に地域作りをしたいのなら、誰もが受け手にも担い手にもなれる仕組みに変えていかねばならないのだ。協力会員と受給会員を明確に区分けするというあり方は、「地域づくり」とは相容れない。

その協力会員にしても、自分の担当した受給会員と、ただ担い手と受け手の、しかもサービスシステムの中だけでの関係に終始するというのも、地域のあり方とは違っている。協力会員もまた地域住民の一人として、その受給会員と、だんだんと個人的なお付き合いが始まってもおかしくない。

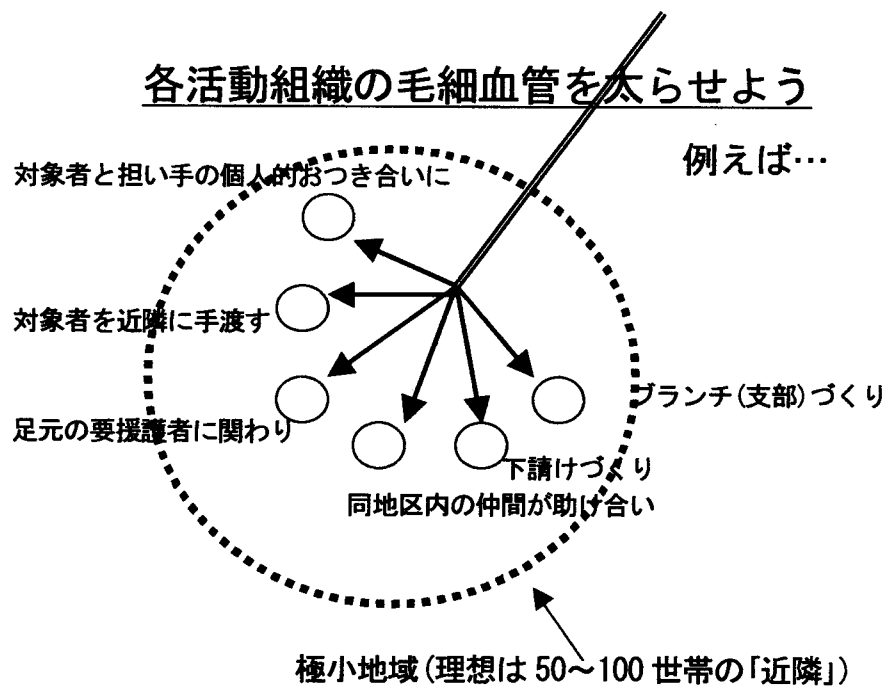
それが発展していくと、サービスもまたその個人的お付き合いの中に解消されてしまうことだって、あっていいはずである。前述の「宅福便」(駒ヶ根市社会福祉協議会が事務局担当)も、協力会員と受給会員の間にハッピーな良縁ができたなら、「あとは両者でよろしくおやりください」と切り離していく。あくまで住民同士の支え合いに返していくことを眼目としている。これが「地域作り」を意識した有償サービスではないのか。

■毛細血管をきめ細かく、が課題

地域福祉計画や活動計画を策定するために福祉マップ作りをしてみて、いちばん感じるのは、今の地域は毛細血管がまだ育っていない、ということであった。地域福祉といっても、それぞれの機関・団体が特定の対象に関わっているだけで、しかも小学校区域程度の広い範囲をぼんやりとながめて「地域づくり」を考えている。これでは粗っぽ過ぎるのだ。だから、マップを持って、極小地域ごとにその中で要援護者の生活ぶりなどを丁寧に見ていくと、「ここには福祉の手が届いていないのではないか」と思われる場合が多い。だから本人達はほとんどあきらめて生きている。「大概のことは辛抱して」だ。この人たちに関わっている世話焼きさんも居るが、彼女らももう限界に来ている。孤軍奮闘といった感じである。痴呆性高齢者の場合、そうした粗っぽいネットワークではとて

も間に合わない。もったきめの細かな支えのネットができていないと、そこから容易に漏れてしまう。

なぜこう粗っぽい福祉ネットができてしまったのかと、辿っていくと、一応活動している機関や団体・グループが「地域づくり」を意識しないでやっているからだとわかってくる。個別サービスをしながら、または特定のイベントを実施しながら、たまたまそこで接点のあった要援護者に適宜関わっていけば、こんな粗っぽい福祉にはならないのではないか。毛細血管を丁寧に作っていこう！
—これが今必要なスローガン、と言っている。



有償サービスのランチづくりで「安心地域」に

近隣ごとにサービス協力員が協同で請け負い



森岡さん

住民総ヘルパーはどのようにして実現するのか。住民全員にヘルパー資格を取得させるという以外にも、いろいろ方法がある。もともとヘルパーのような資質を持ち、また活動も既に行っている人たちをどのように結集して、大きな力にするか。それが大きな課題だ。

本章ではそのための方法の一つとして、サロンを活動拠点として世話焼きさんをかき集め、この人たちの普段の活動を相互に支援し合うという方法を提示してある。それと関連して、サロンでなく有償サービスという活動をもとにする方法もある。やはり活動意欲があり、ある程度世話焼きさんのような資質の人がこの組織に参加してくるから、可能ではある。その場合に、ただ市という大きな規模で彼らの力を組織化するだけでなく、その力を小地域ごとにまとめ、そのまとまった小グループによって主体的自主的に足元のニーズに対応する方が効率的である。ランチづくりで、近隣の住民資源が今まで以上に掘り起こされ、それだけ住民総ヘルパーに近づいていく。その先駆的な活動事例を、推進者である駒ヶ根市社会福祉協議会の片桐美登氏にレポートしてもらった。

■住民参加型(非営利・有償)のサービス「こまちゃん宅福便」は好評活動中

駒ヶ根市社協が実施している住民参加型(非営利・有償)のサービス「こまちゃん宅福便」は、現在、340名の会員登録があり、月270件を超える利用がある。まだ増えていきそうだが、これだけのコーディネートを一人で、しかも他の事業と兼務の梶田ひとみさんがこなしている。

住民流のやり方だからこそ可能なことではあるが、もう限界にきている。できるだけ早く住民に返していかなければならない。最近、この課題に対応した動きが住民の側からいくつも生まれてきている。

■森岡さんとの出会い

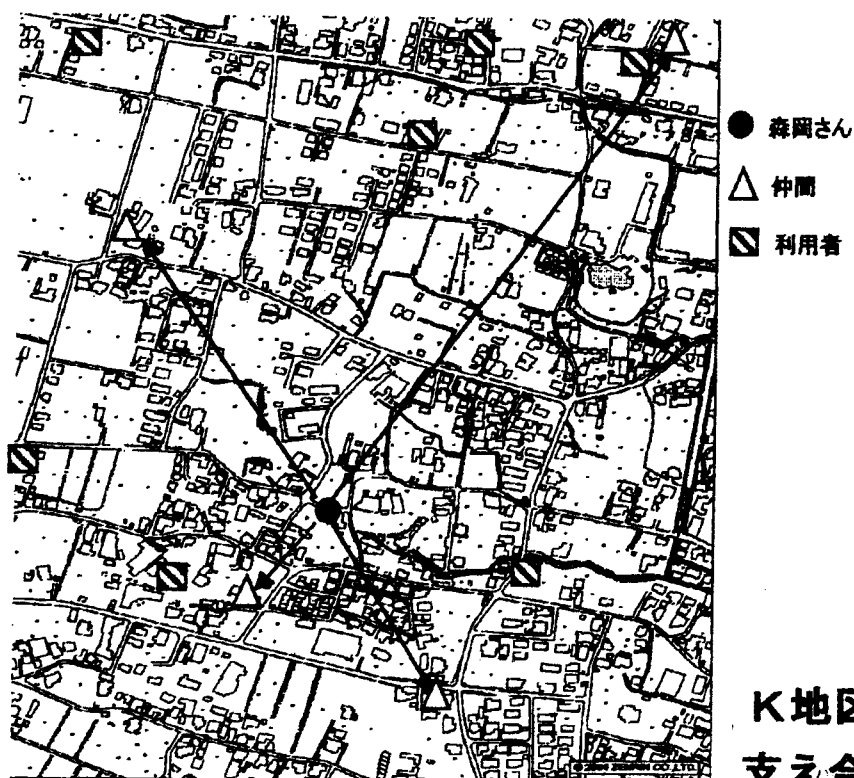
K地区の一人暮らしFさんから「雪かきをしてほしい」と宅福便へ依頼があった。早速、Fさんを訪問するが、雪かきが頼めるような男性は近くにいないという。持参した住宅地図にFさん宅を記入し、近所に人材がいないか探してみると、近隣に以前かかわりのあった名前を発見した。

この人は、梶田さんが公民館で料理教室を開いていた時、4年間欠かさず参加していた森岡さんという(当時は50代)の男性である。「若者の料理教室」という講座にもかかわらず、一人60近い、しかも男性が参加していたことから梶田さんの記憶にしっかりと残っていた。

■「定年退職後、何かしたい！」

この森岡さん、民間の会社に勤めていたが、50代半ばになって公民館に足しげく通うようになった。公民館の主事が同級生ということもあったが、定年後の準備という意味合いもあったかもしれない。公民館では「料理教室」の他にも「成年学級(なるねん学級と呼ぶ)」「歩く講座」などに通っていた。定年になって、シルバー人材センターの講座も受講したが、どうも「これだ!」というものが見つからないでいた。梶田さんから宅福便のお誘いがあったのはそんな時期であった。

小・中・高校の同級会の幹事を20年もやっている人だから、もともと世話好きで気がきく。知人の多さも梶田さんに匹敵するほどである。宅福便で地域の利用者のお世話をしているうちに、2級ヘルパーの資格も取ってしまった。こんな森岡さんには、利用者の依頼がたくさんやってくる。その活動の一部を紹介する。



K地区の宅福便による
支え合いづくり

■訪問先でニーズを拾う

現在、支援している人は15人いる。毎日ではないがなかなか忙しい。依頼が無くても心配な人にはちよくちよく顔をだして見守りも欠かさない。

Sさんの依頼で塀のペンキ塗りをしたら、ついでに障子の張替えと庭木の剪定も頼まれた。仕事中にSさんの隣の住むKさんがお茶のみにやってきて、「私の家もお願い」と動物病院への送迎と墓参りまでやってしまった。さらにSさんから「花仲間のGさんが困っているのをお願い」との声を聞き、梶田さんにつなげて対応している。利用者のGさん宅ではお茶のみ話の中に困りごとを発見し、社協の相談員につなげて解決した。Fさんには通院介助を頼まれ自宅まで送っていったが、ボイラーが壊れているのがわかり、すぐ知り合いの業者に連絡し格安で修理してあげた。

このように、宅福便での依頼内容に関わらず、気づいた困りごとにもすぐ取付いていく森岡さんのやり方はまさに住民流だ。

■仲間を作り、関係機関にもつなげる

森岡さんの活動はこれだけではない。Tさん宅の草刈をやっていたら、裏の土手が崩れているのが目に付いた。早々、市役所の土木課と掛け合って改修してもらった。

さらに、このTさんは恩師の奥さんだとわかり、お墓参りから通院介助までなんでも対応している。最近、Tさんの体が弱くなってきて、心配なので隣のMさん（歩く会の仲間で「私も何かやりたい」と言っていたのを思い出し）を会員に誘い、見守りをお願いした。ついでに近所の利用者の支援も頼んでいる。

Oさん宅の草刈はとても広範囲で、一人では手に負えないとわかると、友人のTさん、Sさんを宅福便の会員に登録し三人でやってしまった。さらに、この家の広い畑を有効利用してほしいというOさんの願いを聞いて、教育委員会と近くにある中学校に、児童生徒の体験活動に使えないかと掛け合っている。地域の友人を始め、行政や病院など至る所に知り合いがいるので、すぐに掛け合い話をつけてしまう。

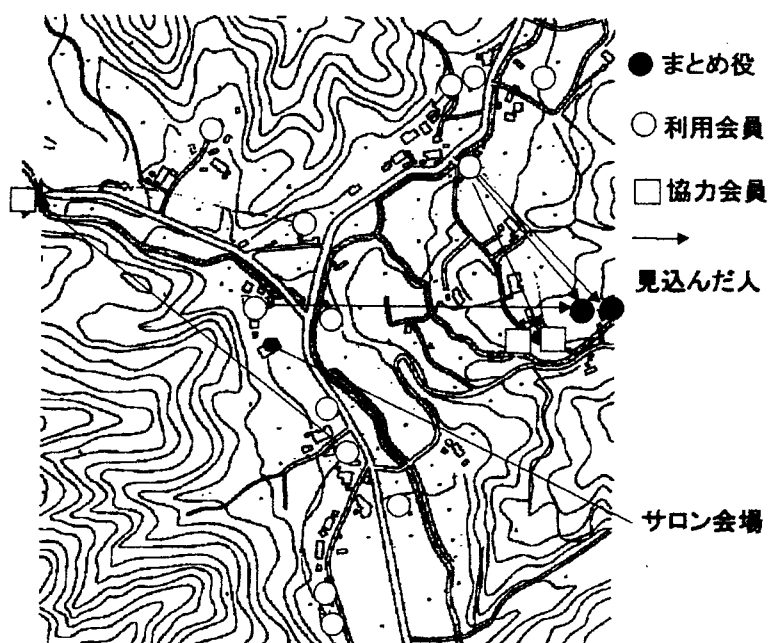
■ケアマネージャーの役割も

老々世帯のAさんから通院介助の依頼があった。森岡さんの支援で頑張っていたが、二人とも介護が必要な状態になってきた。杖とポータブルトイレがほしいとの声を聞き、これは介護保険で対応できると判断、市へつないだ。

市で医者意見書が必要と聞くと、知り合いの病院へ行き、意見書をもらい認定にこぎつけた。ケアマネージャーにもつなぎ、介護機器メーカーを知り合いから紹介してもらって杖とトイレのレンタルを実現した。森岡さんのこうした活動は、宅福便のサービス外で、全てボランティアである。

森岡さんは、親しくなった近所の宅福便利用者Fさんにお申し、空いている畑を借りて趣味の野菜作りをしている。見守りと支援をかねて毎日というくらいFさん宅へ行くので一石二鳥というわけだ。しかも、出来た野菜は自分が支援している、畑のない宅福便利用者にお裾分けして

0 地区サロンでの支え合いづくり



いる。

利用者が畑を貸していることでお互いの「心の貸借対照表」がバランスをとっているといえる。

困りごとを聞いたらとにかく動かずにはいられない性格が、宅福便の担い手を越えて、K地区の支え合いの仕掛け人としての役割を果たしている。

■宅福便の協力者同士で仕事も請負

最近宅福便以外にも市のリハビリ教室や特養でのボランティアも始めた。とことん関わる森岡さんの活動は、まさにコミュニティマネージャーの役割と言えよう。

その彼が、最近、福祉施設から送迎の仕事を頼まれたが、1人ではとても対応できない。そこで宅福便の仲間三人でローテーションを組んでやることにした。梶田さんがやっていることを、彼が自分の地区に限って、いわば「下請け」的に対応しているのである。宅福便の小地域版がこうして誕生していた。

■他地区でも宅福便のランチ作り

K地区の森岡さんの活動以外にも、宅福便を「地域に返す」仕掛けは、地区社協と「いきいきサロン」でも始まっていた。

N地区では、役員Kさんが近所の気になる一人暮らし2人に声をかけ、宅福便に登録した。自身も協力会員になって2人の支援をすることになった。他にもマーケットに勤めるサロンの世話焼きKさんが、お客さんで買い物に困っている一人暮らしのTさんに声掛けをして利用会員に登録した。

こうした動きがN地区で始まると、声を掛けられた利用会員が同じ悩みを持つ友達や近くの気になる人を誘い、芋づる式にたちまち13人もの利用会員ができてしまった。

こうなるとN地区で支えていただく協力会員もつくらねばならない。早々、「いきいきサロン」で参加している利用会員と顔なじみの世話焼きさんとが話し合い「私はこの人をお願いね」と3組の

ペアが出来上がった。他にも協力してくれる人もいて協力会員5名で支援体制が出来上がった。

H地区でも、地区のお年寄りが通院や買い物の足に不自由しているという悩み事に、地区社協で地域の担い手を募り、年間187件もの送迎を行っている。

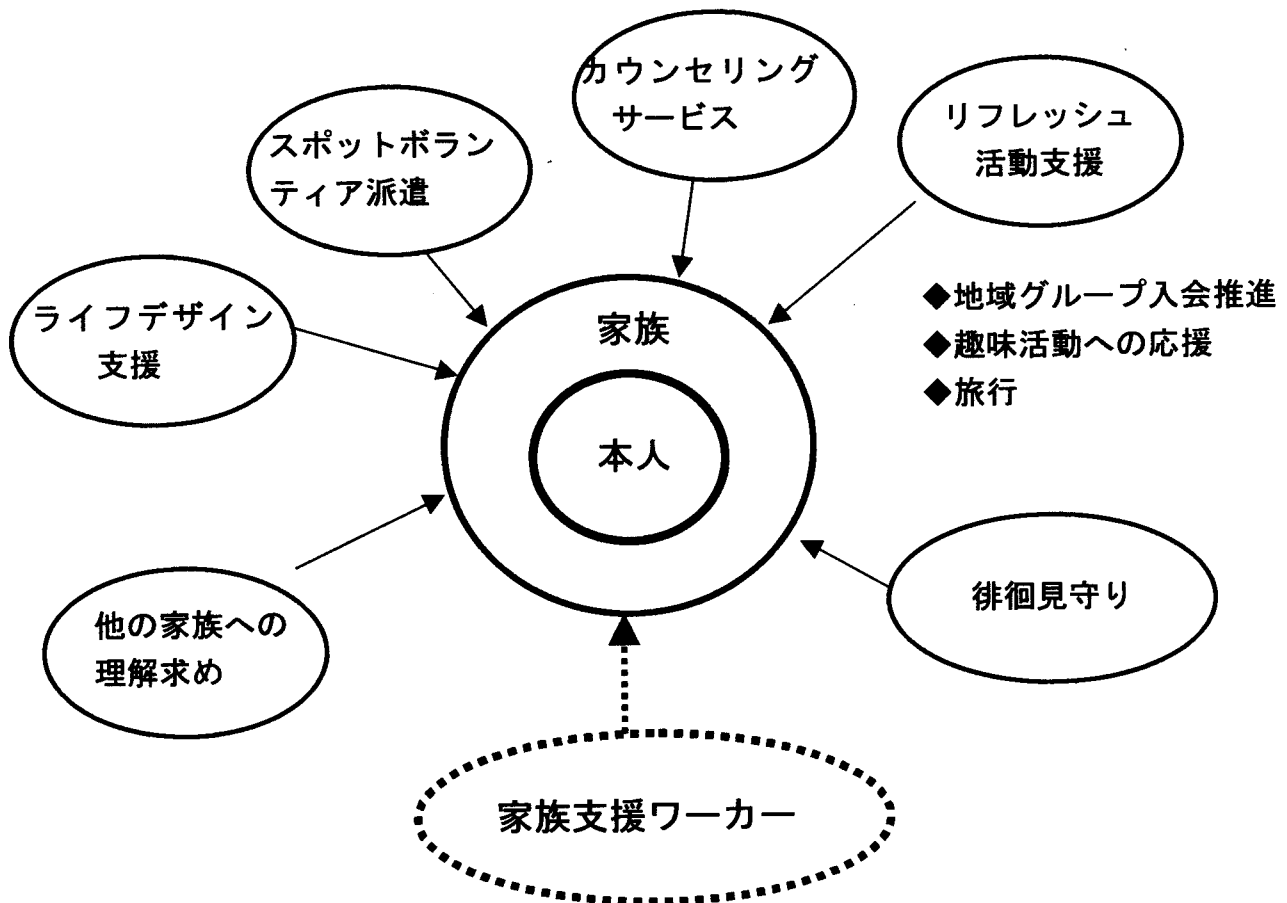
このように、いくつかの地域では、足元の困りごとへの対応として、「宅福便」という道具を活用しながら、地区社協やサロンを核に地域内で支え合う仕組みが出来つつある。

スポット・ボランティア

介護者への多様な支援の確保

本人および介護者の豊かな、ゆとりある生活を保障するには、彼らの日常のこまごまとした生活場面のそれぞれに、スポット的に関わるボランティアが望まれるようだ。それをどうやって確保するか。

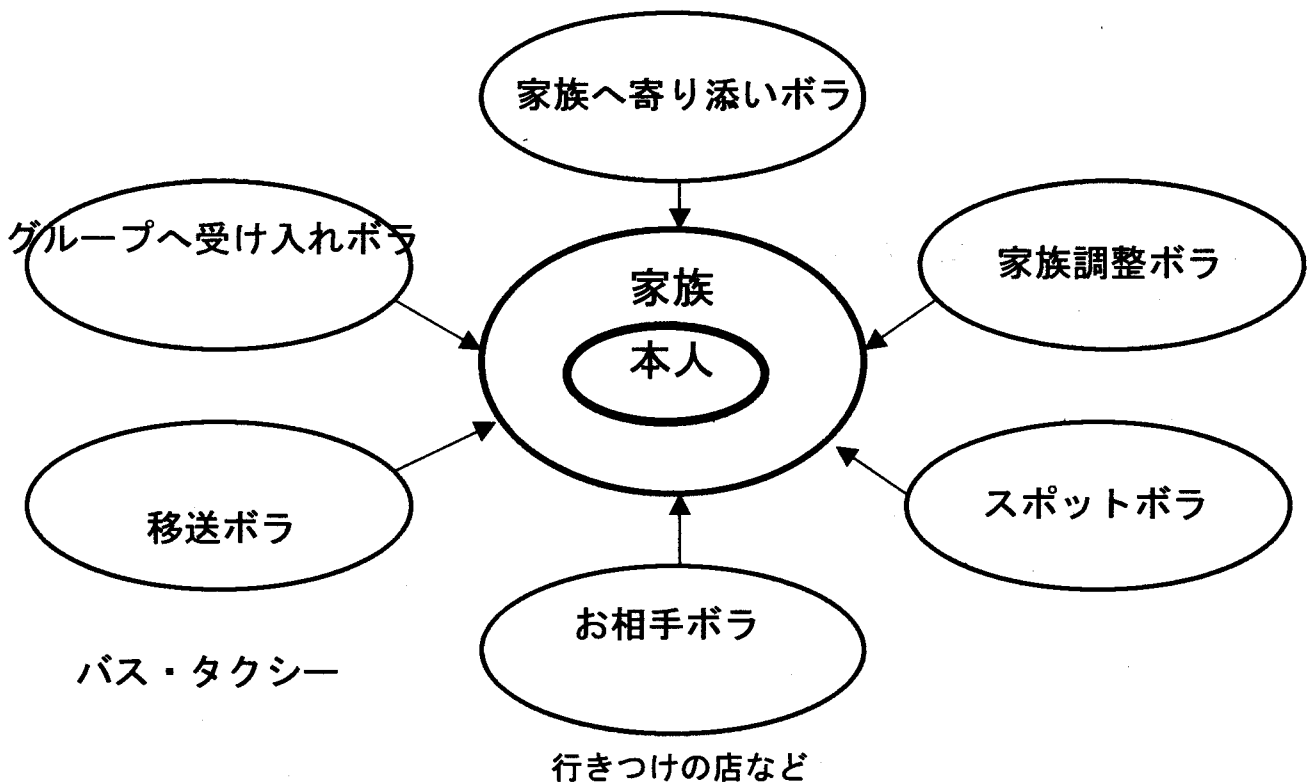
一つには、地域でその接点で何気なく要介護者に関わっている人たちを掘り起こし、それを認知し、意識づけすればいい。住民は意図的に福祉センターまで来て活動するほどの気はないが、足元で、生活の中で、しかもどこかへ行かなくてもできれば、やる意思は持っているのだ。



「かごに乗る人・担ぐ人、そのまたわらじを作る人」

実際に果している役割に位置づけ

私たちの社会は、最前線の活動しか「活動」と認めない。「認知しない」ということが、活動している本人にそれを自覚させない、したがって本気で取り組ませないという問題を生んでいる。後方支援活動や、ちょっとした活動もきちんと「活動」と「認知」することの効用を考えなければならない。本人や家族に対してしている意外なボランティアを探し出し「それもボランティアですよ」と言ってあげるボランティアが、じつはずでに居る。活動と言えそうなものはことごとく「活動」と認知していくのだ。それも住民総ボランティア作戦の一つだ。



世話焼きさんを後見人にしたら、世話焼きさんじゃなくなった？

住民活動を支援するときの心得

住民総ヘルパーということは、必ずしも住民全員にヘルパーという職に就いてもらうことを意味しない。住民は住民のままで、その日常生活の中でできるだけのことをしてくれればいい、という面もある。その場合に、関係者がその住民の活動に土足で踏み込んで、あれこれ指示したり、補助金を支給したり、なんらかの肩書きを貼り付けたりすることで、うしなうものも少なくない。その点を心得ておく必要がある。フィールドワークの中でたまたま以下のようなケースにぶつかった。

そのケースとは神奈川県川崎市のケースであるが、本人・S子さんのアパートの大家さんが大変な世話焼きであり、その人の世話で、今まで痴呆症でも一人で生きていられた。ところが症状が重くなってきたので、老人ホームに入所してしまった。その間、その世話焼きさんに彼女の後見人になってもらった。

■「これでやっと肩の荷が下りた」

聴取に出かけた日、たまたまS子さんが以前に住んでいたアパートに里帰りをしていた。これからちよいちよい里帰りをするのかと思ったら、「これで地域で生活するのは最後」。今までアパートを彼女の部屋として維持していたのを、これでとりやめて、施設生活一本槍にする。その「けじめをつける日」だったのだ。

世話焼きさんに感想を聞いたら「これでやっと肩の荷が下りた」。本人の意向とは関係なく、とにかく安全な老人ホームに永久入所させたことに安堵していたのだ。

■「有限責任」だから世話焼きで居られる？

S子さんにとって最高の世話焼きさんだからと「後見人」になってもらったなら、「責任重大」というわけで、「肩の荷を降ろす」ことが先に立ったというわけだ。世話焼きさんが世話焼きであるのは、有限責任だからなのかもしれない。完全にその人の生活・生命に責任を負わねばならない立場になったら、世話焼きでなくなる？

■痴呆の人の「本当の後見人」になれる人って、誰なんだ？

そういえば、その日、S子さんの部屋にやって来た人たち—NPOのリーダー、後見人とその姉、その友達、だれもS子さんの気持ちを考えようとはしていない。まさに本人不在の「けじめをつける日」になっていた。

では一体、痴呆の人の「本当の後見人」になれる人って、誰なんだ？

委員の個人的考察

以下は今回の研究活動の中で、特にフィールドワークの中などで、委員が個々に、感じたり考えたりしたことをまとめたものである。執筆の様式も組み立て方もすべて、個々人の自由裁量に任せてある。これまでまとめてきたことのどれに最も関心が向いたのか、どの点が他の委員の意見と異なるのかなどが、そこで強調されてある。

大塚真理子

(1) 痴呆になっても友人の役に立ちたい

●駒ヶ根の唐沢さん

70歳代半ばで、1年前から痴呆が始まったK子さんは、息子家族と暮らしている。できることは自分でやるように家族が見守っていて、地域の中で友人との付き合いも続けながら暮らしている。

●相互助け合いの中で充実した日々（活人社会）

まず、朝は、高校生の孫を起こし、洗濯物を干すのがK子さんの仕事である。その後、足が悪く外出できないM子さんから、「うちにおいで」と電話がかかってくるので、午前中はM子さんの家で過ごしている。M子さんの家は三叉路の真ん中に位置するので、人々の往来が多く、かつての幼馴染が常時、沢山集まってくる。

K子さんは、「ここに来ると胸の扉がひらく」とM子さんに言い、M子さんは「K子さんが来てくれるから自分も助かっている」とK子さんに言う。実際、K子さんはM子さんの家で、「あんたは足が悪いからおれがやる」と言って、庭の草取り、お茶入れなどを行っている。

●家族の中で役割を担う ーだれかのために役立ちたいー

K子さんは午後、孫が帰ってくる時間になると「迎えてやりたい」と、自宅に帰っていく。自宅では、洗濯物を取り込み、たたみ、孫の帰りを待っている。時には働いている嫁を気づかい、簡単な夕食のおかずを準備することもある。孫は、同じことを繰り返し話すK子さんに、わずらわしさも感じているが、おばあちゃんとして孫の世話をしようとするK子さんに根気よく付き合っている。

●徘徊犬の助けも借りて

K家には犬がおり、K子さんは犬の散歩が日課になっている。K子さんは犬の散歩をしているつもりであるが、K子さんが迷子にならず家まで帰れるよう、犬はK子さんの見守りをしている。

●自然に作られてきた地域の見守りの仕組み（移住社会）

K子さんの1日の動きをマップに書き込んでみると、K子さんの行く先々には、友人宅があったり、受け入れてくれるサロンやサークルが点在しており、知らず知らずのうちに、地域の人々に見守られているという実態があった。このような見守りがある地域社会は、痴呆症で徘徊がある当事者にとっては安心して暮らせるもので、地域社会にとっても徘徊があまり問題とならないだろう。

(2) 痴呆で寝たきりでも人の役に立っている

●さいたま市の稲葉さん

稲葉さんは78歳の男性で、アルツハイマー病で寝たきりである。アルツハイマー病と診断され

て8年がたち、現在は娘さん家族と暮らしている。デイサービスに通ったり、施設入所した時期もあるが、今は要介護度5で訪問看護師とヘルパーの訪問サービスを受けている。

稲葉さんが裁判所に勤めていた頃、休日買い物に行った帰りに、仕事に関わった少年が働いている店に立ち寄って励ましたり、旅行に行った時も知らない人に自分から話しかけて世話を焼く人であった。娘さんは稲葉さんのことを「面倒見のいい人で、人の世話が好きな人」と言う。

●教育者として社会貢献ができる

稲葉さんは、ボランティアで看護学生の教育を行っている。学生が自宅訪問をすると、稲葉さんは車椅子に座って迎えてくれる。ほとんど自分から話すことはないが、学生が話しかけると顔を向けたり、表情を変えてくれる。稲葉さんの部屋には、たくさんの写真がはってある。奥さんと旅行に行ったときの写真や、友人たちと一緒に撮った写真、楽しい思い出の写真である。娘さんは稲葉さんの若い頃の話や元気な頃の人柄などを話してくれる。学生は現在の稲葉さんのご様子、はってある写真、娘さんの話しを聞いて、稲葉さんの生き方や痴呆症のことを学んでいる。これは痴呆で寝たきりの人の立派な社会貢献である。

●痴呆症であっても社会参加を

稲葉さんが学生の教育に協力してくれることに対して、娘さんは、「お父さんは人が好き、人の役に立つことは何でもする人、だから学生さんの役に立つことなら引き受けるはず」とお父さんの自己決定を代行している。お父さんの人柄と生き方をよく知っている娘さんならではの判断である。そして、「学生さんがきてくれて、父も社会参加する機会が持てる」と喜んでくださっている。事実、学生と過ごす稲葉さんの表情は楽しそうである。

(3)超介護者を嫁に持った幸せ

●駒ヶ根のS子さんとお嫁さん

90歳代半ばの女性であるSさんは、息子夫婦と3人暮らしである。6～7年前から痴呆がはじまり、今は誰に世話になっているか、どこに行ったかもわからない状態である。2月に1回くらいは排泄に失敗もあり、布団を汚してしまう。息子さんは70歳代で、脳梗塞で現在リハビリに通っている。

お嫁さんは夫と姑の二人を介護している。お嫁さんいわく「厳しいお姑さんで、泣かされた」と言っているが、「今は姑がかわいい」と言っている。「私の復讐はうんと介護してあげること」と笑顔で話してくれた。Sさんは高度の痴呆であるが、「この人がいないとだめなの」とお嫁さんに絶対的な信頼を寄せていた。お嫁さんは、Sさんを家で最後まで看取りたいと思っている。

●天性主義のお嫁さん —自分のQOLも大切にできる—

夫と姑の二人を介護しているのに、このお嫁さんはすっごく明るい。なんでもプラス思考で、ユ

一モアを心がけて居るお嫁さんは、S子さんの失敗も笑いで吹き飛ばしている。自宅の庭先を近所の人たちが“通路”として行き来しているのに、ちっとも気にしないで居られる人である。

夫の兄弟たちが姑を預かってくれるときも、チャンスとばかりにしっかりあずけ、そういうときを利用して旅行や婦人会活動に参加している。それが気分転換となり上手にリフレッシュしている。

●超介護者と一緒にいると痴呆による混乱が起こらない

S子さんは、お嫁さんと食事をするときと、息子さんと食事をするときでは、その様子が異なっている。お嫁さんと楽しく食事をしたときは、食べたことを覚えており、息子さんにしかられながら食べたときは、食べたことを忘れ、食事を催促する。

●超介護者を支える兼親制度 一駒ヶ根に昔からある助け合いの知恵一

兼親制度とは、親を兼ねる仲人とも言える役割で、他者の家庭内のトラブル、姑問題等を解決する調整役で、生涯に渡ってその家族の世話をする制度である。お嫁さんにも兼親がおり、S子さんとの嫁姑問題でも世話になってきた。現在の介護の中で、兼親という付き合いがある宮下家のおばあちゃんがS子さんをデイサービスに連れて行ってくれたりして、日常的に面倒を見てくれていた。このように、地域社会で人々と円滑に継ぎあう仕組みがあると、痴呆の介護を地域で支えるネットワークとなる。

(4)私は介護のプロジェクトX

●春日部市の高畑さん

高畑さんは痴呆症のお母さんを介護したのち看取った娘さんである。高畑さんは、痴呆のお母さんが持つ、人を世話する力を引きだし、お母さんの積極徘徊を地域社会に働きかけて可能にし、周囲の人々にお母さんの介護をさせることができた超介護者である。お母さんを看取った後も、介護者の指導員やネットワークづくりに活躍している。

昔馴染みの関係が根づいている田舎と違い、転勤属で、やっと住みついた街では、地域の人々との関係を作ることが大変である。しかし、高畑さんは地道に地域社会の人々に働きかけ、お母さんの介護を社会化した。

●痴呆の人は能力を持っている

高畑さんのお母さんは娘3人の母であった。高畑さんが介護する以前に、お姉さんが介護していた時と違うところは、高畑さんはお母さんの力を信じているところである。毎日見ていると、「痴呆で判断力は失われても、瞬時にいい人か悪い人か見分ける能力があるのがわかる」と言う。だから、ボランティアの人を頼むときにも、お母さんと一緒にボランティアを希望してきた人に面接し、お母さんの反応を見て決めたのである。

専業主婦で掃除が大好きだったお母さんが玄関前を掃除したいといえ、したいようにさせてい

た。お母さんがかきあつめた落ち葉をわざと玄関前にまいて掃除してもらうことさえあった。「人間はしたいことをするように生まれてきているだから」と行動を制することはしなかった。このように、高畑さんは、お母さんは「人が好きなの、人を褒めるのが上手なの」とお母さんの良いところを強調して、家族や地域の人と関わりをつくった。痴呆の人のもつ力を引きだし、大切にしていたので、介護が楽しかったと言っている。

●積極徘徊

お母さんは「水戸に帰らせてもらいます」と言っでは家を出て行こうとした。高畑さんは「お母さんにとって徘徊は意味があること」と捉え、積極的徘徊を演出した。水戸に帰るといってお母さんに、お土産をもたせ、薄化粧をしてあげて送り出す。ボランティアさんに、お母さんが疲れた頃を見計らって「うちに泊めてあげる」と言って連れてきてもらった。そうするとお母さんは満足して帰ってきて、夜もぐっすり眠ってくれた。

●迷惑をかけあえる地域づくり

玄関前で掃除をするお母さんは、そこで近所の人に話しかける。高畑さんはお母さんが痴呆症と言うことで奇異な目で見られたり、陰口を言われたりすることがあっても「世間体は気にならない」と言う。むしろ、痴呆症のお母さんは近所の人と社会関係を結ぶことになり、お母さんにとっては好ましいことだと考えている。近所の人をそれが迷惑なことと感じていても、「うちのおばあちゃんが自宅の人、みんながんばっていたよ」と言っていたよ、と伝えるとにこっと挨拶してくれるようになるのだから、時間はかかるが、それはたいしたことではないのである。

●地域の人が理解ある人になるのを待つ

高畑さんは買物に行くときなど、いつもお母さんを連れ歩いた。「母が行ったお店の人はみんな母を理解してくれた」と高畑さんは言う。お店の人は、高畑さんとお母さんのやり取りを見聞きして「痴呆なんだな」と理解してくれて、声をかけてきてくれる。やり取りをするようになると気心が知れてきて、高畑さんが他のお店を見に来る間お母さんを見ていてくれるようになる。高畑さんは地域の人が自然にヘルパーになるように働きかけていたのである。

●痴呆になっても母は私を愛してくれた

高畑さんは、お母さんの介護を振り返って、「私がお母さんの痴呆に合わせて演技をしていたと思っていたけれど、お母さんは私の演技を見抜き、私の介護にあわせていてくれたのではないか」と思うようになった。痴呆症になっても人間としての暖かな心の通い合いを娘さんと感じあうことが出来たお母さんなのである。それは、介護し介護される関係が、互いに愛し、愛される関係であったからである。

(5)地域に開かれた天性の世話焼きさん

●前橋のI子さん

I 子さんは、77 歳で、幼い頃から住み慣れた地域に今も住み続けている。昔は隣が郵便局で、自分で貯金を降ろせない人の手助けなどもしていた。履物店は街中の道路に面した店で、5つの小中学校のシューズを扱っており、子供やご近所の人の出入りが多い。3年前に夫を亡くし、今は1人で店を守っている。徘徊の人を呼び入れたり、週に2～3回は店に来る近所の人たちと食事を共にしている。人の世話が好きで、みんなで一緒に話をするのが楽しい、話がしたいと思っている人である。

●天性の介護者 — 世話上手・もてなし上手・つきあい上手

I 子さんは自分から初対面の人に「寄ってかない？」と声をかけられる人である。道路に面している店の2面の壁は全面ガラス張りになっていて、人のとおりがよく見渡せる。店の一角にはコタツがあり、お茶とお菓子、漬物、家族の写真やアルバム、ちょっと一緒に遊ぶための輪投げやゲームなど来客をもてなすグッズが所狭しと準備されている。

「子供が買いに来るから、店を続けてほしい。子供たちの力になってくれ」という小学校の教頭先生からの言葉をまじめに受け止め、それを励みに店を続ける原動力にしている。人に頼りにされると、それに応えようと努力し、世話をする人である。人に「良かった」と言ってもらえることが喜びであり、人をもてなすことが苦ではない、という天性の世話焼きさんである。

●徘徊途中の痴呆性高齢者の見守り — 休みをうけいれます

I 子さんのご近所には、1日に6回も立ち寄る痴呆性高齢者がいる。I 子さんは、いやな顔をすることもなく、その都度迎え入れ、繰り返しの話に耳を傾け、痴呆性高齢者にとって、この履物屋さんというお店も、I 子さんという人も拠り所となっている。

痴呆の人に対する見守りの大切さを、「話し相手が居れば、痴呆は治る」とI 子さんは力強く自らの体験を通して語った。

●馴染み合い社会としての履物屋さんの存在

幼少児からこの地域に住み続けている I 子さんは、多くの人と継続した人間関係がある。I 子さんを支えている友人たちは、小学校からの同級生であり、そのうち4人は未亡人と言う共通点があり、励ましあったり慰めあったりして支え合っている。ここには古い家や町並みとともに、長い時間をかけた熟成した人間関係がある。

(6)当事者の安心につながる施設のあり方とは？

●神奈川のT子さん

T 子さんは現在 80 歳代だが、この地域で長年ヘルパーとして働いていた。夫を亡くし、子ども

もないため1人で自宅で生活していた。痴呆症がでてきて1人暮らしができなくなり、N子さんのアパートで暮らすようになった。親類は皆遠方であったので、昔から付き合いがあったN子さんが成年後見人となって、T子さんは施設に入所した。

入所時は要介護度5であったが、入所後約半年がたち、要介護度3に改善した。施設は終の場としてT子さんの生活の場となるので、最後のけじめとして、お正月に家に一時帰宅した。

●専門職・施設の地域の中の役割

施設入所したT子さんは、表情が良くなり、下肢の浮腫もなくなり、身体状態が改善した。そのため要介護度が改善したのである。このような変化は施設のなかで専門家による適切な医療・介護が提供されたためである。施設が地域の中で行うこのようなサービスの提供は、地域社会に暮らす人々に安全と安心を保障することになる。

施設が在宅介護を支援するために機能できれば、この人のように介護度が改善し、再び地域で暮らすことが可能となる。しかし、現在の介護保険制度の仕組みの中では、施設と在宅の自由な行き来ができず、当事者が在宅に戻ることを許す仕組みになっていない。

(7)地域のカラオケサークルで自己実現

●千葉のKMさん

KMさんは、60歳代の男性で、奥さんと二人暮らしである。アルツハイマー病と診断されて退職したが、退職後は庭の手入れや陶芸教室など趣味活動を楽しんでいた。時々パニックを起こすことがあり、精神的に不安定になり趣味活動が続けられなくなった。しかし、カラオケサークルだけは継続することが出来ている。

●馴染みあいの仲間の中でカラオケを楽しむ

KMさんが通うカラオケサークルは、奥さんの昔からの友人がその世話役をしていた。KMさんとも親しく、なじみの関係であった。他の仲間にもKMさんの痴呆の事は伝えられているが、だれも偏見をもってKMさんを見ることはない。KMさんが一生懸命歌うので、カラオケサークルに集まる人たちは、一緒に歌ったり、節回しを教えたり、KMさんと一緒にカラオケを楽しんでいる。痴呆だからと言って特別扱いをすることはなく、さりげなく「親切的な仲間」としてKMさんに接していた。

KMさんは「カラオケ店の店員」になったつもりである。新しい歌を覚えるためにカセットにダビングしてもらい、家でも一生懸命練習している。

●受け入れの雰囲気

痴呆症を自然に受け入れられる場には、それなりのしつらえがある。このカラオケサークルでは、お座敷で座卓の周りに座布団が敷き詰められ、座卓の上にはお茶やお菓子、漬物など、参加者が持

ち寄った飲み物、食べ物が並んでいた。出入り自由で、ふらっと人が入ってくると、「ここがあいてるよ」とだれかれとなく声がかかり、「食べな」とお皿に食べ物がのせられる。自然にその場にとけこめるような雰囲気を作られているのである。カラオケを歌う順番や約束事が決められており、初めて参加する者にも親切に教えてくれる。一人がマイクを独占することもなく、誰もが公平に歌えるような配慮がされている。背中をたたいてリズムを取ってくれたり、一緒に歌ってくれたり、手拍子をくれたり、だれもが一緒に楽しんでいる。

(8)痴呆の人も趣味グループに受け入れられる

●須坂市のふれあいサロン

須坂市には 30 名くらいの規模のふれあいサロンがいくつもある。そのなかで、痴呆症の Y さんが参加している中ノ島ふれあいサロンは活気があった。リーダーの K 男さんが地域づくりの名人なのだ。

●痴呆の人が今日はゲートボールだ

最近、A さんは痴呆症が悪化したので、お嫁さんが仕事をやめて介護に専念するようになった。週 2 回デイサービスに通うようになり、その送迎はお嫁さんがしている。A さんは、月に 1 回のふれあいサロンの以前から常連さんである。A さんも他の参加者も昔からのなじみであり、子供の頃からの愛称で呼び合う関係である。A さんが「行きたい」というので、お嫁さんはデイサービスの日であっても、このサロンに A さんを連れてくる。

サロンでは、A さんが電気ポットをコンロの火にかけようとしたことをきっかけに、参加者が「変だ」と気づき、A さんに配慮するようになった。座布団の出し入れを頼んだりして、台所の仕事が A さんにあたらないようにしている。特別扱いはしていないが、なにげなく配慮している。A さんは、歌の歌詞をコピーしてきてみんなに教えたり、ゲートボールを一緒にしたり、ふれあいサロンの一員として活動している。昔馴染みの人々の中では A さんは A さんらしく居られるのである。

●コミュニティマネジャーがいるサロン

このサロンの世話人さんは 60 歳代の男性である K 男さんである。参加者は K 男さんを「細かいことを気にしないで細かい気が回る人」と評価している。話がおもしろくて人を楽しませるのが上手、労を惜しまず他の人が嫌なことをやってくれる、年寄りを大切にしてくれる、など参加者の信頼を集めている。

K 男さんは、「人が集まるのが好き、みんなが喜んでくれたらいい、ありがとうという言葉が好き、ありがとうの発信と受信が好き」と話す。どうしたら人が集まるかを考え、サロンの運営をどうしたらいいか考えている。だから、サロンに集まる人は男性もいるし、90 歳代の人も居る、自分から参加し、無理がなく、楽しそうである。

黒川理恵子

◆本人の会づくり（ピアカウンセリングによる当事者同士の支え合い）

痴呆になると本人が認知している社会が現実とは異なってくる。そのことが、本人に不安と混乱を招き、他者との関係において様々なトラブルが生じてくる。

痴呆という言葉は広く一般に知られるようになったが、正しく理解し適切な対応ができるかといえ、必ずしもそうとは限らない。痴呆高齢者の「その人らしい」生活を支える環境づくりを目指すには、痴呆高齢者本人も当事者同士さらに社会に向けて率直に想いを伝え、我々も当事者から学ぶことで、相互理解を深めていく必要がある。

先日、精神障害者当事者（統合失調症）の会報に目を通していた時、『当事者からのメッセージ』と題した印象に残る一文と出会った。精神障害者も、社会では病気への偏見・差別というハンディーを抱え、生涯にわたり付き合う病気という点で痴呆と共通している。その内容の一部を簡単に紹介したい。

～『当事者からのメッセージ』～

①「変容」という言葉を軽々しく使わない。そう簡単にはいかない。

家族と当事者の苦しみ・悩みの根本は共通という視点に立つと少し楽になる。



これも当事者主体から相互主体へといえる。

最初は自分が精神障害者であることを認められなかった。病気の症状を受け入れられなかった。病気の症状で、どんなことが起きているのかわらなかつたから。

病院へ行き、薬を飲むようになると精神障害者という立場を受け入れなくてはならなくなる。治療を受けること、薬を飲むことは理解できても、障害者とか病者という立場を受け入れるのは、当事者だけでなく家族にとっても辛い作業だ。

ようやく受け入れたら、今度は自分の将来像を変えていかなければならなくなる。発病前と発病後の自分は変わってしまったわけですから。ゆっくりやっ払いこうと思っても、将来を考えるとがっかりしてしまう。一生養ってもらおうのかなどと考え出すと、希望も何もなくなってしまう。

②自立とは孤立することではない。

誰の手も借りないで生きることはありえない。

真の自立とは、調和のとれた依存ができること。

回復の目的が、自立でなく孤立になってはいけな。だから、自分のできる範囲はどこまでだろう、できないのはどこからだろうということを念頭に置いて、周りに頼りながら今日一日を何とか乗り切っている。

この方は病気を受け入れるまでに5年位要したという。そして、今の自分に至るための大切なことを教えてくれたのは、同じ病気の体験を持つ当事者だったと語っている。

このメッセージを読んで、病気と共存しながら新しい生き方を見つけ出すことが回復であり、そのためには同じ悩みや苦しみを共有できる当事者同士の存在が重要に思えた。

「その人らしく生きる」ための、調和のとれた依存のあり方を構築し、尊厳ある生き方を選択できる環境づくりが望まれる。

◆告知（告知と当事者の会は車の両輪）

社会に向けたメッセージを当事者から発信するには、まず病気や障害を受け入れなければならない。先に紹介した内容にもあったが、受け入れるまでには本人も家族も多くの時間とサポートが必要になってくる。同じ体験を持つ当事者同士の中で、癒され、新しい生き方を模索できる場が必要に思う。

◆事前教育

「その人らしく生きる」とは、どのようなことを意味するのだろうか。

- ・自分の意志を伝える手段を持ち合わせている。
- ・自分の意志で選択できる。
- ・自分の存在が、他者に受け入れられている。
- ・双方向の人間関係がある。（意志や心情、言葉等のキャッチボール）
- ・他者から必要とされていると感じられる。（社会における役割や仕事がある）
- ・必要があれば、他者に協力を求めることができる。

病気の告知、当事者の会づくり、対等な人間関係の築き方等すべてに共通していえることだが、生きている以上、誰もが病気や障害を有する可能性があることを踏まえて、「その時、自分はどうかあったらいいのか、自分はどのように暮らしたいのか」、人への温かい関心が育てられる環境づくりを心がけながら、事前教育の機会をライフプランの中に取り入れていけたらと思う。

永島光枝

介護保険の資料において2002年に痴呆の人は149万人、2005年には169万人、居宅で介護保険認定者の3人に1人は痴呆があるといえます。高齢社会が更に進む2015年に痴呆の人は250万人に達するといわれます。この時点で65歳以上の内7,6%の人に痴呆が見られるという将来推計が出ています。(厚労省—2015年の高齢者介護)

痴呆は、今はもう世間の中でそう珍しいことではないのに、本人、家族はもとより社会に痴呆のことがまだまだ理解されていないのが現状です。

痴呆は「正常に発達し、成人となった人が、主として老化に伴う要因で脳の中に病変がおこり、記憶、記銘、判断力などが、普通の生活ができなくなる程度までに障害された状態」と言われます。今までずっと家庭や地域の中で普通の人として生活していた人に痴呆がおこると、これらの障害が原因となり、色々なトラブルが起きてきます。このことが外からはなかなか分からないため、自分の責任ではないのに、今までと同じ付き合いをしていた周囲からおかしいと思われたり、陰口をいわれ、ときには排除されるということが多くなり、今までと同じ関係や生活が維持出来なくなってきました。本人もそれを気にして悩んだり、それでもこれまでの生活経験や人間関係を土台にして色々取り繕ったりしています。しかし、だんだん痴呆が進行するに従ってそれもカバーできなくなり、破たんが多くなり、ついには自力で生活することが出来なくなります。

私の小さいころにも、近所のおじいさんが夜中に大声を出して外をうろうろしていたことがあり、近所では「魚屋のおじいさんはもろくした」と言っていましたが、ただそれだけでした。今から考えるとその家の人は結構大変だったのかと思いますが、でもそれを近所で「問題視」する人はいなかったと思います。

しかし、私の母が69歳で脳梗塞の後、脳血管性痴呆となった時に、当時30歳台の私は母の「おかしい」言動が理解できず、それを受け入れられませんでした。今のような痴呆について一般的な情報もなく、母の現実を見るのが、娘であるがゆえに出来なくなっていたと思います。

それは今まで自分が抱いていた母のイメージを壊される情けなさがあり、とても辛いことでした。24年前に「呆け老人をかかえる家族の会」が出来て、「療原の火のごとく」(早川一輝)全国に家族の会が広がったゆえんはそこにあり、今も家族(肉親)なるが故の悩みは深いと思います。

最初に示したように、これから高齢者が増えるに従い痴呆のある人がもっと多くなってくると、痴呆の人がそこにもここにもいるということになり、痴呆は普通のこととなってかえって社会にその理解が進むのかも知れません。

調査報告の高畑富美子さんのようにまず自身が痴呆の母の理解が出来ていて、地域の人たちに進んで母親の理解を求める働きかけができるような「家族」がもっと沢山出てくることが、痴呆の人が地域で暮らせるようになる基本です。本や講演会で痴呆のことを「学ぶ」よりも近所に居る痴呆の人本人を見る事で、その生活に何がおこっているのかを納得してもらうことが大事だと思います。

高畑さんは末っ子だということです。上のほうの子供は親の壮年期に独立していますから、いつまでも親をそのころの親だと思っているけれど、下のほうの子供は、親が老齢となつての暮らしをみていることが多いので、哀れみや、庇う気持を持てるのかもしれませんが。

それが高畑さんの「天性」と相まって親とお芝居の世界にすんなりと入っていったのではないのか？と思いました。

ともあれ、社会の理解を得るための先兵として、「かかえる家族たち」の意識を変えていくことが地域で暮らす痴呆の人にとって一番早い理解を得る手立てではないかと思います。

「在宅介護と家族介護とは違います」というのが私の言い分ですが、家族が抱え込まずに、しかも地域の中で暮らしていける方策を見つけるのは先ず当事者である家族からの働きかけからではないかと思います。ごく最近になってその延長に「本人の思い」を社会に知らせるといった動きがでてきて、それを聞くと家族も分からなかった本人の気持が表明されて驚くことが沢山ありました。

痴呆の初期に診断がされるようになり、それに伴って医療受診や服薬に本人の了解をとりつけなければならないといった事情も新しい展開となっています。又、成年後見や任意後見などの法律が出来、それを使って老後の生活を担保しておくことなども追々大きな問題になってくるでしょうし、高齢者の世代が大正から昭和へと年代が下りて、家族関係の変化を高齢者自身が感じ取り、自分の老後を痴呆や要介護状態を含めて自己決定する自立志向の高齢者像が出てきていることもあります。これからはその中での「新しい地域像」を模索していく時代なのではと感じています。

初老期痴呆の K さん夫妻が参加しているカラオケサークル協和会

永島光枝・大塚真理子

KM さん (男性・現在 64 歳) 元会社員。(57~60 才・12 年夏ごろから発症?)

Km さん (介護者・妻 56 歳) 職を持っていたが夫の病気と自身の胃ガン手術のため 12 年に退職

(子供はいない)

- ・平成 11 年 2 月に市内で新築転居した。以前は千葉市内に夫の母親、弟の家族らと同じ敷地内に住んでいたが、同市内の 14 キロ離れた妻の実家近くに移転した頃から妻が病気に気付いた。
- ・12 年 3 月受診したところ、脳内検査で萎縮が同年代の人より 10 歳くらい進んでいるといわれ、アルツハイマー病と診断される。
- ・12 年 5 月に病気のため退職。60 歳・勤続 40 年
退職後は家で庭の手入れ、家庭菜園の作業、以前から続けていた茶道の稽古、陶芸教室などに通った。
- ・14 年 1 月頃から妻の友人の紹介で C 市の D 町内会館内のカラオケサークル協和会に参加するようになり、毎週土曜日を楽しみに参加している。
- ・15 年夏ごろ、「パニック障害」(医師による) を起こし非常に不安定になり、茶道、陶芸などが続けられなくなる。

[訪問の記録と感想]

訪問・参加観察の依頼

平成 15 年 9 月 27 日、千葉市道場南 1 丁目の町会会館「協和会館」に大塚、永島がうかがいました。Km さんには訪問の目的を連絡しておいたところ、事前にサークルの世話役の方に、訪問の目的など話を通しておいていただきました。

カラオケサークルの場所と経緯

千葉市道場は古くからの住宅地で、市の中心街に近いが、閑静で家並みも整っています。協和会館はその中で割合新しい築 3 年木造総二階の建物です。

玄関の前まで行くと、カラオケの音が洩れてきました。1 階は舞台付大ホールのみ 1 室、およそ 50 畳くらいでしょうか。備え付けのカラオケセットと座卓、座布団の用意が出来ており、台所には冷蔵庫もあり、食器一式も備わっています。

テーブルの上にはお茶やアルコール飲料、てんぷら、おつまみ、持ち寄りのお菓子などが並び、もうカラオケが始まっていました。

この町内会館は町内の地主に土地を譲ってもらい、この町会の人たちが資金を出し合って建

てたそうで、玄関ホールに芳名者の一覧が額になっていました。

色々なサークルがここを利用していますが、「協和会」と名づけられたカラオケサークルは毎週土曜日、午後2～9時まで使うことになっています。会員は20名程度、毎回の参加者は多いときで10数人、会ができてこの秋で丸2年だそうです。メンバーのなかには、他でカラオケ教室に通ってレッスンしている人もいます。でも「ここはお楽しみの場」だそうです。

Kmさんから協和会のグループ責任者の鶴岡さん（男性 70 歳）に紹介してもらいました。他にお世話役の岸さんが、お茶をいれたり、てんぷらを取り分けてくれたりしてくれます。「カラオケは 1000 円の会費をもらっているから、是非歌うように」とあれこれと私達にも気を遣ってくれます。早速 1000 円払って仲間に入れてもらうことにします。

この時間（2～9時）の会館使用料は5,500円で、参加者は1回1000円払えば、特に町内会員でなくとも参加できるとのことです。もともとこの町内にカラオケ店があり、その常連だった人たちが、「千葉テレビ」の歌自慢大会などに出場などするための練習もしていたそうですが、カラオケ店がつぶれてしまい、店のカラオケセット一式をメンバーである佐藤さんご夫妻が買い取り、この会館に設置してくれたそうで、カラオケ仲間が継続で集まることになったといった経緯があり、町内会員に限らず誰でも受け入れている下地はそんなところにあったようです。

KMさんが参加するようになった経緯と妻の介護

実はKmさんの家もここから10キロくらい離れています。Kmさんの古くからの知り合いの岸さんもこの町会の住人ではなく、カラオケ店当時からKmさんと一緒でした。本人のKMさんは病気になってから妻のKmさんと一緒に協和会へ来るようになったということです。Kmさんは岸さんを通じてご主人がこの病気であることを他の人にも伝えてもらっています。

経過に書いているように、KMさんは20年くらい茶道の稽古もしており、その関連で退職後、公民館の陶芸サークルにも参加していました。茶道の先生は付き合いも長いので理解してもらいましたが、茶道はお手前が順序どおり進むことがお稽古なのでその性質上、また陶芸は本人が何を作るのかが時々「自分でも分からなくなっている」ことがわかってきて、病気の経過と共にこの二つは続けることが難しくなり、自然に遠のいてきています。

Kmさんがカラオケで病気のことを言ってから参加したのは、普通の暮らしの中ではこのように段々と出来ることが少なくなってきたいて、それを何とかしたい、という強い気持が働いていたことだったでしょう。

カラオケは病気以後始めたのですが、「歌」という性質と、画面に歌詞が出るので新しい歌も「覚える」ことが出来るそうです。というのは、スローな歌の得意な岸さんが歌う新曲がKMさんの気に入って、「覚えたい」と言ったら、岸さんが背中をたたいて拍子をとってくれ、その曲を家のカラオケでも猛練習して歌えるようになったのだそうです。それで岸さんが歌う時は特によく聴いていて、盛んな拍手を送ったりするそうです。

歌はメロディとリズムと歌詞からなり、メロディは若しかしたら「覚える」ことが可能なのか

も知れません。(特にKMさんのような若年の初期の方は…これは興味深いことです。

今本人は病気のことをあまりはわかっていない様子(Kmさんの話)です。しかし、今までの自分とは違ってきている不安は感じてはいるようです。私達が奥さんから聞くと、痴呆は中期の初めくらいに進んでいるような感じですが、KMさんの兄弟や周りの人はそんなに感じていないようです。というのは奥さんのKmさんがとても痴呆の状態を理解していて、なるだけ今までと同じような暮らしを続けていけるように大変努力をしているからではないかと思えます。

協和会館への痴呆の人の参加

世話役の鶴岡さんに聞いたところ、協和会館の町会の地域には他にも痴呆の方がいて、時々ふらふらと歌を聞きつけて入ってくる人が2人ほどいるそうです。が、それは多分、家の人も知らないで立ち寄ってくるだけではないかということでした。そんな時は1曲くらい歌ってもらって帰るのだそうです。

ここでは痴呆であるかどうかを皆があまり問題にしていないようです。カラオケを一緒に歌う、と言うことでその時間を楽しく過ごせればよいのでしょう。従ってKMさんもここでは対等にカラオケのメンバーとして不安なくお付き合いをしている様子が分かります。メンバーはさりげなく「親切」な仲間として彼に接しています。

メンバーの1人である岸さんには、他にも「他に痴呆の人が来るようになったら、どうでしょうね?」と聞いてみました。「KMさんはおとなしいし、他の人に迷惑かけないから、別に他の人と代わらない」とKMさんを「痴呆の人」として特別扱いはしていないようです。そして「前に私が連れてきた人で、自分で持ってきたお酒を飲んで酔っ払っちゃって大変だった、そういう人は次は来れない」ということで、このサークルの調和を乱す人は困るということを書いていました。

他者を受け入れる会の様子(メンバーの様子)

この日は私たちが5時に帰るまでに12~3人の方が参加されていました。お茶やお菓子、てんぷらや持ち寄りの果物、お漬物をつまみながら楽しくリラックスした雰囲気です。KMさんは声量があり、なかなかのものです。あまり良く知らない歌に挑戦すると、仲間が背中をたたいてリズムを取って一緒に歌ってくれます。全部のメンバーが4周りくらい回ったあと、氷川きよしの新曲がコピーで渡され、みなが3~4回練習している後ろで、その踊りも練習があり、大塚さんはその踊りを一緒に習っています。

<配慮、受け入れの雰囲気>

岸さん

Kmさんから、私たちのことを直接頼まれた岸さんは、初めて参加した私たちにいろいろ配慮をしてくれます。「ここに座って」と座を用意してくれ、「座った順番にカラオケの予約をするん

だ、歌わない時は、パスして次の人に回すだけ、歌った方がいいよ」とリモコン機械の使い方を教えてくれます。私たちにお茶を入れてくれたり、食べ物をまわしてくれます。

しばらくすると「タバコ吸うかい？すいたかったらここは禁煙だから灰皿おいていないけど、台所の換気扇のところで吸っていいんだよ、私もいま吸ってきた、我慢していたらかわいそうだと思うさ」とそばによってきてくれます。

またしばらくすると「飲むなら、ここにあるからね」と誘ってくれたり、「座ってばかりだと疲れるから、こっちのソファーに座ってもいいんだよ」と促してくれたりします。岸さんは、途中から新たにメンバーが入ってくると、同じように飲み物、食べ物の世話を焼いています。

佐藤さんの奥さん

カラオケの機械を買い取ってこの会館に設置してくれた佐藤さんご夫妻は、お二人ともカラオケがとっても上手でした。奥さんは「サークルが使用する時の会館の開け閉めなどの世話」をしてくれています。近所にお住まいのようで割烹着をつけて参加しており、途中家に戻って漬物などを持ってきてくれました。持ってきた食べ物は小分けにしてみんなに配ります。てんぷらを私たちの小皿にとってくれたりもします。

Cさん（明日のカラオケ大会に鶴岡さんとデュエットを組む女性）

後から来たCさんは、かばんにお団子や食べ物を沢山持ってきていました。机に出して、他のメンバーに「これ食べる？ごまだれの団子の方がいいかい？」などとふるまっていました。

後から顔なじみが何人も参加してきましたが、「そこあいてるよ」などと誰かが叫んだり、「きたきた、遅かったじゃない、待ってたよ」などと声がかかります。メンバーは自然に溶け込んでいく感じで、いつの間にか歌う順番に入って歌っていました。

<譲り合いの雰囲気>

Bさんが帰る時間になったようですが、明日の歌のリハーサルをしていなかったのです。順番を待っていると歌えなくなってしまいます。鶴岡会長が自分の順番の時にリモコンを操作して自分の歌を中止してDさんの明日の歌にしてくれました。Dさんは舞台に立って、お辞儀をしたり、拍手をもらったりして、少し緊張して歌い、帰りました。

<教えあう雰囲気>

佐藤さんの奥さん

佐藤さんの奥さんは私が歌い終わると、「マイクを縦にしないで横にもっともっと口に近づけて持つと声が入るんだよ、次歌うときは、こうしな」とジェスチャーで教えてくれました。

Eさんが歌っているときも、間奏のときに「もっと頭の上からこえだすようにしたらいいよ」と声をかけていました。

佐藤さんのご主人

佐藤さんのご主人はとってもはりのある声でお上手です。明日の65歳以上の人のカラオケ大

会にも出場予定で、長谷川という女性とデュエットします。ご主人は少し若いAさんという男性に「練習用のカセットテープ」を作ってあげていました。それをもらったAさんは「佐藤さんが、あんたの声ならこの歌手のこの歌がいいんじゃないか、と練習用に歌手が歌った曲と、カラオケの曲をテープに入れてくれたんだ」ということでした。Aさんは初めて歌う歌を佐藤さんと一緒に歌っていました。

リモコン操作を間違うBさんに対して

Bさんの順番なのですが、イントロがはじまると自分が予約した歌ではなく、「これじゃない」と中止し、歌えませんでした。次の予約をしましたが、順番が回ってきたときは、またイントロが自分の思う歌ではなかったのです。同じことが2回も続いたので、佐藤さんの奥さんや岸さんが、「如何したんだろう、何番を予約したの?」とBさんのメモノートを見て、Bさんのリモコン操作を点検してくれました。「最後は9番なのに、7番押してたんだよ」と原因を発見してくれました。Bさんは「目が良く見えないから(だいぶお年のようです)」という、「見えるようになれば」と佐藤さんの奥さん。Bさんは、メモノートの数字を太い字で上書きして見やすいようにしました。

Bさんの失敗を攻撃したり、否定したりの発言はメンバーの誰からもありませんでした。

KMさんと仲良しなBさん

BさんとKMさんは仲良しなのだそうです。Bさんは「あんた歌うんだろ」とボーとしているKMさんを促したりしていました。Bさんが帰るときも、BさんとKMさんは何度か手のひらを合わせて別れを告げていました。KMさんは「あしたがんばってください、見に行きますから」とBさんを激励していました。

KMさんと一緒に歌うメンバー

KMさんがまだ上手に歌えない歌を歌うとき、奥さん(Kmさん)と一緒に夫の背中をたたいてリズムをとって歌っています。でもKmさんにはキーが高くて歌えない歌の時、AさんがずっとKMさんの横にきて、一緒に歌ってくれました。歌いおわるとKMさんはAさんに何度も「ありがとうございます」と頭を下げてお礼を言いました。Aさんは照れくさそうに、そんなにお礼いわなくてもいいんだという風でした。

<自己表現してよい雰囲気>

私が始めて歌ったとき、KMさんが一緒に歌ってくれました。KMさんも歌いたい歌だったのかもしれませんが、私がひとりでもじもじしていたからかもしれません。会長さんはイントロが始まると「いい歌歌うね」とほめてくれました

永島さんが歌っているとき私もマイクをもって歌おうと思ったのですが、あまりよく知らない歌だったので、歌うのをやめようとするKMsさんがそばに来て「歌って、遠慮しないで、へたでもなんでも歌ったほうがいいですよ」とマイクを手を持たせてくれました。

私の横に座ったAさんも岸さんも、私が順番をパスしようとする「歌った方がいいよここでは遠慮することないんだよ、歌ったほうがうまくなるよ」と勧めてくれます。そういわれどだんだんその気になってきます。演歌ばかり、知らない歌ばかりですが、何とかみんなが知っていそうでも歌える歌を探して歌ってるうちに、本当に自分が歌いたい歌（みなさんが知らないフォークソング）を歌ってしまいました。

岸さんは「ここでは、なにをしてもいいんだよ、そのうちだれかおどりですよ」と。

氷川きよしのズンドコ節の歌のとき、Cさんが後ろで踊りだしました。私もCさんの真似をしながら動き出しました。岸さんも加わり三人で踊りました。愉しかったです。

最後に

この集団のもつ魅力は、カラオケが好きな人が、本当に楽しんでいる場であることだと思います。上手になるために練習する場ではなく、競うために集まっているのではなく、歌って楽しむために集まっています。岸さんは「食べて飲んで歌って、毎週土曜日になると2kg太ってしまう」といっていました。ですから雰囲気をとっても和やかで暖かい感じでした。

他者を受け入れる配慮があり、譲り合ったり教えあったりする暖かい雰囲気があるので、心開いて自己表現することができるのだと思いました。だからメンバー自らも楽しむことができるでしょう。

KMさんはこの集団の中で、しっかりと社会生活を送っていると思いました。KMさんはカラオケの上手な人、自分に教えてくれる人には礼儀正しく教えてもらう態度を取れます。私のような新参者には教えたり配慮することもできます。老化現象がでてきているBさんとは親しげなかわりもできます。普通の対人関係を保っていました。

「もし、この地域にグループ・ホームが出来るとしたらどう思いますか？」と、とても聞いて見たい気がしましたが、それは止めておきました。今グループホームはとても増えており、特にこのような住宅地にはグループホームはふさわしいのではないかと思えるのですが、一方、こんな住宅地では決まって猛烈な反対運動がおきています。

それは痴呆という病気の実態を知らないからで、痴呆と言えればならず、徘徊、火の不始末、万引き、ところ構わずの排尿、排便などがあり、近所に迷惑だ、地価が下がる迷惑施設というのが理由です。この「道場」のように痴呆を自然に受け入れている住民の「下地」があるところではどうなのだろうか、と思うのです。

池田昌弘

【施設が、地域の住民同士の支え合いを基盤に介護保険サービスを提供するための提言】

1990年の社会福祉八法改正によって、施設を中心とした福祉から在宅を中心とする福祉に大きく方向が転換された。しかし、その後も実際の制度運用面では、施設を中心に進められてきたのである。

90年代の高齢者福祉の一般的な形は、ホームヘルプを含む在宅介護支援センターに、デイサービス、ショートステイ、特別養護老人ホームの合築型であった。在宅を中心にこれらのサービスを位置付けるならば、前記のように在宅介護支援センターを基盤に在宅を支えるサービスがあり、最後の選択肢として特養があるとなるのではないかと考えたが、その現実とは違った。

特養が母体施設とされ、在宅サービスはあくまでもそこに併設されているものであった。ショートステイに至っては特養との混在運営であったし、ご本人や家族を意識して一人ひとりの暮らしに合わせた在宅支援をしようと考えても、これらのサービスを弾力的に運用することは許されてなかったのである。在宅福祉の時代と呼ばれていても、施設が在宅支援に積極的に目を向けられるという状況にはなかったし、在宅支援を弾力的に運用するならば、即問題施設とレッテルを貼られるような時代であった。

2000年に制定された社会福祉法では、地域福祉の推進が盛り込まれた。同年に始まった介護保険では、措置から利用者による契約制度に改められて、施設では新たに競争という視点が持ち込まれ、利用者には選ばれる施設のあり方が問われるようになった。

施設は常に利用者やその家族にとって良かれと思うことを想像豊かにして考え出し実施しているのであるが、一方でそれが本当に高齢者が求めているものなのかどうか、施設で働く者は常に不安の中に居た。

そこで、施設の機能を施設の側から考えるのではなく、高齢者ご本人の暮らしに合わせて考えて見ることにした。まずは、特養に暮らす痴呆症の入居者の自宅に、ほかの痴呆症の入居者数人と介護スタッフとともに、日中だけでも帰ることを試みた。これは近年「逆デイサービス」と呼ばれているものの一つであるが、特養の中では落ち着く居場所を見出せないでいたこの方々に変化が現れた。介護スタッフが寄り添う中で、徐々に落ち着きを取り戻し、普通の暮らしが流れ始まったのである。「逆デイサービス」の意義は、ご本人の望まれていることを、施設の職員に気づかせてくれることにある。その後、この気づきを特養に持ち込んで生まれたものが、ユニットケアである。

また、高齢化の高い地域に痴呆専用の単独型のデイサービス始めてみた。民家をそのまま活用したので、誰かの家に居るような感覚で利用いただいた。痴呆専用のデイサービスは定員が10人以内と小さいので、ご本人ともその家族ともコミュニケーションも高く、その方と家族の日常に合わせたサポートができ、必要があれば泊まったり、家に手伝いに伺ったり、あるいは夜だけは泊まっていたら、日中は家に帰るといような、在宅支援のあり方が生まれてきた。これが、「小規模多機能ケア」と呼ばれるものである。

一人ひとりの願いや思いに則していったら、少しは施設も本人や家族に寄り添った支援ができるようになったが、それでもその発想は施設の位置に立って考えたもので、本人や家族の位置に立って考えるということはどういうことなのかを、施設の職員が考えてみることにした。

あるボランティア・リーダーからの相談から気づかされたことがあった。支え合って暮らしている隣同士で一人暮らしの女性たちに対して、介護保険の開始とともに近隣が騒ぎ始めたというのである。素人の老老介護よりも、専門のヘルパーを活用した方が良いのではないかということからである。この二人の支え合いは、一方が支え、一方はそのお礼として500円を支払う。500円をいただいた方はそれで生計に役立て、互いに自立しているというのである。近隣は、同じ500円を出すのであれば、専門のヘルパーに来てもらった方が良いのではないかと考えた。しかしボランティア・リーダーは、そんなことをしたら一方の生計は立たなくなるし、ヘルパーの利用料だって9割は介護保険料で賄っているので決して安くは済まないと考えたが、どう考えたら良いのだろうかかと相談してきたのである。現実の施設にはこうした視点は存在しない。

施設が、地域に目を向け、住民同士の支え合いや流儀のあることに気づき、まずはこうした支え合いや流儀に施設が合わせて、そのうえで施設に何ができるのかを考えることが求められてきているのである。

白川すみ子

1. 誰もがボランティア（「西荻あつとホーム」での例）

痴呆性高齢者を中心にした民間独自のデイホーム（1996～、週2日）では、「やりたいことをやる自由、やりたくないことはやらない自由、何もしなくてもよい自由」を認める方針と、他所のデイではボランティアとして受け入れられない、何らかのハンディを持つ人もそれぞれ手伝いたいと思う部分を、自由に手伝いながらアットホームな雰囲気で行ってきた。

とくに、103歳（女性）のYさんは、何も活動をしなくても、笑顔でそこに居るだけで、立派にボランティアをして下さっていると思う。（自然に、“見えない貢献”にもなっている）

2. 特別な役割を持って（1.と同じデイホームで）

①元医師のN氏（男性）

専用の聴診器と血圧計を持ち、スタッフ（看護職）にサポートされながら、朝のひとときを利用者数人の「診察」にあて、イキイキとしておられた。（受ける人にとっても、ここではいつも優しい先生に診てもらえる、と喜ばれていた）

②元教授のO氏（男性。夫人は常勤の仕事を持つ）

アルコール依存による早期痴呆で入院し、退院直後から複数のサービスを結び合わせ、サポートしてきた。

なかでも、デイホームでO氏の講義を聞きたい人に、専門のヨーロッパの歴史や文化について語られるとき、またデイホーム終了後、勤め帰りの夫人を待つ2～3時間、担当していた青年S君に対し、（かつての学生に対するように）本当にイキイキと話されていた。

協力団体との連携により“なじみの関係”で、最期まで細やかなサポートができた。

3. 受け手であり、担い手でもある

（私事で恐縮だが）「24時間365日、電話による依頼に即応し、直接訪問援助を行う」サービス（1993～）を考え、やり始めたとき、自分が後に（'98）そのサービスのおかげで入院生活を乗り切れる、とは思っていなかった。

自分たちで設立した福祉法人の理念（できるだけ自由に・どこまでも対等に・他者への思いを活かし合う）にもあるように、厳しい現実の中で及ばずながらも実践してきたつもりであるが…。サービスの具体例をとおしてそのことを実感するとき、本当に幸せだと感じる。

（これも私事になるが）パーキンソンの末期、痴呆になった母は、（当時）看護婦さんや実習生、ボランティアがわが家に見えるたび、「S子がいつもお世話になります…」と、精一杯の笑顔で、私の仕事をサポートして？くれた。母のために訪問してもらったのだが、もしかすると母は最後まで、

担い手（嫁）の助手のつもりでいたのかも、とこの頃思うし、実際に助けられたのだ…とも思う。

4. ホメるのではなく、尊重する

“福祉の現場では、演技力も大切”と、ある専門家が言われた。その通りだと思う一方、単なる演技や口先だけのホメ言葉、役立っているという評価だけでは、痴呆の高齢者に失礼ではないか、と考える。

ホメる、という言葉に、若干の上下関係を感じたりもするとき、その人のこれまでの人生とありのままの現状を、人間として尊重できるかどうか…。これはむしろ、高齢者に相対する側の人間性が問われているように思われる。

（年をとって痴呆になった場合、自分を励まし、がんばらなくても、自分なりに生きていけるか？が私の課題）

①「本人の会」づくりがカギを握る

以前、知的障害者の本人の会づくりに関わったことがある。親の会が脱施設化と地域生活推進という国の方針に揺れていた頃である。支援のワーカーに支えられて本人の会が歩み始めると本人たちはどんどん変わっていった。全国レベルの大会やシンポジウムに参加したりと外の世界に触れることで「自分たちはどんな生活をしたのか」を考えたり主張するまでになった。親たちの中にもそれを支え実現しようとNPOを立ち上げるグループも生まれた。

痴呆高齢者も同じなのだろう。痴呆高齢者の「そのひとらしい」生活を支えるには、本人の会をつくり自ら望むあり方を発信することが大事なのだろう。そしてその病気の特質ゆえに思いを十分伝えることができない本人の意思を汲み取り支援する専門ワーカーが早急に必要なのだと以前の経験からも確信する。

時には利害が対立する場合もある本人と介護家族への支援は、それぞれの支援ワーカーという役割分担が必要なのだろう（現場で家族を支援していて本人の願いと家族の苦境を知っているだけに対応に悩む時がある）。現状はまだ本人より周囲の人たちが本人の処遇を決定することが多く見受けられることから“本人の自立支援”が一層声高に言わなければならない状況にある。しかし、在宅ケアには本人の自己決定を尊重することと同時に、介護家族の負担の縮小もはからなければならない。そのためにも双方を満たす新しい在宅ケアのあり方が求められるが、まだその途上にある。

②「共に豊かに」の関係づくり

介護では、本人と介護家族は“合わせ鏡”と実感しているが、本人のこれまでの生き方が人生の最晩年の生活に大きな影響を及ぼすことも確かだ。「新しい介護関係」の創造が実現できれば、高齢者虐待や施設待機者はかなり減るのではないかと期待したい。

③ファミリー・ケースワーカー

家族間の人間関係の調整はこれまで保健師やソーシャルワーカーが担当していた。介護保険になってその役割はケアマネージャーに求められているが、現実には介護保険サービスの調整に追われているのが実情だ。ファミリーワーカーが本人と家族やまわりの環境を調整することで痴呆高齢者もかなり在宅で生活する可能性が広がるのではないか。この場合、ファミリーワーカーはコミュニティーワーカーも兼務した方が可能性が広がるのではないかと考える。

④「私（介護者）を愛した母（要介護者）」

「私を愛した〇〇」と気づくのは、大方要介護者が亡くなった後の事が多い。葛藤が激しく長期

の介護経験者ほど、支えていたつもりが実は支えられていたことに気づき愕然とする時がある。たんぼぼの会の会員に若年性痴呆症の夫を介護していて、はた目にも壮絶な暮らしであったが、夫の晩年には「お父ちゃんがいてくれるので、妻という字を書ける」と語った人がいたが、介護関係の妙味といえよう。どの時点でその境地に達せられるかが在宅介護を大きく左右する。そのためには、痴呆症について早期発見と診断、痴呆ケアに対する理解と介護法の研修や啓発を専門職だけでなく住民対象に行う必要を痛感している。

⑤「歩く」（徘徊）の支援ネット作り

歩くことが本人にとって意味あるとして、それを家族は生活の中で毎回付き合うことは難しい。まず家族が地域に開くことから始まり、地域の見守りや受け入れ体制をつくっていくことが大事だ。介護に追われる家族にそれを求めることは難しいが、ここでコミュニティーワーカーの出番だが、何処に期待するといいいのだろう。

⑥極小地区ごとにコミュニティー・マネジメント拠点施設

地域全体が高齢化した場合、同じ仲間ネットワークを組むことは現実的ですが実行可能なことである。まち全体から「集める」ことには限界があるが、歩いて、車椅子を押して、杖をついて「寄って来られる」ことが大事。

同じ課題を抱えた人たちが、身内の介護はしんどいけれど他人の家族ならお互い看あうことができる。人（社会）の中に入ると、人は家庭の中とは別の顔を持つ。本人と介護家族のエンパワーメントへの支援でもあり、新しい介護関係（タテからヨコのつながり）を生み出すきっかけや突破口になる可能性が大きい。お試しの価値あり。

⑦親を看取り終えた介護者の活用法

「本格的なプロとして活躍したい」とまではいかないまでも経験を生かして同じような苦しみを持つ人を支援したいと考える人は多い。長期間介護に携わった人は看送った後、虚脱状態になったりうつ状態から体調を崩す人も多いが、サポート活動に関わった人のほうが立ち直りも早い。痴呆ケアのプロが沢山求められる今、一定期間研修して本格的に活用することのメリットは大きい。

⑧「自己決定」のわからなさ

「自己決定」と「当事者主体」について本研究会で随分こだわって議論した。こだわったのは全て介護経験者であった。何故か。理念と現場で展開される現実乖離があり過ぎるからだ。

痴呆高齢者と介護家族を支援する現場にいて一番悩ましいのも実は「本人の希望」をどう実現させるかだ。第一義は「本人の意思」を尊重することだが、現実には家族で看なければ地域で暮らすこともままならない。「本人の意思を大切にすること」で「介護する人の生活を侵しかねない」場合どう考えたらいいのいか。現実には抱えきれなくなった家族が手を放すことで痴呆高齢者という弱

い立場の人が不利益を被っている場合がほとんどである。この議論は互いを向き合せては利害の対立に陥ってしまいかねない。

「相互介護」のなかに、つまり本人だけが一方的に介護を受けているのではなく、「私を愛した母」のように受け取るものもあるのではないかという視点である。一個の人間対人間の関わり合いの「相互介護」はあるのだ。しかしこの場合も専業主婦など常時家庭に介護する体制が整わなくては難しい。

◇研究会の議論以来、私はこのことを考え続けている。

「自己決定」とは、自分の生き方は自分が決めるという個人主義・自由主義的価値観であり、結果には「自己責任」がついてまわる。私たちの社会は、いつからか個の確立を何より大事と追い求め続けてきた。その結果が今の家族の崩壊といわれる現象を生み出しているのではないだろうか。プライバシーや個を主張し続けることは、限りなくひとりになっていくことではないのか。家族の幸福のためには多少の制約は引き受けるという価値観がなければ、子育ても介護も外部化が急速に進んでいくだろう。そして社会が制度として保障しなければならなくなるだろう。しかし介護保険も含めそこまでは保障していない。

一方で今の高齢者は家族を単位に暮らすことを最大の価値としてきた世代である。“家族が揺らいでいる”といわれ世代間にギャップが生じている現在、在宅福祉のあるべき姿も必然的に変わらなければならないのだろう。今は、在宅介護はイコール家族介護になっている。家族の単位が小さくなって、家族では背負いきれなくなったものを近隣や地域が家族に代わって背負ってくれる可能性は限りなく小さい。地域の世話焼きさんが焼いてくれるお世話は、暮らしの延長線上でできることに限られる。家族でも抱えきれない責任までは負ってはくれない。善意の働きには限度があると認識すべきなのだ。

今必要なのは、新しい介護関係を紡ぎ出すその土地にあった仕組みであり、それを難しい制約なしで支援する施策だろうと思われる。痴呆高齢者と介護家族を地域で支えられるとしたら小学校単位かもう少し小さい圏域内の小規模多機能施設ではないかと期待している。

⑨本人の心を乱さない告知法

痴呆の人「本人の会」をつくるには、本人が“痴呆である”ことを認識することが前提で、そこから始まる。ガンの告知と同じく考えられるのではないか。ガンの告知は、治療法やこれからの人生を本人が決定するためにも大事なこととして広がり、今は普通に行われるようになっていく多くの患者や家族もそれを望むようになっていく。

しかし治療法も見つからない痴呆症は、痴呆のもつ社会的な負の印象とともに今はまだ告知が難しい段階なのではないか。また最後まで意識の明瞭なガン患者と違って、本人の痴呆が進み周囲が困り果てた末に専門医の診断を受ける現状があり、判断能力が低下していく痴呆症との違いは大きい。早期発見と適切なケア体制などの受け皿を整備しながら本人の性格や生き方、今の状態を勘案し、家族とも相談しながら現場で判断していくことになるのではないか。

日本人は高齢になっても老いや孤独やその先の死を見つめるようには今もなっていない。聞き取りの中で多くの痴呆高齢者が「人の役に立たなくなった」「使いものにならなくなった」「誰もほめてくれない」と嘆いているというのを聞いた。人の役に立たなくなり、誰からも期待されなくなった孤独とその先に見えるものに不安と恐れを感じるのだろう。

⑩「あの人ちょっとヘン」の効用

要介護者を施設に入れるよりも、地域社会に生きていた方が、偏見も差別も受けにくい。グループホームに入っていれば、いかにも「痴呆の人」となるが、同じ症状でも、自宅に住んでいれば、周りの人は「あの人、ちょっとヘンね」程度の見られ方で済む、という視点であるが、介護保険の認定調査などで初めて専門職に出会ったとき“人生を生きてきた〇〇さん”ではなく“障害をもった〇〇さん”、もっと言えば“ハンディがあり援助の必要な人”だけになってしまうことに対する抵抗感は大きい。本人にすれば烙印を押される意識なのだろうか。

◇全国の事例を見ても、痴呆高齢者が穏やかに暮らしていただける環境は

- ①自然環境の変化が比較的穏やかである。
- ②昔なじみの人々がいて、近隣とのつきあいが生きている。
- ③家族関係がいい _____ 本人と介護者の関係がこれまでよかった。
本人の性格が穏やかで痴呆症状も穏やか。
- ④経済的にゆとりがある。
- ⑤住宅もある程度の広さがあり、多少混乱などがあっても互いにひとりになれる空間的広さがある。障害があっても暮らしやすくなっている。
- ⑥本人の周りに強力な世話焼きさんがいる。世話焼きも生活を脅かさない範囲で責任を伴うならできない。

岩淵雅子

《調査報告 1》

- ◇調査日 2004年1月7日
- ◇調査者 木原孝久 岩淵雅子
- ◇対象者 千葉五郎さん
- ◇聞き取りの内容

- ・千葉五郎さん（76歳）の地域活動

現在：町内会福祉部長・老人クラブ事務局長・ボランティア出愛会長など多数。

〈町内会の現況〉

- ・町内会の構成 185戸中、142戸が70歳以上の一人暮らしか高齢者のいる世帯
小学生13人・中学生7人。夏のラジオ体操参加者は中高年のみ。

この地域は、元太平洋炭鉱の関連会社の分譲地で、購入者の中心は元炭鉱マン。

04年度から少子化のため地域の公立中学校が統合化で廃止された。空き校舎は中高一貫教育の私立学校が利用する。

〈千葉さんの活動の背景〉

千葉さんは炭鉱の崩落で瀕死の重傷を負い、その後遺症のリハビリとして指圧を通信教育で学び自己指圧で回復した。事故のとき多くの人にお世話になったとして近隣の人たちに指圧のボランティア活動を始めた。その活動は、近隣から地域の希望する家庭、施設、市民に広がっている。多くの人に受け入れられるのは、指圧ボランティアという技術だけでなくそのこだわらない性格や親しみやすい人柄によるものと思われる。

町内会福祉部長としても声掛け見守り活動を続け、震度6の地震発生時は即刻町内を巡回した。

千葉さんの活動の裏には、町内の支え合い活動の伝統がある。前町内会長のYさん（故人）は、妻の介護の中で孤立しがちな要介護者や家族の孤独を体験し地域のつながりの大切さを痛感し町内会長に立候補した。会長になると毎日、町内の病人や障害のある人、介護中の家を回り声掛け・見守りを続けた。

その中の1人にたんぼぼの会員で一人息子を介護中のMさん夫妻がいた。夫妻は長男と共にたんぼぼの会の託老に参加していたが、長男が亡くなると夫Mさんに痴呆の症状が出て夫婦で託老に参加しながら地域の痴呆の家族に声掛けし入会を勧めたり、体験を生かして福祉サービスの紹介をしたりしていた。

この間ずっと隣家の千葉さんが毎日見舞い、指圧をしてM夫妻を支援していた。そのうち妻Mさんが体調を崩して入院。その間夫Mさんは老健施設に短期入所していたが、妻Mさんが亡くなり短期入所の期間も過ぎて自宅に帰った。

町内の人たちは夫Mさんの甥夫婦と相談して、夫Mさんにせめて亡妻の49日までは自宅での生活を送らせてあげたいと千葉さんを中心に交代で支援。ホームヘルパーが一日3回家事援助に入り、千葉さんたちは火の始末、除雪、草取り、毎日の見守りなどを支援した。

夫Mさんはそれから2年あまり、痴呆症状がありパーキンソン病でトイレなども這っていく生活を続けたが、病状が進行して車椅子生活になり、一人暮らしがいよいよ困難になって新設の特養ホームに入所した。夫Mさんが周囲の予想を超えて一人暮らしを続けることができたのは、夫Mさんの穏やかな性格と共に妻Mさんの元気な頃に地域のお世話をしてきた蓄えによるものであろう。

そしてそれを見事に支えたのは、前町内会長や千葉さんを中心とする町内の人たちであった。同じ炭鉱一家という結び付きの強さも大きかった。前会長、M夫妻、千葉さんと続いてきた地域の支え合い精神は、6年前から町内会に福祉委員として制度化されている。

《感想》

地域の中で人と人を結ぶものは何だろう。個人のつながりをネットワークにして広げていく働きは、どうすれば生まれそして育つのかと期待してお話を伺った。

前会長とM夫妻、千葉さんに共通することは、介護経験者であったり障害を負うなどの当事者であったことだ。そこから地域の弱い立場の人たちとつながりその輪を町内会全体に広げていったという。

この町内会では、分譲当時の世代から次の世代に交代して炭鉱一家の意識はもうないというが、地域の高齢化が進んでいることからその対策として前出の福祉委員制度（14人）をつくり、きめ細かなサポート体制をつくっているという。個人のレベルの支え合いを町内会単位にまで広げた千葉さんたちの20年に及ぶ努力はすごい。

仕事のように毎日忙しくボランティアをしても、個人の活動で終わってしまうことが多い。それを地域に広げ継続するためには、意識的につながりを働きかけることが必要で、それを千葉さんは「ふれあい」と表現した。日々の生活の中で人々が無理なく支え合うための秘訣をもう一度見直してみることが必要と感じた。

《調査報告2》

◇調査日 2004年1月7日

◇調査者 木原孝久 岩渕雅子

◇対象者 佐藤郁子さん

◇聞き取りの内容

佐藤郁子さん（56才）3人姉妹の末っ子。現在、知的障害者の更正施設に勤務。

父親（91才）は元校長。スポーツマンで道東に最初にバスケットボールを紹介し広めた人。辺地校勤務が長く、地元教育界の重鎮として教え子も多い。

妻が亡くなった3年目の‘97年頃から物忘れが出てきて、翌‘98年3月受診、痴呆症と診断

された。たんぽぽの会入会は‘00年2月。一人暮らしが困難になり、末っ子で子どものいない三女郁子さん宅に同居した。郁子さんの夫は教え子。

父親は、雄別炭山の神童といわれ、28才で校長になった。在職中も書類の内容を3年間は完全に覚えていたといわれていた。

親子であるため養護老人ホームの寮母という専門職でいながらぼけていくサインを見逃し、病気に気づくのが遅れた。診断された後は、あるがままに受け入れた。あるがままに受け入れる性格は亡くなった母ゆずりだと郁子さんは述懐する。

郁子さんは泊まりもある仕事なので、ディケアサービスとホームヘルパー、ショートステイ、たんぽぽの会の託老を月2回利用しながら在宅介護を続けてきた。父に徘徊があると町内会の会合で協力をお願いしたので、出歩いても町内の中で保護されSOSネットワークを使ったことはない。

大型のディケアサービスでは落ち着かず、帽子とコートを着たままバックを抱えて一日中施設内を徘徊し、夕方疲れ切って帰宅し、落ち着かない状態は家庭でも続いた。少人数のディサービスでは「ここはいいなあ。みんな笑っていて」と落ち着いて一日を過ごすことが多く、そんな日は帰宅しても家族の団欒に入ることができた。

デイサービスで転倒して骨折入院し、その後老健施設に入所中に郁子さんが養護老人ホームから知的障害者更正施設に移動になった。この移動は支援費制度導入時と重なり仕事に忙殺され、加えて体調を崩したことから在宅介護が難しく老健入所を継続している。

郁子さんは、介護の中で父の言葉を書きとめていて、ノートは数冊になる。初期からターミナルまでの痴呆の人の思いを書きとめた貴重な資料であるが、忙しくてまとめていないとのことである。

《父親本人の言葉》

- ・一日の時間帯の帯が途切れる。
- ・何回も同じことを聞くけど許してほしい。
- ・(頭に) オハチを被っているようで重い。
- ・いつもモヤがかかっている。
- ・(さえているとき) 頭の先から足の先まで栄養が行き渡っている。
- ・(88才の米寿の祝いの席で子どもが父にインタビューしたとき)

子：あなたの人生どうでしたか。

父：3つの闘いであった。①思想との闘い ②自然との闘い ③戦争との闘い

- ・真剣に褒めてくれる人がいない。
- ・年を取ったら自分を励ましながら頑張らないと、頑張れなくなった。

※郁子さんから見た印象

忘れることを自分に許せなかったことが、自分で自分を追いつめていったように思える。

《父の様子》

・食事中でも突如職員会議の席になる。

→父：「その意見は今・・・」

家族：「わかりました。もう少し検討してみます」

父：「よし」

・父には最後の旅行になるかもしれないと子どもたち夫婦や孫と父の旅行を計画。

(上野駅で突如修学旅行になって)

→父：「点呼」と号令をかける。

家族：(一列に並び)「1, 2, 3, ...」と点呼し

「以上、全員異常ありません」

父：「よし、乗れ」

《感想》

お父さんの混乱や言葉を丁寧に受け止めることで、痴呆の人の不安や苦しみを和らげようと努力するご家庭の様子がとても印象に残った。これは郁子さんが専門職であったこと、お孫さんも関係職種など痴呆についての専門的な知識があったこともあるが、家族みんなが父親に尊敬と愛情をもっていることが大きいと感じた。

また、頻回に徘徊しても町内の人たちに見守られていて町内の中でおさまっていたことは在宅介護を続ける上で大事な支援になる。周りに隠さないこと、近隣との日頃の付き合いが良好なこと、仕事を持っていても町内会の役員をしっかりと務めていることなど、団地分譲時同時に引越してきたつながりが生きていると思われる。

《研究報告3》

◇調査日 2004年1月8日

◇調査者 木原孝久 岩渕雅子

◇対象者 本谷正代さん

◇聞き取りの内容

・本谷正代さん(長女)の母、石田ツヤ子さん(84才・要介護2)について

先代からバス通り前で薬局を開き、正代さんが薬剤師として調剤と店を経営している。長女の正代さん、正代さんの夫(元教員)、本人の3人暮らしだったが、最近孫娘が帰郷し同居、薬剤師として病院勤務。本人は長年店番として地域の人たちとつながっていたのでよく知られている。80代の初めまで現役で、暗算で消費税まで計算ができた。'97年頃から物忘れが時々あったが、'98年7月心臓血管のバイパス手術後、ぼけ症状が進んだ。現在長女と嫁いだ次女が毎日通って来て協力して介護している。長女の夫も協力的。

本人の外出希望が強く徘徊が多く、その都度店を閉めて探したり地域の人たちが連れて来てくれることもある。店の前がバス停のため長女が調剤や客の対応をしている間にバスに乗ってしまい、SOSネットワークを利用、2時間後警察に保護されたり、家族が気づいて車でバスを追いかけて

次のバス停で保護することもあった。徘徊が頻回なのでディサービスを週3回から週7回に増やして利用している。本人はディサービスを楽しんでいる様子であるが、明け方家を出たりと徘徊は今も続いているのですぐ発見しやすいように、コートは緑色、帽子は赤色、手袋は黄色など工夫している。

本人は今も店番をしている（つもり）で、9時の開店準備と21時の閉店の時の旗や看板の掲示などを手伝おうとする。外国人の客には万引きされた経験からついて回る。うっかりすると薬を売ってしまうので、事故がないよう気をつけている。女性従業員がいい人で、本人について散歩してくれたり、柔軟に対応してくれるので助かっている。

本人は20代で薬局経営する夫と結婚。現住所で店の手伝い一筋に生きてきた。性格は、まじめ、几帳面、内向的で娘たちが小さいころは、成績にとっても厳しかった人だった。本人の兄弟姉妹の中で、家庭の事情で本人だけが女学校に進学できなかったことが、劣等感になっているようで、自分の子どもたちの成績にこだわったのではないかとの事。娘たちには“厳しい人”という印象が強いという。

次女の夫が急に亡くなり一人は寂しいからと本人は3年ほど前から夜は次女の家で泊まっていたが、昨年7月次女の家で転倒してから次女が責任を感じて泊まりをやめたことで、長女の介護負担は大きくなっている。

最近の本人は、「ゴメンネ。なんにもできなくなって」の連発で、孫娘が「どうして謝ってばかりなの？」と長女（母）に問うこともあるという。

《感想》

昨年6月に長女の話をお聴いたときは、徘徊に悩みながらも家族姉妹の見事な連携プレーで理想的な在宅介護をされていると感じていた。今回半年たって変わったことは、長女にとっても疲れが見えたことだ。

昨年7月本人が転倒したことで、自宅での生活が長くなり更にADLが低下して長女は店の仕事と家事のうえに排泄介助や添い寝、夜中の対応などで疲労困憊されているためと思われる。また夜中にウロウロ起き出すことで朝の送迎バスに間に合わず、長女の夫がディの送迎を担当しているなど介護状況が厳しくなっている。

本人が「何もできなくなった」と嘆き、「ゴメンネ」を連発するのは、失敗を指摘されたり訂正されたりすることで不安や居場所を失うことからくるものと思われる。「おばあちゃん、迷子になると心配だからすぐ帰って来てね」と見ていると散歩してニコニコ帰ってくるなど、家族がゆとりがあり受け止めのいいときには散歩に行っても帰ってくることで、客の相手をして目を離したりすると行方不明になることから、本人が落ち着けるような支援や在宅サービスが必要であり、年中無休の家業の場合家族の負担は計り知れない。どちらも尊重される介護のあり方を探し出したいと切実に思った。

(1/8 佐井さん、1/9 中村さん・小林さん・渋谷さんの聞き取りは省略します)

《反省会から》

- ・中村さんの支援について→地域福祉の観点、働きかけがまるでない。専門職の関わりだけで完結している。
- ・中村さんにとって、年金などを使われることはあっても、地域の人たちとのふれあいを求めているのではないか。
- ・地域に生きるということは、どういうことか。サポートしてくれる専門職だけに会う暮らしが、地域に生きること（在宅）といえるのか。
という意見が交わされた。

筆者は、次の3つのフィールドワークに参加した。

- (1) 徘徊を伴う痴呆性高齢者の家族による介護の例
- (2) 近隣住人が世話をした痴呆性高齢者の例
- (3) 近隣の痴呆性高齢者家族から頼りにされている住民の例

調査内容と結果

(1) 徘徊を伴う痴呆性高齢者の家族による介護の例

この事例の概要は次のとおりである。

- ①調査対象者 Kさん (女性・Nさんの三女で末っ子・同居)
Nさん (女性・痴呆あり・徘徊はなはだし)

②Kさんの性格等

- ・神経質な兄弟が多い中で、私だけが神経質ではない。主人もおっとりしており、怒ることがない。

③Nさんの性格

- ・神経質で、気を使う人であった。

④徘徊の状況

- ・始めの頃は、一緒に付いていくと怒ったので、遠くから付いていった。2・3時間は付き合っ歩いてきた。私の方から帰ろうとは言わないで、疲れた頃に声をかけ、連れ戻した。
- ・一人で出て行ってしまったときは、疲れたら近くの家に入り込んで、そこから連絡がきたが、それは決まった家ではなかった。
- ・歩くことが多いが、バスに乗り込むこともあった。
- ・どうしたのかと聞かれると「私は帰るんです」と答え、行き先については「鹿児島に帰りたい」と言う。

⑤徘徊への対応

- ・出さないように、門の鍵を締めたことがあるが、通る人に「開けて下さい」と訴えて、その人が鎖を切ってくれたりしたこともあった。
- ・近隣には病状を話しておいた。そのため、色々と情報を教えてくれる人もいた。
- ・名前、住所、電話番号を書いた物を洋服の前に付け、終いには後ろにも付けた。
- ・地域で有名になることは気にならなかった。親だから平気で他人に言えたのかも知れない。もともと自分も母も地元の人ではないので、それもあったのかもしれない。
- ・買い物には一緒に行っていた。出て行ってしまう時には、トイレに入っている、台所にいても、途中で止めてすぐに付いていった。
- ・母中心の生活と割り切っていた。ショートステイの予定を決めてから自分の予定を立てていた。

⑥Nさんに対するKさんの対応

- ・私が気を使わないようにしたら、母も段々と気を使わなくなった。
- ・暴言、暴力はあったが、こっちが泣いていた。

(2) 近隣住人が世話をした痴呆性高齢者の例

この事例の概要は次のとおりである。

- ①調査対象者 Kさん (男性・単身者・同じ長屋で3軒隣りに居住)
 Nさん (女性・単身者・軽度の痴呆・物忘れあり)

②Nさんの状況

- ・名前と住所、電話番号は言えても、すぐ忘れてしまう。
- ・大声で怒鳴ったり、話がすぐ下ネタになるため、周りから浮き上がってしまう。
- ・親切に声をかけても、「うるさい、おまえらには関係ない」と言われるので、みな世話をしなくなってしまった。
- ・自分で勝手に出歩いてはいるが、迷子になることはない。出歩くのは好きだが、いつもタクシーを使い、50m先の歯医者さんであっても歩いていかない。にもかかわらず、お金のかかることは何もしない。
- ・部屋を綺麗にすることはできず、1日中ただゴロゴロしている。

③Nさんの生活上の問題

- ・年金が入っているはずなのに、お金がない。3人の知人が、自分の物を買ったり一緒に旅行したりしていたお金をNさんに支払わせていた。
- ・古い住宅(長屋)が取り壊されるので、移転のくじ引きに参加するようにKさんが連れて行ったが、勝手に家に帰ってしまったてくじ引き参加しなかったため、引っ越し先がなくなってしまった。
- ・引っ越しが決まっても、引っ越し費用がないからと何もしていない。

④Kさんの対応

- ・お金がなくなる理由を突き止め、知人達に釘を刺してやめさせ、本人に代わって金銭管理をしてあげた。
- ・現況届が出ていなくて年金が止まった時には、止まった原因究明から復旧手続き、再支給までの間のお米と灯油代金、電気料金の立て替えなどをした。
- ・一人だけ古い住宅に残すわけにはいかないと、市役所に説明し、頼んで、やっと引っ越し先を見つけてもらった。
- ・前家賃分の支払いの代行、毎日行つての引っ越しの仕度、車の手配をし、無事引っ越しをさせた。

(3) 近隣の痴呆性高齢者家族から頼りにされている住民の例

この事例の概要は次のとおりである。

- ①調査対象者 Sさん (女性・単身者・2階建て住宅に居住)

②Sさんの性格

- ・ ずけずけ言うほうだが、嫌われたことはない。
- ・ 父も母もこんな性格ではない。小学校4年の時に母がリエスで寝ていて、生まれたばかりの弟を背負ってお風呂にも行った。その後一家で満州に行ったが、家のやりくりまでしていて、さしずめ小さいお母さんだった。天気の良い日は、父が家にいるので学校にいったが、天気の良い日はいけなかった。生活がこうさせたのかもしれない。妹も強い。
- ・ 自分で辛い思いをしたので、人の辛さが分かる。
- ・ 満州に行った人は、物にこだわらない。
- ・ 引き揚げて来た後も、ものすごい苦勞をしてきたので、苦勞を苦勞とも思わない。
- ・ 泣いてくる人のことを全部受けとめてしまうので、生活全部を見ることになる。
- ・ 人が家に来るのは好き。
- ・ どんな人でも好き。但し、嫌いな人の側には寄らないし、口も利かない。

③Sさんの関わり方

- ・ 一緒に入り込んでしまい、仕事として割り切れない。
- ・ その人が長居していても、自分は自分の事をしながらいられる。
- ・ テレビを見ながら寝ている人もいるがそれはそれでかまわない。
- ・ お茶を置いて放っておく。別に何か食べたくて来るのではなく、孤独感を慰めるためにきているのだと思う。
- ・ してくれと言うことだけをしてやっているだけ。
- ・ 夜中に電話をくれた時にはハイヤーを呼んで駆けつけた。
- ・ 余計なお世話とは言われたことはない。

調査の考察

(1) 徘徊を伴う痴呆性高齢者の家族による介護の例について

この事例で、KさんがNさんの介護をしていく上で、取った方法は、

- ①自由に徘徊させた。
- ②そのために、Nさんが痴呆である事を公表した。

ということである。

目的をもった徘徊（Nさんの場合は「鹿児島へ帰る」ということ）は、制限を加えるのが難しい。昔から歩くのが好きだったNさんを引き止めては見たものの、徘徊を止めさせるのは無理なので、結局Kさんは一緒について歩くことで、安全に徘徊できるようにした。こうして、Nさんは自由に自分の行動を取れることになったが、いつ出て行くのか分からないままに出られることがあるため、Kさんとしては、周りに迷惑をかけることが少なくすむようするためには、Nさんが痴呆であることを周りが理解してくれることだと考え、その都度Nさんが痴呆である事を説明した。洋服に名前をつけたのもそのためである。

(2) 近隣住人が世話をした痴呆性高齢者の例について

この事例で、KさんがNさんのお世話をしていく上で、取った方法は、

- ①生活は自由にさせた。
- ②しかし、Nさんが出来ないところを補助した。

ということである。

Nさんは、痴呆も手伝って自分勝手な生活を続けてきた。大声で話したり、怒ったり、下品な話に終始したりということから、周囲からも嫌悪された存在であった。それに付け入って、Nさんにたかっている者ばかりが、友達として周囲にいた。KさんはNさんの年金がすぐになくなったことから疑問を感じ、Nさんの金遣いに制限を加えるのではなく、たかっていた人たちを追及し、結果としてNさんの金銭が搾取されるのを防止したのである。そのためNさんは、何ら自分の行動が規制されることなく、かつ面倒を見てくれるKさんに心を許し、金銭管理までさせるようになった。住宅の移転に際しても、市役所への依頼、前家賃の支払い、引越しの準備と実施と、必要なことは全部やってあげ、本人は身体一つで動けば良いようにしてあげた。Kさんのこういう親切に満ちたお世話の仕方が、Nさんをして「この人はいい人」と言わしめるのである。Nさんの地域での生活は、こうしたKさんの献身的なお世話によって保たれてきたのである。

(3) 近隣の痴呆性高齢者家族から頼りにされている住民の例について

この事例で、Sさんが近隣の痴呆性高齢者をお世話していく上で、取った方法は、

- ①自由に家に来て貰った。
- ②しかし、何もかまうことはしなかった。

ということである。

Sさんを頼って、近隣の痴呆性高齢者が遊びに来たり、家族が痴呆性高齢者を預かって貰いに来たり、果ては困ったことがあると夜中でも相談を持ちかけたりしている。もともと困っている人を放っておけない性格である。Sさんは、これらを負担とも思わずに受け入れている。又、家にいてもつまらない高齢者が、勝手に家に来ていても苦にしていない。と言って特に世話を焼くわけでもなく、勝手にさせておき、このことが却って「もてなしをしないので気楽に行ける」と好まれる理由にもなっている。Sさんも、お茶を置いてはおくが、放っておいて自分の事をやっている。食べたくて来るのではなく、孤独感を慰めるためにきているのだと思っていると言う。Sさんは面倒見のいい人で、頼ってこられるととことん面倒を見てしまう一方、家に来た痴呆性高齢者に対しては、自由に時間を過ごさせており、こうした面倒を見る粗密を心得ている事が、近隣の痴呆性高齢者家族から信頼され、頼りにされ、Sさん宅が痴呆性高齢者が立ち寄れる場所となっている所以でもある。

まとめ

さて、これらの結果から、痴呆性高齢者が地域で上手く生活しているポイントを考えてみると、

(1) 地域で上手く生活しているポイントは

ア、痴呆である事を公表する

これは第1の事例から見出されたものである。Nさんは地域を徘徊して歩いていた。そのNさんの自由意志を束縛しないためにKさんが取ったのは、地域に対しNさんの理解を図ったことである。

高齢者が本当に安らげる居場所が地域の中に作られたとしても、肝心の痴呆性高齢者が地域に出て行かないのでは役に立たない。痴呆性高齢者が地域に出て行かない理由の一つには、家族が痴呆である事を隠すということがある。隠す理由には

①本人がかわいそうだ。

嘗ての本人のイメージをそのまま社会に残しておきたい。

本人のプライドを尊重したい。

②家族が恥ずかしい。

身内に痴呆の人がいるのが恥ずかしい。

人前で変な事をされたとき恥ずかしい思いをする。

③他人に迷惑をかけたくない。

異常行動のため、他人に迷惑をかけることがあるので、恐縮する。

迷惑をかけられた人から文句を言われるのがわずらわしい。

などが考えられる。

しかし、こういったことが遠慮となり、痴呆性高齢者を家に閉じ込め、地域社会から遠ざけているのである。これらは全て家族の考え方なのであり、これを変えていくには、「遠慮をしないですむ社会」を作るということである。遠慮がなければ、痴呆性高齢者もどんどん地域に出て行けると考えられるのではないだろうか。

実際、これらの考え方を転換して痴呆であることを公表し、「恥ずかしいことと思わず、多少迷惑をかけるかもしれないが、それを最小限にしようと努力している」人達にあっては、身内の痴呆性高齢者がちゃんと地域で生活しているという現状がある。

したがって、そうなるためには、実際的な教育による意識改革を図らねばならない。「痴呆性高齢者を家に閉じ込めないで！」と言ったキャンペーンを張るなどの社会運動が必要と考えられ、その主体としては「呆け老人をかかえる家族の会」に期待するのである。

こうして、少しずつでも痴呆性高齢者が地域に平気で出てくるようになると、痴呆という症状に対しての理解も進み、少なくとも「家族が恥ずかしい」とか「他人に迷惑をかけたくない」と言った理由で家に閉じ込められていることは徐々になくなることが期待でき、そうなる初めて、地域の中に作られた高齢者が本当に安らげる居場所が生きてくるのである。これは、障害者において本人達が積極的に社会に出てくるようになって、障害者への理解が進み、障害者を取り巻く環境が変わってきたという事例を見れば分かる。そのためにも、痴呆である事を公表することは必要であろう。

又、公表することは、介護者本人の身体的・精神的負担を軽減する効果もある。公表をしてみようと、周囲に向かって気軽に「助けて」「手伝って」と頼むことができるようになり、こうして外部の手を借りることで、本人の自由意志を尊重したままの介護を継続しやすくなるのである。

イ、世話焼きさんを探す

これは第2の事例から見出されたものである。Nさんは自宅で気ままな生活をしており、金銭の取り扱いもいい加減であった。KさんはNさんの自由意志を束縛しないようにしながら、Nさんの周囲に対し働きかけを続けたのである。NさんにとってKさんは自分から望んだ介助者というわけではない。いわばNさんの生活が気になったKさんが勝手に世話を焼いたのである。Kさんは所謂「世話焼きさん」であった。第3の事例のSさんもそうである。

地域の持つ介護力とは何であるか。1つは「地域の持っている介護に対する公的な各種のサービス」という社会資源で、もう一つは「介護に関しての地域の持っているインフォーマルな関わり」ではないかと思う。そのインフォーマルな関わりを調査したところ、地域で痴呆性高齢者が生活をしているという場面で大きな力をもっていたのが、ここで「世話焼きさん」と名付けた方たちであった。

「世話焼きさん」という言葉には、おせっかいというイメージがあるが、ここで言う「世話焼きさん」には押し付けがましいところがないところが違う。では、どういう人が「世話焼きさん」と言うと、私たちの調査で見られた傾向をまとめると、

- ①親切で、困っていそうな人に無関心でいられない。
- ②面倒見がいい人で、頼ってこられると、とことん面倒を見てしまう。
- ③面倒を見る緩急を心得ており、自分の負担にならない。

といった条件を持っている。これが「世話焼きさん」の資質である。

この人達が痴呆性高齢者の周囲にいて、面倒を見ていることで、痴呆性高齢者が自由に生活をし、又家族が力を抜いて身内の痴呆性高齢者を自由にさせておける環境を作っているのである。一般の人が普通に関わるのではそこまでの力には成れないのである。徹底的に関われる「世話焼きさん」だからこそ、その力に成れるのである。

ウ、立ち寄り場所を作る

これは第3の事例から見出されたものである。Sさんはいわば自宅を痴呆性高齢者の立ち寄り場所に提供している。居心地がいいため、この場所はそれぞれの痴呆性高齢者が地域で生活するための一部として組み込まれているのである。

「立ち寄り場所」になれるところの条件を私たちの調査からみると、

- ①道路からすぐに入りやすいところである。
道に面した商店や家などで、そのままひょいといれるところが良い。家の場合は、玄関が空いていて、声がかげられるとか、玄関を入るとすぐ座敷とかが良い。
- ②人が家に来るのは好きである。
基本的にどんな人でも好きで、社交的である。長居されても自分は自分の事をしていられるなど、自分の生活が乱されないように工夫できる。
- ③わずらわしさを感じさせない。
せいぜいお茶を入れてくれる程度で、特に世話を焼いてくれるわけではない。してくれと言うことだけをしてくれるため、気楽に行ける。
- ④物にこだわらない性格である。

おおらかで、多少のことには動じない。痴呆の人が変な事をしても気にとめず、温かく見守ってくれる。

⑤苦勞を苦勞とも思わない性格である。

頼まれたらイヤと言えない。困っているのをみたら助けたくなるなど、自分を多少犠牲にしても平気である。

といった場所である。こういったところが見つければ、その痴呆性高齢者は、徘徊も含めて地域に出て行ったとしても、安心していられるのではないだろうか。

(2) 介護力を極大にするには

現実的に迷惑をかけることの多い痴呆性高齢者が上手く地域で生活しているのはどういう条件下であろうか、もう一度みてみよう。

地域で痴呆性高齢者を支えている例を見ると、本人、家族、周囲や地域に色々な条件があることが分かる。

ア、本人の持つ条件

- ①痴呆になる以前は社交的であって、地域に知人が多かった。
- ②単身であるなど見守りを必要としている状況が知られていた。

イ、家族の持つ条件

- ①家族が、痴呆である事をひた隠しにできなかった。
- ②姑でなく実母であるなど、血のつながりがあるため遠慮がなかった。
- ③土地の人でなかったため、しがらみや面子がなく、痴呆を知られても平気であった。
- ④自分だけで抱え込まず、他人の助けを仰いだ。

ウ、周囲や地域の持つ条件

- ①痴呆になる前を知っており、仕方がないと好意をもって受け入れる状態にあった。
- ②痴呆を、異常で迷惑をかけられる者という意識が少なかった。
- ③痴呆というものになれていて、受け入れてくれる人がいた。
- ④何事も気にしない性格の人がいた。
- ⑤世話焼きさんがいて、見守ってくれていた。
- ⑥家族を責めることがなかった。
- ⑦本人が気を使わなくて良い場所があって、そこに迷惑をかけなかった。
- ⑧お互いにやわらかな干渉をし合って、助け合っていた。

こういった条件の内、幾つかが上手く重なって地域に出て行っているのである。

確かに、お互いに迷惑を掛け合うことが既に普通になっている地域では、これらの条件がうまく働いているが、一般的には今の社会は「迷惑をかけないようにし、迷惑をかけられるのを嫌がる」社会である。そういう状況下で痴呆性高齢者が地域へ出て行くには、現在では少なくとも「家族が迷惑を最小限に押さえる努力をする」と「見守ってくれる世話焼きさんを何人か見つける」ことに加えて、「理解ある地域」作りが必要となるのである。

そこで、先ほど述べた3つのポイントを地域に取り入れることで、地域の介護力をアップさせ

ることができないであろうか。即ち、ある高齢者が痴呆である事を公表し、そのことによって地域に迷惑をかけることの注意を喚起し、地域の理解を得、徘徊していても安全に徘徊できるようにする。加えて、世話焼きさんを見つけて、相手をしてもらったり、迷惑事や安全性の監視に当たってもらおう。徘徊の途中には立ち寄り所があつて、そこでしばらく時間を過ごしたり安全性の確認をしてもらったりすることで、他への迷惑のかかり具合を軽減することができる。地域全体で痴呆性高齢者を介護していくには、少なくともこれらの準備が必要ではないだろうか。

このことは、とりもなおさず、この研究の目的でもある、高齢者が本当に安らげる居場所を、個々の高齢者の嗜好に従って、地域のここかしこに設置していくという対応法への1つのヒントになるのではなかろうか。こうして地域の持つ介護力をアップさせることで、地域の力を借りることができ、介護者に負担が集中している現状を改善でき、地域全体で痴呆性高齢者を介護する体制を作ることができるのではないだろうか。

要約

痴呆性高齢者の地域社会での自由意思による行動とそれへの地域住民のかかわりの実態を、(1) 徘徊を伴う痴呆性高齢者の家族による介護の例 (2) 近隣住人が世話をした痴呆性高齢者の例 (3) 近隣の痴呆性高齢者家族から頼りにされている住民の例の実例を調査した結果から、痴呆性高齢者が地域で上手く生活しているポイントとして (1) 痴呆である事を公表する (2) 世話焼きさんを探す (3) 立ち寄り場所を作るの3つが有効に働いた事を突き止めた。したがって、この3つのポイントを地域に取り入れることで、地域の介護力をアップさせ、地域全体で痴呆性高齢者を介護する体制を作り上げることができるのではないかと。